

大阪府埋蔵文化財調査報告 1999-6

# 安威遺跡

2000.3

大阪府教育委員会



大阪府埋蔵文化財調査報告 1999-6

# 安威遺跡

2000.3

大阪府教育委員会

卷頭圖版 1



安威遺跡出土遺物 集合寫真



1. 住居19遺物出土状況（南より）



2. 住居24上層遺物出土状況（南より）

## はしがき

安威遺跡の所在する茨木市は、商業都市大阪と古代の都である京都のほぼ中間に位置し、現在大阪北部の中核都市として発展を遂げています。

今回調査を実施しました安威遺跡の周辺は、古来から文化遺産に恵まれています。この中には、北の丘陵上に古墳時代前期に築造され茨木市史跡安威0号墳、1号墳。安威川を挟む東の丘陵には、北摂で有数な規模を誇る太田茶臼山古墳。同一の段丘上には、古墳時代後期に築造された巨石の横穴式石室墳である大阪府指定史跡耳原古墳。安威川を挟む北の山腹には藤原鎌足の墓と考えられている国史跡阿武山古墳。南には、奈良時代の鳩下郡の郡衙推定地である郡遺跡や古代から交通の要所として機能していた西国街道など、枚挙のいとまがありません。

今回の調査は、主要地方道茨木龜岡線の道路改良工事に先立って平成9年度から平成10年度の2ヵ年にわたって実施したものであります。それまで安威遺跡については、小規模な調査が行われたのみで、実態が不明の遺跡がありました。しかし、今回の調査において、古墳時代中期から後期前半にかけての堅穴式住居跡35棟、掘立柱建物11棟などの遺構を多数確認しました。また、出土した遺物の中には、瓦質土器、陶質土器が含まれ、分析の結果、朝鮮半島南部で作られた可能性を指摘されています。その他には、小鍛冶が行われたと推定される鉱滓も出土しています。

これら、検出した遺構・遺物から朝鮮半島南部からの渡来人の大規模な集落の可能性を示唆し、安威遺跡の実体を知る手がかりを多数得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査にあたっては、ご協力いただきました茨木市教育委員会、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々に厚く感謝の意を表すとともに、今後とも文化財保護行政について変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成12年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

## 例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府上木部より依頼を受け、主要地方道茨木龜岡線道路改良工事に先立って実施した茨木市安威1丁目～南安威1丁目所在、安威遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、平成9年度を文化財保護課調査第二係技師酒井泰子、平成10年度を同技師奥和之を担当者とし、平成9年9月から平成11年3月にかけて実施した。それに伴う整理作業は、平成11年度に資料係が行い、平成12年3月に全ての作業を終了した。
3. 調査にあたっては、大阪府上木部道路課、大阪府安威川ダム建設事務所、茨木市教育委員会、および奥井哲秀（茨木市教育委員会）、北野重（柏原市教育委員会）、合田幸美（財団法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター）、武末純一（福岡大学）、田中清美（財団法人大阪市文化財協会）、馬田弘穎（甘木歴史資料館）、濱野俊一（茨木市教育委員会）、眞鍋成史（財団法人交野市文化財事業団）、宮脇薰（茨木市教育委員会）、免山篤（茨木市文化財保護委員）、森村健一（堺市教育委員会）、吉武孝礼（廿木市教育委員会）はじめ多くの諸機関、諸氏より懇切な助言、ご協力をいただいた。（敬称略～50音順）
4. 本書の編集は奥が担当し、北村美紀、西澤寿子が補佐した。執筆は、主に奥が行い、第2章、第3章第1節を酒井泰子、第4章4節を有井宏子が行った。また、第4章7節については、三辻利一氏（奈良教育大学）、第4章8節については、大澤正己氏、鈴木瑞穂氏（九州テクノリサーチ）に原稿をお願いした。英文サマリーについては、有井が本文を要約し執筆した。ハングルサマリーについては、横田明が本文を要約し執筆し、徐光輝氏（龍谷大学）が校正した。なお、遺物計測値表については、北村美紀が行った。遺構の写真撮影については、各担当者が行った。

## 凡　　例

1. 座標、方位については国土地標、標高については東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
2. 造構及び遺物の色調については、小山正忠・竹原秀雄「新版標準十色帳」日本色彩研究所1992を使用した。
3. 遺構の名称番号については、各年度毎に異なる表記であるため、主な遺構について通し番号を付けた。
4. 遺物は、挿図、図版の番号と一致させた。

# 目 次

巻頭図版

はしがき

例言

日次

第1章 はじめに .....	1
第2章 位置と環境 .....	4
第3章 調査の成果 .....	7
第1節 基本序 .....	7
第2節 第1群の調査 .....	9
第3節 第2群の調査 .....	16
第4節 第3群の調査 .....	28
第5節 第4群の調査 .....	39
第6節 第5群の調査 .....	53
第7節 第6群の調査 .....	57
第8節 第7群の調査 .....	75
第9節 弥生時代の遺構 .....	86
第10節 北部地区的調査 .....	88
第4章 安威遺跡の諸問題 .....	89
第1節 出土した初期須恵器について .....	89
第2節 山上した瓦質土器について .....	95
第3節 出土した瓶について .....	96
第4節 住居跡出土の管玉について .....	98
第5節 積穴住居跡について .....	100
第6節 竈について .....	103
第7節 安威遺跡山上の硬質土器の蛍光X線分析 .....	105
第8節 安威遺跡出土鍛冶津の金属学的調査 .....	112
第9節 まとめ .....	118
英文サマリー .....	120
ハングルサマリー .....	121
出土遺物計測値表 .....	123
報告書抄録 .....	134

## 挿 図 目 次

第1図 茨木市と調査地点	1	第44図 建物3平面・断面図	27
第2図 調査区位置図	2	第45図 第3群平面図	28
第3図 周辺の道路	5	第46図 住居11平面・断面図	29
第4図 基本図序図	7	第47図 住居12平面・断面図	29
第5図 古墳時代遺構配置図	8	第48図 住居12平面・断面図	30
第6図 第1群平面図	9	第49図 住居12出土遺物	30
第7図 住居1平面・断面図	10	第50図 住居12遺物出土状況図	31
第8図 住居1竪平面・断面図	10	第51図 住居13出土遺物	31
第9図 住居1竪遺物山上状況図	10	第52図 住居13平面・断面図	31
第10図 住居1出土遺物	11	第53図 住居14平面・断面図	32
第11図 住居2平面・断面図	12	第54図 住居14竪平面・断面図	33
第12図 住居2山上遺物	12	第55図 住居14遺物出土状況図	33
第13図 住居3平面・断面図	12	第56図 住居14内石破�竪平面・断面図	33
第14図 建物1平面・断面図	13	第57図 住居14遺物山上状況図	34
第15図 溝1上層断面図	13	第58図 住居14出土遺物1	35
第16図 土坑1平面・断面図	14	第59図 住居14出土遺物2	36
第17図 土坑1山上遺物	14	第60図 建物4平面・断面図	37
第18図 墓状遺構出土遺物	15	第61図 土坑群平面・断面図	38
第19図 第2群平面図	16	第62図 土坑群出土遺物	38
第20図 住居4山上遺物	17	第63図 第4群平面図	39
第21図 住居4平面・断面図	17	第64図 住居15平面・断面・遺物出土状況図	40
第22図 住居5竪平面・断面図	18	第65図 住居15出土遺物	40
第23図 住居5竪遺物山上状況図	18	第66図 住居16平面・断面図	41
第24図 住居5出土遺物	18	第67図 住居16上面焼失状況図	42
第25図 住居5・6・7平面・断面図	19	第68図 住居16出土遺物1	43
第26図 住居6竪平面・断面図	20	第69図 住居16遺物山上状況図	44
第27図 住居7竪平面・断面図	20	第70図 住居16出土遺物2	44
第28図 住居6・7出土遺物	20	第71図 住居17平面・断面図	45
第29図 住居8平面・断面図	21	第72図 住居17遺物山上状況図	45
第30図 住居8竪平面・断面図	22	第73図 住居17竪平面・断面図	46
第31図 住居8出土遺物1	22	第74図 住居17内土坑平面・断面図	46
第32図 住居8出土遺物2	22	第75図 住居17山上遺物	46
第33図 住居9平面・断面図	23	第76図 住居18平面・断面図	47
第34図 住居9竪平面・断面図	23	第77図 住居18竪平面・断面図	47
第35図 住居9竪遺物山上状況図	23	第78図 住居18山上遺物	48
第36図 住居9内土坑平面・断面図	23	第79図 住居19平面・断面図	49
第37図 住居9遺物出土状況図	24	第80図 住居19竪平面・断面図	49
第38図 住居9山上遺物1	24	第81図 住居19竪遺物山上状況図	49
第39図 住居9出土遺物2	25	第82図 住居19内土坑平面・断面図	49
第40図 住居10平面・断面図	26	第83図 住居19出土遺物	50
第41図 住居10遺物出土状況図	26	第84図 住居19遺物山上状況図	51
第42図 住居10出土遺物	26	第85図 建物5平面・断面図	51
第43図 建物2平面・断面図	27	第86図 建物6平面・断面図	52

第87図 住居20平面・断面図	53	第128図 第7群平面図	75
第88図 第5群平面図	53	第129図 住居31平面・断面図	76
第89図 住居20壇平面・断面図	54	第130図 住居31出土遺物	76
第90図 住店21平面・断面図	54	第131図 住居32平面・断面図	76
第91図 住居22平面・断面図	55	第132図 住居32竪平面・断面図	76
第92図 住居22壇平面・断面図	55	第133図 住居33平面・断面図	77
第93図 住店23平面・断面図	55	第134図 住居33壇平面・断面図	77
第94図 住居21・22・23山上遺物	55	第135図 住居33出土遺物出土状況図	77
第95図 第6群平面図	57	第136図 住居33出土遺物出土状況図	78
第96図 住居24平面・断面図	58	第137図 住居33出土遺物	78
第97図 住居24壇平面・断面図	58	第138図 住居34平面・断面・遺物山上状況図	79
第98図 住居24壇遺物出土状況図	58	第139図 住居34山上遺物	79
第99図 住居34遺物出土状況図	59	第140図 住居35壇平面・断面図	80
第100図 住居24山上遺物山上状況図	59	第141図 住居35平面・断面図	80
第101図 住居24出土遺物1	60	第142図 住居35遺物出土状況図	81
第102図 住店24出土遺物2	61	第143図 住居35出土遺物	81
第103図 住居24山上遺物3	62	第144図 建物9平面・断面図	82
第104図 住居25平面・断面図	63	第145図 建物8平面・断面図	82
第105図 住居25竪平面・断面図	64	第146図 建物10平面・断面図	83
第106図 住居25壇及び周辺遺物出土状況図	64	第147図 上坑13出土遺物	83
第107図 住居25出土遺物	65	第148図 建物11平面・断面図	84
第108図 住居26平面・断面図	66	第149図 土坑13平面・断面図	84
第109図 住居26竪平面・断面図	66	第150図 罩列2平面・断面図	85
第110図 住居26壇上層遺物出土状況図	66	第151図 土坑14遺物山上状況図	86
第111図 住居26壇遺物出土状況図	66	第152図 土坑14出土遺物	87
第112図 住居26土上遺物	67	第153図 北部地区平面図	88
第113図 住居27出土遺物1	67	第154図 溝3出土遺物	88
第114図 住居27平面・断面図	68	第155図 出土初期須恵器(包含層・その他)	90
第115図 住居27遺物出土状況図	68	第156図 初期須恵器編年試案1	92
第116図 住居27出土遺物2	68	第157図 初期須恵器編年試案2	93
第117図 住居28平面・断面図	69	第158図 出土瓦質土器	95
第118図 住居28山上遺物	69	第159図 山土壠(包含層)	96
第119図 住居28遺物出土状況図	70	第160図 風変遷図	97
第120図 住店29平面・断面図	71	第161図 墓立ち住居想定図	101
第121図 住居30平面・断面図	71	第162図 風変遷図	103
第122図 住居30出土遺物	71	第163図 安威遺跡出土硬質土器の両分布図	105
第123図 土坑7・8・9・10・11・12平面・断面図	72	第164図 安威遺跡出土硬質土器の産地推定	106
第124図 上坑9・11出土遺物	73	第165図 吹田群の須恵器の両分布図	107
第125図 溝2断面図	74	第166図 陶邑群と吹田群の須恵器の相互鑑別	108
第126図 建物7平面・断面図	74	第167図 安威遺跡山上須恵器の産地推定	108
第127図 罩列1平面・断面図	74		

## 表 目 次

表 1 安威遺跡出土土器の分析データ1	110	表 3 供試材の履歴と調査項目	115
表 2 安威遺跡出土土器の分析データ2	111	表 4 供試材の化学組成	115

表 5 川上遺物の調査結果のまとめ	115
表 6 古墳時代前・中期の鉱石系精錬・鍛鍊窯冶洋出土例	116
表 7 遺物計測値表 1	124
表 8 遺物計測値表 2	125
表 9 遺物計測値表 3	126
表10 遺物計測値表 4	127
表11 遺物計測値表 5	128
表12 遺物計測値表 6	129
表13 遺物計測値表 7	130
表14 遺物計測値表 8	131
表15 遺物計測値表 9	132
表16 遺物計測値表 10	133

## 卷頭図版目次

図版図版 1 安政塗抹土遺物(集合写真)

卷頭図版 2

1.住居19 遺物出土状況(南より) 2.住居24 物出土状況(南より)

## 図版目次

図版表紙 調査地(全景)(南上空より)

図版 9 第2群

1.住居9(西より) 2.住居9 遺物出土状況(西より)

図版 1 古墳時代遺構全景(空中写真)

3.住居9 南北断面(東より) 4.住居9 東西断面(東より)

図版 2 基本断面及び第1群

5.住居9 油壁付近断面部(東より) 6.住居9 北壁付近断面部(東より)

1.北部地区 基本断面 2.第1群 基本断面

図版 10 第2群

1.住居9 電気物出土状況(西より) 2.住居9 電気土断面(南より)

3.第4群 基本断面 4.第7群 基本断面

3.住居9 土被物出土状況(北より) 4.住居9 土被断面(南より)

5.第1群全景(空中写真)

図版11 第2群

1.住居9 遺物出土状況(南より)

図版 3 第1群

2.住居9 遺物出土状況(東より)

1.住居1(北より) 2.住居1 電気検査状況(西より)

3.住居9 上層遺物出土状況(南より)

3.住居1 電気物出土状況(東より) 4.住居1 電気(東より)

4.住居9 上層遺物出土状況(東より)

5.住居2(北より) 6.住居2 断面(北より)

図版12 第2・3群

1.住居10(西より) 2.住居10 遺物出土状況(北より)

図版 4 第2群

3.住居11(東より)

1.全景(北より) 2.住居4(南より)

図版13 第2群

1.建物2(西より) 2.建物2 SP9(東より)

3.住居5 鐵道物出土状況(東より) 4.住居5 鐵道物出土状況(北より)

3.建物2 SP15(東より) 4.建物2 SP14-17(東より)

5.住居5 電気土断面(南より) 6.住居5 遺物出土状況(東より)

5.建物3(西より) 6.建物3 SP21(東より)

図版 6 第2群

7.建物3 SP4(西より) 8.建物3 SP18(東より)

1.住居6(西より) 2.住居6 電(東より)

図版14 第3群

1.全景(北より) 2.住居13(西より)

3.住居6 南北断面(東より) 4.住居6 切合い断面(西より)

3.住居13 南北断面(西より)

図版 7 第2群

4.住居13 南北断面(東より)

1.住居7(東より) 2.住居7(西より)

1.住居12 遺物出土状況(南より)

3.住居7 電(東より) 4.住居7 電埋土断面(東より)

3.住居12 東西断面(東より) 4.住居12 南北断面(東より)

図版 8 第2群

5.住居12 電理土断面(東より) 6.住居12 土坑断面(東より)

1.住居8(東より) 2.住居8 東西断面(南より)

図版15 第3群

1.住居14(南より)

3.住居8 南北断面(東より) 4.住居8 電埋土断面(東より)

2.住居14 東西断面(東より)

5.住居8 電埋土断面(南より) 6.住居8 電理土断面(東より)

3.住居14 南北断面(東より) 4.住居14 電(南より)

5.住居14 電埋土断面(東より) 6.住居14 電理土断面(東より)

## 図版17 第3群

- 1.住居14 遺物出土状況(北より) 2.住居14 遺物出土状況(南より)  
3.住居14 竪上面遺物出土状況(東より)

## 図版18 第3群

- 1.住居14 墓土遺物山土状況(北より) 2.住居14 遺物出土状況細部(西より)  
3.住居14 遺物出土状況細部(東より) 4.住居14 石敷土炕(北より)

5.住居14 石敷土炕上層断面(東より) 6.住居14 七竈土炕断面(東より)

## 図版19 第2・3群・上坑群・上坑

- 1.土坑群全貌(北より) 2.土坑B 遺物出土状況(東より)  
3.土坑C 遺物出土状況(西より) 4.土坑A 断面(南より)  
5.上坑B 断面(南より) 6.上坑C 断面(南より)  
7.土坑D 断面(南より) 8.土坑E 断面(北より)  
9.上坑2 断面(南より)

## 図版20 第4群

- 1.北部全景(南より) 2.住居15(西より)  
3.住居15 東面断面(北より) 4.住居15 南北断面(西より)  
5.住居15 遺物出土状況(北より) 6.住居15 遺物出土状況細部(北より)

## 図版21 第4群

- 1.住居16(西より) 2.住居16 南北断面(東より)  
3.住居16 東面断面(西より) 4.住居16 便次状況(東より)  
5.住居16 上層土面断面(南より)

## 図版22 第4群

- 1.住居16 遺物出土状況(東より) 2.住居16 遺物出土状況細部(西より)  
3.住居16 遺物出土状況細部(西より) 4.住居16 遺物出土状況細部(東より)  
5.住居16 遺物山土状況細部(南より) 6.住居16 管玉土山状況(内より)  
7.住居16 遺物出土状況細部(西より)

## 図版23 第3・4群・上坑

- 1.建物4(北より) 2.建物4 SP25(東より)  
3.建物4 SP43-44(東より) 4.建物4 SP32(北より)  
5.建物4 SP12(北より) 6.建物4 SP46-47(東より)  
7.建物4 SP41(東より) 8.建物5(北東より)  
9.建物5 SP76(東より) 10.建物5 SP75(東より)  
11.建物5 SP71(東より)

## 図版24 第4群

- 1.南派全貌(北より) 2.住居17(南より)  
3.住居17 東面断面(南より) 4.住居17 南北断面(東より)  
5.住居17 土炕遺物出土状況(内より) 6.住居17 土炕断面(東より)

## 図版25 第4群

- 1.住居17 竪(南より) 2.住居17 墓土遺物山土状況(東より)  
3.住居17 墓土遺物山土状況(南より) 4.住居17 遺物出土状況(南より)  
5.住居17 遺物山土状況細部(南より) 6.住居17 遺物山土状況細部(南より)

## 図版26 第4群

- 1.住居18(東より) 2.住居18 南北断面(東より)  
3.住居18 東面断面(東より) 4.住居18 遺物出土状況(西より)  
5.住居18 竪(西より) 6.住居18 墓土遺物山土断面(南より)  
7.住居18 墓土断面(西より)

## 図版27 第4群

- 1.住居19(北東より) 2.住居19 南北断面(南より)  
3.住居19 東面断面(東より) 4.住居19 遺物出土状況(北西より)  
5.住居19 竪(北西より) 6.住居19 墓土遺物山土(南東より)  
7.住居19 墓土断面(南西より)

## 図版28 第4群

- 1.住居19 遺物出土状況(北東より) 2.住居19 遺物出土状況細部(東より)  
3.住居19 遺物出土状況細部(南より) 4.住居19 遺物出土状況細部(南より)  
5.住居19 遺物出土状況細部(南より) 6.住居19 遺物出土状況細部(西より)

## 図版29 第5群

- 1.住居20(南より) 2.住居20 東面断面(南より)  
3.住居20 南北断面(東より) 4.住居20 竪(南より)  
5.住居20 墓土断面(東より)

## 図版30 第5群

- 1.住居21(南より) 2.住居21 東面断面(南より)  
3.住居22(東より) 4.住居22 竪(南より)  
5.住居22 墓土断面(東より)

## 図版31 第6群

- 1.住居24(南より) 2.住居24 南北断面(東より)  
3.住居24 東面断面(南より) 4.住居24 竪(東より)  
5.住居24 墓土断面(東より) 6.住居24 墓土断面(南より)  
7.住居24 遺物出土状況(南より) 8.住居24 上坑断面(東より)

## 図版32 第6群

- 1.住居24 上層遺物出土状況(南より)  
2.住居24 上層遺物出土状況細部(南西より)  
3.住居24 上層遺物出土状況細部(南東より)

## 図版33 第6・7群

- 1.第6・7群(北より) 2.住居25(西より)  
3.住居25 東面断面(南より) 4.住居25 南北断面(東より)

## 図版34 第6群

- 1.住居25 竪(南西より) 2.住居25 墓土遺物山土状況(南西より)  
3.住居25 墓土断面(南西より)

## 図版35 第6群

- 1.住居25 遺物出土状況(北より)  
2.住居25 墓土遺物山土状況(東より)  
3.住居25 遺物出土状況細部(南西より)

## 図版36 第6群

- 1.住居26(北東より) 2.住居26 東面断面(南より)  
3.住居26 南北断面(東より) 4.住居26 墓土遺物山土状況(北西より)  
5.住居26 竪(北西より) 6.住居26 墓土断面(南より)  
7.住居26 竪上面遺物出土状況(南西より)

## 図版37 第6群

- 1.住居27(南西より) 2.住居27 東面断面(南より)  
3.住居27 遺物出土状況(南西より) 4.住居27 管玉山土状況(南より)

図版38 第6群

- 1.住居28(南西より) 2.住居28 東西断面(南より)  
3.住居28 遺物出土状況(南西より) 4.住居28 遺物出土状況細部(南より)  
5.住居28 遺物出土状況細部(西より)

図版39 第6・7群

- 1.第6・7群全景(南より) 2.住居39(西より)  
3.住居39(西より)

図版40 第7群

- 1.住居32(東より) 2.住居32 南壁土断面(東より)  
3.住居32 東北断面(東より) 4.住居33(西より)  
5.住居33 壁(西より) 6.住居33 壁土断面(南より)  
7.住居33 電線土断面(南より)

図版41 第7群

- 1.住居34(東より) 2.住居34 東西断面(北より)  
3.住居34 遺物出土状況(北より) 4.住居34 遺物出土状況細部(北より)

図版42 第7群

- 1.住居35(西より) 2.住居35 壁(南西より)  
3.住居35 電線土断面(南より)  
4.住居35 南北断面(西より) 5.住居35 東北断面(北より)  
5.住居35 貴重断面細部(北より)

図版44 第7群 建物

- 1.建物9(西より) 2.建物9 SP221(東より)  
3.建物9 SP219(東より) 4.建物9 SP208(西より)  
5.建物9 SP187(東より) 6.建物9 SP104(西より)  
9.建物10 SP168(東より) 10.建物10 SP153(西より)  
11.建物10 SP154(内より) 12.建物10 SP141(東より)  
13.建物10 SP137(西より) 14.建物10 SP164(西より)

図版45 土坑

- 1.土坑13(南東より) 2.土坑13 断面(東より)  
3.土坑7 壁面(南より) 4.土坑8 断面(南より)  
5.土坑9 断面(南より) 6.土坑10 断面(東より)  
7.土坑12 断面(南より) 8.土坑14 遺物出土状況(南より)

図版46 北東地区

- 1.1997年度調査区(南より) 2.1998年度調査区(北より)  
3.1998年度調査区柱穴群(北から)

図版47 出土遺物 第1・2群

図版48 出土遺物 第2群

図版49 出土遺物 第3群

図版50 出土遺物 第3・4群

図版51 出土遺物 第4群

図版52 出土遺物 第6群

図版53 出土遺物 第6群

図版54 出土遺物 第6・7群 石製品 卡類

図版55 出土遺物 弦懸器

図版56 出土遺物 狹口器・瓦質土器

図版57 模形鍬治溝の断面復元図

# 第1章 はじめに

## 1. 調査の経過

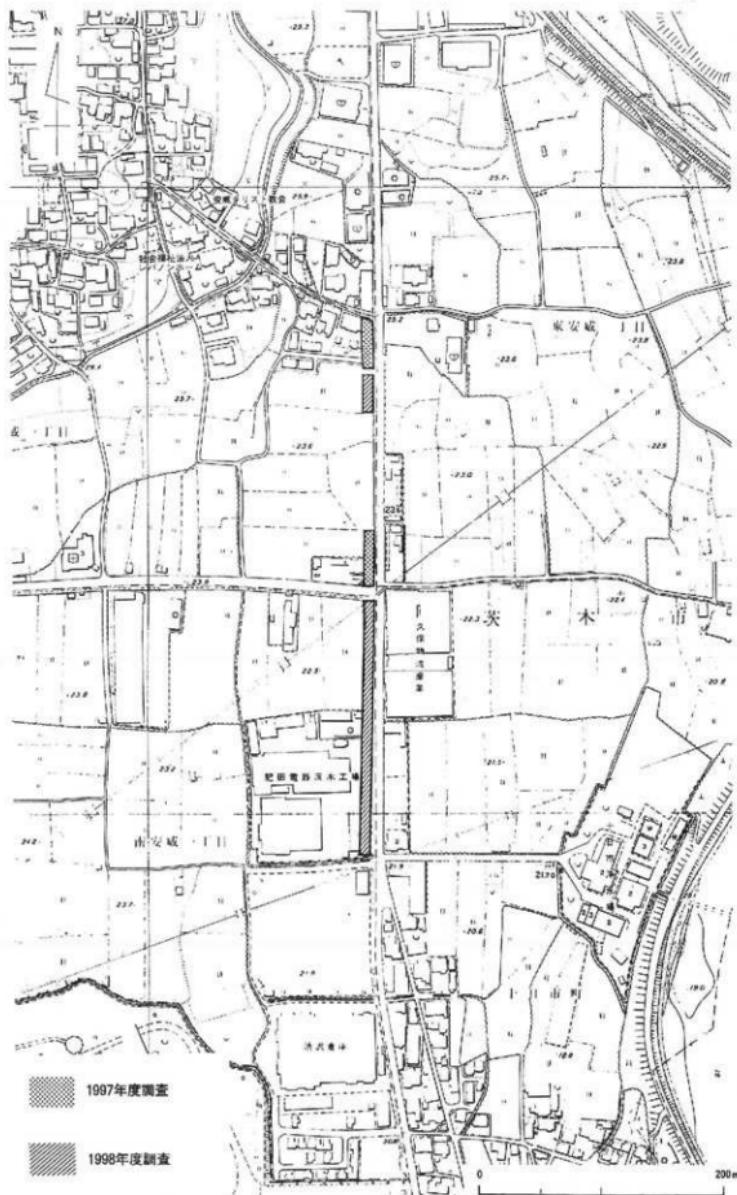
安威遺跡は、茨木市安威1丁目から南安威1丁目にかけて、主要地方道茨木龜岡線を東側の境として東西約500m、南北約600m範囲に広がる周知の遺跡（第1・2・3図）である。しかし、調査地区周辺は、今回の調査以前について、大規模開発が少なかったため発掘調査例が乏しく、今回の調査地区南端から南へ約100mの地点で茨木市教育委員会によって1997年度に大規模店舗建設に伴い調査を実施し、弥生時代後期の遺構・遺物を検出した例以外は、具体的な遺跡の様相はほとんど不明であった。

今回の発掘調査の契機となった主要地方道茨木龜岡線は、茨木市西河原西の交差点で国道171号線と合流していることから、朝夕に限らず交通渋滞を引き起こしていた。それを解消することと、安威川ダム建設工事のアクセス道路として拡幅を計画した。

拡幅工事箇所は、周知の遺跡である安威遺跡の東端部付近に沿って行われることから、工事に先立って本府土木部と大阪府教育委員会によって協議を行い、拡幅工事区域全域を対象とする試掘調査を実施することとなった。試掘調査は、本府教育委員会によって1996年度に試掘調査を実施した。その結果、何箇所かに遺構・遺物が発見された。その試掘成果をもとに、両者は再度協議を重ね、遺構・遺物が検出された範囲約3000m<sup>2</sup>については、本府教育委員会によって発掘調査を1997年度から実施することとなった。また、用地買収が行われていなかったため試掘調査を実施していなかった発掘調査区の名称であるB区とC区の間約108mについては、遺跡が存在する



第1図 茨木市と調査地点



第2図 調査区位置図

かどうか不明であったため、再度試掘調査を行うこととなった。再度の試掘調査は、1998年度に行い、その結果B区の南長さ約29mの範囲に遺跡が存在することが明らかになり、その結果を元に、両者が協議を行い、その年度内に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、1997年、1998年度の2カ年にわたって実施し、調査面積は、1997年度が1400m<sup>2</sup>、1998年度が2120m<sup>2</sup>で、計3520m<sup>2</sup>を測る。

発掘調査に伴う直接の費用負担については、本府教育委員会と本府土木部と協議の結果、既設道路の拡幅工事であるため、付近住民との調整、既設道路の安全確保を図り、なおかつ発掘調査を円滑に進めるためには、本体工事に含めて発注して実施する方法が、最も適切であると判断した。そのため、安威川ダム建設事務所が、茨木龜岡線の拡幅工事の本体工事について、交差している名神高速道路の北側を担当していることから、本体工事に含め調査を発注し実施した。

## 2. 調査の方法

道路拡幅工事の順序および既設建物の進入路を確保するために、発掘調査を実施した全長約330mの区間をAからIまでの9調査区に区分した。調査区は、AからC区を1997年度、DからI区を1998年度に実施した。調査は、調査区内の調査が終了後、次の調査区に移る方法を行った。

調査は、調査区の約2分の1が現地表面から造構面まで2m前後あるため、掘削することで周辺の既設建物に影響を及ぼすことが予想された。そのため造構面上面までの掘削で収まる雨水路および養壁の工事を優先した。この工事については、立合いにより対処し、掘削が造構面まで達していないことを確認した。

工事終了後、耕作土および盛土層をバックホウによって除去した後、それより下層を人力によって掘削し造構・遺物の検出に努めた。一部の地区については、最終造構面より下を掘削し、地山の確認を行った。調査終了後、埋設管などで造構が破壊される部分を除き、検出した造構を保護するために造構面上の厚さ約0.2mを真砂土によって養生し、その上に掘削土を埋戻した。

造構番号は、隔年度ごとに検出した造構順に通し番号をつけた。その後、住居跡、建物、土坑、溝などについては統一化を図り、北から順に通し番号をつけた。柱穴の番号については、多数検出されたため混乱するおそれがあるので、あえて統一しなかった。

ヘリコプターによる空中写真撮影を各調査区ごとに行い、これを基に20分の1、100分の1の平面図、造構図を作成した。この空中写真撮影で得られた各調査区のモノクロ密着写真を基に、調査地全域の合成写真を作成した。

空中測量図で表現が極めて困難な一部の造構、遺物出土状況に関しては、細部を表現するために手書き実測で10分の1、20分の1の図面を作成した。土層断面図については、造構平面図と対応するために基本的に20分の1で作成したが、細部が表現出来ないものについては、10分の1で行った。

註) 茨木市教育委員会「安威遺跡の発掘調査」『平成8年度発掘調査概要』 1997

## 第2章 位置と環境

茨木市は大阪府の北東部に位置し、東は高槻市、西は吹田市・箕面市、南は摂津市、北は豊能郡豊能町と京都府亀岡市に接している。大阪府の淀川以北は北摂地域と呼称されるが、千里丘陵を境に東西に分けられる。茨木市はこの北摂東部に位置している。安威遺跡は、茨木市と高槻市が接する付近、安威1丁目から南安威1丁目にかけて所在する、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡である。南北に長く、東西に短い長方形を呈する市域を持つ茨木市は、地形的には丹波帯に属する北摂山地が連なる北部と、河岸段丘と沖積平野からなる「二島平野」が広がる南部に大きく二分される。両者の境界は「真上断層帶」が明瞭な崖となって画しており、有馬にまで続く「有馬—高槻構造線」と呼ばれる活断層である。

市域を流れる中小河川は、北摂山地に源を発して南流し、淀川水系を経て大阪湾に流れ込んでいる。市域東部を流れる安威川は市内で最大の河川で、京都府亀岡市に源流を持ち、いくつかの小河川を合わせて南流した後、淀川の自然堤防に阻まれて西に向を変え、神崎川に合流している。安威遺跡はこの中流域右岸に位置している。

安威遺跡が立地するのは北摂山地の南に派生する段丘上である。標高はT.P.+21.5mから23.5mを測る。安威1丁目の南端には直線的な崖が東西にのび、扇状地帯である上位の段丘面と下位の段丘面（所謂「富田台地」）とを画している。安威川はこの付近で大きく蛇行し、両岸に氾濫原を形成している。安威遺跡はこの上位段丘面と下位段丘面の地形変換点にあたっている。

安威遺跡の立地する北摂東部（二島地域）は旧石器時代以降の各時代の遺跡が濃密に分布する地域である。当遺跡の周辺にも耳原遺跡・太田遺跡などの集落遺跡の他、北の丘陵の尾根上には塚原古墳群など多数の古墳が築かれている。ここでは、今回検出した安威遺跡の集落が展開した古墳時代の状況について述べていく。

二島地域では、3世紀中葉に安満宮山古墳が築造されたのち、後期まで400基近い古墳が確認されている。前期では郡家川西遺跡を基盤とする地域に、弁天山古墳群が形成される。4世紀初めの前方後円墳である弁天山A1号墳（岡本山古墳）をその初現とし、3支群に分かれた各群主墳が一連の首長系譜を引いて築かれたと理解される。この首長系譜はやがて郡家車塚古墳（4世紀後葉）・前塚古墳（5世紀前葉）へとつながっていく。茨木市域では4世紀中葉に全長100mを測る前方後円墳である紫金山古墳が築造された。後円部の竪穴式石室から鏡・玉類・石製品・貝輪・武器・武具・鉄製農工具類などが出土した。紫金山古墳と相前後して、やはり竪穴式石室を主体とする前方後円墳である将軍山古墳（全長110m）が現れる。前中期には安威遺跡の北方の丘陵上に安威0号墳（円墳）・同1号墳（前方後円墳）が作られている。いずれも割竹形木棺を入れた粘土櫛が2基設けられており、0号墳からは鏡・玉類・鉄製工具類などが、1号墳からは石製腕飾類などが出土した。安威古墳群中に立地するが、前期古墳はこの2基のみで、他は後



1. 宮川河原遺跡  
2. 墓谷古墳群  
3. 墓谷古墳群  
4. 墓谷山D6号墳  
5. 墓谷山D4号墳  
6. 墓谷山D3号墳  
7. 墓谷山D2号墳  
8. 弁天山D1号墳  
9. 尼ヶ谷古墳群  
10. 犬山古墳群  
11. 犬山B1号墳  
12. 犬山B2号墳  
13. 犬山B3-a号墳  
14. 犬山B3-b号墳  
15. 犬山B4号墳  
16. 桐原山東古墳  
17. 犬山A1号墳  
18. 大藏司古墳群  
19. 舞子山古墳群  
20. 四葉山A4号墳  
21. 上野道跡  
22. 不引川源寺支流跡  
23. 那須木町湯跡  
24. 那須草古墳  
25. 那須古墳群  
26. 今城原古墳  
27. 前原古墳  
28. 今城原古墳  
29. 水室古墳  
30. 水室溫跡  
31. 開田今城溫跡  
32. 跳鹿神社古墳  
33. 宮原溫跡  
34. 佐賀溫跡  
35. 佐賀古墳  
36. 佐賀古墳  
37. 跳鹿神社古墳  
38. 佐賀古墳  
39. 佐賀古墳  
40. 上土至溫跡  
41. 土室溫跡  
42. 富山古墳  
43. 石船古墳  
44. 高見古墳  
45. 土室山古墳  
46. 二子山古墳  
47. 石山古墳  
48. 横瀬古墳跡  
49. 丹波古墳  
50. 横瀬古墳  
51. 丹波古墳群  
52. 沢山1号墳  
53. 沢山2号墳  
54. 安威古墳群  
55. 安威古墳群  
56. 安威古墳  
57. 安威古墳  
58. 安威古墳  
59. 安威古墳  
60. 安威古墳  
61. 安威古墳  
62. 安威古墳  
63. 安威古墳  
64. 安威山2号墳  
65. 科弓山第1地点溫跡  
66. 科弓山第2地点溫跡  
67. 青井古墳群  
68. 西岸井溫跡  
69. 横井城跡  
70. 横井城跡  
71. 新原古墳群  
72. 新原山古墳  
73. 青井古墳  
74. 青井古墳  
75. 海北加北方溫跡  
76. 雄物川溫跡  
77. 雄物川溫跡  
78. 雄物川溫跡  
79. 太田山古墳  
80. 太田山古墳  
81. 太田山古墳  
82. 太田山古墳  
83. 雄物川溫跡  
84. 雄物川溫跡  
85. 雄物川溫跡  
86. 富田古墳  
87. 富田溫跡  
88. 富田溫跡  
89. 中城溫跡  
90. 雄物川溫跡  
91. 雄物川溫跡  
92. 小代溫跡  
93. 畠山古墳  
94. 畠山古墳  
95. 畠山古墳  
96. 畠山古墳  
97. 畠山古墳  
98. 畠山古墳  
99. 畠山古墳  
100. 畠山古墳  
101. 上野溫跡  
102. 開田溫跡  
103. 開田溫跡  
104. 開田溫跡  
105. 開田溫跡  
106. 開田溫跡  
107. 馬場  
108. 驚山古墳  
109. 駒山溫跡  
110. 駒山古墳  
111. 駒山古墳  
112. 駒山古墳  
113. 駒山古墳  
114. 上野鶴山溫跡  
115. 上野鶴山古墳  
116. 上野鶴山古墳  
117. 駒山古墳  
118. 駒山古墳  
119. 駒山古墳  
120. 駒山古墳  
121. 地盤水溝跡  
122. 茂木ゴルフ場内高瀬  
123. 桜沢池底温跡  
124. 桜沢池底温跡

第3図 周辺の遺跡

期の横穴式石室塙である。群集塙である安威古墳群とは区別して考える必要があろう。郡遺跡・宿之庄遺跡・倍賀遺跡などでは弥生時代から継続して集落が営まれている。東奈良遺跡においても集落規模が拡大し、他地域からの搬入土器も多い。また総持寺遺跡でも庄内式期の堅穴住居が検出されている。しかし前述した前期古墳の造営母体となる集落は明確でなく、古墳間に首長系譜を追うことはできない。

中期に入ると、安威川左岸の下位段丘面（宮田台地）の最高所に全長226mを測る前方後円墳である太田茶臼山古墳が突如として築かれた。現在宮内庁が「繼体天皇陵」としているが、墳形や出土埴輪の年代観等から5世紀中葉の築造と考えられる。また先行して太田石山古墳があるものの、三島地域の中では突出した古墳であり、既存の首長系譜上にのるものではない。

太田茶臼山古墳の北東の土室地区には石山古墳・十保山古墳・森山古墳などの中小規模の古墳が築かれた。5世紀中葉になると、太田茶臼山古墳の南1kmの総持寺遺跡では方墳群が形成され始める。概ね一辺10m以下の小規模・低墳丘のものである。墳丘が削平されていて主体部が残存しないが、木棺直葬であると推定している。周溝内から初期須恵器や埴輪（形象埴輪を含む）などが出土した。埴輪は一部が後述する高槻市新池遺跡で生産されたものであることが判明した。茨木市郡道跡・駅前遺跡・春日遺跡、高槻市ツゲノ遺跡等でも同様の小規模古墳（方・円墳）が検出されている。これらの古墳（群）はいずれも5世紀中葉から後半に出現し、6世紀前半で造営を終了しているようである。安威遺跡の古墳時代集落が出現するのもこの時期である。高槻市新池遺跡では埴輪生産が行われている。5世紀中葉と中断期間をはさんだ6世紀前半の二時期の埴輪窯群が検出されており、それぞれ太田茶臼山古墳と今城塚古墳に製品を供給していたものである。また西方の千里丘陵では須恵器生産が始まり、7世紀中頃まで継続している。

後期では全長190mの前方後円墳である今城塚古墳があげられる。今城塚古墳が『日本書紀』や『延喜式』に記された「繼体天皇藍野陵」であることは疑いをはさむ余地のないところで、古墳編年において、今城塚古墳が530年前後という定点のひとつとなっている。南塚古墳・青松塚古墳は横穴式石室を主体部に導入している。また石棺を主体とする海北塚古墳・耳原古墳などが築造された。丘陵部には断崖・安威・将軍山・塚原古墳群などの群集塙が慶ね6世紀中葉以降に造営されている。終末期になると疎敷きの初田1号墳、夾紵棺を持ち、藤原鎌足を被葬者とする見解の強い阿武山古墳が築かれている。後期の集落については安威遺跡の他に、茨木市総持寺遺跡、高槻市ツゲノ遺跡で竪穴住居等を検出している。

#### 参考文献

- 高槻市史編さん委員会「高槻市史 第6巻」「考古編」 1973
- 大阪府教育委員会「総持寺遺跡発掘調査概要」 1995
- 大阪府教育委員会「総持寺遺跡発掘調査概要Ⅱ」 1997
- (財)大阪府文化財調査センター「安威川縦合開発事業に伴う文化財等総合調査中間報告書」 1997
- (財)大阪府文化財調査研究センター「総持寺遺跡」 1998
- 茨木市教育委員会「平成8年度発掘調査概要」 1997
- 高槻市教育委員会「新池」「新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書」高槻市文化財調査報告書第17冊 1993

## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

安威遺跡は、地形的に上位段丘と中位段丘の変換点に位置する。調査地区北端に存在するA区と南端に存在するH区までの全長約330m間の標高差は約2mを測る。層序は、道路及び宅地・工場造成時の盛土（厚さ約1m～1.5m）を除くと遺構検出層である地山までは、基本的にほぼ同様な堆積状況を呈している。しかし、検出した遺構の遺物包含層は削平を受けたものと推定され、存在しない。

以下各層の概要（第4図、図版2-1～4）を記述する。

I層 現耕土層で層厚は、約0.2m前後を測る。

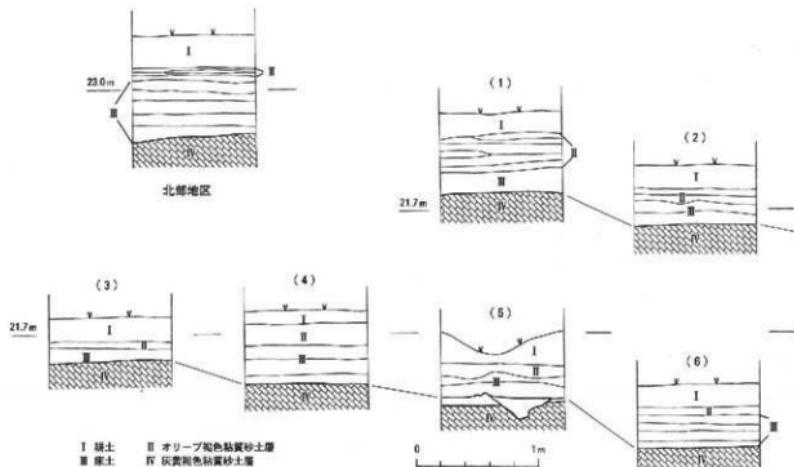
II層 現耕土の床土層で、基本的に1層であるが、部分的に2から3層に分けることができる。

層厚は、0.05mから0.1mを測る。

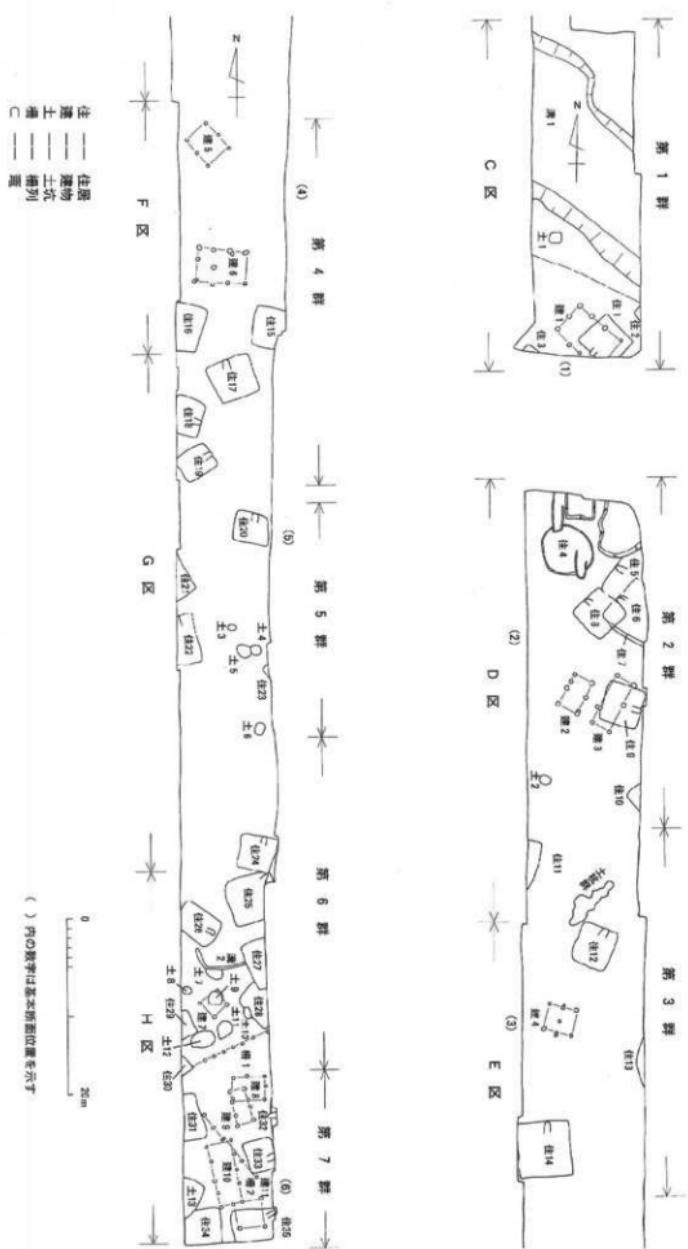
III層 緑灰色砂質土層を基本とする層で、中世から近世にかけての床土層と推定され、中世から近世にかけての遺物が少量ながら出土した。基本的に1層から3層に分けることが出来る。

層厚は、0.1mから0.5mを測り、各層の上面には、鏧溝が多数検出されている。

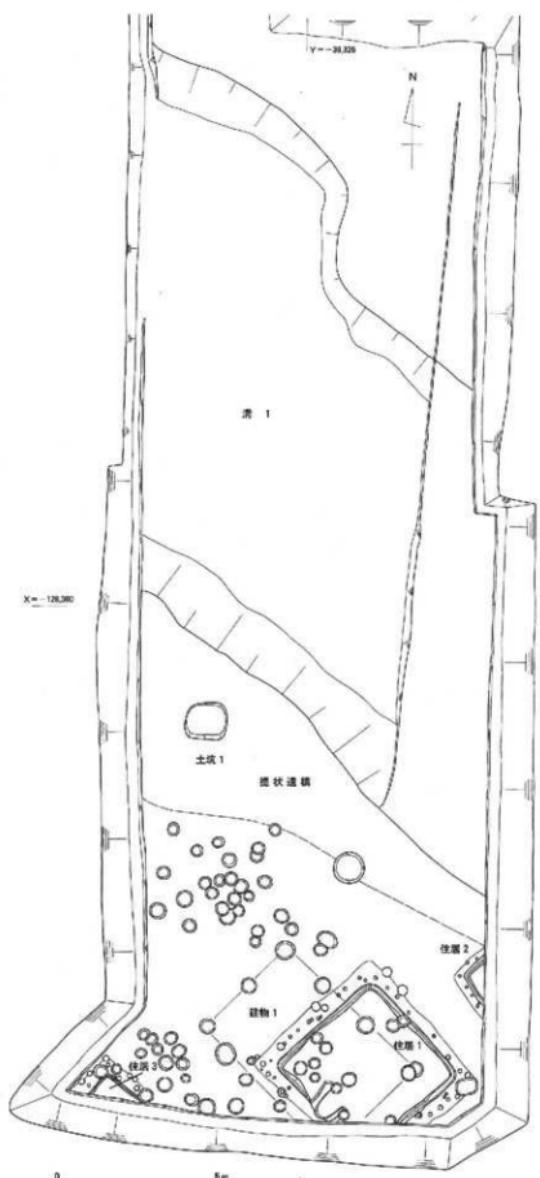
IV層 調査区内の地山である。北部地区は砂礫層を基本とする。古墳時代の遺構が検出された南側の地区は、色調は異なっているが砂質土層が大半を占め、部分的に砂礫層が認められる。検出した遺構の大半は、砂礫層を避けているものと推定され砂質土層上面に存在する。



第4図 基本層序図



第5図 古墳時代遺構配置図



第6図 第1群平面図

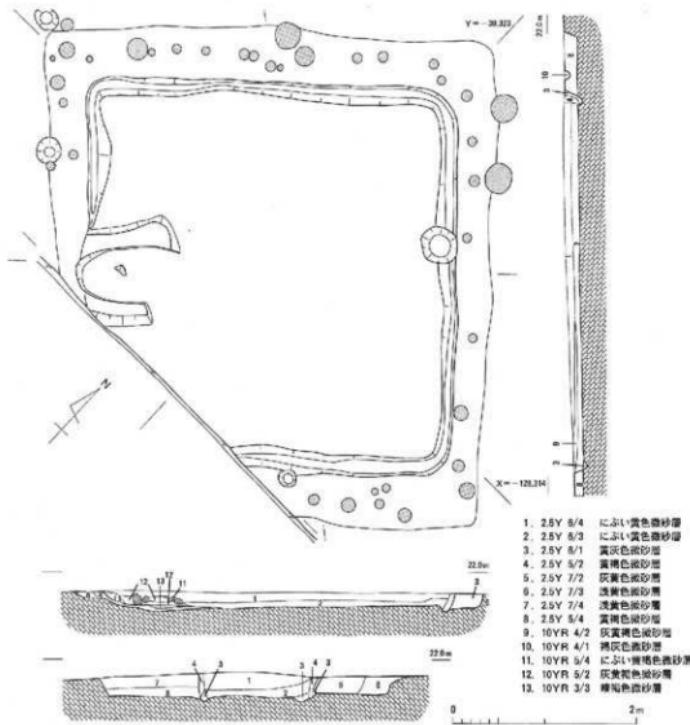
## 第2節 第1群の調査

### 1. 概要 (第6図, 図版2-5)

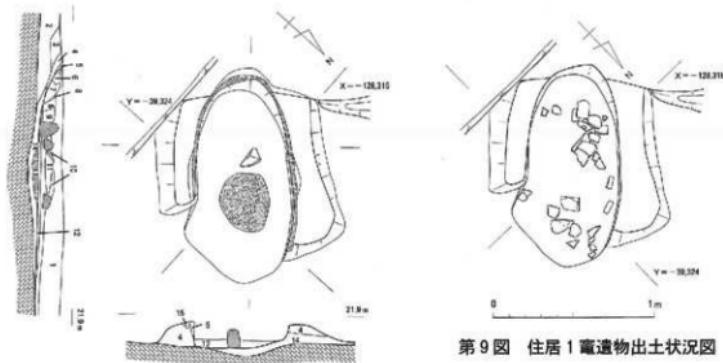
府道と市道の交差点北側  $Y = -39.325$ 付近を中心とし,  $X = -128.276$ から  $X = -128.317$ 付近の全長約41mの調査区（C区）で検出した。堅穴住居3棟・掘立柱建物1棟・土坑等で構成されている。安威遺跡では北端に位置する遺構群である。

C区では約500m<sup>2</sup>を対象に調査を実施した。現地表下約1mの盛土・旧耕土を除去すると、中世以前の包含層がある。遺構面も確認したが、後述する自然河川の痕跡を除けば明確な遺構は検出していない。古墳時代中期から後期の遺構面は黄褐色砂質土をベースにT.P. +22m前後で検出した。

幅11mから14mの自然河川（溝1）が調査区を北西から南東に横断している（第6図）。この川の北側は南と比べ約0.3m高くなっている。遺構は存在せず、遺物もほと



第7図 住居1平面図・断面図



第8図 住居1竈平面・断面図

第9図 住居1竈遺物出土状況図

んど出土しない。川の南側には幅2.5mから5.0mの範囲で堤状に盛土が施されている。堅穴住居を始めとする遺構群は、この堤の南に展開している。

### 2. 住居1（第7図、図版3-1・6）

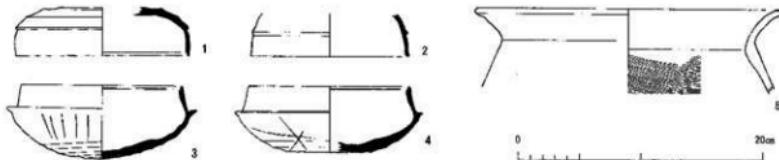
調査区の南東、X=-128.315、Y=-39.324付近に位置する。一辺4.0mを測る隅丸方形の住居で、南隅の一部を除くほぼ全形を検出できた。主軸は南北方向から約45度東に振っている。南西辺の中央壁際には竈を設置している。竈の両脇から、幅0.2mほどの壁溝が四辺に巡っている。住居は深さ0.15m程度残存しているが、床面には後述する掘立柱跡など後世のピットが掘り込まれていたほかは、住居の主柱穴となるものは検出しなかった。

竈（第8・9図、図版3-2～5）は長さ1.3m、最大幅0.6mを測る。黄色シルトをもちいて馬蹄形に築いている。頂部は壁溝の外に若干出ており、煙道部が続いているようである。検山時には黄色シルトの内側に焼土・炭化物が広がっていた。袖部の幅は0.25mから0.3m、残存高は0.15mを測る。内側は被熱しており、最奥部が最もよく熱を受けている。燃焼部の長さは1.0m、幅は0.5m程度である。奥から0.3mと0.7mのところにそれぞれ石が置かれており、この右の間の床面が被熱して赤変していた。床面より上で上器片が出土した。壁溝の0.5mほど外側でこの住居に伴う掘り方と思われるラインを検出した。また、板材の痕跡と思われる幅0.05m、長さ0.3m程の黒褐色土塊が、壁溝内に並んでいる状況を一部分ではあるが埋上面で確認している。断削り部及び調査区南壁での十層観察の結果もあわせて考えると、まず一辺5mの方形に地山を掘り込んだ後、0.5m内側に板材を打ち込み、外側の堀方との間を土で埋め戻しているようである。検山した壁溝がこの内側のラインにあたる。外側と内側のラインの間には小ピットが並んでおり、壁構造を持つ住居であった可能性が考えられる。精査を重ねても主柱穴は全く確認していない。本来柱穴を持たないと考えられることもその根拠となろう。

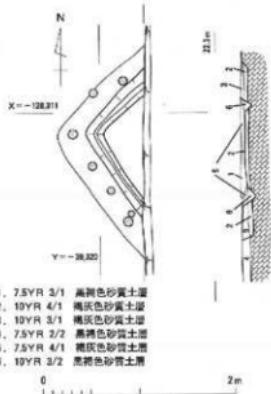
この住居の床面及び埋土から須恵器・土師器等が出土している（第10図、図版47-3）。これらの遺物よりこの住居には5世紀末から6世紀初頭の時期が与えられる。

### 3. 住居2（第11図、図版3-7・9）

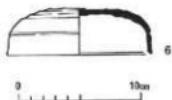
調査区東端で検出した、方形の堅穴住居である。西隅コーナーの一部がかかっているだけで、住居の大部分は調査区東の府道下に埋没している。主軸の方向は、住居1と同じである。規模は不明だが、幅0.2mの壁溝とその0.3m外側に平行して巡る掘り方のラインを検出した。やはり柱穴は持っていないよう、住居1と同様の構造を持つようである。



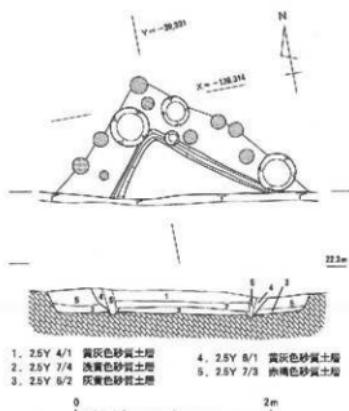
第10図 住居1出土遺物



第11図 住居2平面・断面図



第12図 住居2出土遺物



第13図 住居3平面・断面図

住居の北側には先に触れた堤状遺構が接している。調査区東壁の断面観察でこの住居2が堤状遺構の上から掘り込まれていることが判明した。側溝出土の須恵器壺蓋がこの住居2に伴う可能性が高い（第12図、図版47-6），これによると時期は6世紀前半と考えられる。

#### 4. 住居3（第13図、図版3-8・10）

調査区南西端で検出した方形の堅穴住居である。北隅コーナーの一部のみで、ほとんどが調査区外の市道下に存在する。他の2棟と主軸方向を同じくし、同時期に作られたことを窺わせる。住居内壁の板材を打ち込んだ痕跡である幅0.1mの溝と、その外側に0.4mの掘り方を持つ。主柱穴はやはり存在しない。

#### 5. 建物1（第14図）

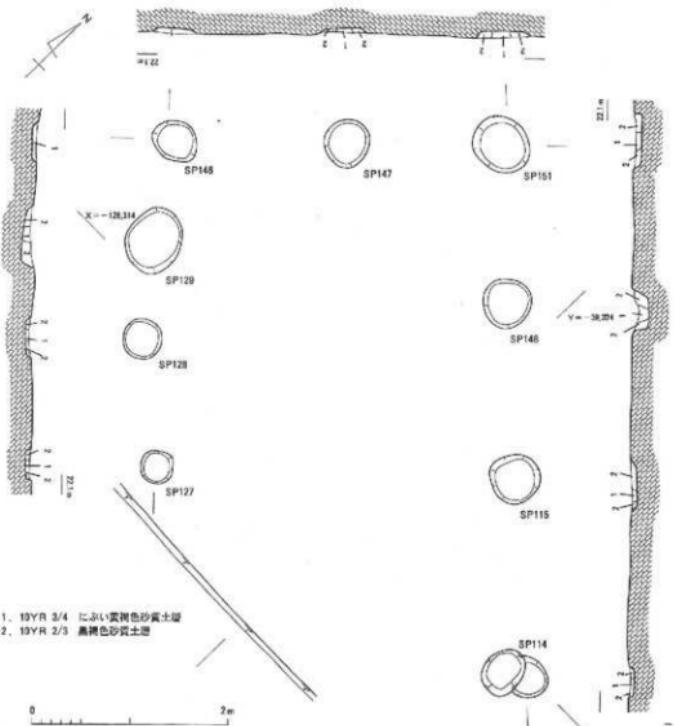
調査区南東部で前述した住居1と重複して検出した建物である。住居群と同じ方向に主軸を持つ。梁間2間、桁行3間以上で、規模は柱間で3.5m×5.5m以上を測る。柱穴は直徑0.5m前後の円形を呈し、深さは0.1mから0.15m程度残存している。

柱穴からは遺物が出土しなかったため時期を明らかにはできないが、建物主軸の方向から見て堅穴住居群との間にはさほど時期差はないと思われ、古墳時代後期前半の範疇で考えられる。

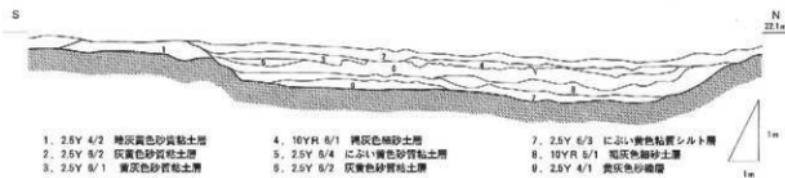
#### 6. 土坑1（第16図）

調査区東端で検出した。溝1の南肩からは2mほど離れ、堤状遺構のほぼ中央に位置し、東西1.3m、南北1.2mの方形を呈する。盛土を除去した面で掘り方を確認したが、上層での遺物の出土状況をみると、最終的な掘り込み面が検出した高さより上に存在し、祭祀の場所として継続的に使用されていた可能性が指摘できる。

出土遺物（第17図、図版47-7・8・20）は土師器高壺・甕・塊などである。土師器壺（21）は口縁部の下側に段を有しており、須恵器を模倣した器形である可能性がある。22はT K10からM T15型式に属する須恵器壺蓋である。堤状遺構は土坑1の直後に築かれており、この土器が土



第14図 建物1平面・断面図



第15図 溝1土層断面図

坑1とともに堤状遺構の上限も示す資料である。

#### 7. 堤状遺構（第15図）

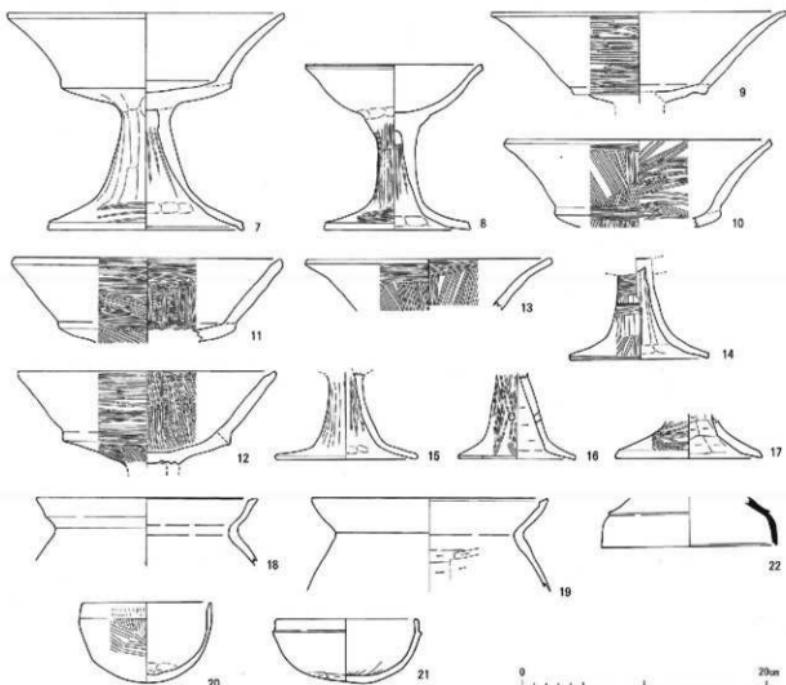
既述の自然河川（溝1）南岸沿いに築かれた、幅2.5mから5.0m、残存高0.3m程度を測る遺構である。初期須恵器を含む古墳時代の遺物を多量に包含した黒褐色土を用いて盛土されていた。自然河川（溝1）は深さ0.5m程と浅く、水が流れた痕跡もほとんど確認できない。遺構や遺物

の検出状況から見て集落の北限であったことは明らかで、堤は集落を画する目的をもつ。初期須恵器を含むことから集落の造営が開始されると同時に堤が築かれた可能性がある。

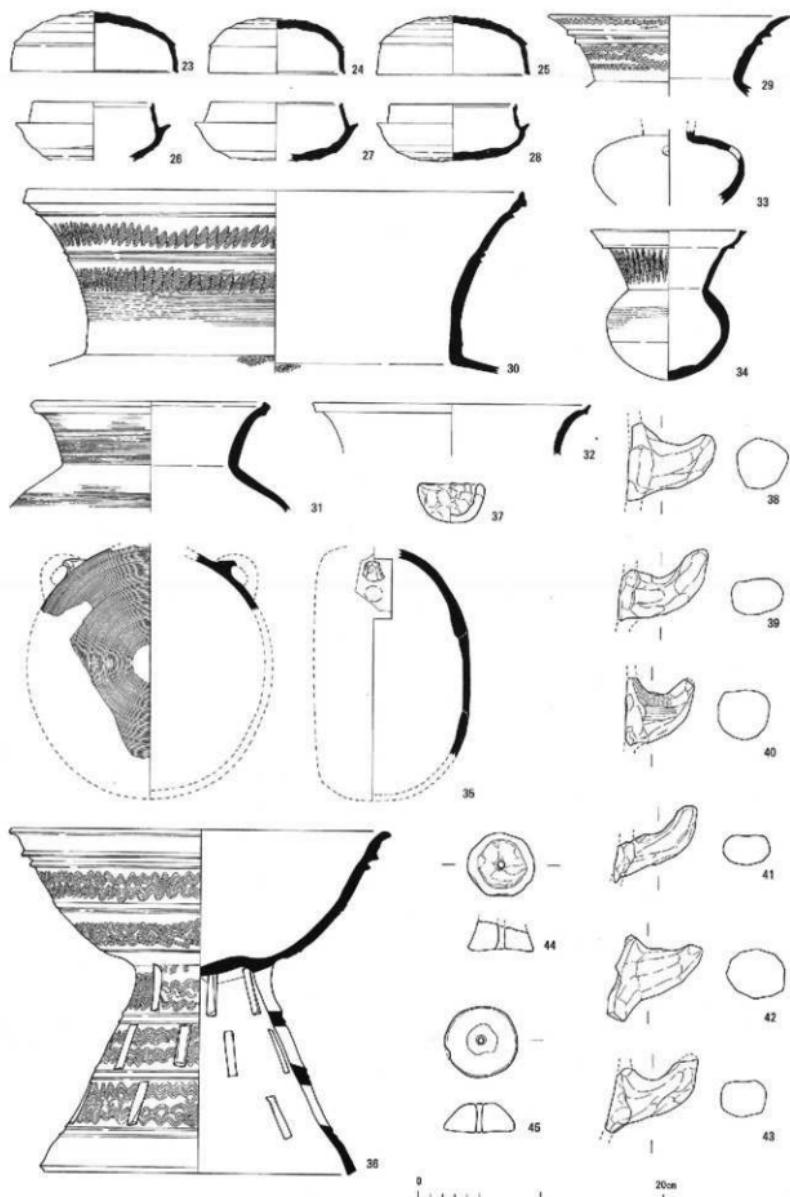
出土した遺物は須恵器壺蓋・壺・甕・器台・提瓶・龜・土師器、紡錘車などである（第18図、図版47-36）。後述の土坑1の上面にあたる部分に特に集中して出土した。

29は須恵器の壺口縁部である。端部や施文の特徴から伽耶系のものとみられる。初期須恵器の範疇に入る器台（36）の他、32の口縁部など古相を示す遺物も含まれるが、壺蓋（24）、壺身（28）、甕（34）、提瓶（35）などMT15型式前後のものが多くを占めている。

第1群の造構については、建物1以外は、いずれもMT15型式前後の須恵器を伴っている。住居2がこのなかでは若干時期が下ると思われるが、概ね5世紀末から6世紀初頭に作られたと考えられる。建物は住居1の廃絶後に建てられている。主軸方向からみて、住居2・3と共に存した可能性も考えられる。



第17図 土坑1出土遺物



第18図 堤状遺構出土遺物

### 第3節 第2群の調査

#### 1. 概要(第19図、図版4-1)

第2群は、Y=-39.325を中心とし、X=-128.330付近からX=-128.364付近の長さ約34m、幅約13mの間に7基の住居跡、建物2棟、土坑1基などを検出した。

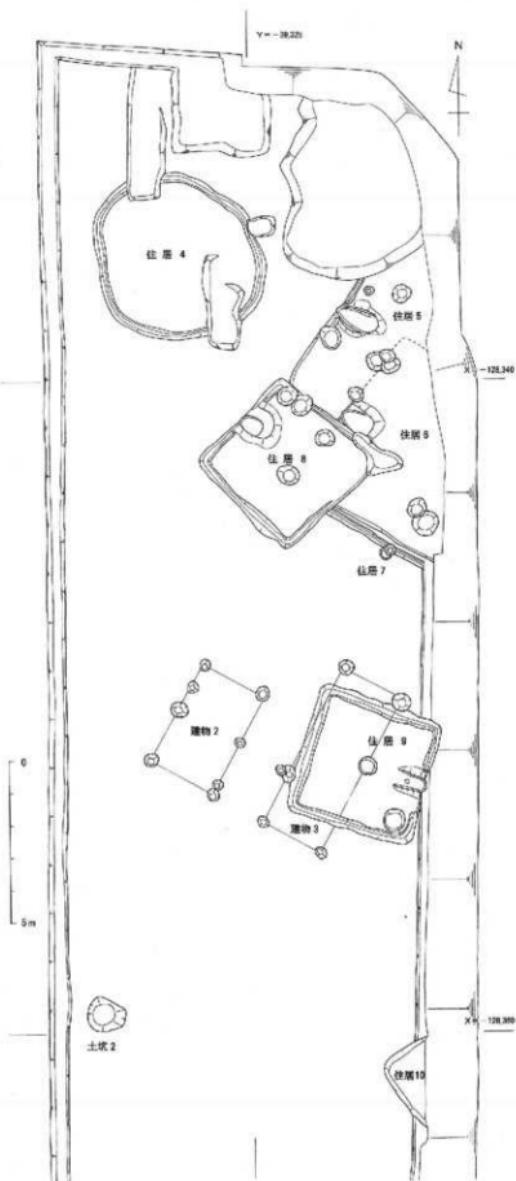
第2群の北辺部の長さ約15mの間は、既存の道路の交差点付近であり、横断歩道橋、側溝などの施設の設置時に削削され、造構検出面のほとんどが削平を受けていた。

#### 2. 住居4

住居4(第21図、図版4-2)は、第2群の北側X=-128.336、Y=-39.327付近を中心とし、平面形がほぼ円形をなす住居跡である。今回の調査で検出した住居跡のはほとんどが、平面形では方形ないしは長方形であるのに対して、円形のものは、2例のみである。

直径約5.0m、深さ約0.1m、床面積は約19.6m<sup>2</sup>を測る。

住居跡の一部は、既存の道路の施設により削平を受けていた。床面はほぼフラットで、住居の壁に沿って壁帶溝が存在する。壁帶溝の埋土は土層断面観察の結果(図版4-3・4)から、ほぼ床面と同色、同系統の上で埋まっているため、使用時には埋められていたものと推定される。壁帶溝は、幅約0.1m、深さ約0.05mを測る。



第19図 第2群平面図

遺物（第20図）は、床面からのものではなくすべて埋土から出土した。少量で破片が多く、図化できたのは、須恵器坏身 1 点 (46), 韩式系土器平底鉢 1 点 (47), 土師器高环脚部片 1 点 (48) の 3 点のみである。

出土した須恵器から住居跡の時期は、田辺編年の MT15 形式、中村編年の II-1 形式に相当し、6 世紀初頭に比定される。

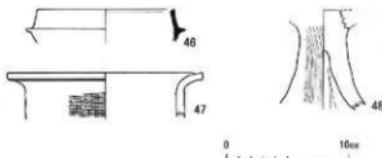
### 3. 住居 5・6・7・8 (第25図)

第2群の北、X = -128.336 から X = -128.346, Y = -39.320 付近で 4 基の住居跡が、切合って検出された。平面および土層観察、出土遺物から住居跡の築造順は、住居 5, 7, 6, 8 の順となる。

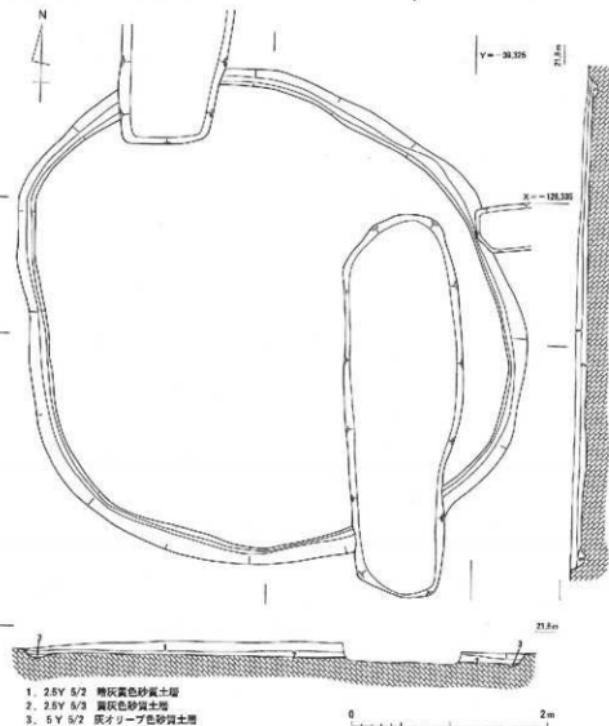
**住居 5 (第25図、図版 5-1)** 住居 5 は、4 基の住居の中では最も北側に位置する。北側は道路施設築造時に削平を受け、東側は調査区外、南側を住居 6, 7, 8 によって削平され、残存していたのは西側のみであった。

住居の方向は、N-52°-W である。

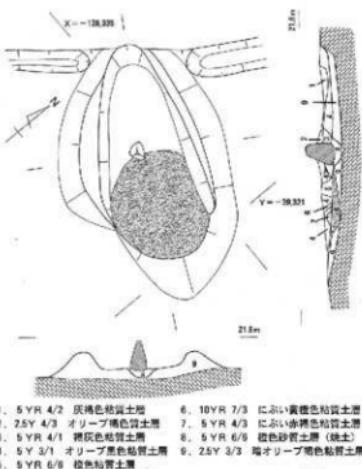
竈、南西辺部の位置から一辺約 6.0 m の隅丸方形の住居と推定され、検出面からの深さ約 0.2 m を測る。床面積は約 36.0 m<sup>2</sup> と推定される。一部のみの検出であるが、壁帶溝が壁に沿って存在する。溝の埋土がほぼ床



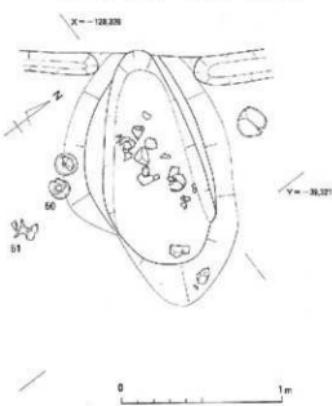
第20図 住居 4 出土遺物



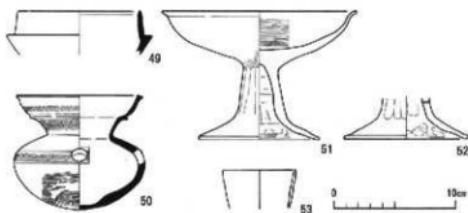
第21図 住居 4 平面・断面図



第22図 住居5竈平面・断面図



第23図 住居5竈遺物出土状況図



第24図 住居5出土遺物

面と同色、同系統の土であるため、使用時には埋められていたものと推定される。計測値は、幅約0.2m、深さ約0.05mを測る。焼失住居で埋土中に多量の焼土、炭片が存在する。

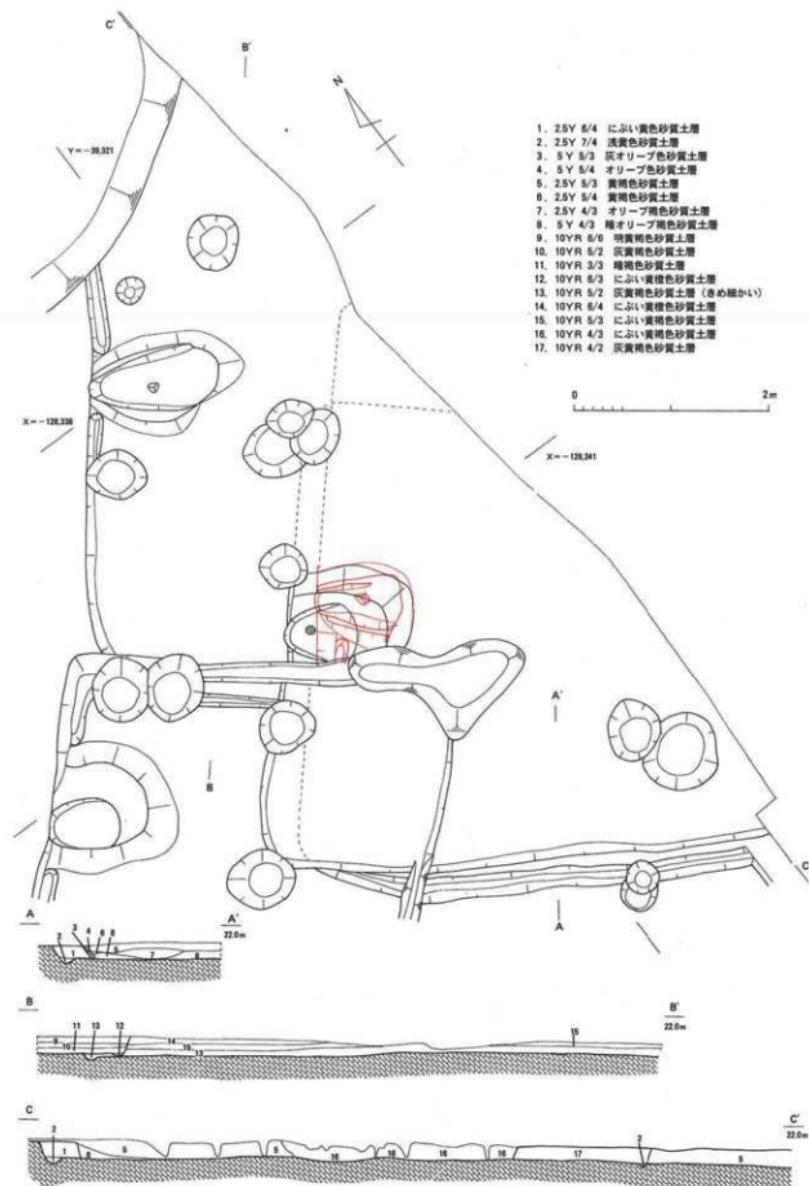
竈（第22図、図版5-2・5）は、西壁のほぼ中央部に位置するものと推定され、平面形では「V」字形に近く先端は丸い。先端は、住居の壁より若干外側にあり、角度はやや西に振る。竈の床面は、住居跡の床面より約0.06m程度高い位置にあり、床面は最大幅0.6m、長さ約1.2mを測る。支脚は、幅約0.1m、長さ約0.2mの長方形に近い河原石を使用し、先端から0.55mの位置にある。床面はほぼ平らで、焚口から支脚までの床面は焼けて赤褐色を呈する。

竈内からは（第23図、図版5-3・4）、甕片、製塙土器（第24-53図）が支脚周辺の床面付近から出土（第23図、図版5-3・4）したが、甕片は図化できなかった。

住居内から出土した遺物（第24図、図版5-6）は、須恵器甕（50、図版48-50）、土師器高环（51、図版48-51）などが竈の左肩部周辺の床面上から、埋土中からは、須恵器環身（49）、土師器高环片（52）などが出土している。

出土した須恵器から時期は、田辺編年のTK 208形式。中村編年のI-4形式に相当し、5世紀後半に比定され、切り合った住居跡の中では最も古い。

**住居6**（第25図、図版6-1・3・4） 住居6は、4基の住居の中ではほぼ中央に位置し、住居の約3分の1は、東の調査区外にある。北と西側は住居5、南側には住居8が存在し、住居7と重複関係にある。住居の方向は、N-50°-Wである。住居の北辺および西



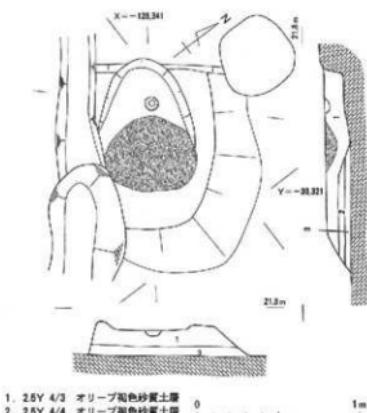
第25図 住居5・6・7平面・断面図

片の約2分の1は、住居、柱穴および上層の砂層が複雑に絡み合っていたため平面では確認できなかった。そのため東壁の断面により、切り合いおよび規模を確認した。南西辺部の形状および土層断面観察から一辺約4.8mの隅丸方形をなす住居と推定され、検出面からの深さ約0.1mを測る。床面積は約23.0m<sup>2</sup>と推定される。壁帶溝は土層断面および平面観察の結果、存在しない。

竈（第26図、図版6-2）は、西壁のはば中央部に位置するものと推定され、平面形ではやや開き気味の「U」字形に近い形を呈する。先端の約0.05mは、住居の壁よりやや外側にある。竈の床面は、住居跡の床面より約0.15m程度高く、住居7のほぼ直上にある。住居7の竈上面に、幅約1.0m、長さ約1.3mの範囲に盛土によって床面を築き、竈が作られている。竈の床面は最大幅0.55m、長さ約0.75mを測る。支脚は欠失していたが、支脚の掘り方が存在しており、径約0.08m、深さ約0.03mを測る。床面はほぼ平らで、焚口から支脚まで焼けて赤褐色を呈する。

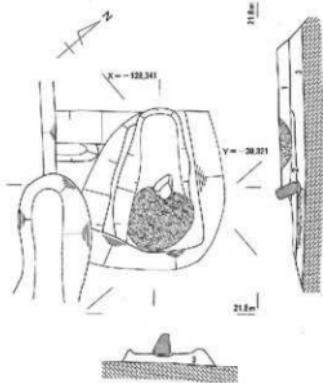
遺物（第28-55～61図）は、須恵器の坏身、坏蓋、甕、土師器の手づくね土器などが埋土中より出土し、床面上からはなかった。

出土した須恵器から住居跡の時期は、田辺編年のTK10形式、中村編年のII-2形式に相当し、



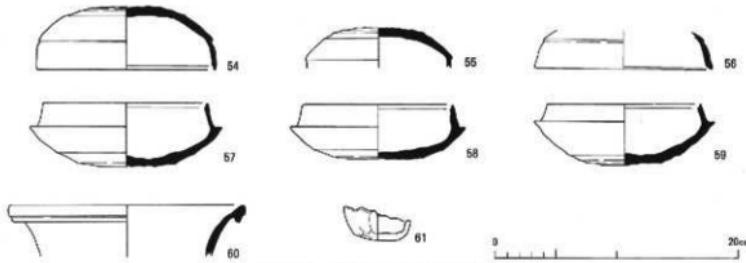
1. 2SY 4/3 オリーブ褐色砂質土層  
2. 2SY 4/4 オリーブ褐色砂質土層  
3. 2SY 5/4 黄褐色砂質土層

第26図 住居6竈平面・断面図



1. 2SY 4/3 オリーブ褐色砂質土層  
2. 2SY 4/4 オリーブ褐色砂質土層  
3. 2SY 5/4 黄褐色砂質土層

第27図 住居7竈平面・断面図



第28図 住居6・7出土遺物

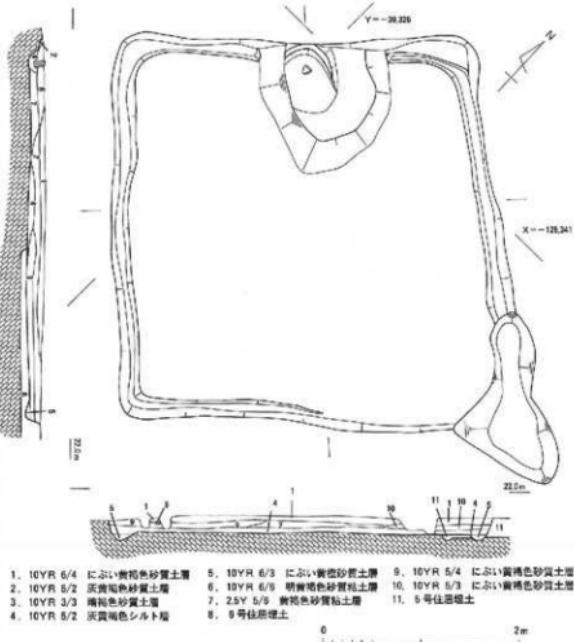
6世紀前半に比定される。

住居7（第25図、図版7-1・2） 住居7は、切り合って存在する4基の住居の中ではほぼ中央に位置し、住居の約3分の1は、東の調査区外、北と西側は住居5、南側には住居8が存在し、住居7と重複関係にある。住居の北辺および西辺の約2分の1は、住居、柱穴および上層の砂層が複雑に絡み合っていたため平面では確認できなかった。そのため東壁の断面観察により、切り合ひおよび規模を確認した。これらから一辺約6.0mの隅丸方形をなす住居と推定され、検出面からの深さ約0.2mを測る。床面積は約36.0m<sup>2</sup>と推定され、方向はN-50°-Wである。埋土内に焼土、炭片が混在していることから、焼失したものと推定される。

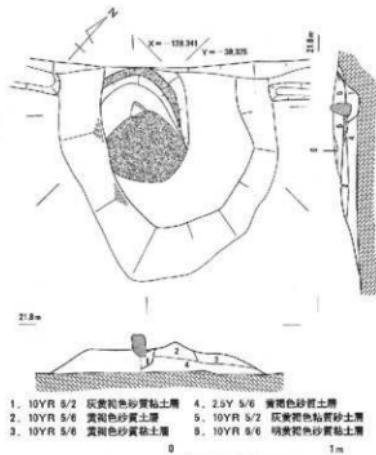
竈（第27図、図版7-3・4）は、住居6の竈のほぼ直下にあり、西壁のほぼ中央部に位置するものと推定され、平面形では「U」字形に近い。先端の約0.05mは、住居の壁より外側にある。竈の床面は住居の床面より0.05m程度高い位置に盛土によって築かれている。盛土は、底面の幅0.9m以上、長さ0.95m以上、上面幅0.5m以上、長さ約0.85mを測る。竈の床面は最大幅0.4m、長さ約0.85mを測る。竈の壁面は、上層に住居6の竈の床面が近いためほとんどが欠失し、残存高約0.02mを測る。支脚は、先端から0.45mの位置にあり、幅0.1m、長さ0.13mの石を使用している。

遺物は、図化できたのは、壺蓋1点（第28-54図、図版47-54）のみで床面上から出土した。時期は、III辺縫年のMT15形式、中村縫年のII-1形式に相当し、若干住居6よりは古い。このことから、住居7が焼失直後に建てられた可能性が高い。

住居8（第29図、図版8-1～3） 4基の重複する住居の中では、最も南西側に位置する。東北辺部の一部が上層の造構によって削平を受けている。東辺約4.0m、西辺約3.7m、東西長約4.0mを



第29図 住居8平面・断面図



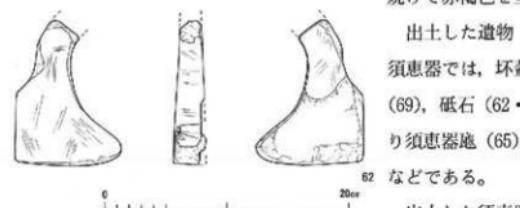
第30図 住居 8 竪平面・断面図

測り、形状は隅丸台形に近い。検出面からの深さ約0.4m、面積は約15.4m<sup>2</sup>を測る。壁帶溝は、壁に沿ってほぼ一周し、幅約0.2m、深さ約0.05mを測る。

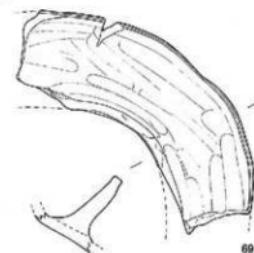
竪(第30図、図版8-4・5)は西辺中央よりやや北寄りに位置し、住居の床面より高さ約0.15mの位置に盛上によって築かれ、底面幅1.3m以上、長さ約1.3m、上面幅約0.9m、長さ約1.0mを測る。平面形では若干開き気味の「U」字形に近い形を呈する。竪の床面は、ほぼ水平で最大幅0.5m、長さ約0.6mを測る。竪の壁面は、床面が検出面に近いためほとんどが消失し、残存高約0.07mを測る。支脚は、幅約0.07m、長さ約0.12mの長方形近い河原石を使用し、先端から約0.15mの位置にある。焚口から支脚までの0.4mの間は焼けて赤褐色を呈する。

出土した遺物(第31・32図、図版8-6)は、須恵器では、壊蓋(63)、壊身(64)、移動式竪片(69)、砥石(62・図版54-62)で、他に埋土中より須恵器底(65)、土師器底(66～68、図版48-68)などである。

出土した須恵器から時期は、田辺編年のTK10、中村編年のII-2形式に相当すると考えられるが



第31図 住居 8 出土遺物 1



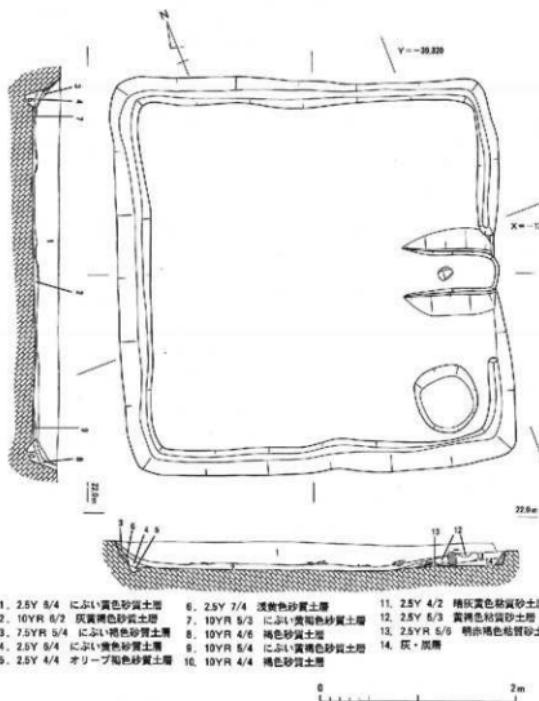
第32図 住居 8 出土遺物 2

若干古い要素をもっている。

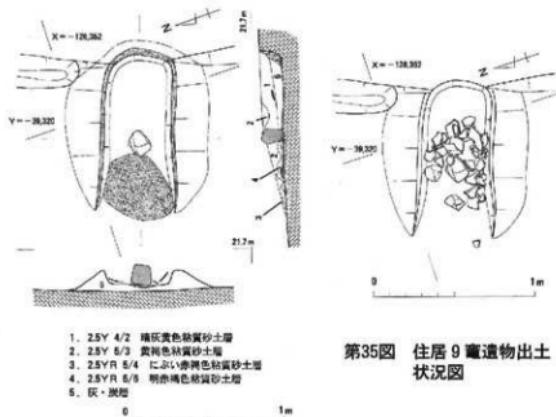
#### 4. 住居 9 (第33図)

図版 9-1・3・4) X = -128.352, Y = -39.322付近を中心とし、第2群では、南側に位置する。住居は平面形では方形に近く、一辺約3.9m、検出面からの深さ約0.3mを測る。焼失住居で、埋土下には、厚さ約0.01m程度の焼土、炭、灰層が凹レンズ状に堆積する。埋土には、土師器甕(第38-70図)、高坏の破片の他に、手づくね土器(図版11-3・4)が混在して出土した。その数は、16点(第38-71~86図、図版48-72・74~77・80)に及ぶ。

これらは、図化すると完形品になるものが多いが、ほとんどが、破片で出土して

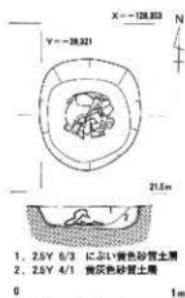


第33図 住居9平面・断面図



第34図 住居9竈平面・断面図

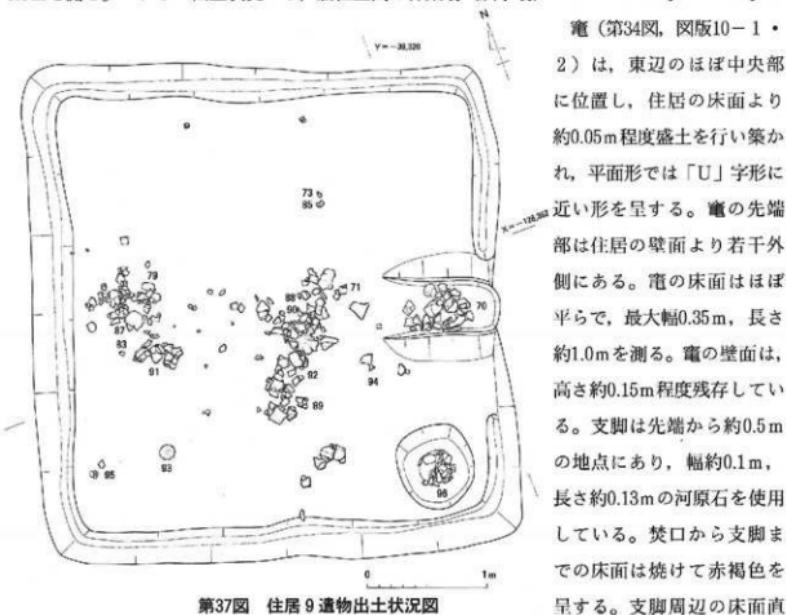
第35図 住居9竈遺物出土  
状況図



第36図 住居9内土坑  
平面・断面図

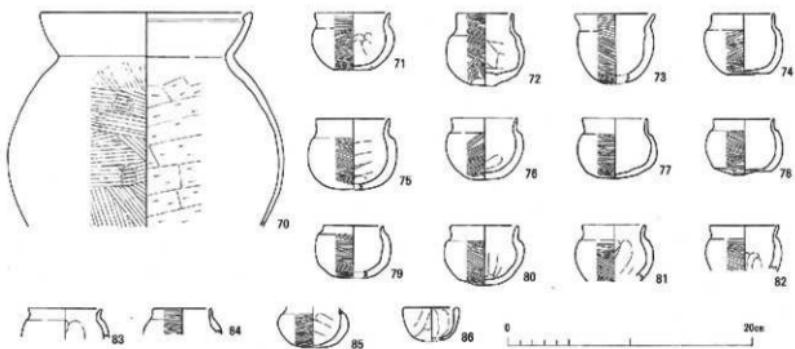
いる。これらの土器から、焼失後住居に伴うなんらかの祭祀が行われ、その後住居内に投棄されたものと考えている。住居の壁に沿って壁帶溝が存在し、土層断面観察の結果、使用時には埋められていたものと推察される。

床面上からは、土師器壺7点、高杯2点、瓶1点が出土した（第37図、図版9-2、図版11-1・2）。これらは、全て南半に集中し、北半部にはほとんど遺物ではなく、空白地で面積は、約5.3m<sup>2</sup>を測る。これらの出土状況から、居住空間と作業場（炊事場）ではないかと考えている。

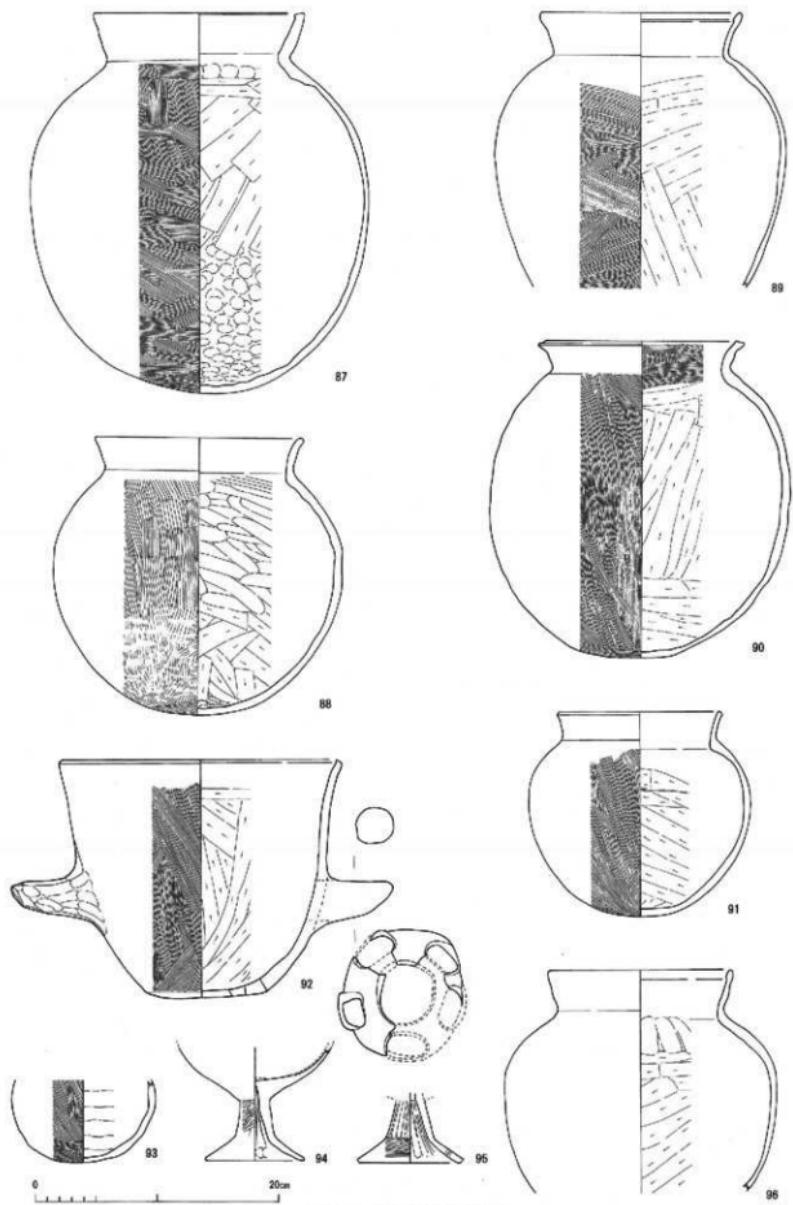


第37図 住居9遺物出土状況図

竈（第34図、図版10-1・2）は、東辺のほぼ中央部に位置し、住居の床面より約0.05m程度盛土を行なうかれ、平面形では「U」字形に近い形を呈する。竈の先端部は住居の壁面より若干外側にある。竈の床面はほぼ平らで、最大幅0.35m、長さ約1.0mを測る。竈の壁面は、高さ約0.15m程度残存している。支脚は先端から約0.5mの地点にあり、幅約0.1m、長さ約0.13mの河原石を使用している。焚口から支脚までの床面は焼けて赤褐色を呈する。支脚周辺の床面直



第38図 住居9出土遺物1



第39図 住居9出土遺物 2

上から一個体となる甕片が散乱して出土した。また図化はできなかったが製塙土器が出土している。

土坑（第36図、図版10-3・4）は、住居の南東端に存在し、竈と近い位置にある。径約0.7m、深さ約0.13mを測り、土坑の中央部から土師器甕1点（第39-96図）が出土した。土坑の壁面から底部にかけて焼けていたことから、埋められていたのではなく、住居の中でなんらかの機能を果たしていたものと推定される。

床面から出土した遺物は、土師器甕が極めて多く総数9点のうち6点（第39-87～91・93図、図版48-88・90・91）を占める。他に瓶1点（第39-92図、図版48-92）、土師器高环2点（第39-94・95図）である。

住居の時期は、図化はできなかったが、須恵器环蓋と推定される小片や土師器甕の形態から5世紀後半から6世紀初頭にかけてのものと推定される。

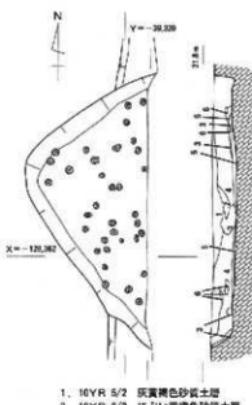
### 5. 住居10（第40図、図版12-1）

X=-128.363、Y=-39.318付近を中心とする方形の住居と推定されるが、ほとんどが東の調査区外に存在する。検出長約2.0m、検出面からの深さ約0.24mを測る。住居は焼失しており、炭化材が多数検出された（第41図、図版12-2）。土層断面および平面観察の結果、壁帶溝は存在しない。床面には、径10cm程度の杭跡が多数確認され、一部は壁面にも存在する。壁面に存在するものについては、壁立ちの住居の可能性を示唆するものと考えている。しかし、床面のものについては、住居内の施設と推定しているが、どのようなものであったかは不明である。

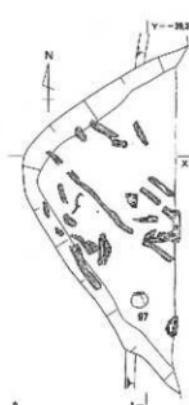
遺物は、床面上から、土師器壺（第42-97図、図版48-97）が出土した。壺は焼失の際、高温を受け、口縁部が変形している。

外面にタタキ痕が認められ、また形状が製塙土器の大型の製品に似ているため、その可能性もある。

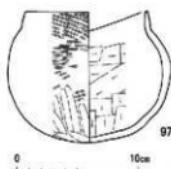
時期は、住居内から出土した遺物が1点のみであるため危険性を伴うが、5世紀後半から6世紀前半にかけてのものと推定される。



第40図 住居10平面・断面図



第41図 住居10遺物出土状況図



第42図 住居10出土遺物

## 6. 建物 2 (第43図、図版13-1~4)

$X = -128.351$ ,  $Y = -39.326$   
付近を中心とし、ほぼ住居9と  
切り合って存在する。切り合い  
関係から建物3の方が古い。  
梁間1間(約2.2m)、桁行2間  
(約3.4m)の建物で、建物2の  
西に存在し、方向はN-25°-E  
である。柱穴は円形に近い形  
を呈し、径0.3mから0.4m、深  
さ0.3mを前後を測る。柱穴埋  
土の土層断面観察の結果、柱痕  
は径約0.15mを測る。

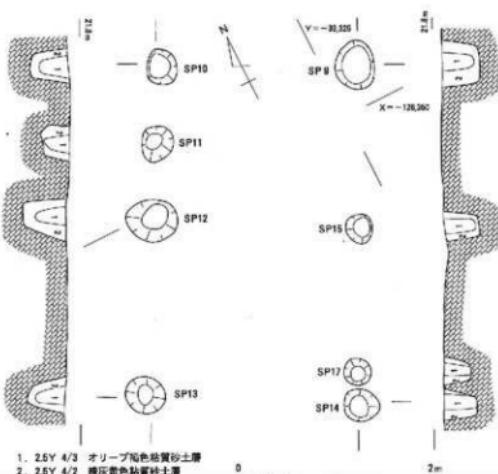
遺物は、土師器片が柱穴内か  
ら少量出土したが、図化できな  
かった。

## 7. 建物 3 (第44図、図版 13-5~8)

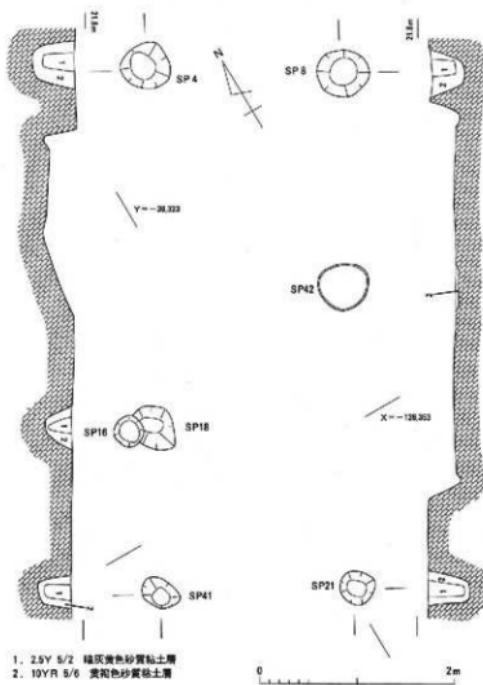
$X = -128.352$ ,  $Y = -39.323$   
付近を中心とする、基本的に梁  
間1間(約2.0m)、桁行3間  
(約5.4m)の建物で、建物2と  
東に約1.5m離れ、ほぼ軸線が  
同じで並列して存在する。建物  
の方向は建物2と同じである。

柱穴は円形に近い形を呈し、  
径0.3mから0.5m、深さ0.3mか  
ら0.4mを測る。柱痕は、径約  
0.5m前後を測る。

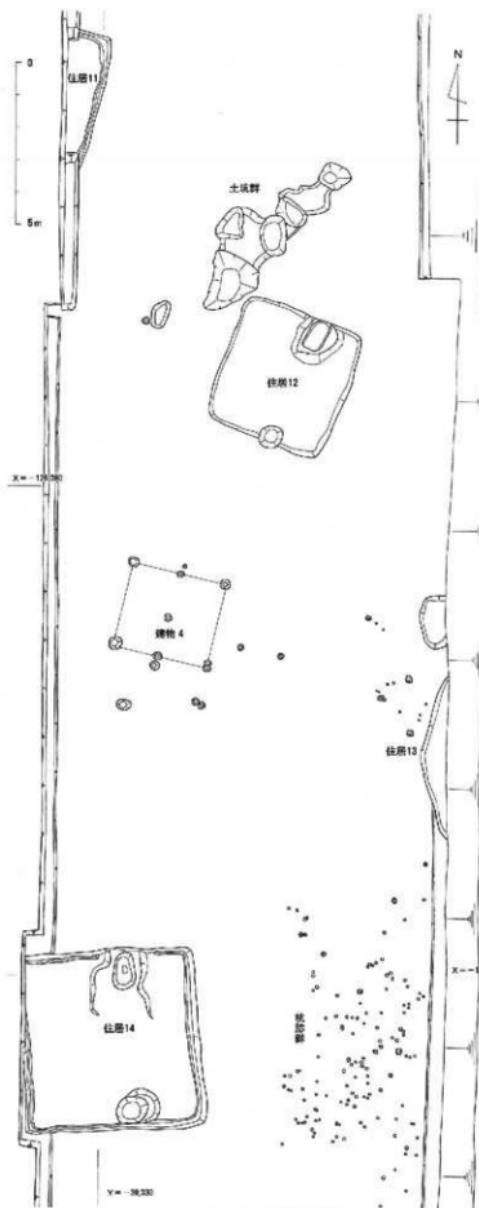
遺物は、土師器片が柱穴内か  
ら少量出土したが、図化できな  
かった。



第43図 建物2平面・断面図



第44図 建物3平面・断面図



第45図 第3群平面図

#### 第4節 第3群の調査

##### 1. 概要 (第45図、図版14-1)

第3群は  $X = -128.365$  から  $X = -128.402$  付近、 $Y = -39.325$  付近の長さ約 77m、幅約 13m の間に存在する。検出した遺構は、4基の住居跡、建物 1 棟、土坑群、杭跡群などである。

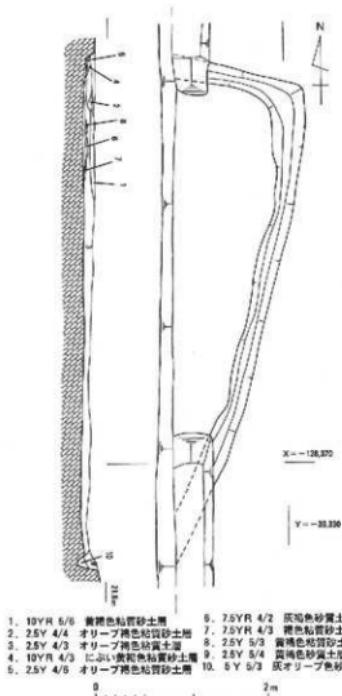
杭跡群は、 $X = -128.397$ 、 $Y = -39.322$  付近を中心とし、東西約 4.5m、南北約 10.0m の間に径 0.05m 前後を測る多数の杭跡を検出したが、規則性は認められない。何らかの作業が行われた痕跡と推定されるが、用途は不明である。

##### 2. 住居11 (第46図、図版12-3)

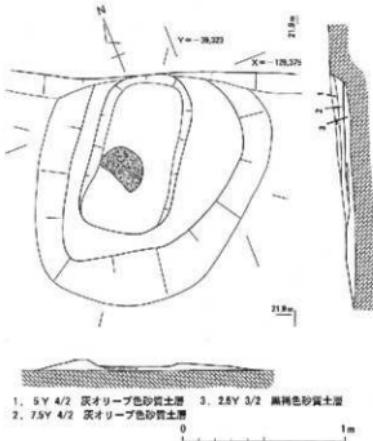
ほとんどが西の調査区外にあり、調査区内に 5 分の 1 程度存在する。 $X = -128.369$ 、 $Y = -39.333$  付近を中心とするものと推定される。東辺の形状から一辺 5 m 前後の隅丸方形の住居と推定され、検出面からの深さ約 0.05m を測る。方向は、N-15°-E である。

住居は焼失しており、床面上に焼土、炭、灰層が確認された。壁帶溝は、幅約 0.2m、深さ約 0.1m を測り、土層断面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

遺物は、須恵器、土師器片が極少量出土したが、図化できなかっ



第46図 住居11平面・断面図



第47図 住居12竈平面・断面図

た。

これらの遺物から住居の時期は、5世紀後半から6世紀前半にかけてのものと推定される。

### 3. 住居12(第48図、図版15-1)

X = -128.377, Y = -39.324付近を中心とし、東西辺約3.9m、南北辺約4.1mの隅丸方形に近い住居である。検出面からの深さ約0.1m、面積は約16.0m<sup>2</sup>を測る。住居の方位はN-25°-Eである。壁帶溝は検出できなかった。

竈(第47図、図版15-5)は、北辺中央よりやや東寄り、東辺より1.3m地点に北辺と接して築かれている。竈は、住居の床面より高さ約0.03m程度盛土を行い築かれている。

盛土は、底面は幅約1.4m、長さ約1.4m、上面は幅約1.0m、長さ約1.1mを測り、その上に竈が築かれている。平面形では「U」字形に近い形を呈し、北辺の軸線より若干西に振る。竈の床面は、最大幅0.45m、長さ約0.95mを測る。竈の端は、住居の北辺と接している。焚口は床面より約0.06m程度低い位置にあり、床面は、焚口から先端に向かって若干上がり気味で、高低差は約0.05mを測る。竈の壁面は、床面が検出面に近いためほとんどが消失し、残存高約0.08mを測る。支脚は、先端から0.45m付近に存在していたものと推定されるが、検出面に近いため消失し、支脚の掘方も検出できなかったため、直接床面に配置されたものと推定される。焚口から支脚までの床面は、焼けて赤褐色を呈する。

土坑(図版15-6)は、南辺中央より東寄り、東辺より1.6mの地点に存在する。土坑の南側は、住居壁より0.2m程度外側に張り出す。平面形では径約0.7mの円形に近い形を呈し、深さ約0.25mを測る。竈とほぼ対角線の位置に存在し、土層断面観察から、壁面から底面直上の埋土が凹レンズ状に堆積していることから、住居使用時には、埋まってはいなかっ

たものと推定される。住居に伴う施設と推定されるが用途は不明である。

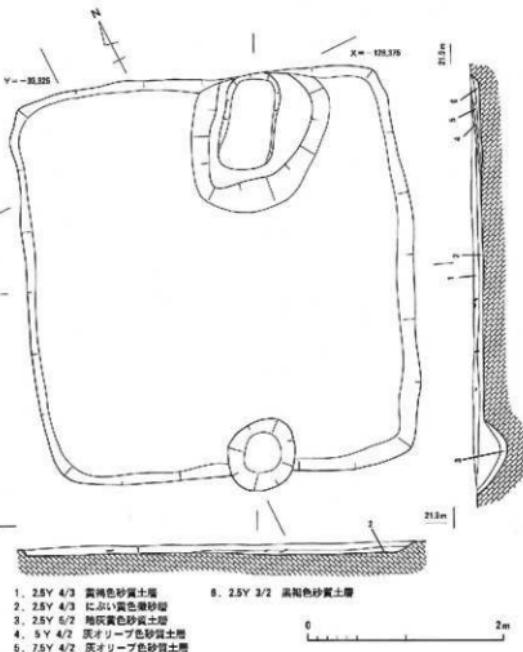
住居内から出土した遺物（第50図、図版15-2）は、すべて埋土中からのもので、床面上からの出土はなかった。

出土した遺物（第49図）は、土師器甕（98~100、図版49-98）、土師器高坏（101・102）、須恵器甕（103、図版56-103）などである。出土した須恵器甕は、口縁部のみであるが、初期須恵器

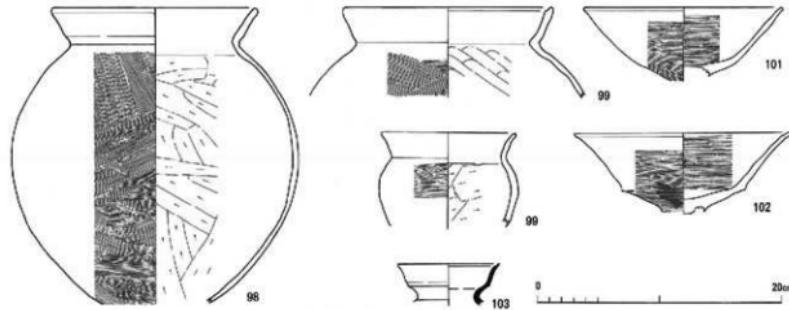
の特徴をもち、胎土分析の結果、陶邑産とされている。形式的には、田辺編年のT K 73形式、中村編年のI-1形式に相当すると考えられるが、口縁端部に凹面をなすことから、若干古い様相をもっている。時期は、5世紀中頃より若干さかのぼる可能性がある。

#### 4. 住居13（第52図、図版14-2・3）

平面の形状から、円形に近い住居と推定されるが、ほとんどが、東の調査区外に存在するため不明な点が多い。住居は、X=128.388、Y=-39.318付近を中心とするものと推定され、径約8.0m、検出面からの深さ約0.35mを測る。面積は、約50.2m<sup>2</sup>を



第48図 住居12平面・断面図



第49図 住居12出土遺物

測る。土層断面および平面観察の結果、壁帶溝は存在しない。

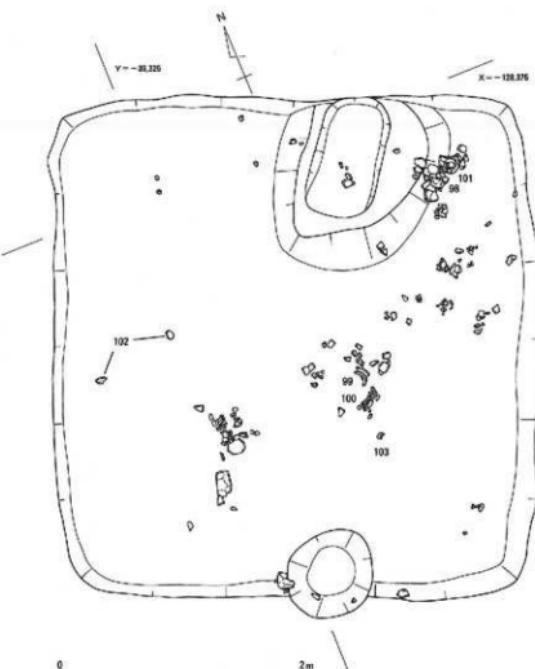
遺物（第51図）は、埋土中から極少量出土した。図化できたのは、土師器高坏（104）、甕片（105）の2点のみである。

これら2点では、時期の決め手を欠くが周辺の遺構の時期から5世紀中頃を中心としたものと推定される。

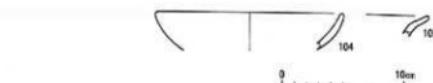
#### 5. 住居14（第53図、図版16-1～3）

$X = -128.397$ ,  $Y = -39.330$ 付近を中心とし、西辺の一部が調査区外にある。東西辺約5.5m、南北辺約5.5mを測り、隅丸方形の住居である。検出面からの深さ約0.2m、面積約30.3m<sup>2</sup>を測り、今回の中では規模が大きい。焼失住居で、埋土中に焼土、炭、灰が存在し、部分的に炭化材が確認された。住居の方位はN-5°-Wである。

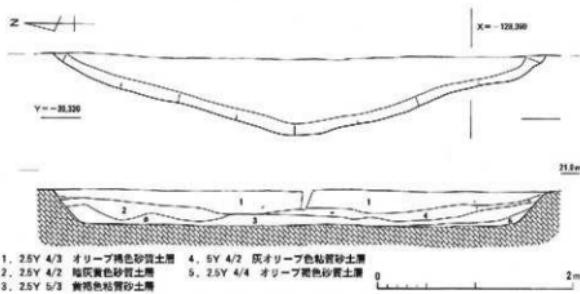
壁帶溝が壁の周間に巡り、幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。壁帶溝は、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたも



第50図 住居12遺物出土状況図



第51図 住居13出土遺物



第52図 住居13平面・断面図

のと推定される。

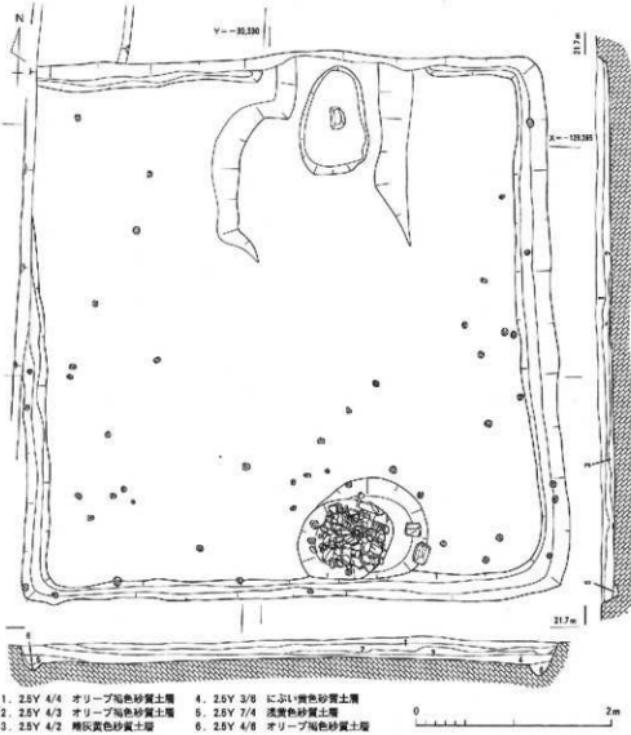
住居内の施設としては竈の他に、石敷の土坑、杭跡が存在する。杭跡は、径0.05m前後を測り、壁面、壁帶溝内、床面上から多数検出された。壁面、壁帶溝内に存在するものは、壁建住居に伴うものと推定される。しかし、床面上で検出されたものについては、規則性が認められず、用途は不明である。ただ、竈周辺には存在しないことが、解明のカギになるものと思われる。

竈（第54図、図版16-4～6）は、北辺のやや東寄りに存在し、東辺からの距離約2.2mを測る。竈は、底面で長さ約2.0m、幅約2.0m、上面で長さ約2.0m、幅約1.4m、高さ約0.06mのテラスを作り、その上に竈が築かれている。竈の先端は、北辺より0.15m程度離れて存在する。平面形では「U」字形に近い形を呈し、長さ約1.1m、最大幅約0.7mを測る。竈の壁面は、0.07m程度残存していた。焚口は、テラス面より0.04m程度低い位置にあり、床面の焚口付近はほぼ平らであるが、支脚から先端部に向かってやや上がり気味である。支脚は、幅約0.15m、長さ約1.1mを測り、約2分の1は床面下に埋めていた。支脚は、先端から0.5mの位置にあり、焚口から支脚の間の床面は、焼けて赤褐色を呈する。

竈から出土した造物（第55図、図版17-2・3）は、甕（第58-116図）、瓶（第58-117図、図版49-117）である。

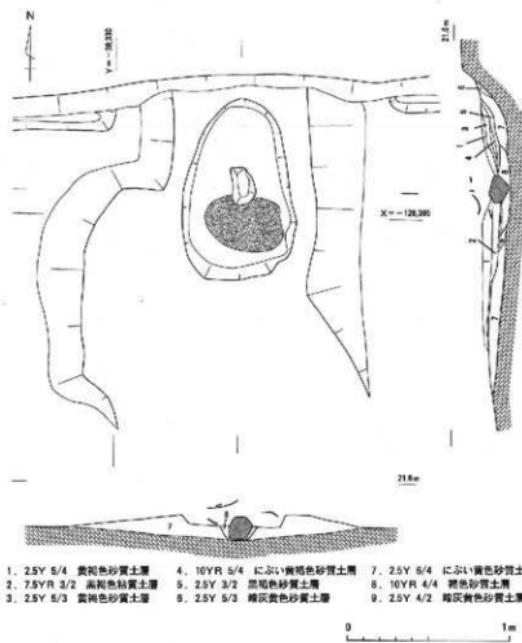
出土状況は、甕はほぼ支脚の直上、瓶はやや離れて立った状況で出土した。これらから、竈に、甕と瓶がセットで置かれていたものと推察される。

石敷土坑（第



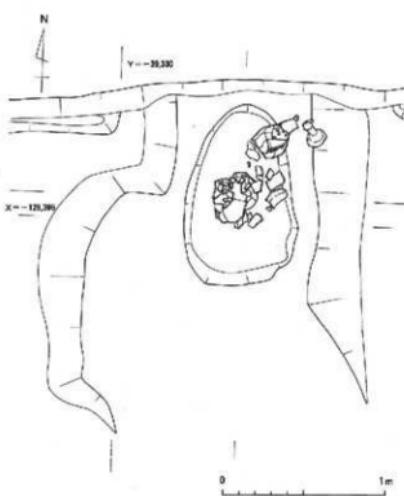
56図、図版18-

第53図 住居14平面・断面図

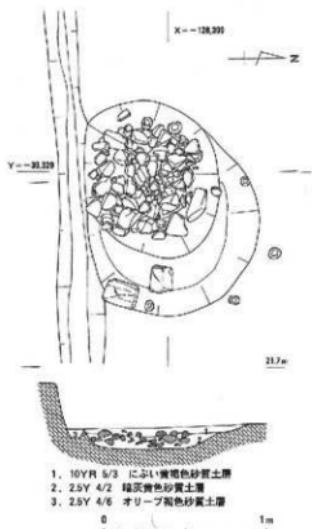


第54図 住居14竪平面・断面図

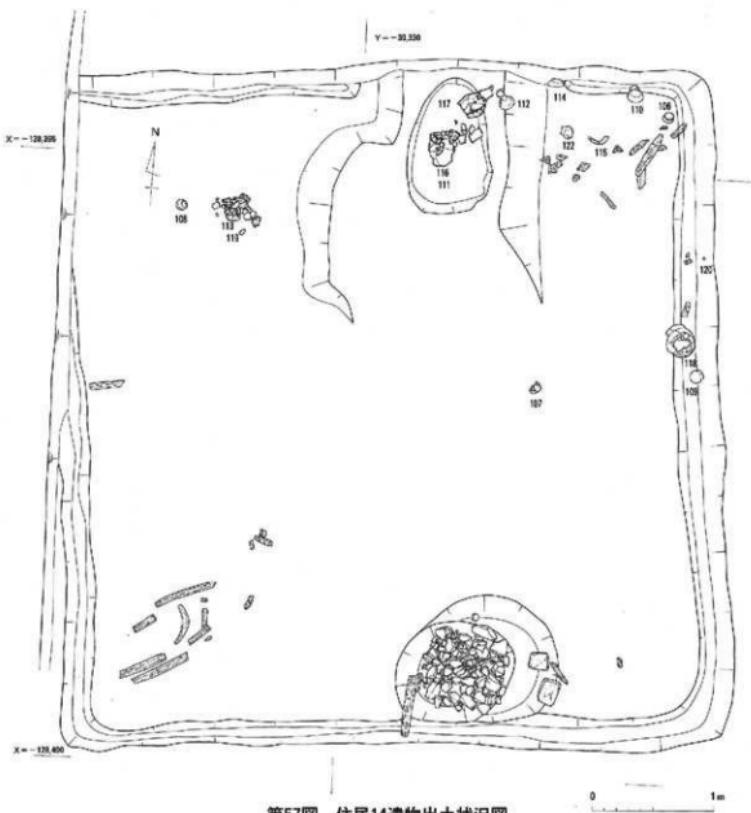
4～6)は、住居南辺の東寄り、東辺より約2.0mの地点にある。2段掘りの平面形では橢円形に近い。長径約1.4m、短径約1.0mを測り、土坑西側で円形に一段深く掘り込まれ、その内部に、長さ0.05mから0.2m程度の河原石が底面まで敷き詰められていた。深さは、住居床面から約0.13mを測り、底はほぼフラットである。土坑肩部から法面には、径0.05m前後の杭跡がほぼ円形に回る。土坑内からは、土器はほとんどなく、砥石(第59-143図、図版54-143)が、出土していることから、



第55図 住居14竪遺物出土状況図



第56図 住居14内石敷土坑平面・断面図



第57図 住居14遺物出土状況図

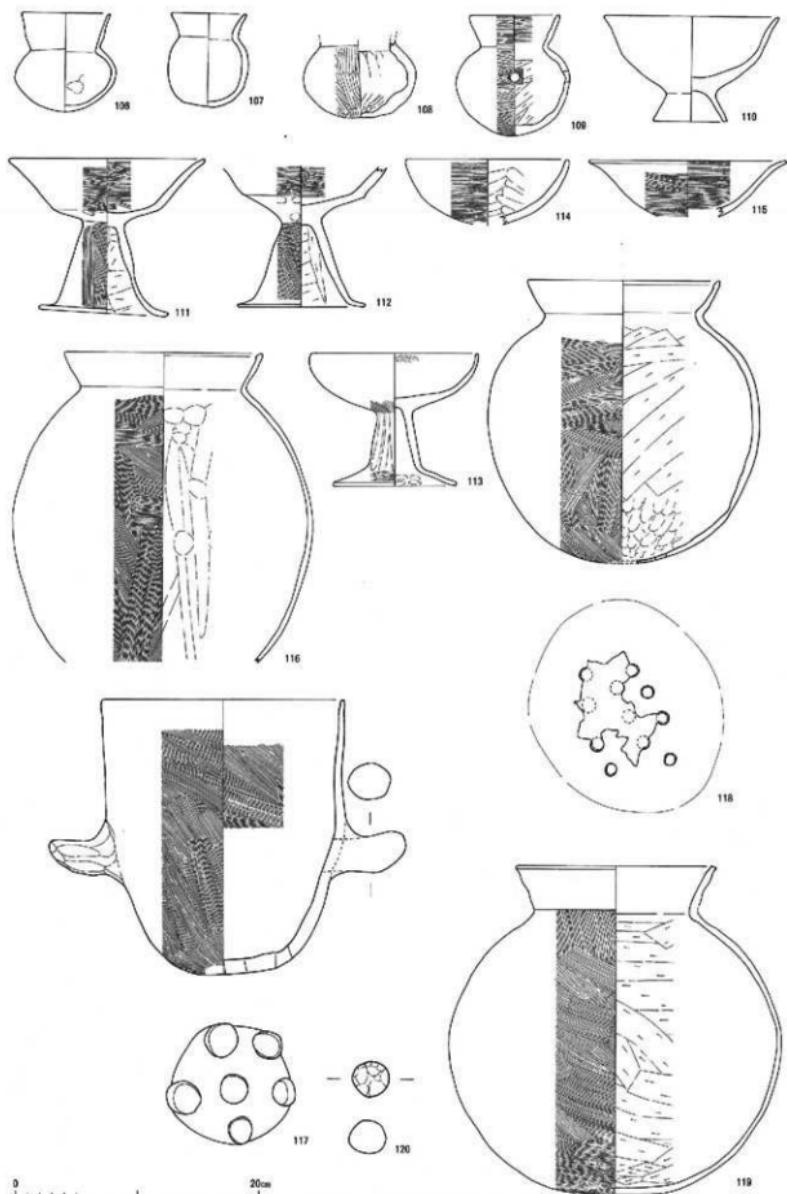
住居内での作業場であったものと推定している。

住居床面から出土した遺物（第57図、図版17-1, 18-2・3）は、竈内を含め住居北半に集中し、特に竈周辺が多い。これらの出土状況から、南西側の長さ約3.5m、幅約2.0mの間が居住空間と推定され、面積約7.0m<sup>2</sup>を測る。

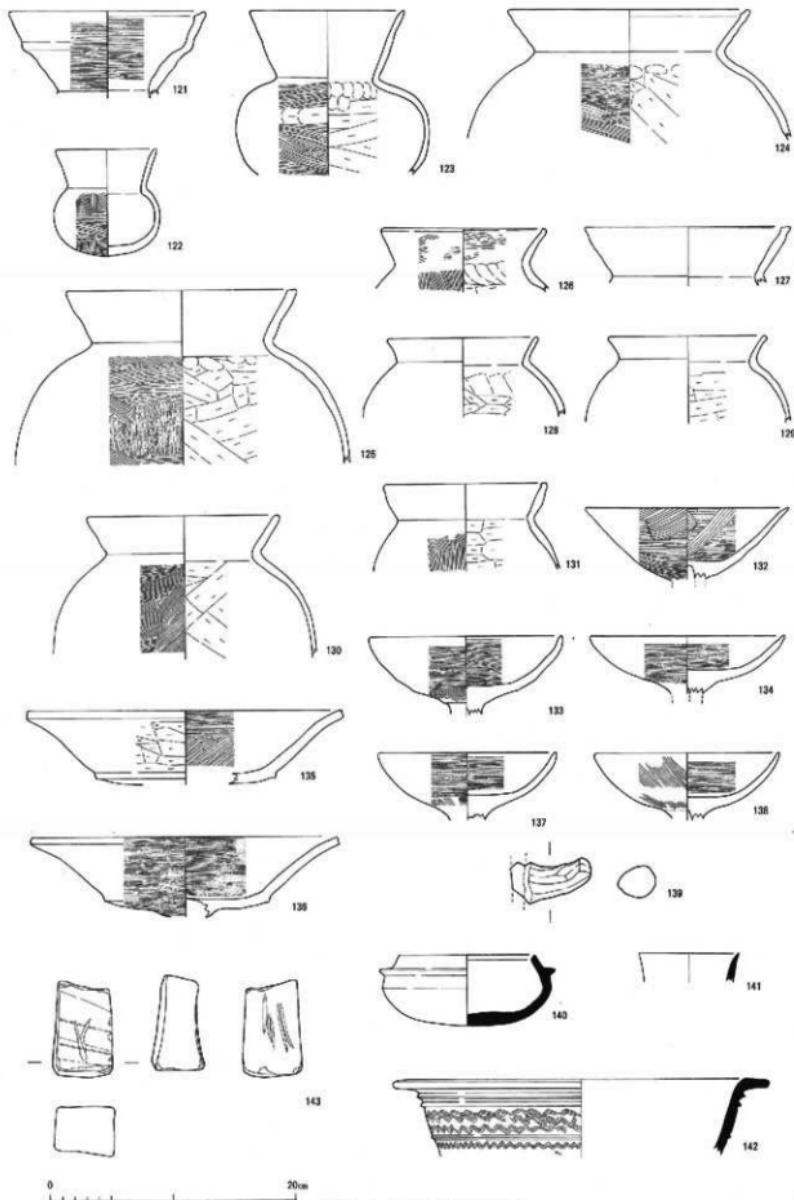
床面から出土した遺物（第58図、図版49-50-110）の中で注目されるものは、土師器壺（第58-118図、図版49-118）、土師器甌（第58-109図、図版49-109）、土玉（第58-120図、図版54-120）がある。

土師器壺（118）は、甌として使用するために底部を焼成前に1cm弱の蒸気孔を10個前後開けている。土師器甌（109）は、小形壺の最大径付近に孔を開け、須恵器の甌をイメージして作られている。土玉（120）は、径3cm程度のもので穿孔されておらず、何に使用したものか不明である。総量的には、甌として使用されていたものは、3点であり少ない。

住居埋土中より多量の遺物が出土した（図版17-1, 18-1）。土師器壺、高坏（第59図）の



第58図 住居14出土遺物 1



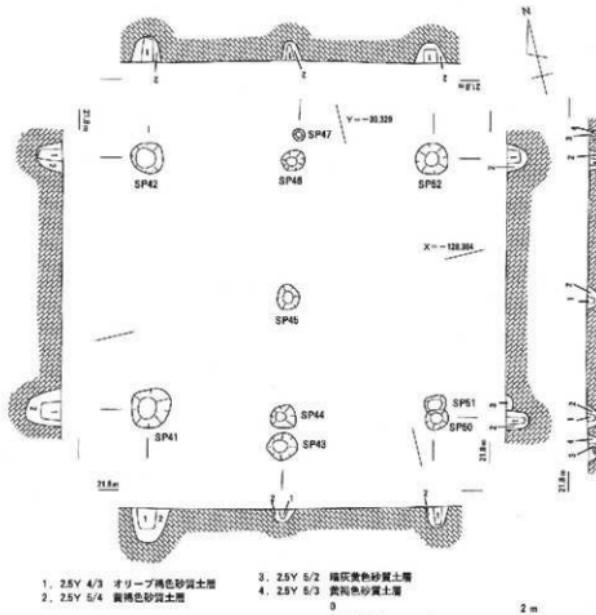
第59図 住居14出土遺物 2

破片が多く盡は少ない。須恵器は3点出土した。須恵器は、壺身(140、図版50-140)、壺口縁片(141、図版56-141)、器台環部片(142、図版56-142)である。壺身は、いわゆる錐形を呈しているため当初、田辯編年のTK73形式、中村編年のI-1形式に属するものと考えていた。しかし、断面が厚く、体部から底部にかけて丸味をおびていることと、体部下から底部にかけての外側が手持ちのヘラ削りではなく、ロクロ停止後ナデによって仕上げていること。また器台の口縁部が外上方に伸び端部が丸いこと。これらの形態の特徴は、一段階古いON231号窯に多く認められるものである。なお、壺身の産地は陶邑、壺および器台は、産地不明という胎土分析の結果がでている。

これらの遺物から、住居の時期は5世紀前半から中頃に比定される。

#### 6. 建物4(第60図、図版23-1~7)

X=-128.384、Y=-39.328付近を中心とする梁間1間(約3.0m)、桁行2間(約2.5m)の総柱建物で、倉庫と推定される。梁間中央の柱穴の両側には約0.3m離れて棟持柱の可能性のある柱穴が存在するが、主柱穴と極めて接近していることから疑問点が残る。しかし、周辺に柱穴が少ないと、この建物に付随するものであることは間違いない。柱穴は円形に近い形を呈し、径0.2mから0.4m、深さ0.15mから0.35mを測る。柱穴埋土の土層断面観察の結果、柱痕は、径0.13m前後を測る。遺物は、土師器片が柱穴内から少量出土したが、図化できなかった。



第60図 建物4平面・断面図

#### 7. 土坑群(第61図、図版19-1~8)

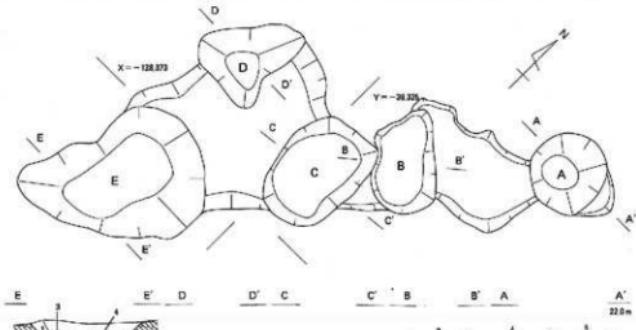
X=-128.370、Y=-39.323付近からX=-128.374、Y=-39.327付近にかけて存在する。長さ約6.1m、幅約4.0mを測り、その間に5基の土坑を検出した。各土坑間は、深さ0.2m程度の不定形な溝状の落ち込みによつて連結している。各土坑の平面形は、不定形なもののが多

い。土坑A(図版19-4)は、円形に近い形を呈し、径約0.8m、深さ0.2mを測る。土坑B(図版19-2・5)は、隅丸長方形に近い形を呈し、長さ約1.0m、幅約0.6m、深さ0.2mを測る。土坑C(図版19-3・6)は、隅丸長方形に近い形を呈し、長さ約1.2m、幅約0.85m、深さ0.2mを測る。土坑D(図版19-7)は、各辺端部が丸く三角形状を呈し、最大幅約1.0m、深さ0.2mを測る。土坑E(図版19-8)は、各辺端部が丸く三角形状を呈し、最大幅約1.3m、深さ0.35mを測る。

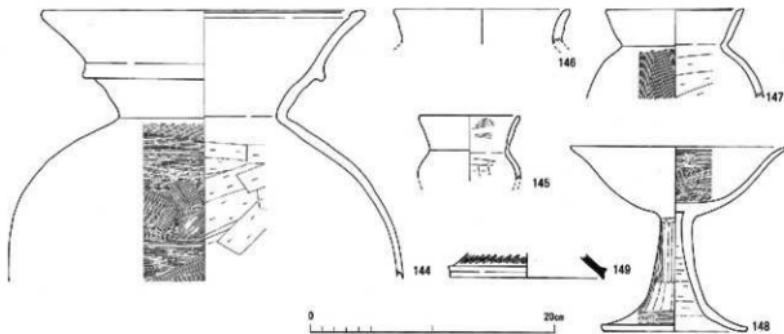
遺物(第62図)は、各土坑内から大小の差はあるものの万遍なく出土した。土器は、破片が多く、完形になるものはないが、各土坑間で接合するものが多い。特に144の壺は全ての構造から破片が出土している。このことから一度に土坑内に投げ込まれたものと推定される。土層断面観察の結果、凹レンズ状に堆積しているものが多い。これらのことから、掘った直後に埋められたものではなく掘られたままの状況で機能していたものと推察されるが、用途は不明である。

時期は、須恵器高坏(第62-149図、図版56-149)が、TK73形式、中村編年のI-1形式に相当するこ

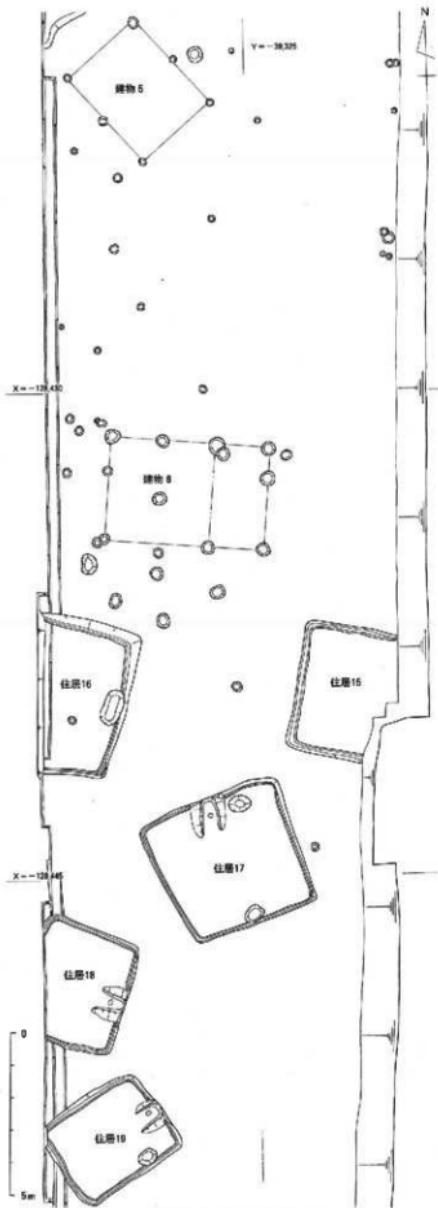
とから5世紀中頃と推定される。



第61図 土坑群平面・断面図



第62図 土坑群出土遺物



第63図 第4群平面図

## 第5節 第4群の調査

### 1. 概要 (第63図, 図版20-1, 24-1)

$X = -128.419$ から $X = -128.455$ 付近の $Y = -39.325$ をほぼ中心とする長さ約37m, 幅約11mの間を指す。調査区外の状況は不明であるが、第3群と第4群の約17mの間は、遺構がほとんど存在しなく、空白地帯となっている。また、 $X = -128.418$ から $X = -128.437$ 付近の19mの間は、建物と柱穴のみが存在し、住居は検出されなかった。

第4群で検出した主な遺構は、5基の住居跡、建物2棟跡群などである。

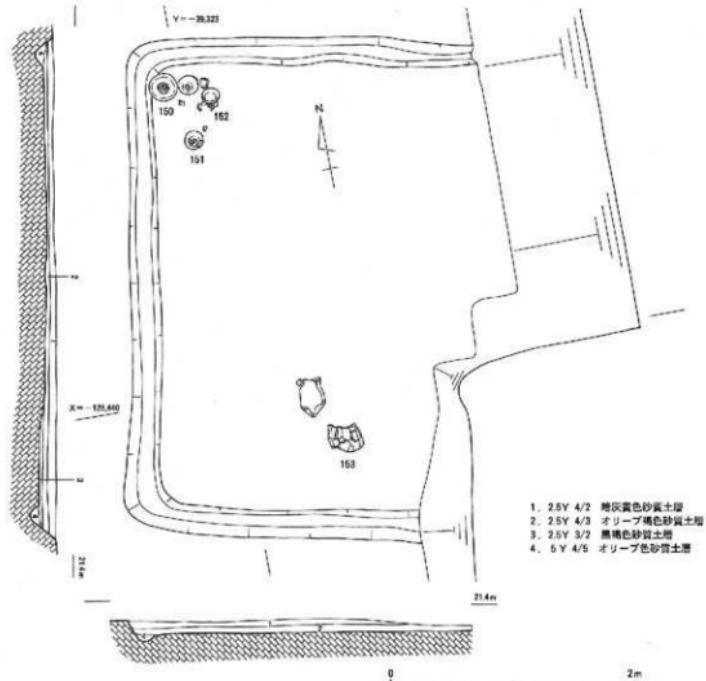
### 2. 住居15 (第64図, 図版20-2~4)

$X = -128.440$ ,  $Y = -39.322$ 付近を中心とし、住居の約3分の1が東の調査区外にある。調査区内に存在する西辺および南北辺の形状から、一辺約4.1mを測る平面形では隅丸方形をなす住居と推定され、検出面からの深さ約0.1m、面積は16.8m<sup>2</sup>前後と推定される。

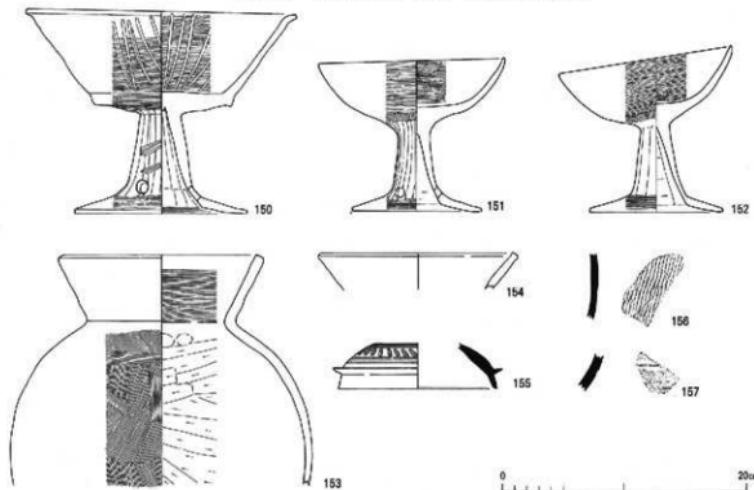
焼失住居と推定され、埋土中に焼土、灰が部分的に存在する。竈は調査区内では検出されなかったが、遺構の検出状況から、東辺に存在するものと推定される。住居の方位はE-10°-Sである。

壁帶溝が壁の周囲に巡り、幅約0.2m、深さ約0.05mを測る。壁帶溝は、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

床面からの遺物の出土状況 (第64図, 図版20-5・6) は、図化したのは3点 (第65-150~152図, 図版50-150~152) であるが、北西辺部に土師器高壙4点が集中し



第64図 住居15平面・断面・遺物出土状況図



第65図 住居15出土遺物

て出土している。1点のみ坏部を上に向いているが、残りの3点は、坏部を床面に付けている。南西側には、石皿、土師器壺（第65-153図）が出土している。

特質すべき遺物としては埋土中より、須恵器高环蓋（第65-155図、図版56-155）が出土している。高环蓋は、形態がTG232号窯出土のものと酷似しており、胎土分析の結果からも陶邑産とされている。このことから住居の時期は、5世紀前半と考えている。

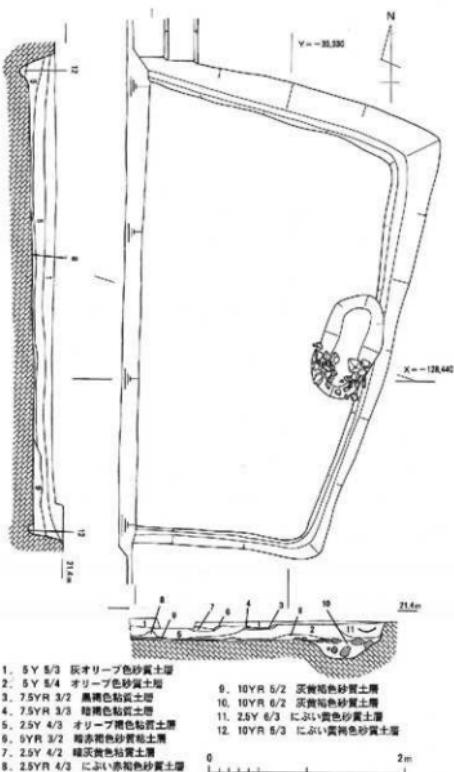
### 3. 住居16（第66図、図版21-1～3）

X=-128.440, Y=-39.332付近を中心とし、西側の2分の1が調査区外にある。調査区内にある東辺および南北辺の形態から、一辺約4.5mの隅丸方形をなす住居と推定され、検出面からの深さ約0.2mを測り、面積は20m<sup>2</sup>前後と推定される。

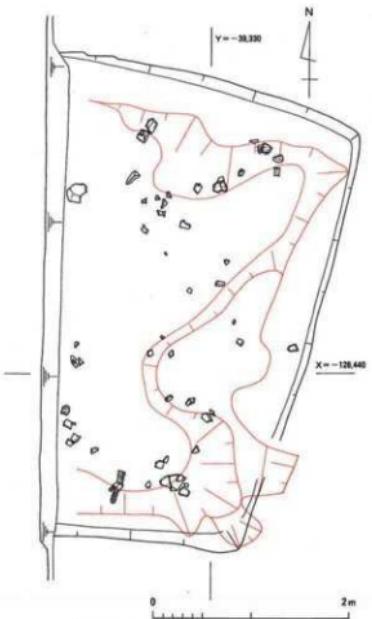
住居16は、焼失住居（第67図、図版21-4・5）で、埋土中に厚さ0.02m程度の焼土層および灰、炭層が、帯状をなして凹レンズ状に堆積し、中央付近は床面とほぼ同一レベルである。しかし、下層の埋土は、ほとんど焼けていない。このことから壁立ちの住居が、焼失の際、壁が内側に倒れ込んだことを示しているのではないかと考えている。住居埋土の土層断面及び平面観察の結果、焼土面と床面との厚さが最大0.2mを測ることから、壁は幅0.2m以上で、検出面からの高さは1.5m前後であったものと推察される。しかし、壁土と推定している焼土上面下層の上は、スサなどの壁を補強する混入物は認められず、検出面の土と極めて酷似していること、決定的な根拠が得られなかつたことなどから、疑問の点も数多くある。

焼土面は、住居壁面から幅約0.5mの間は、ほとんど焼土は存在せず、帯状をなしているが、東辺の南東端部から約0.8mの地点のみ住居より外側にまで延びている。この状況から、この地点が住居入り口と考えられ、幅約0.4mを測る。

住居東辺のほぼ中央の床面上には、平面形では楕円形に近い土坑が存在



第66図 住居16平面・断面図



第67図 住居16上面焼失状況図

物の出土状況から、居住空間は、西北部周辺と推定される。

器種（第68-158～171図、図版50-158～163）は、土師器の壺、甕、高环である。特に完形品は少ないが、他の住居に比べて高环の量が多い。161の土師器甕は、最大径が他のものに比べ小さく、縦に細長い特徴をもち、体部外面をタタキによって仕上げていることから、畿内ではなく他地域のものと推定される。

なお、特質される遺物（第70図、図版54-184～186）としては、緑色凝灰岩製管玉1点（184）、滑石製管玉2点（185・186）が出土している。

須恵器壺ないしは甕の口縁部1点（第68-181図、図版56-181）と把手付鉢2点（第68-182・183図、図版56-182・183）が焼土上面の埋土中から出土している。181の口縁部は、頸部と口縁部の境に段を有し、内弯気味に外上方に伸び、端部はやや丸みをなす。182・183の把手付鉢は、2点とも口縁部が短く外反し、体部は突帯によって区切られ、内部に波状文を施している。いずれも胎土分析の結果から、陶邑産とされ、形態の特徴からいえばTG232号窯から出土しているものと極めて酷似している。なお、183の把手付鉢は、同一個体が住居17から出土している。

これらの出土遺物から住居の時期は、須恵器からTG232号窯前後のものと考えられ、5世紀前半と推定される。

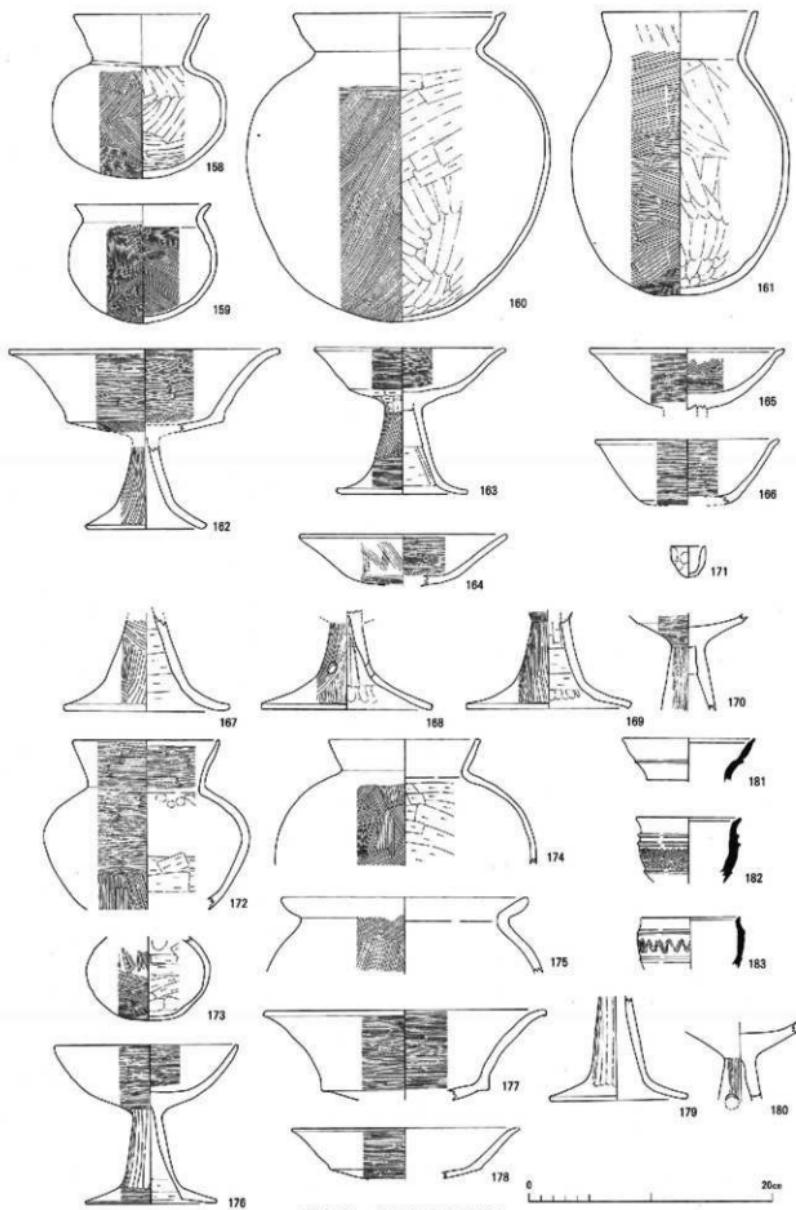
する。長辺約1.1m、短辺約0.6m、深さ約0.2mを測り、上面から床面の一部にかけて、0.07m程度の河原石が敷き詰められた状況で、幅約0.6m、長さ約0.4m間に存在する。用途は不明であるが、住居14で検出された石敷土坑と同様な機能をもつものと推察される。土層断面観察の結果、土坑が埋められた後に河原石が敷かれている。

壁帶溝は壁の周囲に巡り、幅約0.3m、深さ約0.05mを測る。土層および平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

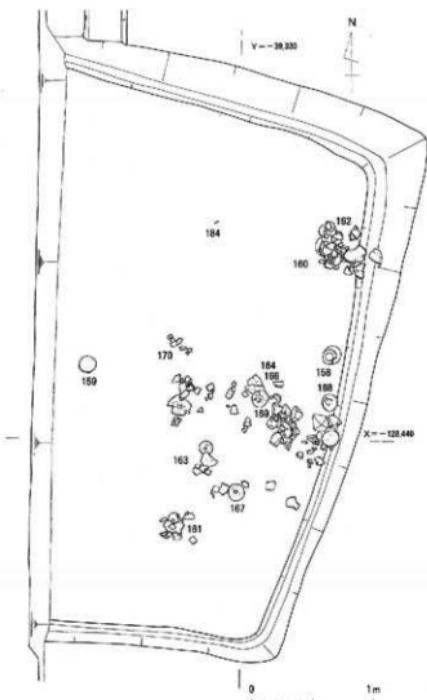
竈は調査区内では検出されなかったが、住居床面上に存在する土坑の対角線上にほとんどが存在していることなどから、調査区外の住居西辺のほぼ中央に位置しているものと推定される。住居の方位はN-74°-Wである。

床面からの遺物（第69図、図版22）は、中央から東辺部にかけて多く出土した。住居の約2分の1が調査区外にあるため全容は不明であるが、遺

物の出土状況から、居住空間は、西北部周辺と推定される。

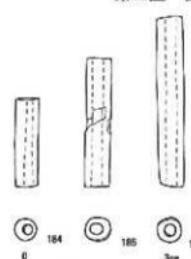


第68図 住居16出土遺物1



第69図 住居16遺物出土状況図

幅約0.5mを測る。竈の壁面は、検出面と床面との高低差が少ないため、約0.1m程度のみ残存していた。床面の高低差は、焚口周辺と支脚から先端にかけてでは、支脚から先端の方がやや深い。支脚は、先端から0.5mの位置にあり、幅約0.08m、長さ約0.14mを測る。焚口から支脚の長さ約0.5mの間の床面は、焼けて赤褐色を呈する。竈内からは、住居16と同一個体の把手付鉢（第75-183図、図版56-183）が埋土中より出土している。



南辺のほぼ中央部に接して存在する土坑1（第74図、図版24-5・6）は、竈とほぼ対角線上に位置する。平面形では梢円形に近く、長辺約0.65m、短辺約0.45m、深さ約0.24mを測る。出土状況から直接土坑とは関係ない遺物と考えられるが、土坑上面から小型壺の体部最大径付近に孔を開けた土師器窓（第75-198図、図版51-198）、埋土中より土師器窓（第75-199図、図版51-199）が出土している。

竈の東側に存在する土坑2は、平面形では梢円形に近く、長辺約0.7m、短辺約0.5mを測り、深さ約0.05mと比較的浅い。図化はできなかったが埋土中より瓶片が出土している。竈に近接し

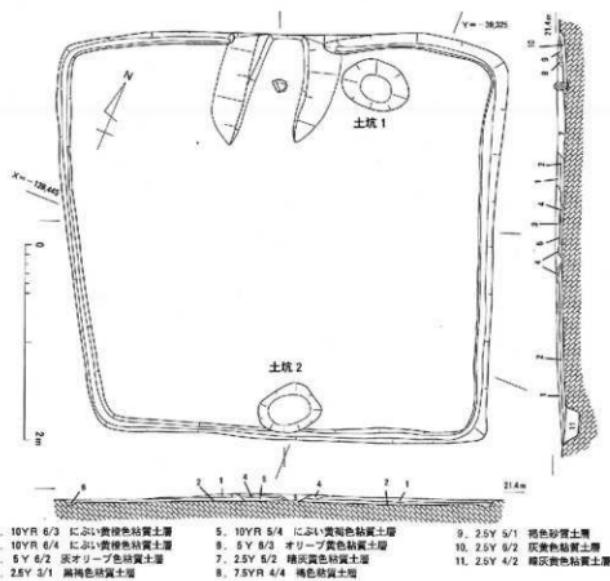
#### 4. 住居17（第71図、図版24-2～4）

X = -128.445、Y = -39.326付近を中心とし、北辺約4.5m、南辺約4.0m、東西辺約4.1mを測り、平面形では隅丸台形に近い住居で、主軸の方針はN-15°-Wである。検出面からの深さ約0.07m、面積は約17.4m<sup>2</sup>を測る。

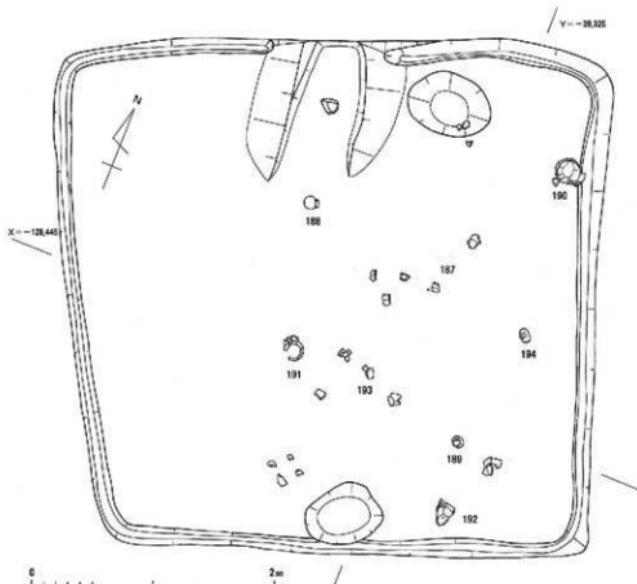
壁帶溝が、壁の周間に巡り、幅約0.1m、深さ約0.04mを測る。壁帶溝は、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

住居内の施設としては竈の他に、土坑2基が存在する。

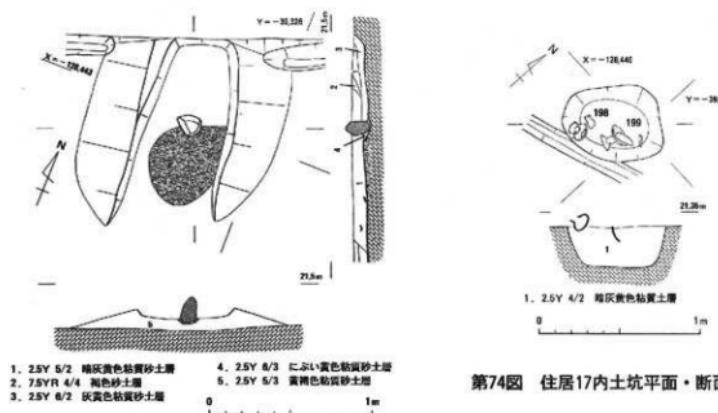
竈（第73図、図版25-1～3）は、北辺のほぼ中央部に位置し、方向は北辺よりやや東に振る。竈は、住居の床面上に築かれている。竈の先端は、北壁と接し、焚口周辺の床面は、住居床面とほぼ同一レベルをなす。平面形では「U」字形に近い形を呈し、床面の長さ約1.2m、最大



第71図 住居17平面・断面図

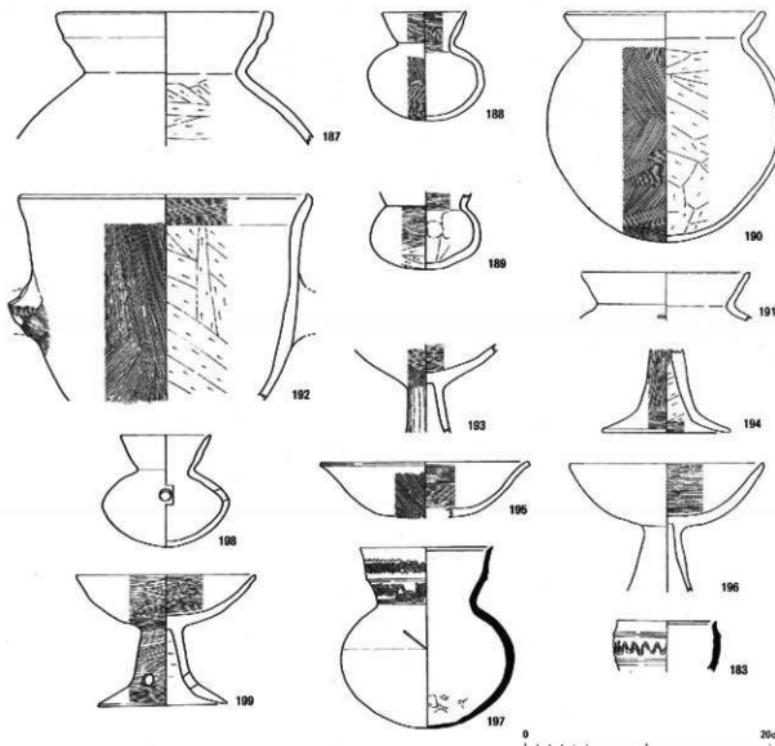


第72図 住居17遺物出土状況図



第73図 住居17竪面・断面図

第74図 住居17内土坑平面・断面図



第75図 住居17出土遺物

ていることから、付隨する施設と推定されるが用途不明である。

住居から出土した遺物（第72図、図版25-4～6）は、ほとんどが埋土中からのもので、床面

上から出土したものは、少量の土器小片のみで、図化できるものはなかった。

出土した遺物の器種（第75-187～199図、図版51-188・190・198・199）は、土師器壺（187・189）、甕（190・191）、高坏（193～196）、韓式系土器瓶（192）、須恵器壺（197）などである。須恵器壺（197、図版56-197）は、やや開き気味の口縁部をもち、頸部と口縁部の境に段を有する。口縁および頸部の外面に波状文を施す。体部は丸い。口縁部の形態が、同時期と推定しているT.G.232号窯出土のものは異なり、胎土分析の結果も産地不定とでている。

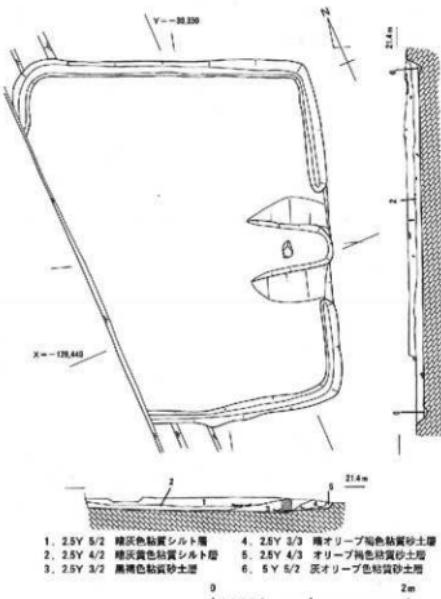
住居の時期は、出土遺物から5世紀前半と推定され、同一個体である把手付鉢（183）が、住居16から出土していることから共存していた可能性が高い。

#### 5. 住居18（第76図、図版26-1～3）

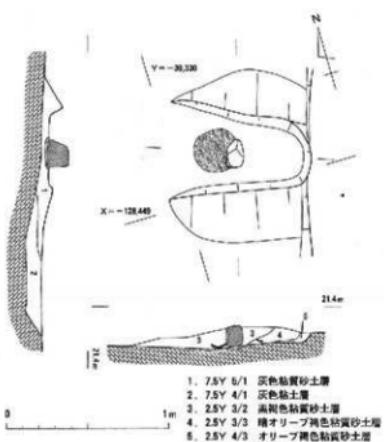
X = -128.448, Y = -39.331付近を中心とする。西から南部かけての約5分の1が西の調査区外にある。平面形では隅丸長方形に近く、東西辺約3.0m、南北辺約3.5m、検出面からの深さ約0.15mを測り、住居床面積は10.5m<sup>2</sup>前後と推定される。主軸の方位はE-23°-Sである。

壁帶溝が壁の周囲に巡り、幅約0.15m、深さ約0.05mを測る。壁帶溝は、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

竈（第77図、図版26-4～7）は、東辺の中央部からやや南側に位置し、先端は住居壁面より若干外側に存在する。住居床面上に若干の盛土を行なっている。焚口周辺の床面は、住居床面とほぼ同一レベルをなす。平面形では「U」字形に



第76図 住居18平面・断面図



第77図 住居18竈平面・断面図

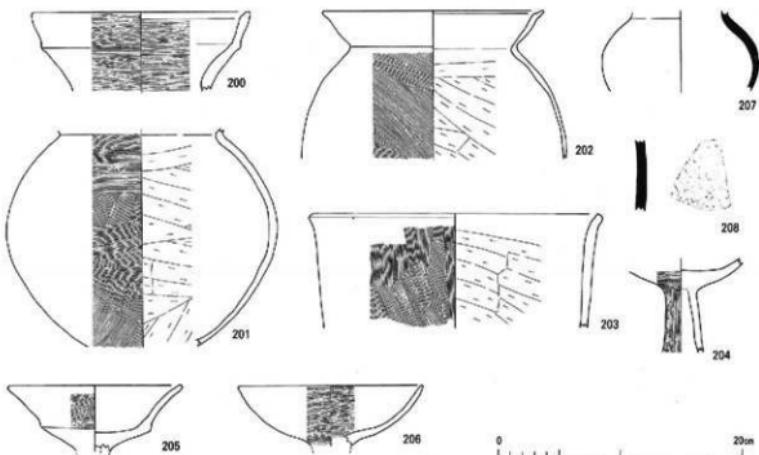
近い形を呈し、床面の長さ約0.9m、最大幅約0.55mを測る。竈の壁面は、調査時において、住居の土層断面観察用畔が中央部に存在していたため、竈の存在に気づかず掘削ミスにより一部が欠失した。残存高約0.1mを測る。床面は、焚口周辺から先端にかけて若干上がり気味で、高低差は約0.03mを測る。支脚は、先端から0.4mの位置にあり、幅約0.1m、長さ約0.12mを測る。焚口から支脚の長さ約0.2mの間の床面は、焼けて赤褐色を呈する。竈内からは図化はできなかったが、甕片、高坏片が出土している。

住居内から出土した遺物（第78図）は、竈からのものを除き、すべて埋土中から出土した。出土した遺物は、土師器壺（200）、甕（201・202）、高坏（204～206）、韓式系土器の瓶（203）、須恵器では壺（207）、甕片（208）が出土している。須恵器の壺は体部の破片で、胎土分析の結果陶邑産とされているが、甕片は不明となっている。甕は、外面はナデによって調整が消され、内面は無文のタタキが認められる。断面は赤褐色を呈し、焼成は堅緻であり、初期須恵器の特徴を数多くもっている。

住居の時期は、これらの出土遺物から5世紀前半から中頃にかけてのものと推定される。

#### 6. 住居19（第79図、図版27-1～3）

X = -128.453, Y = -39.330付近を中心とし、住居の南西端部の一部が調査区外にある。住居は、埋土中に焼土、炭、灰が多量に存在していたことから、焼失したものと推定される。平面形では隅丸長方形に近い住居で、東西約3.0m、南北約3.5m、検出面からの深さ約0.15mを測り、床面積は10.5m<sup>2</sup>前後と推定される。主軸の方位はN-55°-Eである。住居内の施設としては竈の



第78図 住居18出土遺物

他に、土坑1基が存在する。

壁帶溝が、壁の周間に巡り、幅約0.2m、深さ約0.03mを測る。壁帶溝は、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

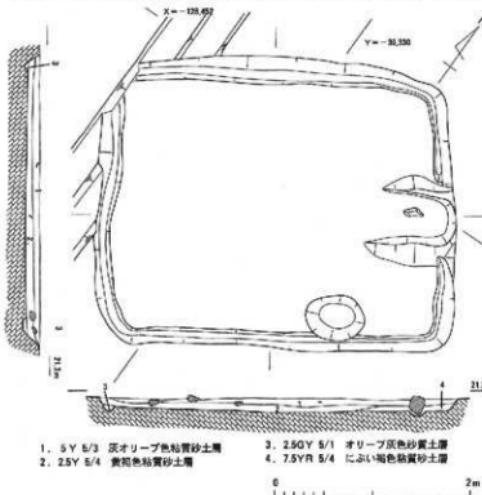
竈（第80図、図版27-4～7）は、東辺のほぼ中央部に位置する。先端は住居壁面に接し、住居床面上に若干の盛土を行い築かれている。焚口周辺の床面は、住居床面とほぼ同一レベルをなす。平面形では「U」字形に近い形を呈し、床面の長さ約0.9m、最大幅約0.55mを測る。竈の壁面は、調査時において、住居の土層断面観察用畔が中央部に存在していたため、竈の存在に気づかず掘削ミスにより一部が消失した。残存高約1.0mを測る。床面は、焚口周辺から先端にかけて若干上がり気味であり、高低差は約0.04mを測る。支脚は、先端から0.35mの位置にあり、幅約0.15m、長さ約0.18mを測る。

約0.15m、長さ約0.18mを測る。  
焚口から支脚の長さ約0.5mの間の床面は、焼け赤褐色を呈する。  
竈内からは、甕、高坏（第83-218～220・223図）が出土している。

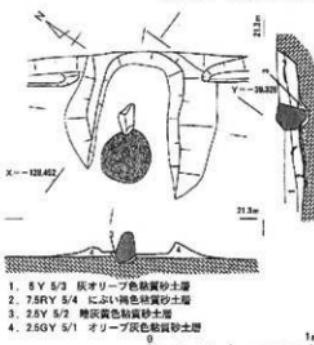
土坑（第82図、図版28-2）は、住居南東隅から0.9mの地点で南辺と接して存在する。平面形では梢円形に近い形を呈し、長径約0.6m、短径約0.45m、深さ約0.15mを測る。

埋土中より、土師器高坏（第83-216図、図版51-216）が出土している。

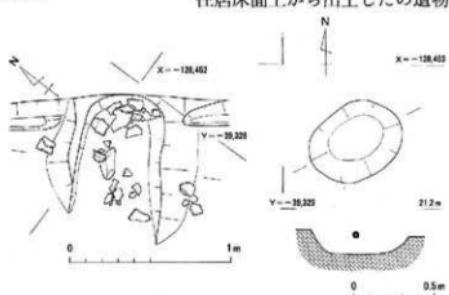
住居床面上から出土した遺物



第79図 住居19平面・断面図

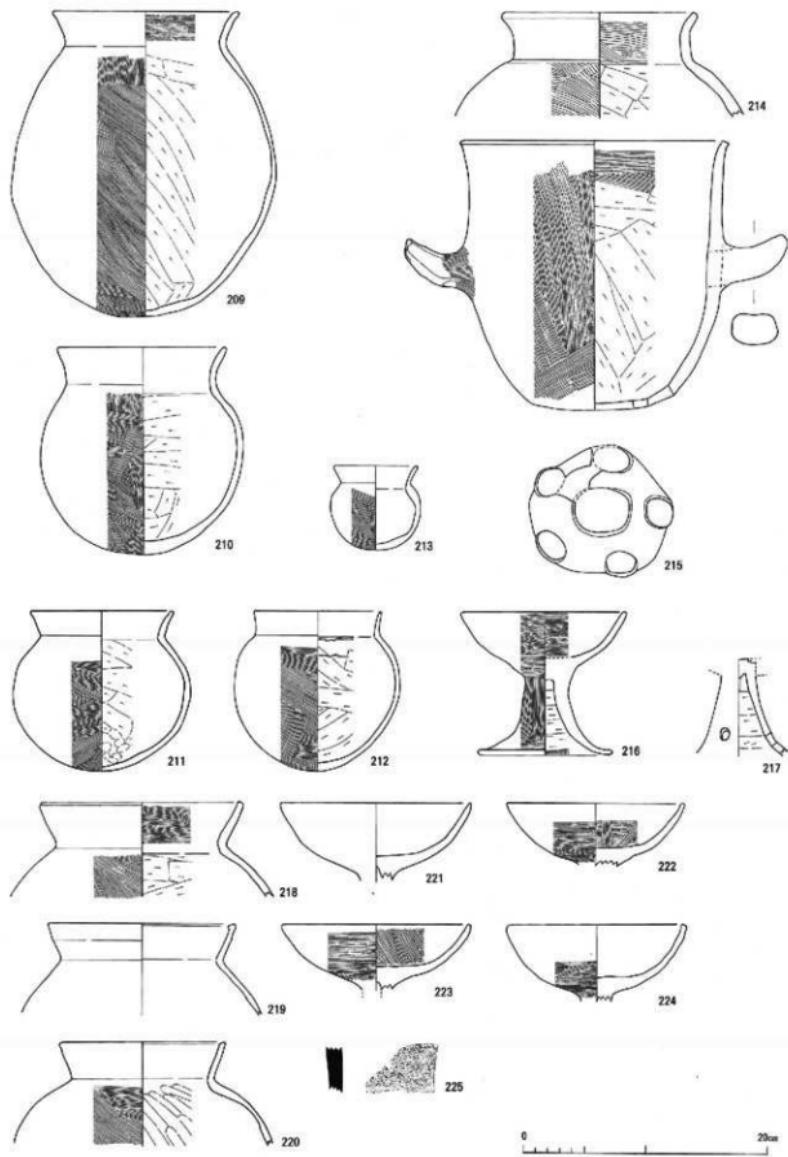


第80図 住居19竈平面・断面図

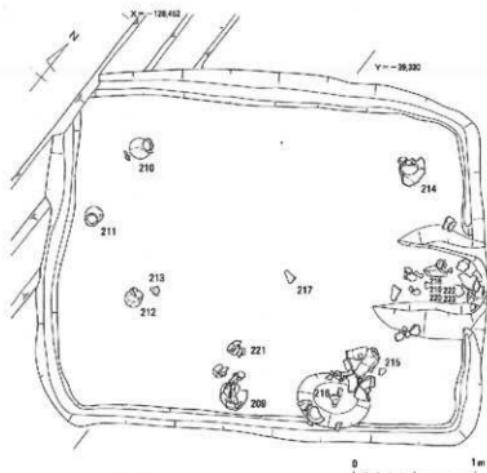


第81図 住居19竈  
出土状況図

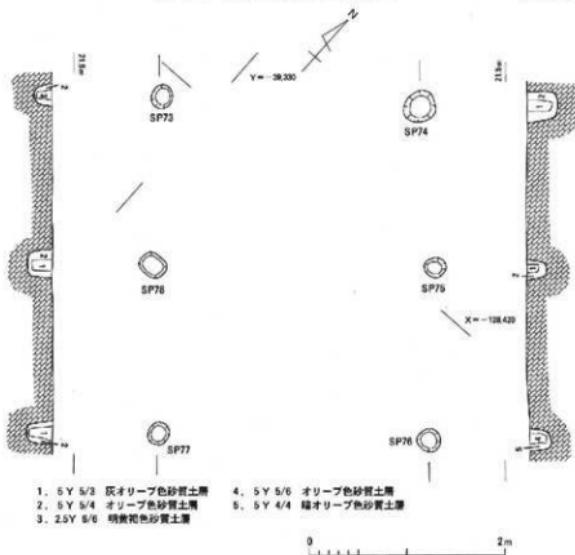
第82図 住居19内土坑  
平面・断面図



第83図 住居19出土遺物



第84図 住居19遺物出土状況図



第85図 建物5平面・断面図

師器甕、高坏などとともに須恵器の壺(225)と推定される破片が出土している。この上器片は、初期須恵器の特徴である外面に細かい格子目のタタキを施し、内面の調整をナデによってスリ消している。胎土分析により産地は、陶邑産とされている。

出土遺物から時期は、5世紀前半から中頃にかけてのものと推察される。

(第84図、図版28-1~6)は、0.5mから1.0m間隔で、北辺部周辺を除き住居の周囲をほぼ一周する状況で出土した。これらから居住空間は、北辺部から中央付近の長さ約1.9m、幅約1.5mの区域であったものと推定され、住居入口もこの周辺であった可能性が高い。

出土した遺物は、土坑内のものを含め8点(第83-209~216、図版51-210・211・214~216)で、その中で土師器甕が5点と圧倒的な数を占める。ただ甕の

北東部から出土した218の甕は、他の甕が口縁部を上に向けて出土しているのに対して、体部のほとんどが欠損し、口縁部を床面につけている状況で出土したことから、壺ないしは甕を置く台に転用していたものと推定される。その他には、土師器小形壺(213)、高坏(216)、韓式系土器の甕(215)がある。

埋土中(第83-218~225図)からは、土

## 7. 建物 5

(第85図、図版

23-8~11)

X = -128.421,

Y = -39.329付

近を中心とする

梁間 1 間 (約

2.7m), 衍行 2

間 (約3.5m) の

建物である。柱

穴は円形に近い

形を呈し、径0.2

m から0.3m,

深さ0.2mから

0.3mを測る。

柱穴埋土の土層

断面観察の結果、

柱痕は、径約

0.12m前後を測

る。遺物は、土

師器片が柱穴内

から少量出土し

たが、図化でき

るものはない

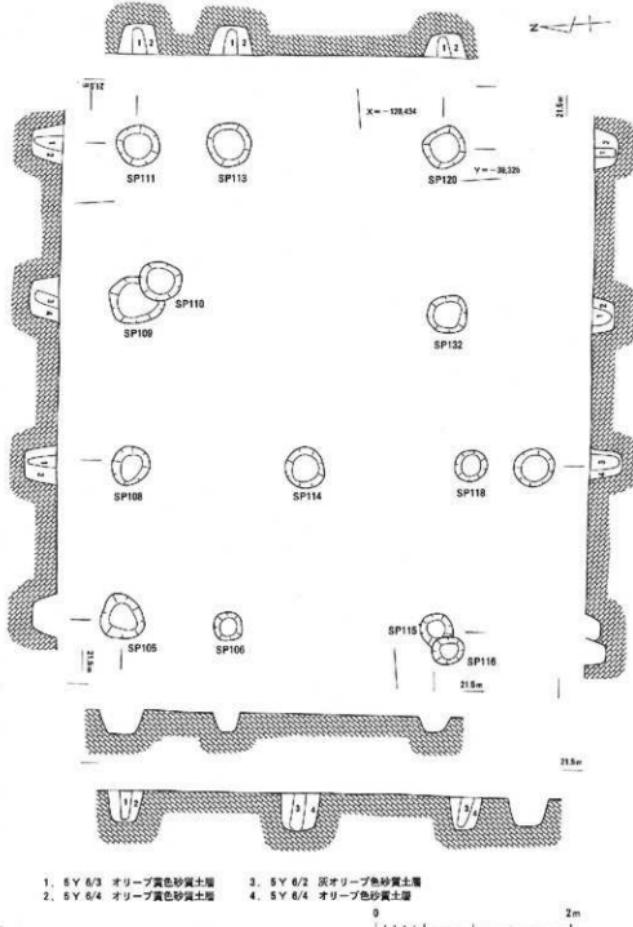
た。

## 8. 建物 6

(第86図)

X = -128.434,

Y = -39.327付近を中心とする、基本的に梁間2間(約3.2m), 衍行3間(約4.9m)の建物である。しかし、梁間の長さが約0.9mと2.2mと異なること、SP118が衍行の通りより0.2m程度外側にあることなど上部構造について不明な点が多い。柱穴は円形に近い形を呈し、径0.25mから0.45m、深さ0.2mから0.35mを測る。柱穴埋土の土層断面観察の結果、柱痕は、径約0.15m前後を測る。遺物は、土師器片が柱穴内から少量出土したが、図化できるものはなかった。

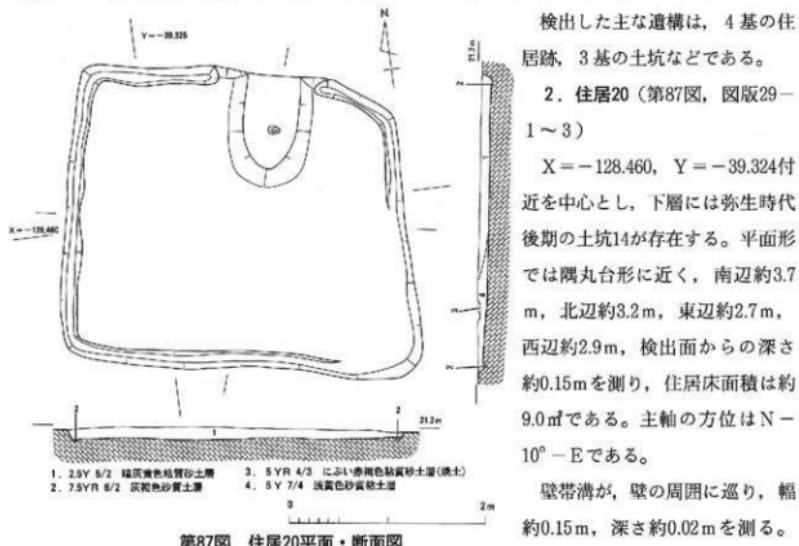


第86図 建物 6 平面・断面図

## 第6節 第5群の調査

### 1. 概要 (第88図、図版20-1, 24-1)

第5群は、 $X = -128.481$ から $X = -128.458$ 付近の $Y = -39.326$ をほぼ中心とする長さ約24m、幅約10mの間を指す。調査区外の状況は不明であるが、第4群と第5群は接している。



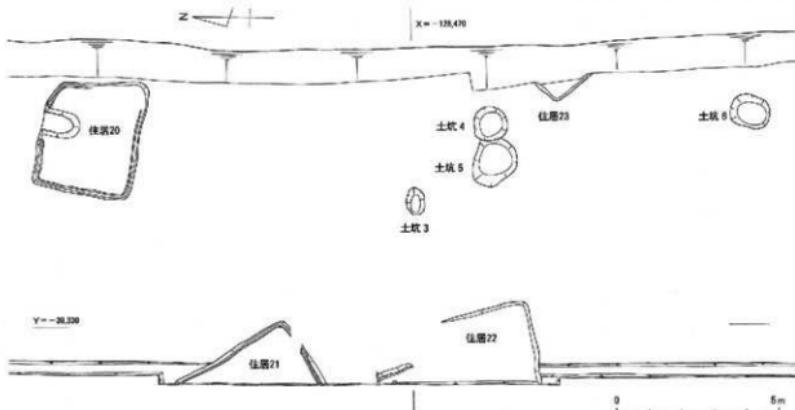
検出した主な遺構は、4基の住居跡、3基の土坑などである。

### 2. 住居20 (第87図、図版29-1～3)

$X = -128.460$ ,  $Y = -39.324$ 付近を中心とし、下層には弥生時代後期の土坑14が存在する。平面形では隅丸台形に近く、南辺約3.7m、北辺約3.2m、東辺約2.7m、西辺約2.9m、検出面からの深さ約0.15mを測り、住居床面積は約9.0m<sup>2</sup>である。主軸の方位はN-10°-Eである。

壁帶溝が、壁の周間に巡り、幅約0.15m、深さ約0.02mを測る。

壁帶溝は、土層、平面観察の結果、



使用時には埋まっていたものと推定される。

竈（第89図、図版29-4・5）は北辺に接して存在し、中央よりやや東寄りにある。竈の床面は、住居跡の床面より約0.08m程度高い位置に盛土によってテラスを作りその上に築かれている。盛土は、底面の幅約0.8m、長さ約1.15m、上面幅約0.55m、長さ約0.95mを測る。竈の壁面は、テラス面と検出面がほぼ同一レベルのため消失し、焚口周辺と推定される竈床面が焼けた赤褐色を呈していた。支脚は欠損していたが、径0.08m、深さ約0.03mを測る支脚の掘り方が存在する。

出土した遺物は、下層に存在する弥生時代後期の土坑14の遺物であり、住居に伴うと推定されるものは出土しなかった。

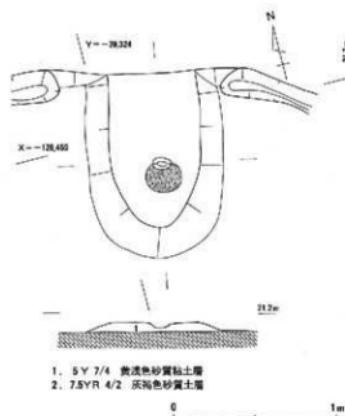
### 3. 住居21（第90図、図版30-1・2）

X=-128.464、Y=-39.333付近を中心とし、住居の一部が後世の溝により欠損している。西から南部かけての約3分の2が西の調査区外にある。東辺から一辺約3.5m、検出面からの深さ約0.25mを測り、住居床面積は12.3m<sup>2</sup>前後で、平面形では方形に近いものと推定される。主軸の方位はN-25°-Wである。

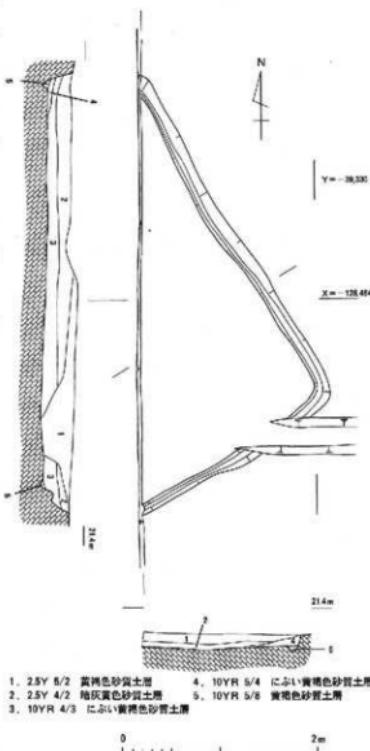
壁帶溝が、壁の周囲に巡り、幅約0.2m、深さ約0.05mを測り、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

竈は、調査区内では検出されなかったが、ほとんどの住居跡に付属していることから、西の調査区外に存在するものと推定される。

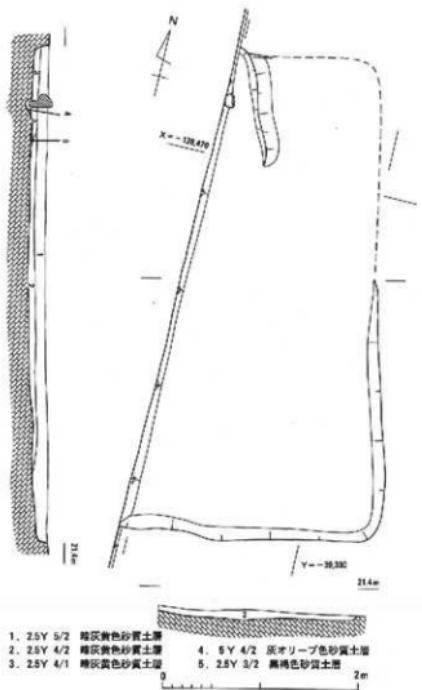
遺物は、床面からのものではなく、すべて埋土中



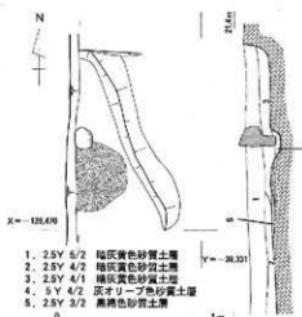
第89図 住居20平面・断面図



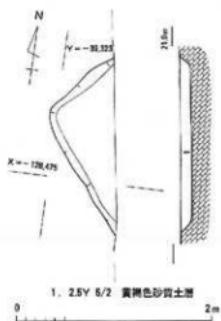
第90図 住居21平面・断面図



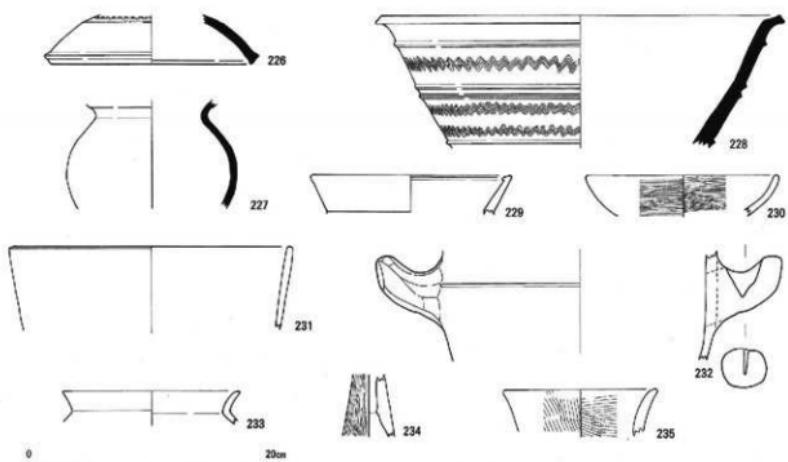
第91図 住居22平面・断面図



第92図 住居22平面・断面図



第93図 住居23平面・断面図



第94図 住居21・22・23出土遺物

より出土した。出土した遺物（第94図）は、須恵器では壺蓋（226、図版56-226）、壺（227）、器台（228、図版56-228）で、土師器は甕（229）、高环（230）などである。特に器台の坏部片（228）は、坏部は深く、口縁部は折り曲げて上方に開き、端部は角張る。外面を突帯で切り、その内部に1条ないし2条の波状文を施している。胎上分析により産地は陶邑産とされている。形態の特徴は、ON231号窯のものと似ているが、これより坏部が深く、口縁端部を折り曲げていることなど古い要素をもっている。これらの遺物の特徴から住居の時期は、5世紀前半から中頃までのものと推定される。

#### 4. 住居22（第91図、図版30-3）

X = -128.471, Y = -39.332付近を中心とする。検出面が住居床面とほぼ同レベルであったことと、住居の一部が検出ミスにより、東辺と北辺の一部の壁面が欠失しているが、竈の位置および住居の形状から、平面形で長方形の住居と推定される。住居は、検出面からの深さ約0.2mを測り、東西長約3.0m、南北長約4.9m、住居床面積14.7m<sup>2</sup>と推定される。住居の主軸の方位はN-10°-Wである。壁带溝は、存在しない。

竈（第92図、図版30-4・5）は北辺のほぼ中央部に存在しているものと推定される。竈の約2分の1が西の調査区外にある。焚口周辺の床面は、住居床面とほぼ同一レベルをなす。平面形では先端部が丸みをもつ「V」字形に近い形をするものと推定され、床面の長さ約1.1m、幅約0.55m以上を測る。壁面の高さ約0.22mを測る。床面はほぼフラットで、支脚は、先端から0.5mの位置にあり、幅約0.12m、長さ約0.22mを測る。焚口から支脚の長さ約0.45mの間の床面は、焼けて赤褐色を呈する。竈内からは図化はできなかったが、土師器残片が出土している。

遺物は、床面からのものではなく、すべて埋土中より出土した。出土した遺物（第94-231~234図）は、韓式系土器の甕（231、232）、土師器甕（233）、高环（234）などである。出土した遺物は破片が多く時期の決め手に欠くが、232の甕に古い要素を有する把手に切れ目が存在すること。周辺の住居の時期が、5世紀前半から5世紀中頃までのものであることから、それらに近い時期のものと推定される。

#### 5. 住居23（第93図）

住居のはほとんどが東の調査区外に存在し、住居の北西隅周辺のみを検出した。検査状況から、X = -128.475, Y = -39.321付近を中心とするものと推定される。北西隅部の形状から平面形か、方形ないしは長方形と推定される。東西長1.5m以上、南北長0.9m以上、検出面からの深さ0.1mを測る。住居の主軸の方位はN-40°-Wである。

竈は、調査区内では検出されなかったが、ほとんどの住居跡に付属していることから、東の調査区外に存在するものと推定される。

出土した遺物は、極少量で図化できたのは土師器壺（第94-235図）の口縁部のみである。住居の時期は、周辺の住居の時期が、5世紀前半から5世紀中頃までのものであることから、それらに近い時期のものと推定される。

## 第7節 第6群の調査

### 1. 概要 (第95図、図版33-1)

第6群は、 $X = -128.491$ から $X = -128.515$ 付近の $Y = -39.327$ をほぼ中心とする長さ約46.5m、幅約9.8mの間を指す。調査区外の状況は不明であるが、第5群と第6群の約10mの間は、遺構が存在しない空白地帯となっている。第7群との境には柵列が存在し、群を分けている。

第6群で検出した主な遺構は、7基の住居跡、鍛冶の痕跡と推定している土坑6基、建物1棟、柵列1基、柱穴などである。

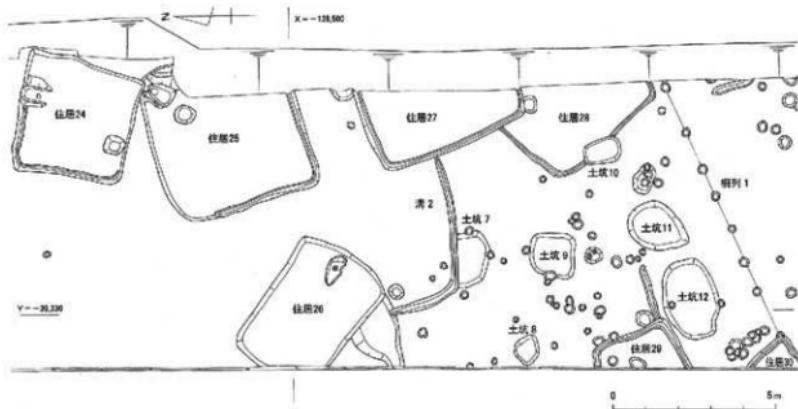
### 2. 住居24 (第96図、図版31-1~3)

$X = -128.445$ 、 $Y = -39.324$ 付近を中心とし、住居25と東南辺の一部が切り合って存在する。土層・平面観察の結果、切り合い関係は住居24が新しい。計測値は、南北長約3.5m、北辺長約3.5m、南辺長約3.2m、検出面からの深さ約0.15mを測る。平面形では、隅丸台形に近い形をなす。床面積は約11.7m<sup>2</sup>を測り、比較的小規模な住居である。主軸の方位はN-13°-Eである。

焼失住居で、床面付近で部分的に炭化材 (第99図)、炭・灰層が認められた。住居内の遺構は、竈の他に土坑がある。

壁帶溝が、北辺の中央付近から西辺にかけて検出された。幅約0.25m、深さ約0.1mを測り、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

竈 (第97図、図版31-4~6) は、北辺のほぼ中央部から東辺より約1.5mの位置に存在する。先端は住居壁面に接し、竈床面は、この周辺の住居床面が疊層であるため、若干の盛土を行い築かれている。焚口周辺の床面は、住居床面とほぼ同一レベルをなす。平面形では「U」字形に近い形を呈し、床面の長さ約0.9m、最大幅約0.35m、残存高約0.15mを測る。床面は、焚口周辺か



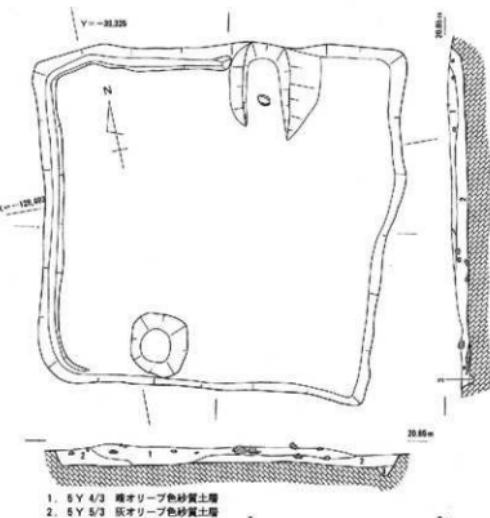
第95図 第6群平面図

ら先端にかけて若干上がり気味であり、高低差は約0.07mを測る。支脚は、先端から0.55mの位置にあり、幅約0.12m、長さ約0.1mを測る。焚口から支脚の長さ約0.58mの間の床面は、焼けて赤褐色を呈する。竈内からは（第98図、図版31-6）、土師器高坏（第101-239図、図版52-239）が竈床面上から出土している。

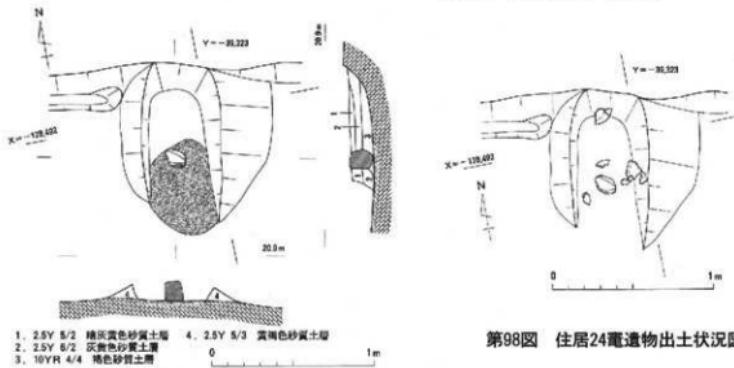
土坑（図版31-8）は、南辺部に接して西辺より約1.2mの位置にあり、平面形では円形に近く、径約0.64m、深さ0.19mを測る。埋土中からは、土師器高坏片（第101-238図）、瓶底部片（第101-240図）、図化はしなかったが、須恵器甕の体部片などが出土している。

床面から出土した遺物は、埋土内からのものに比べ極少量で、主に南側の土坑周辺から出土した。出土した遺物は、土師器甕（第101-236・237図、図版52-236）の2点のみである。

住居埋土上層には、土器溜状を呈して多量の土器が出土した（第100図、図版32）。土層断面観察用畦の観察結果、床面まで達する幅約2.7m、深さ約0.2mの落ち込み状のものが認められ、その中に多量の土器が折り重なる状況で存在する。しかし、出土した土器は図面上では完形品になるものも認められるが、すべて破片で出土し、完



第96図 住居24平面・断面図

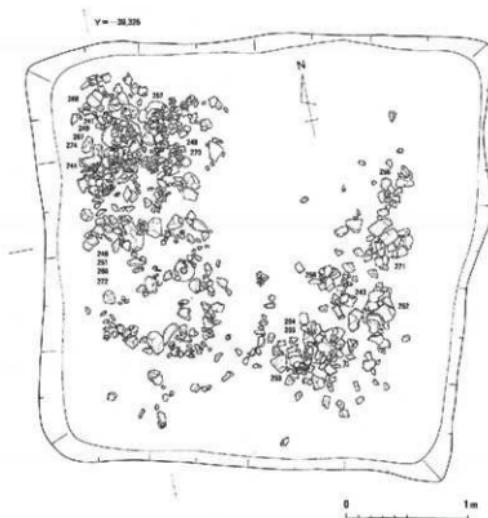


第97図 住居24平面・断面図

第98図 住居24遺物出土状況図



第99図 住居24遺物出土状況図



第100図 住居24上層遺物出土状況図

形のものはない。このことから住居焼失後、落ち込み状になっていた場所に、使用に適さなくなった土器を多量に投げ込んだものと推定される。

出土した遺物（第102・103図、図版52-254-257・264）の種類は、土師器、須恵器（陶質土器を含む）、韓式系土器で、特に須恵器の量が、他の住居に比べて極めて多い。

須恵器は、無蓋高壺（241・242、図版56-241・242）、壺（243、図版56-243）、鉢（246、図版52-246）、鍋（249、図版52-249）、甕（250-252、図版52-252）などである。

241の無蓋高壺は、壺部の一部のみの出土で、産地が分析の結果、伽耶の可能性を示している。壺部全体の形状はやや角張り、比較的浅い。口縁部と底部の境には、断面三角形のやや鋭い突帯を有する。そこから口縁端部に向かって外上方に外反しながら伸び、端部は丸い。242の無蓋高壺は、壺部の一部のみの出土で、底体部の形状は丸みをもち、比較的深い。口縁部は短く外上方に伸びる。

243の壺は、体部と頸部の境から大きく外反しながら口縁端部に達する。口縁端部は

凹面をもち、角張る。この口縁部の形状は、鉢？(245)、鍋(249)にも共通して認められる特徴である。体部は上部のみ残存しているが、形状から最大径が上部にくるものと推定される。鍋(249)は、体部最大径部付近に把手を有し、把手上面に断面三角形の切れ口を入れている。体部と口縁部の境から口縁端部にかけてやや外反気味に外方に伸び、端部は角張り、外面に凹面を有する。体部は球形に近く最大径部付近に凹線を巡らす。

鉢(246)は無頸壺に近い形状を示す。体部は球形に近く、口縁端部は体部上部に存在し丸い。

甕(252)は、焼成が不良で、色調が黄褐色を呈していたため、当初は上師器と思われたが、体部外面に格子目のタタキを施しているため須恵器の甕としたものである。口縁部は体部の境から外反気味に外上方に伸び、端部はやや角張る。体部最大径はやや上方にあり、外面に格子目タタキ、内面はナデによって仕上げている。

韓式系土器である平底鉢(270)は、体部から口縁端部にかけて鋭く外反し短い。端部は角張り、外面に凹面を施す。体部外面にはハケ目調整、内面はナデによって仕上げている。

甑(271・272)は底部がほぼ平らに近く、蒸気孔は円形をなす。

これらの遺物の特徴から住居の時期は、須恵器の編年ではTG232型式前後のものと推定され、5世紀前半に比定される。

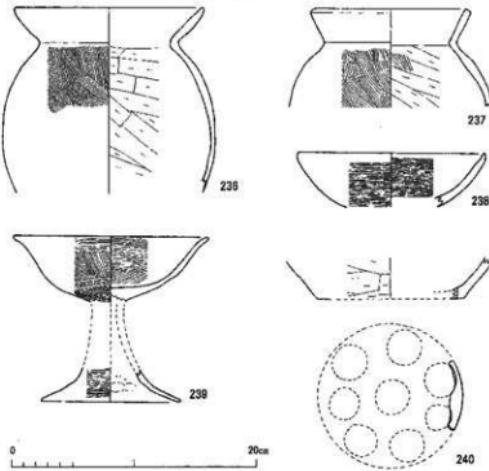
### 3. 住居25(第104図、図版33-2~4)

住居の約5分の1が東の調査区外にあり、X = -128.498, Y = -39.325付近を中心とし、住居24と東北隅の一部が切り合って存在する。土層・平面観察の結果、切り合い関係は住居24が新しい。計測値は、東西長約4.9m、南北長約4.7m、検出面からの深さ約0.1~0.2mを測る。平面形では隅丸方形に近い形をなす。床面積は約23.3m<sup>2</sup>を測る。主軸の方位はN-18°-Wである。

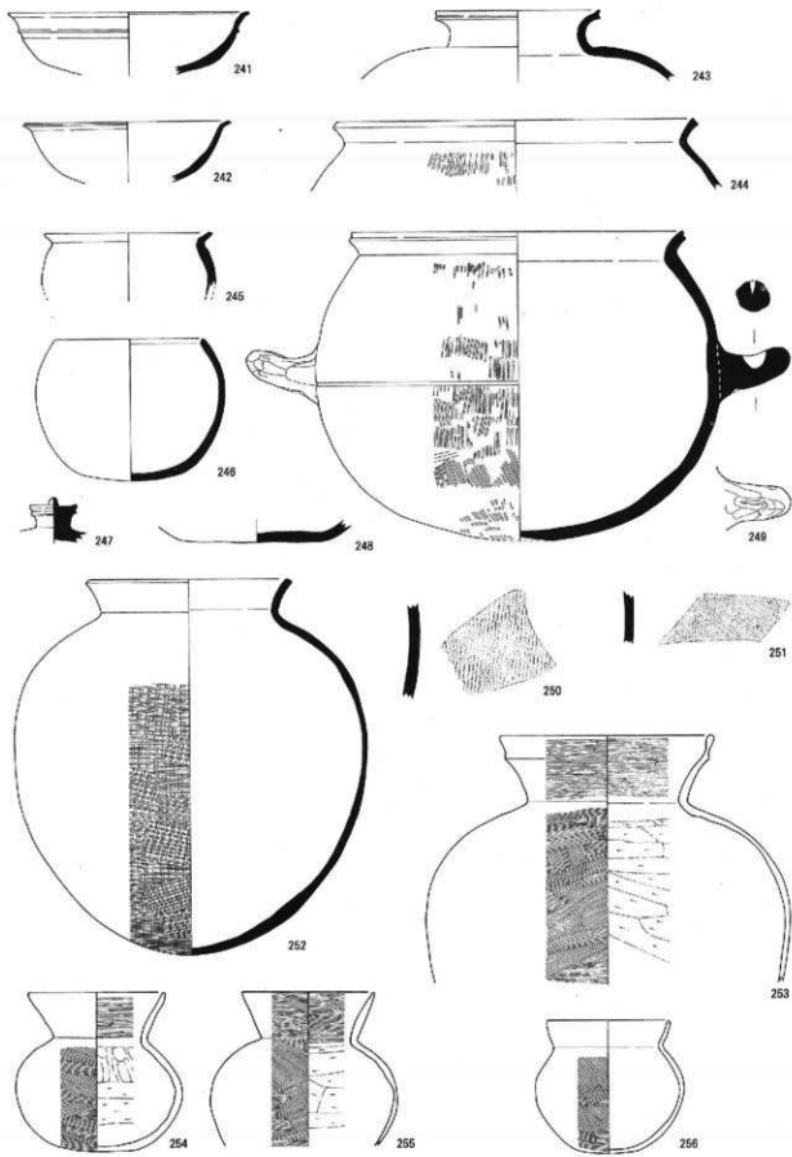
焼失住居(図版35-1)で、床面付近には部分的に炭化材、炭・灰屑が認められた。住居内の遺構は、竈、竈に伴うと推定される十坑がある。

壁帶溝が、西辺から南辺にかけて検出された。幅約0.2m、深さ約0.05mを測り、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

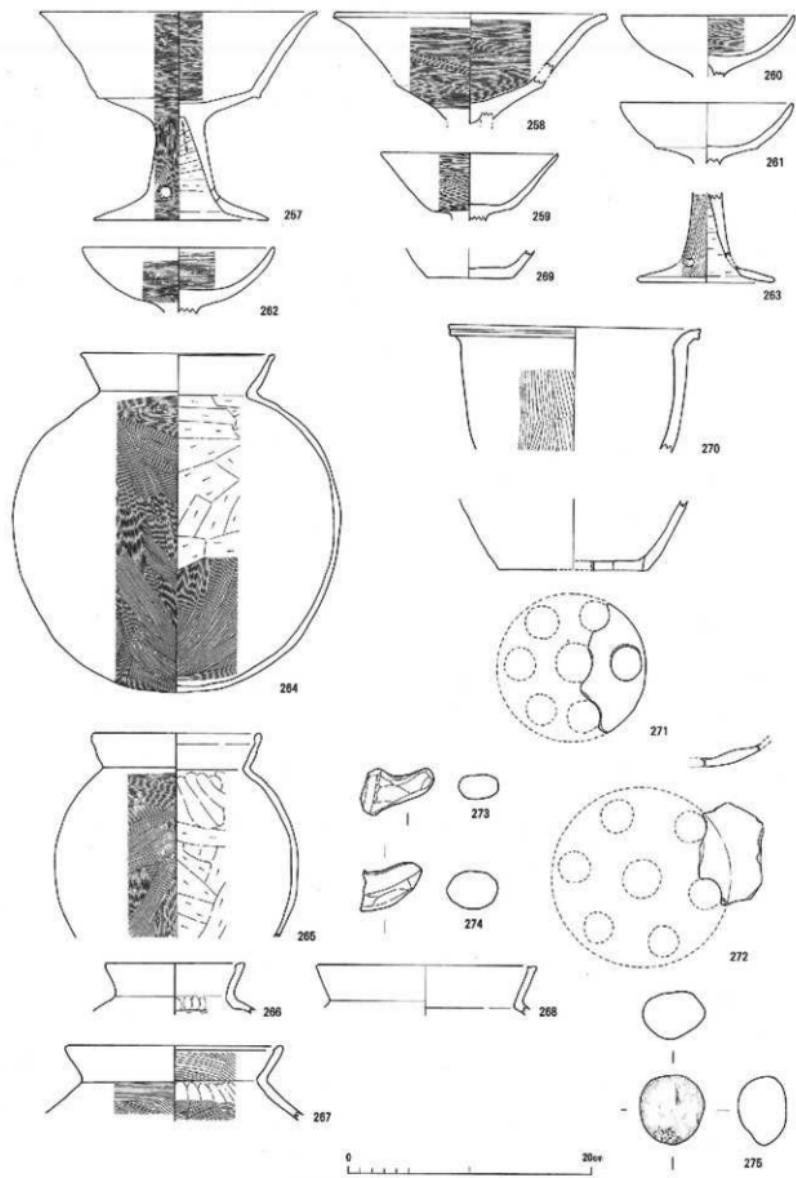
竈(第105図、図版34)は、東北隅部には接して検出された。先端は住居壁面より0.27mの位置にある。平面形では「U」字



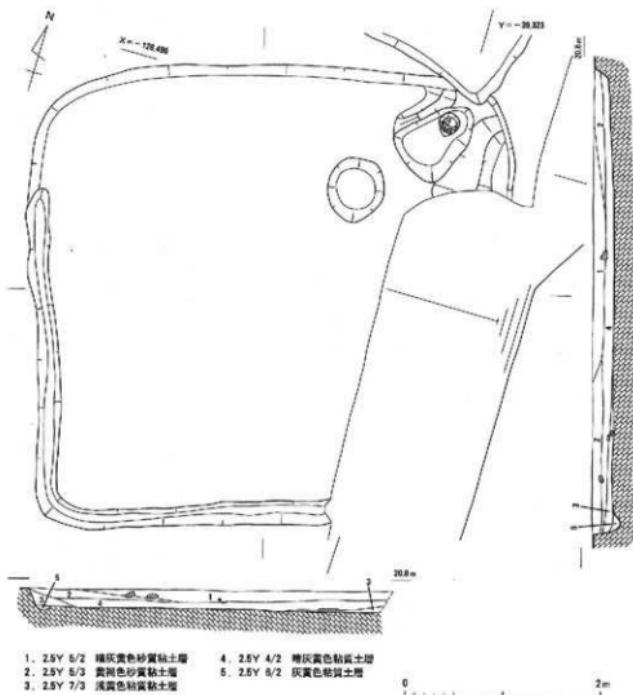
第101図 住居24出土遺物1



第102図 住居24出土遺物 2



第103図 住居24出土遺物 3



第104図 住居25平面・断面図

形に近い形を呈し、床面の長さ約0.8m、最大幅約0.42m、残存高約0.2mを測る。焚口周辺の床面は、住居床面より約0.06m低い位置にあり、焚口から先端にかけて上がり気味であり、高低差は約0.1mを測る。支脚は、先端から0.25mの位置にある。今回の調査で検出した支脚のほとんどが長細い河原石であるのに対して、土器を転用している。基本的に、高壙の口縁部片1点(第107-281、図版53-281)を下に敷き、その上に壺(第107-282、図版53-282)を逆さまにして使用している。床面からの高さ0.05mを測る。焚口から支脚の長さ約0.35mの間の床面は、焼けて赤褐色を呈する。竈内からは、支脚直上に、壺(第107-285、図版53-285)、床面周辺から平底鉢(第107-284図、図版53-284)が出土している。

土坑は、竈焚口から約0.5mの位置にあることから、竈に付随する施設と推定される。径0.6m、深さは浅く約0.06mを測る。土坑内および周辺から出土した遺物(第106図、図版35-3)は、図化できたのは1点(第107-280図、図版53-280)のみであるが壺2点が出土している。住居の床面から出土した遺物(第107図、図版35-1・2)は、竈および竈周辺がほとんどでそれ以外

からは極めて少ない。注目される遺物としては、土師器壺の体部に孔を開け竈にしたもの（286、図版53-286）、平底鉢（284、図版53-284）がある。平底鉢の底部はほぼ平らで、底部から外方に開き気味に伸び、体部境から口縁端部にかけてさらに外方に開く。端部は丸みをおびる。胎土分析の結果、伽耶産の可能性があるとされている。

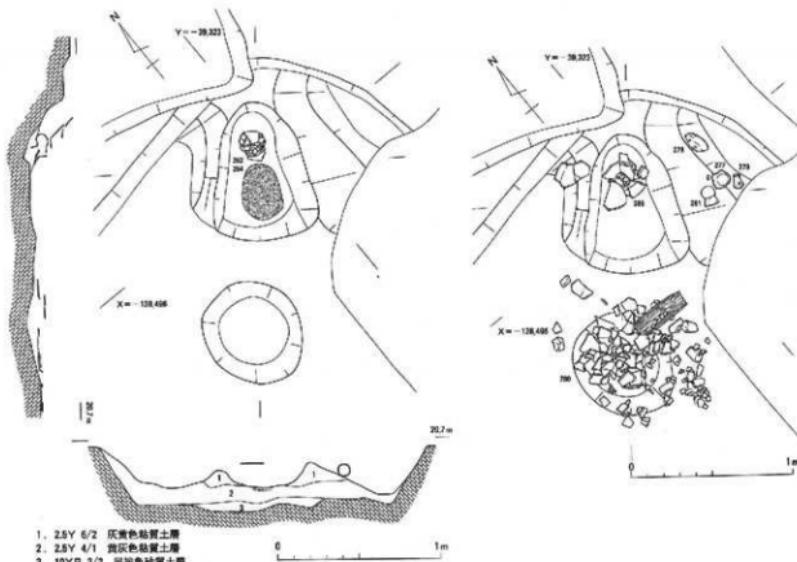
出土遺物から住居の時期は5世紀前半のものと推定される。

#### 4. 住居26（第108図、図版36-1～3）

X = -128.500, Y = -39.330付近を中心とする。平面形では、隅丸長方形に近い形をなし、長辺約4.5m、短辺長約3.0m、検出面からの深さ約0.15mを測る。床面積は約13.5m<sup>2</sup>を測り、比較的小規模な住居である。主軸の方位はE-40°-Sである。

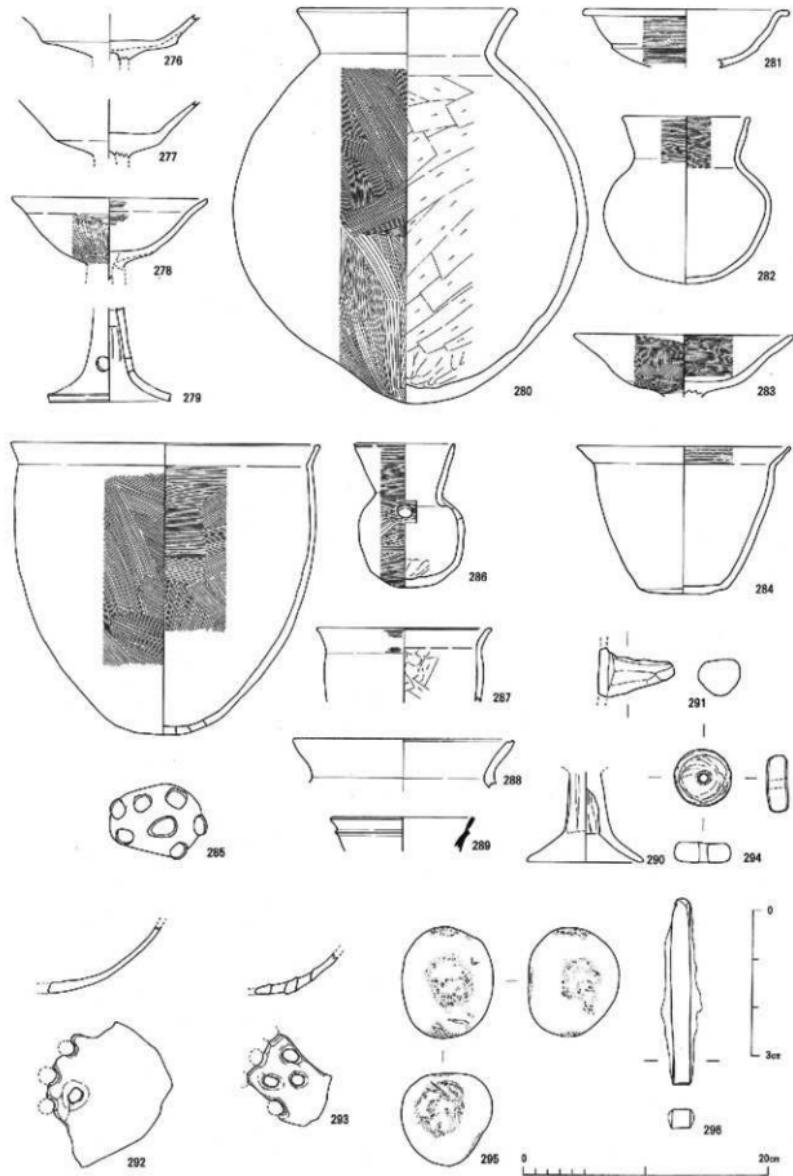
壁帶溝は検出されなかった。

竈（第109図、図版36-5・6）は、東辺のほぼ中央部にあり、焚口周辺の床面は、住居床面とほぼ同一レベルをなす。平面形では「U」字形に近い形を呈し、床面の長さ約0.75m、幅0.35m以上を測る。竈の壁面は、調査時において、住居の土層断面観察用畔が中央部に存在していたため、竈の存在に気づかず掘削ミスにより一部が欠失した。残存高約0.1mを測る。床面より0.05m程度下に存在し、地山の上に直接築いている。支脚は、検出時はば現位置で倒れていたが、支脚を立てる穴は焚口から0.6mの位置にある。幅約0.18m、長さ約0.08mを測る。焚口から支脚の長さ約0.43mの間の床面は、焼けて赤褐色を呈する。竈内からは（第111図、図版36-4），甕

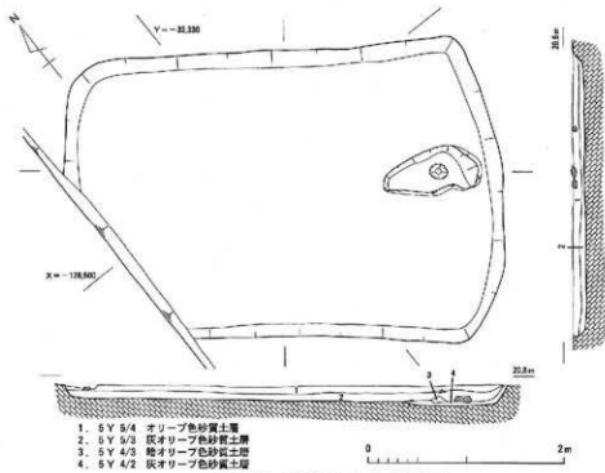


第105図 住居25竈平面・断面図

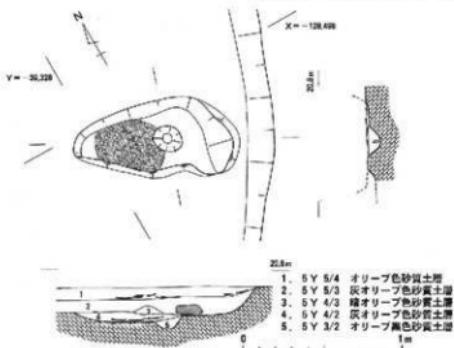
第106図 住居25竈及び周辺遺物出土状況図



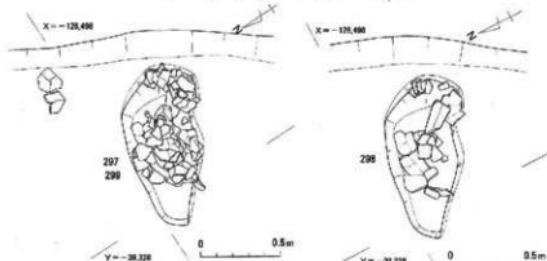
第107図 住居25出土遺物



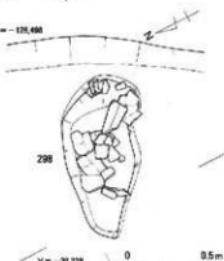
第108図 住居26平面・断面図



第109図 住居26平面・断面図



第110図 住居26上層  
遺物出土状況図



第111図 住居26上層  
遺物出土状況図

(第112~298図、図版53~298)が出土している。また直上には住居廃絶時の祭祀と推定される壺2個体が配置されていた(第110図、図版36~7)。

住居内からの遺物(第112図)は少量で、竈内(298)、直上(297・299)から出土した以外には、瓦質土器(300、図版53~300)がある。瓦質土器は、壺体部と推定されるもので、外面は細かい格子目タタキ、内面をナデによって仕上げている。胎土分析の結果、伽耶産の可能性のあるものと推定されている。また分析の数値が、住居34から出土したもの(330、図版53~330)と極めて酷似していることから、同一個体の可能性があると指摘さ

れているものである。

住居の時期は、出土遺物から5世紀初頭から前半にかけてのものと推定している。

### 5. 住居27(第114図、図版37-1・2)

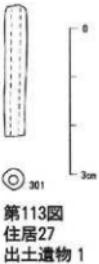
住居の約5分の3が東の調査区外にあり、X=-128.505、Y=-39.320付近が中心と推定され、住居28と切り合って存在する。土層および平面観察の結果、住居27が古い。検出状況から一辺約4.7mの隅丸方形の住居と推定され、検出面からの深さ約0.15mを測る。床面積は約22.1m<sup>2</sup>と推定され、主軸の方位はN-74°-Eである。焼失住居(第115図、図版37-3)で、床面付近には炭化材が多数検出された。

壁帶溝が、壁の周囲に巡り、幅約0.2m、深さ約0.03mを測る。壁帶溝は、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

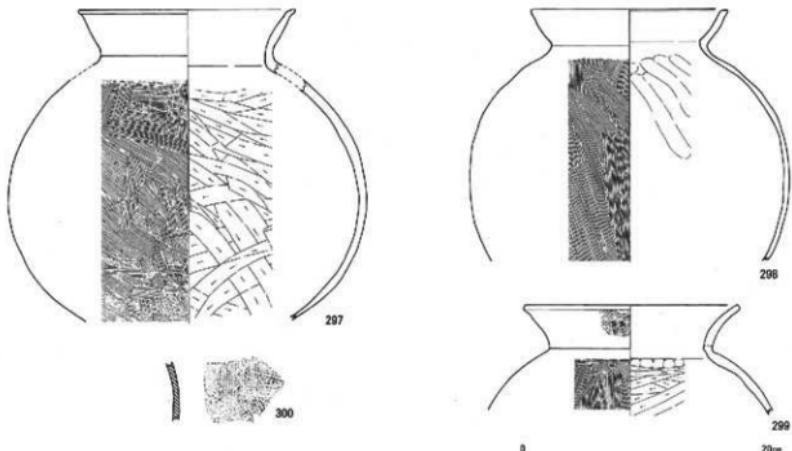
竈は、調査区内では検出されなかったが、ほとんどの住居跡に付属していることから、調査区外の南がないしは東辺付近に接して存在していたものと推定される。

床面から出土した管玉(第113図、図版37-4・54-301)を除く出土した遺物(第116図)は、焼失住居にもかかわらず少量で破片が多く、ほとんどのものが床面からのものではない。このことから住居に伴う遺物は、東の調査区外に集中して存在しているものと推定される。出土した遺物は、土師器甕(302、303)、高坏(305~307)、鉢(304)、須恵器器台(308、図版55-308)などである。

須恵器器台は、坏部で口縁部が欠損しているが、形状から外上方にのび、端部が丸味をもつタイプと推定される。口縁部下の外面を突帯で区切り、その内部に2条前後の波状文を施している。



第113図  
住居27  
出土遺物 1

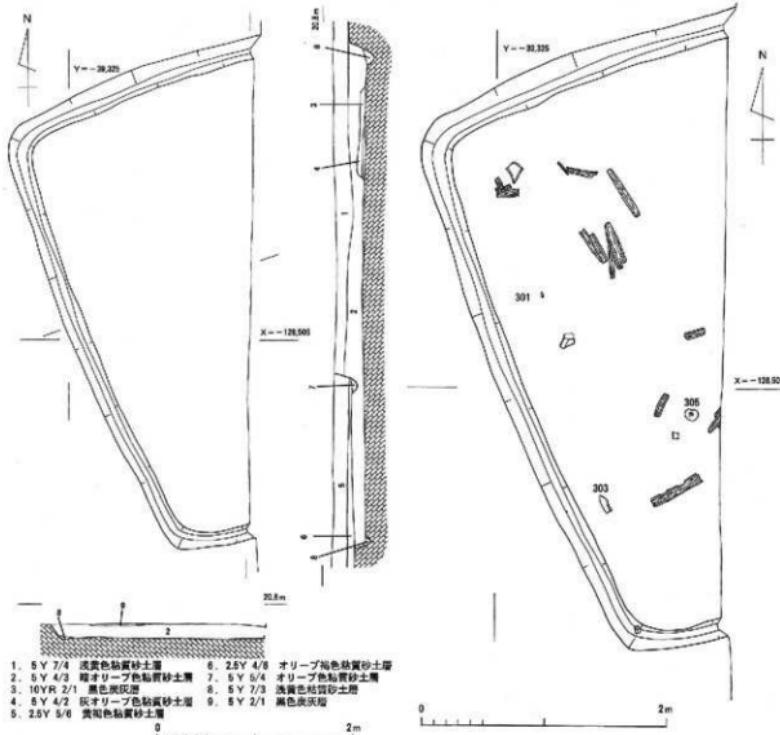


第112図 住居26出土遺物

住居の時期は、埋土中から出土した須恵器器台の諸特徴からT G 232型式のものと推定され、5世紀前半に比定される。

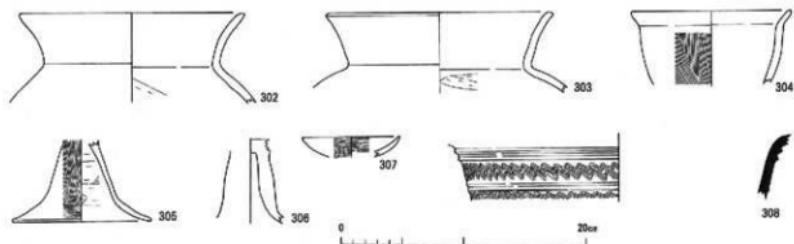
#### 6. 住居28 (第117図、図版38-1・2)

住居の約2分の1が東の調査区外にあり、X = -128.506, Y = -39.322付近が中心と推定され、

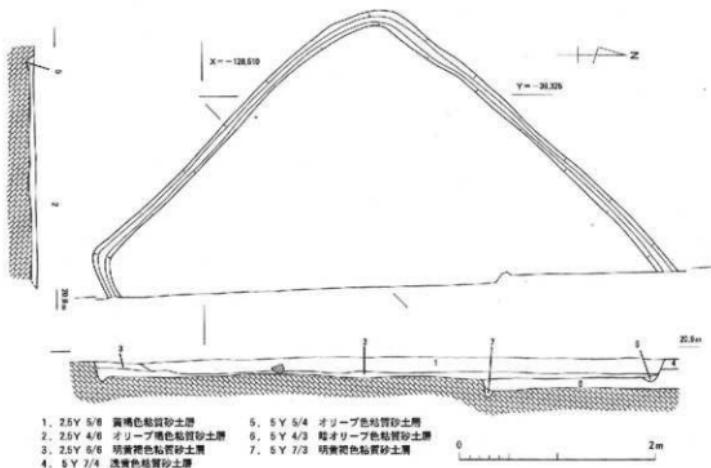


第114図 住居27平面・断面図

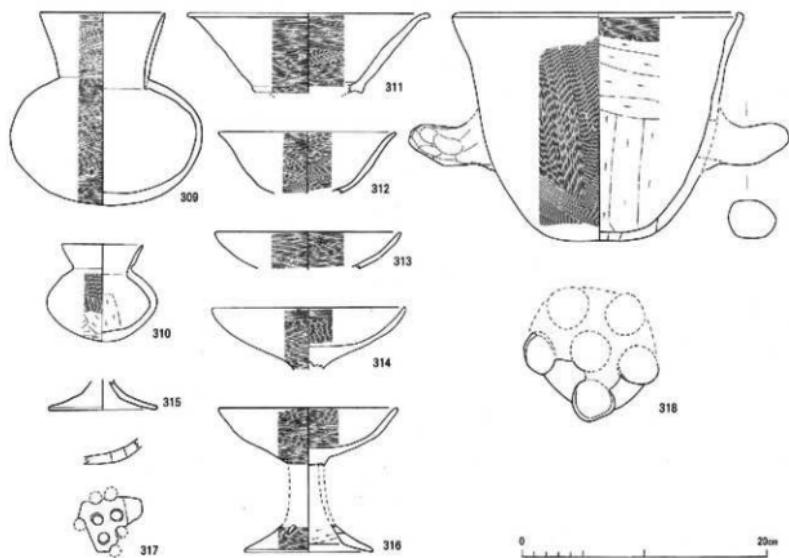
第115図 住居27遺物出土状況図



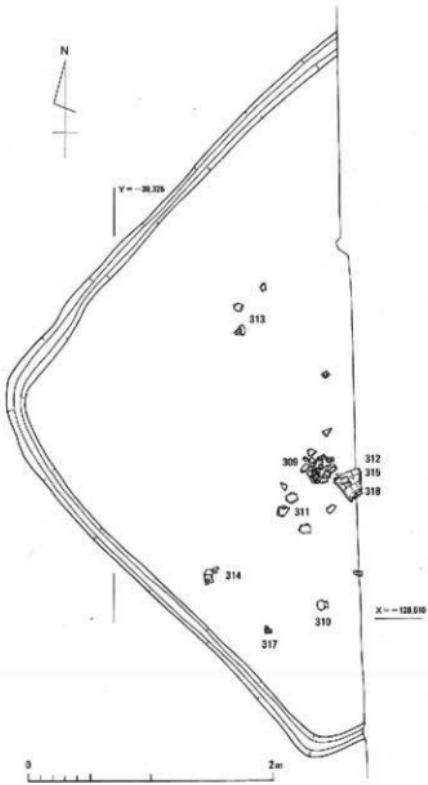
第116図 住居27出土遺物 2



第117図 住居28平面・断面図



第118図 住居28出土遺物



第119図 住居28遺物出土状況図

これらは、これらの遺物から住居の時期は、5世紀前半から中頃にかけてのものと推定される。

#### 7. 住居29 (第120図、図版39-2)

住居のほとんどが西の調査区外にあり、X = -128.512, Y = -39.334付近を中心と推定される。調査区内に東の一辺のみ検出されたため、規模は不明であるが、東辺の長さが約2.4mと短いため、平面形が隅丸長方形の住居の可能性が高い。検出面からの深さ約0.04mを測る。床面積は約4.2m<sup>2</sup>以上と推定され、主軸の方位はW-25°-Sである。

壁帶溝が、壁の周間に巡り、幅約0.2m、深さ約0.03mを測る。壁帶溝は、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

竈は、調査区内では検出されなかったが、ほとんどの住居跡に付属していることから、調査区外の南辺ないしは東辺付近に接して存在していたものと推定される。

住居27と切り合って存在する。土層および平面観察の結果、住居28が古い。検出状況から一辺約4.1mの隅丸方形の住居と推定され、検出面からの深さ約0.05mを測る。床面積は約16.8m<sup>2</sup>と推定され、主軸の方位はN-45°-Eである。

壁帶溝が、壁の周間に巡り、幅約0.15m、深さ約0.02mを測る。壁帶溝は、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

竈は、調査区内では検出しなかったが、ほとんどの住居跡に付属していることから、調査区外の南辺ないしは東辺付近に接して存在していたものと推定される。

出土した遺物のほとんどが床面ないし直上で検出された (第119図、図版38-3~5) が、破片が多く、土師器壺 (309, 310) の2点のみ完形であった。また、焼失を受けていないことなどから、これらの遺物は現位置を保つてはいないものと推察される。

出土した遺物 (第118図、図版53-309・54-318) は、土師器壺 (309, 310)、高壺 (311~316)、韓式系土器壺 (317, 318) などである。



第120図 住居29平面・断面図

遺物は、土師器小片が少量出土したが図化できるものはなかった。時期は、周辺の造構などから、5世紀前半から中頃にかけてのものと推定される。

#### 8. 住居30 (第121図)

住居のほとんどが、西の調査区外に存在する。X = -128.515, Y = -39.327付近が中心と推定される。調査区内に東南隅周辺のみ検出されたため、規模・形状は不明である。検出面からの深さ約0.13mを測る。床面積は約2.2m<sup>2</sup>以上と推定され、主軸の方位はN-40°-Wである。

壁帶溝が壁の周囲に巡り、幅約0.17m、深さ約0.08mを測る。壁帶溝は、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

竈は調査区内では検出されなかったが、ほとんどの住居跡に付属していることから、調査区外の南辺ないしは東辺付近に接して存在していたものと推定される。

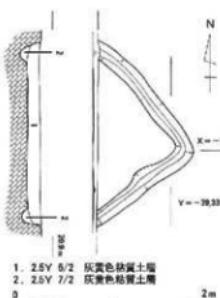
遺物は、土師器小片が少量出土したが図化できたものは土師器高环脚部1点 (第122図) のみであった。

時期は、出土遺物、周辺の造構などから、5世紀前半から中頃にかけてのものと推定される。

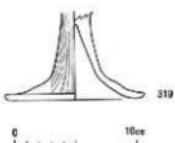
#### 9. 土坑7・8・9・10・11・12 (第123図)

Y = -39.311からY = -39.325付近、X = -128.505からX = -128.513付近の東西約7m、南北約7mの間に6基の土坑を集中して検出した。土坑周辺の検出面上層一帯には、厚さ約0.05m程度の炭・灰層が堆積し、部分的に赤褐色を呈した土が存在していたことから、造構検出前には、焼失住居が存在するものと推定していた。しかしそれらを除去し、造構を検出を行った結果、周辺に土坑6基が集中して検出された。また、土坑周辺の造構から出土した遺物の中に、鉛滓が4点含まれていた。これらのことなどから、検出ミスにより炉跡を欠失した可能性が高いと判断した。炉跡などを検出してはいないが、鍛冶に関する構造ではないかと考えられる。また、検出した土坑6基のうち、4基に降雨時に水分を防ぐための覆屋の存在を伺わせる柱穴が存在している。

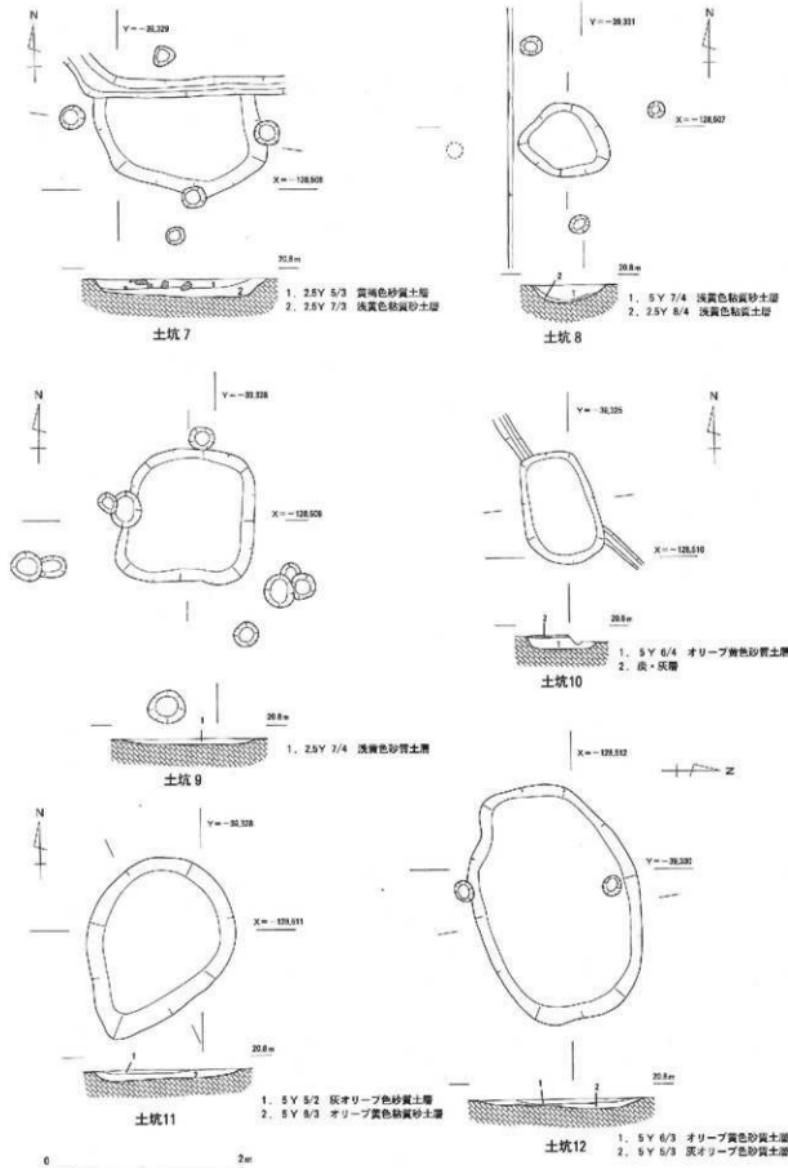
土坑7 (図版45-3) X = -128.505, Y = -39.328付近を中心



第121図 住居30平面・断面図



第122図 住居30出土遺物



第123図 土坑 8・9・10・11・12平面・断面図

とし、北側を溝2によって切られている。平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、長辺約1.65m、短辺約0.9m、深さ約0.18mを測る。上坑に接して柱穴が4本検出されたことから覆屋が存在していたものと推定される。柱穴間の長さ1.0から1.5m、径0.25m前後、深さ0.09m前後を測る。遺物は、土師器片が土坑内から少量出土したが、図化できるものはなかった。

**土坑8** (図版45-4) X = -128.507, Y = -39.331付近を中心とする。平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、長辺約0.8m、短辺約0.7m、深さ約0.18mを測る。上坑より約0.7m前後離れて柱穴が3本検出された。柱穴の配列状況から、西の調査区外に1本存在する可能性が高いことから、覆屋であったものと推定される。柱穴間の長さ1.4m、径0.2m前後、深さ0.7m前後を測る。遺物は、土師器片が土坑内から少量出土したが、図化できるものはなかった。

**土坑9** (図版45-5) X = -128.508, Y = -39.328付近を中心とする。平面形では隅丸方形に近い形を呈し、一辺約1.4m、深さ約0.6mを測る。土坑上から周辺にかけて柱穴が6本検出されたことから覆屋もしくは建物(建物7)が存在していたものと推定される。土坑上層より十師器窯跡(第124-320図)、韓式系土器頸片(第124-321図)が出土した。外面が変色し赤褐色を呈していたことから、2次焼成を受けたものと推定される。

**土坑10** (図版45-6) X = -128.5095, Y = -39.328付近を中心とし、住居28と切り合って存在する。前後関係は、土坑10が占い。平面形では隅丸長方形に近い形を呈し、長辺約1.2m、短辺約0.8m、深さ約0.15mを測る。遺物は、土師器片が柱穴内から少量出土したが、図化できるものはなかった。

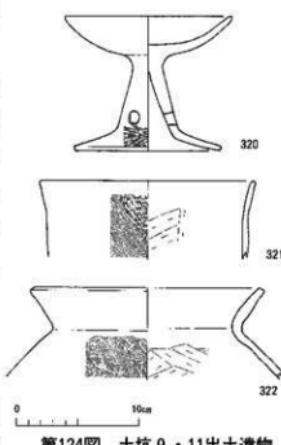
**土坑11** X = -128.511, Y = -39.328付近を中心とする。平面形では梢円形に近い形を呈し、長径約2.0m、短径約1.45m、深さ約0.1mを測る。

出土した遺物は、上層より土師器窯跡(第124-322図)が出土している。この上器は、2次焼成を受けたものと推定され、外面が変色し赤褐色を呈している。

**土坑12** (図版45-7) X = -128.512, Y = -39.330付近を中心とする。平面形では梢円形に近い形を呈し、長径約2.5m、短径約1.7m、深さ約0.1mを測る。土坑のほぼ中央部に柱穴が2本検出されたことから、覆屋であったものと推定される。柱穴間の長さ1.5m、径0.2m前後、深さ0.04m前後を測る。遺物は、土師器片が土坑内から少量出土したが、図化できるものはなかった。

#### 10. 溝2 (第127図)

X = -128.504, Y = -39.325付近からX = -128.503, Y = -39.330付近で検出された。住居27と接し、住居26の南辺付近で収束する。一部上坑7と切り合い前後関係は、溝2が



第124図 土坑9・11出土遺物

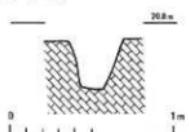
新しい。全長約6.3mを測り、平面形では逆「L」字形に近い形を呈する。幅約0.35m、深さ約0.28mを測り、断面「U」字形に近く、細い溝にかかわらず比較的深い。出土遺物は、土坑7に近い地点で鉱滓3点(図版57-413)が出土している。断面が「U」字形に近い形を呈し、両端部が収束していることから、用水などの水に伴う目的の施設ではないと推測されるが、用途は不明である。

### 11. 建物7(第126図)

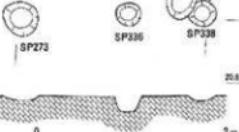
$X = -128.508$ ,  $Y = -39.328$ 付近を中心とする。基本的に梁間1間(約1.8m), 柱行2間(約2.0m)の建物である。柱穴は円形に近く、径0.25mから0.35m、深さ0.05mから0.15mを測る。ほぼ同一地点に土坑9があることから、鍛冶炉に関係する建物と考えているが、他の建物よりは規模が小さく覆屋としては大きいため疑問の点が残る。そのため、一応建物として扱った。遺物は、土師器片が柱穴内から少量出土したが、図化できるものはなかった。

### 12. 檻列1(第127図)

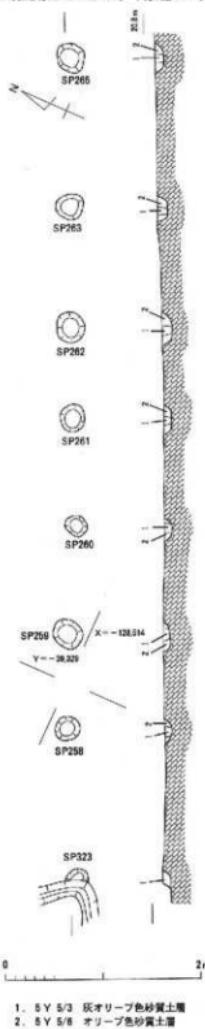
$X = -128.511$ ,  $Y = -39.323$ から $X = -128.515$ ,  $Y = -39.331$ 付近にかけて、ほぼ東北方向から南西方向に伸びる8本の柱穴を確認した。対応する柱穴が存在しないため檻列と考えられる。検出長約8.4m、柱間は0.9mから1.5mを測り、柱穴は径1.0m前後、深さ0.08m前後、柱底は、径0.06m前後を測る。柱穴内から出土した遺物が少量で図化できるものはなく、時期の決め手に欠くが、住居の方向から推定すると住居25・27・29がほぼ同方向であること。これより南には、鍛冶炉と推定される土坑が存在しないことなどから共存していた可能性が高いと考えられる。



第125図 溝2断面図



第126図 建物7平面・断面図



第127図 檻列1  
平面・断面図

## 第8節 第7群の調査

### 1. 概要（第128図、図版39-1）

第7群は、調査地区の南端に位置し、 $X = -128.511$ から $X = -128.533$ 付近の $Y = -39.326$ をほぼ中心とする長さ約22m、幅約10mの間を指す。北に存在する第6群との境には柵列1が存在し、群を分けている。

第7群で検出した主な遺構は、5棟の住居跡、建物4棟、柵列1基、土坑1基、柱穴などである。

### 2. 住居31（第129図、図版39-3）

住居の約5分の3が西の調査区外にあり、 $X = -128.520$ 、 $Y = -39.332$ 付近が中心と推定される。検出状況から一辺約4.5mの隅丸方形の住居と推定され、検出面からの深さ約0.07mを測る。床面積は約20.3m<sup>2</sup>と推定され、主軸の方位はW-5°-Sである。

壁帶溝が、壁の周囲に通り、幅約0.15m、深さ約0.06mを測る。壁帶溝は、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

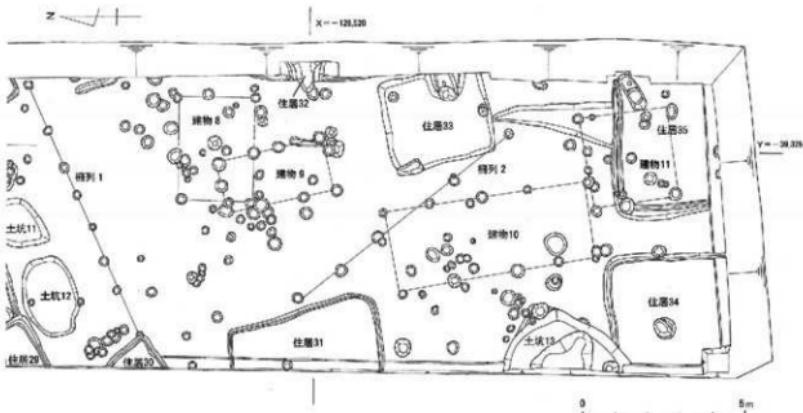
竈は、調査区内では検出されなかったが、ほとんどの住居跡に付属していることから、調査区外の南辺ないしは東辺付近に接して存在していたものと推定される。

遺物（第130図）は、埋土中から少量出土し、図化できたのは土師器高坏片2点（323、324）のみである。

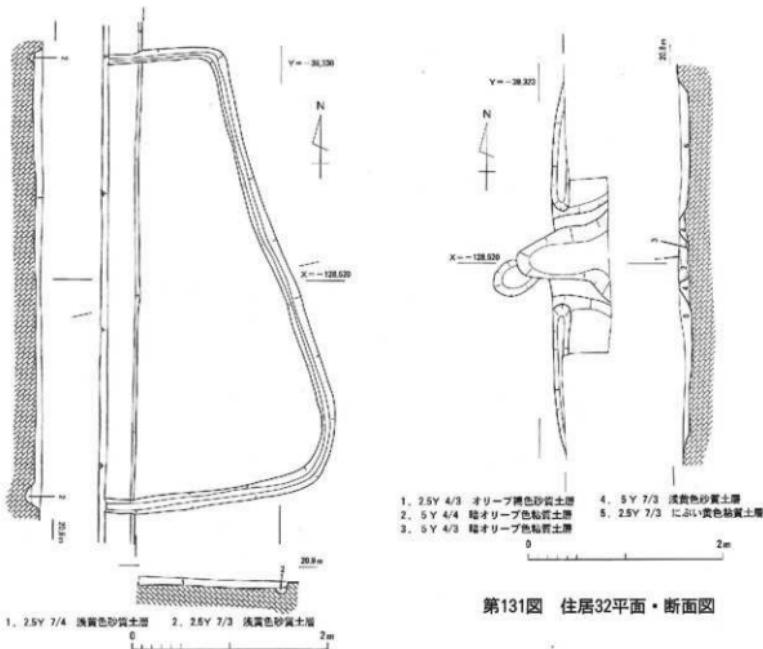
時期は、出土遺物、周辺の遺構から5世紀前半から中頃にかけてのものと推定される。

### 3. 住居32（第131図、図版40-1）

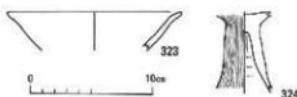
住居のほとんどが東の調査区外にあり、西辺と竈の一部を検出したのみで、 $X = -128.520$ 、 $Y = -$



第128図 第7群平面図



第129図 住居31平面・断面図



第130図 住居31出土遺物

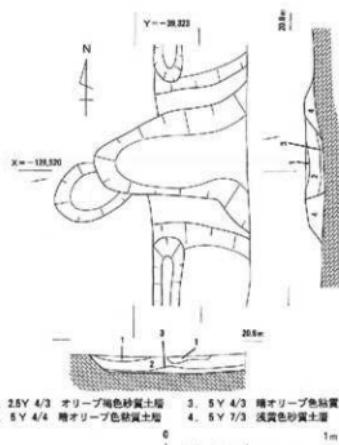
39.320付近が中心と推定される。このため住居の形状は不明で、検出面からの深さ約0.1mを測る。主軸の方位はW-0°と推定される。

壁帶溝が、壁の周囲に巡り、幅約0.15m、深さ約0.08mを測る。壁帶溝は、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

竈（第132図、図版40-2）は、焚口付近が調査区外にあり、検出状況から西辺のはば中央部に存在しているものと推定される。竈の位置は、他の住居のものと異なり、先端部が住居壁

1. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色沙質土層  
2. 5Y 4/4 細オリーブ色粘質土層  
3. 5Y 4/3 細オリーブ色粘質土層  
4. 5Y 7/3 淡黄色沙質土層

第131図 住居32平面・断面図



第132図 住居32平面・断面図

面より0.3m外側にある。平面形では「V」字形に近い形を呈し、長さ1.1m以上、幅0.7m以上、残存高0.1mを測る。

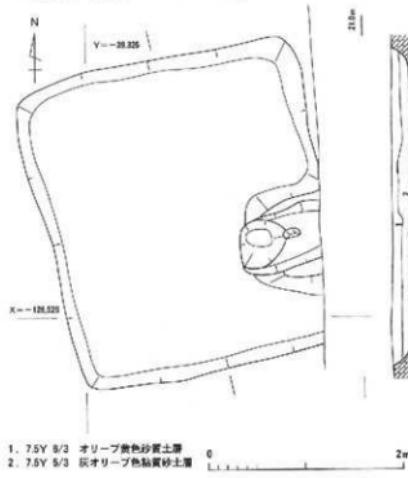
遺物は、埋土中から極少量出土したが、図化できるものはなかった。

時期は、周辺の遺構から5世紀前半から中頃にかけてのものと推定される。

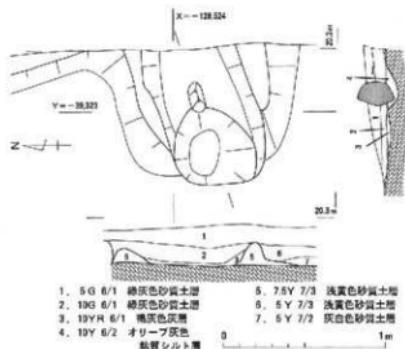
#### 4. 住居33(第133図、図版40-3・4)

X = -128.524, Y = -39.324付近を中心とする。東辺と竈の一部が調査区外にある。平面形では、隅丸長方形に近い形をなし、長辺約3.2m、短辺約3.0m、検出面からの深さ約0.2mを測る。小規模な住居で、床面積は約9.6m<sup>2</sup>を測る。主軸の方位はN-73°-Eである。

壁帶溝は検出されなかった。



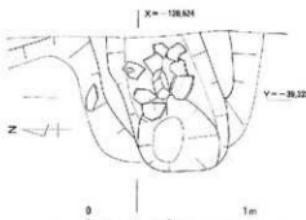
第133図 住居33平面・断面図



第134図 住居33平面・断面図

竈(第134図、図版40-5~7)は、東辺のほぼ中央部から西よりにあり、先端部が調査区外にある。焚口周辺の床面は、住居床面とほぼ同一レベルをなす。竈は地山の上に直接築き、平面形では「U」字形に近い形を呈するものと推定され、床面の長さ約0.85m以上、最大幅0.45m、残存高約0.15mを測る。支脚は、焚口から0.55mの位置にあり、幅約0.09m、長さ約0.23mの河原石を使用している。焚口周辺から支脚付近までの0.45m間は、床面より0.05m程度落ち込み土坑状を呈する。支脚周辺からは、甕(第137~326図、図版54~326)が出土している。

住居床面上からの遺物(第137図、図版54~325・327)は少量であり、土師器高环(325)、韓式系土器瓶(327)などが出土し



第135図 住居33竈遺物出土状況図



第136図 住居33遺物出土状況図

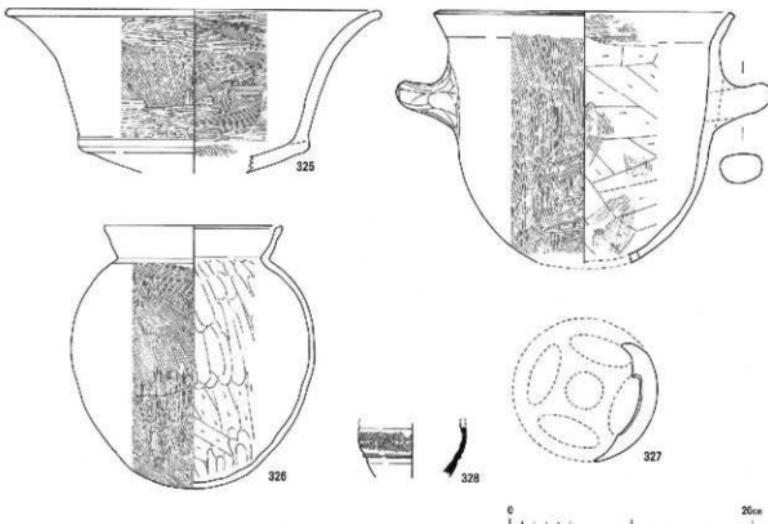
ている。また埋土中より須恵器把手付鉢（328、図版56-328）が出土している。

把手付鉢は、口縁部及び把手が欠損している。底部から口縁部にかけて内湾気味に外側に伸び、体部上半に2条の沈線を入れ、その内部に2本の波状文を施している。体部上半外面は回転ナデ、下半はナデ、内面は回転ナデによって仕上げている。

これらから住居の時期は、出土遺物から5世紀前半と推定している。

#### 5. 住居34（第138図、図版41-1）

X = -128.531, Y = -39.330付近を中心とする。西辺と南辺が調査区外、北辺の一部が土坑13によって切られている。それらのため平面形では、隅丸方



第137図 住居33出土遺物

形に近い形をなすものと推定されるが、全容は不明である。一辺3.4m以上、検出面からの深さ約0.14mを測る。床面積は約12.6m<sup>2</sup>以上を測る。主軸の方向はW-7°-Sである。

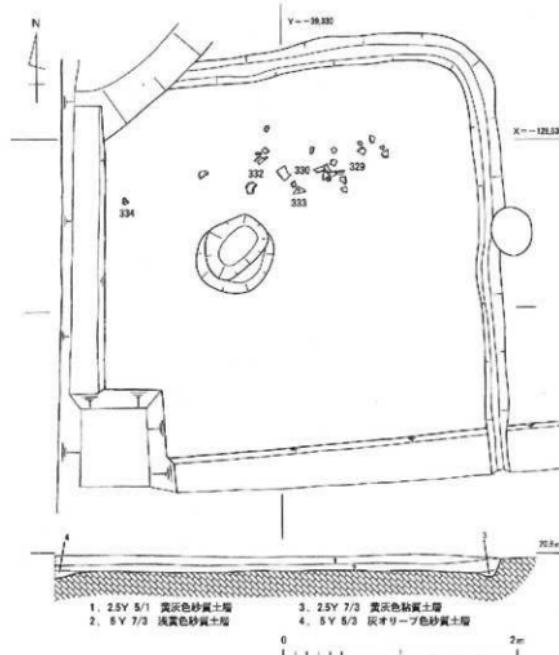
壁帶溝が、壁の周囲に巡り、幅約0.2m、深さ約0.04mを測る。壁帶溝は、土層、平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

竈は、調査区内では検出されなかったが、ほとんどの住居跡に付属していることから、調査区

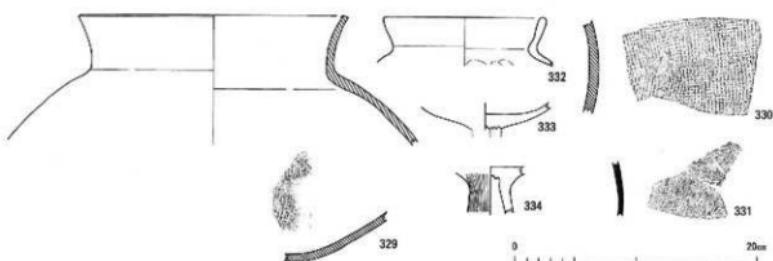
外の南辺ないしは西辺付近に接して存在していたものと推定される。

住居床面上からの遺物  
(第138図、図版41-3・4)は少量ではあるが  
(第139図)、瓦質土器2点(329, 330)、須恵器  
壺片(331)、土師器壺(332)、高坏(333, 334)  
などが、住居北半より出土している。

瓦質土器(329、図版  
54-329)は、口縁部から体部上半、底部片が出土した。口縁部は体部境から外方に開き、端部はやや角張る。体部上半は口縁部境から下方に向けて大きく開いている。



第138図 住居34平面・断面・遺物出土状況図



第139図 住居34出土遺物

底部は平底に近い。外内面ともナデによって仕上げているが、底部内面の一部に格子目タタキが認められる。330(図版56-330)は壺体部片と推定されるもので、胎土分析の結果、住居26から出土した300と同一個体の可能性を指摘されているものである。外面に格子目タタキ、内面をナデによって仕上げている。

住居の時期は、出土遺物から5世紀初頭から前半にかけてのものと推定される。

#### 6. 住居35(第141図、図版42-1, 43-3~5)

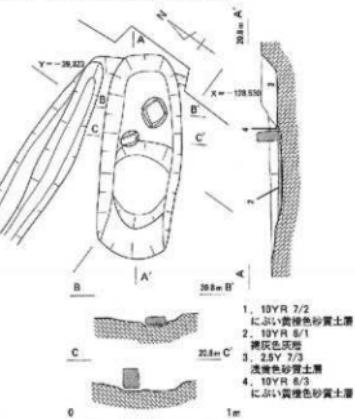
X = -128.532, Y = -39.325付近を中心とする。

焼失住居(第142図、図版43-1・2)で、床面付近のはば中央部に集中して炭化材、炭・灰屑が認められた。住居の約3分の1が南および東の調査区外にあり、平面形では、隅丸方形に近い形をなすものと推定されるが、全容は不明である。一辺4.5m、検出面からの深さ約0.1mを測る。床面積は20.3m<sup>2</sup>前後と推定される。主軸の方位はE - 0°である。

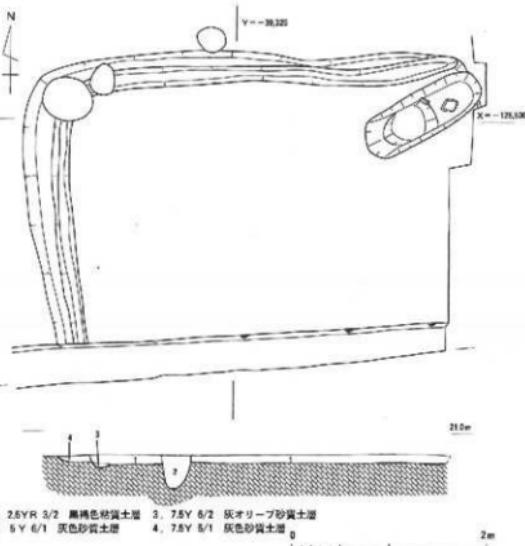
壁帶溝は、幅約0.2m、深さ約0.04mを測り、上層平面観察の結果、使用時には埋まっていたものと推定される。

竈(第140図、図版42-2・3)は、東北隅部にはば接して検出された。先端は住居壁面にはば接して存在する。平面形では長方形に近い形を呈し、床面の長さ約1.15m、最大幅約0.35m、残存高約0.1mを測る。他に比べて長いのが特徴である。竈の床面は、住居床面より約0.06m前後低い位置にあり、ほぼフラットである。

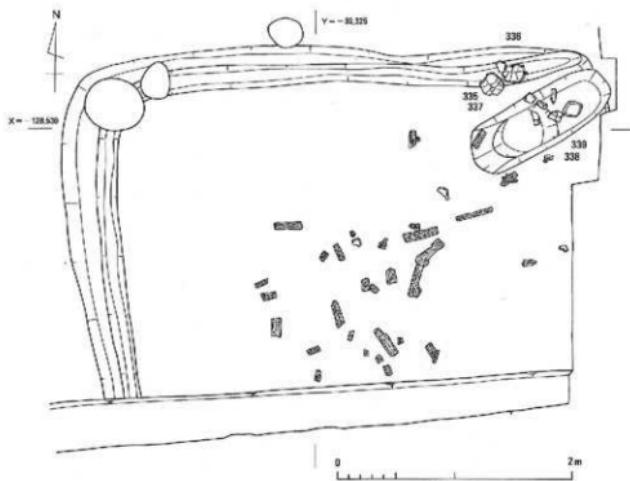
支脚は、先端から約0.35mと約0.5mの位置に2脚検出された。北側のものは長さ約0.13m、幅約0.06mと細長く、



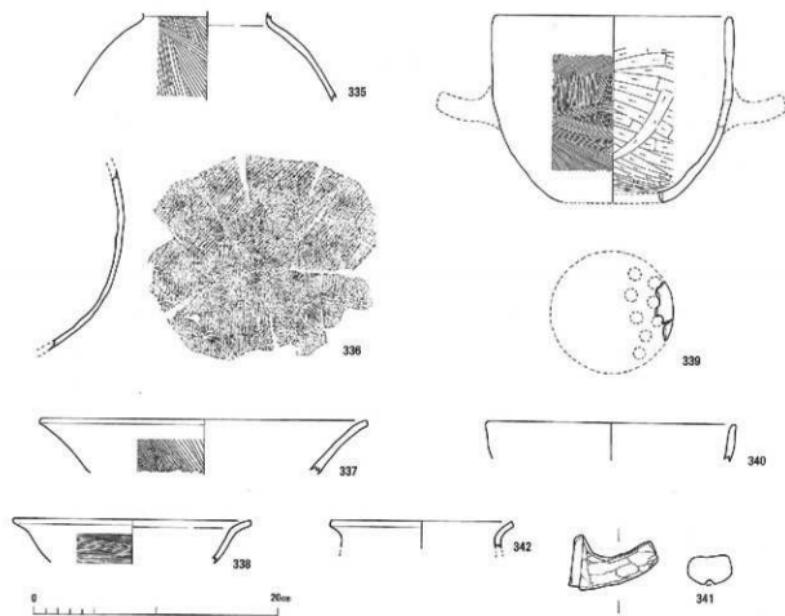
第140図 住居35竈平面・断面図



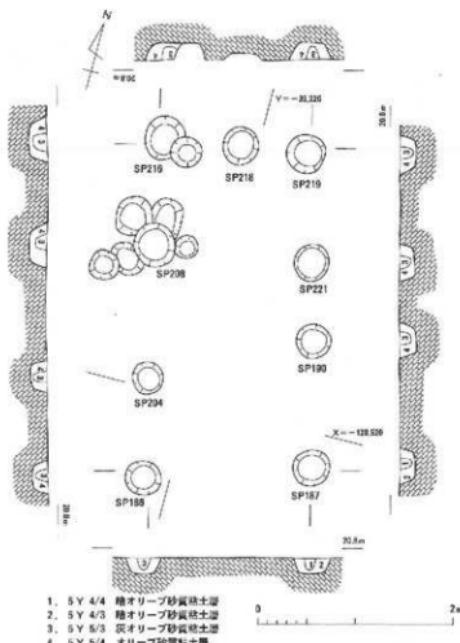
第141図 住居35平面・断面図



第142図 住居35遺物出土状況図



第143図 住居35出土遺物



第144図 建物9平面・断面図

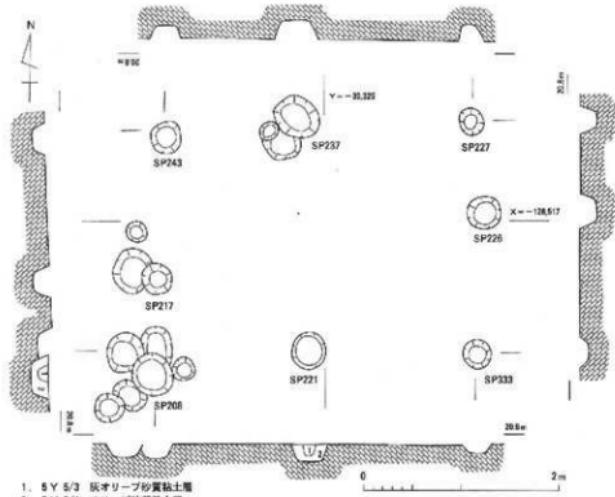
南側のものは長さ約0.17m、幅約0.1mと扁平な河原石を使用している。

出土した遺物（第143図）は、床面と検出面との差が約0.08mと浅いため、ほとんどのものが破片で出土した。出土した場所は、特に竈周辺からが多い。出土した遺物は、土師器甕（335、336）、高壙（337、338）、韓式系土器甕（339～341）、平底鉢（342）がある。特に甕把手片（341）は、他から出土したものと異なり先端部が角張っていることから古い要素をもっているものと考えている。また、須恵器が出土していないことから検出した住居の中では最も古い一群に属するものと考えている。

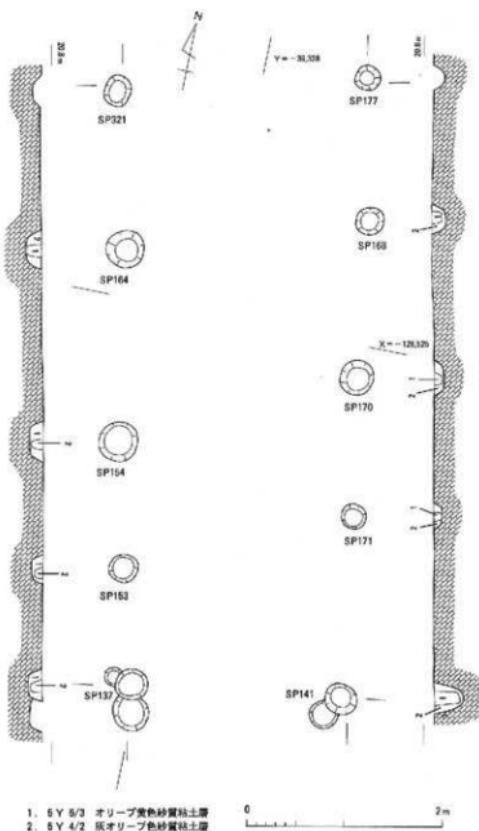
住居の時期は、5世紀初頭から前半にかけてのものと推定される。

#### 7. 建物8（第145図）

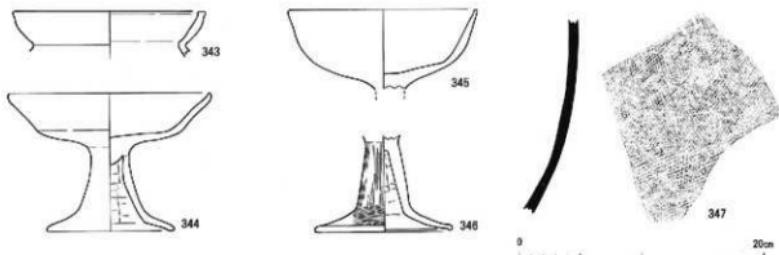
X = -128.517, Y = -39.325付近を中心



第145図 建物8平面・断面図



第146図 建物10平面・断面図



第147図 土坑13出土遺物

心とし、建物9と一部が切り合って存在するが、前後関係は不明である。

梁間1間（約2.5m）、桁行2間（約3.2m）の建物で、主軸はW-0°である。

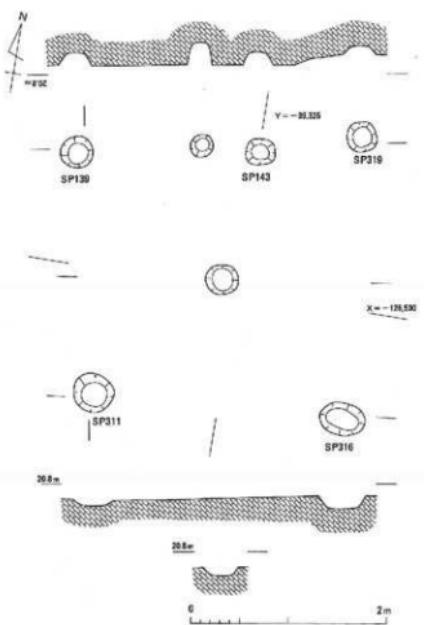
柱穴は円形に近い形を呈し、径0.25mから0.35m、深さ0.1mから0.2mを測る。柱穴埋土の土層断面観察の結果、柱痕は、径約0.15m前後を測る。

遺物は、土師器片が柱穴内から極少量出土したが、図化できるものはなかった。

建物の時期は、周辺の遺構から5世紀前半から中頃にかけてのものと推定される。

#### 8. 建物9（第144図、図版44-1～5・7）

X=-128.519, Y=-39.326付近を中心とし、ほぼ建物9と切り合って存在するが、前後関係は不明である。梁間1間（約1.7m）、桁行3間（約3.3m）の建物で、主軸はN-12°-Wで



第148図 建物11平面・断面図

ある。

柱穴は円形に近い形を呈し、径0.3mから0.38m、深さ0.16mから0.18mを測る。柱穴埋土の土層断面観察の結果、柱痕は、径約0.1m前後を測る。

遺物は、土師器片が柱穴内から極少量出土したが、図化できるものはなかった。建物の時期は、周辺の遺構から5世紀前半から中頃にかけてのものと推定される。

#### 9. 建物10(第146図、図版44-8~14)

X = -128.526, Y = -39.328付近を中心とし、ほぼ住居9と切り合って存在する。梁間1間(約2.4m)、桁行4間(約4.8m)の建物で、主軸はN-10°-Wである。

柱穴は円形に近い形を呈し、径0.25mから0.43m、深さ0.1mから0.3mを測る。柱穴埋土の土層断面観察の結果、柱痕は、径約0.12mを測る。

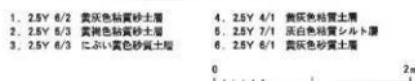
遺物は、土師器片が柱穴内から少量出土したが、図化できるものはなかった。

建物の時期は、周辺の遺構から5世紀前半から中頃にかけてのものと推定される。

#### 10. 建物11(第148図)

X = -128.530, Y = -39.325付近を中心とし、住居35と切り合って存在する。前後関係は、建物11が古い。

梁間1間(約2.7m)、桁行1間(約2.7m)を測り、建物の中央に柱



第149図 土坑13平面・断面図

穴が存在することから、総柱建物と推定され、規模から言えば、倉庫と考えられる。主軸の方位はN-9°-Wである。

柱穴は円形に近い形を呈し、径0.3mから0.4m、深さ0.15m前後を測る。

遺物は、土師器片が柱穴内から少量出土したが、図化できるものはなかった。

建物の時期は、周辺の遺構から5世紀前半から中頃にかけてのものと推定される。

#### 11. 柵列2（第150図）

X = -128.519, Y = -39.324からX = -128.526, Y = -39.330

付近にかけて、ほぼ東南方向から北西方向に伸びる5本の柱穴を確認した。対応する柱穴が存在しないため柵列と考えられる。検出長約8.6m、柱間は1.0mから2.25mを測り、柱穴は径0.3m前後、深さ0.15m前後を測る。

柱穴内から出土した遺物が少量で図化できるものではなく、時期の決め手に欠くが、住居の方向から推定すると住居26・28・30がほぼ同方向であることなどから共存していた可能性が高いと考えられる。

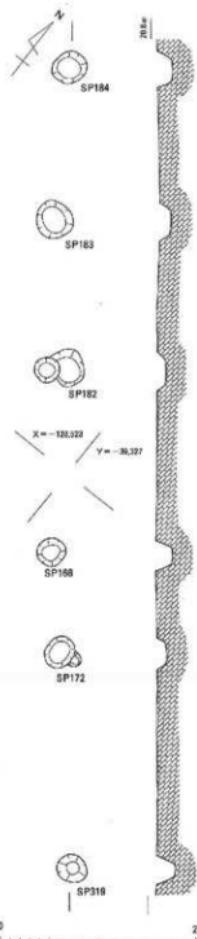
建物の時期は、周辺の遺構から5世紀前半から中頃にかけてのものと推定される。

#### 12. 土坑13（第149図、図版45-1・2）

土坑の約2分の1が西の調査区外に存在する。X = -128.528, Y = -39.332付近を中心とするものと推定され、南側の一部を住居34と切り合っている。前後関係は、住居34が古い。平面形では隅丸長方形に近い形を呈してゐるものと推定される。土坑は2段掘を行い、検出面で長辺約3.6m以上、短辺約2.3m以上、深さ0.45mを測る。下段は、平面形では梢円形に近い形を呈し、長辺約2.0m以上、短辺約1.15m、下段までの深さ0.2mを測る。

土坑埋土内から出土した遺物（第147図）で、図化した土器は、土師器甕（343）、高坏（344～346）、須恵器甕片（347）であるが、それら以外にも多量の土器片が出土した。これ以外の遺物として鉱滓（414、図版57-414）がある。

時期は、出土遺物から5世紀前半から中頃にかけてのものと推定される。



第150図 柵列2 平面・断面図

## 第9節 弥生時代の遺構

### 1. 概要

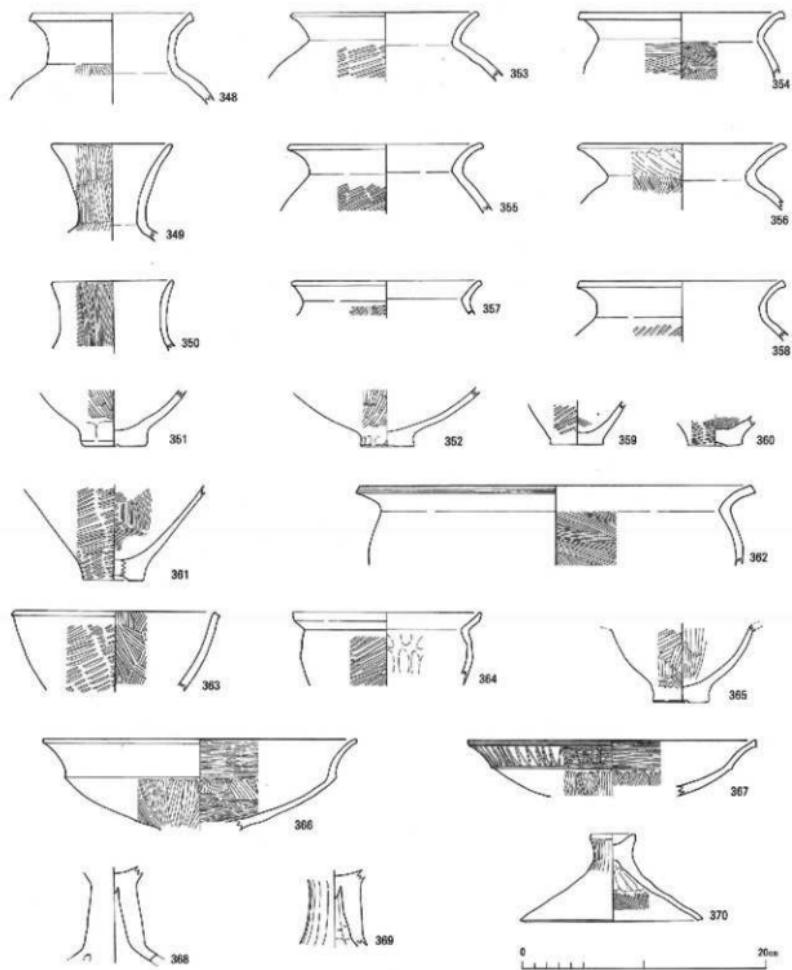
弥生時代の遺構は、土坑ないしは落ち込みと推定され、第5群に存在する住居20の下層で検出した。従来の発掘調査において、安威遺跡は、弥生時代を中心とする遺跡であると言われていたが、これ以外には弥生時代の遺構は検出されなかった。

### 2. 土坑14（第151図、図版45-8）

土坑の形状から約2分の1が東の調査区外に存在し、 $X = -128.460$ ,  $Y = -39.323$ 付近を中心とするものと推定される。調査区内の土坑の形状は隅丸三角形に近い形を呈している。検出長約8.65m, 検出幅約7.3m, 深さ約0.3mを測る。平面の形状、土坑が浅い、壁面がなだらかに下ることなどから、人工的に掘削されたものではなく、落ち込み状のものと考えられる。



第151図 土坑14遺物出土状況図



第152図 土坑14出土遺物

出土した遺物（第152図）は、図化したのは20点余りであるが、土坑内の中心部付近から折り重なるように、多量の土器が出土した。土器の器種は、壺、甕、高坏、鉢、壺蓋である。遺物の出土状況を観察した結果、配置されたものではなく、投げ込まれたものと判断した。

出土した遺物から土坑の時期は、弥生時代後期と推定される。

## 第10節 北部地区の調査

### 1. 概要 (第153図、図版46-1~3)

北部地区は、今回の調査対象地区の北端に位置し、X = -128.104付近からX = -128.181付近のY = -39.324をほぼ中心とする、長さ約78m、幅約15mの間を指す。

南側に存在する古墳時代の遺構群の北端とは約95m離れている。この間は、試掘調査の結果、遺物が少量であることと、遺構が検出されなかったため、発掘調査対象外とした。発掘調査は、A・B地区を1997年度、I地区を1998年度の2カ年にわたって実施した。

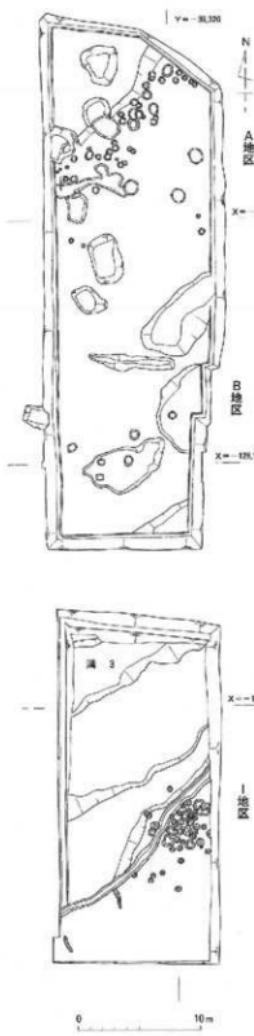
北部地区で検出した主な遺構は、溝、柱穴群、土坑などである。

### 2. 溝3

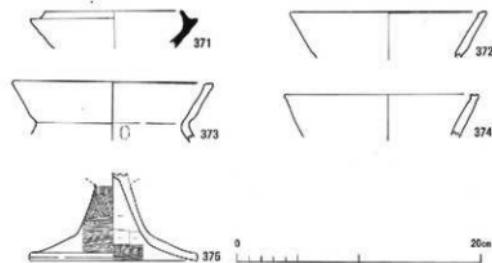
I区で検出された。地形から南西方向から北東方向に流れ、安威川に注ぐ溝と推定される。溝底まで掘削したのが一部のみであるので自然なものか、人工的なものか判断できなかった。

左岸側で、南から幅約2.3mと幅約7.0mのテラスを作りながら徐々に下り、幅約4.3m、深さ約0.6m、断面「U」字形をなす溝である。溝の埋土は、すべて砂が堆積していたことから、常時水が流れていたものと推定される。

時期は、出土遺物から6世紀後半には埋没したものと推定される。



第153図 北部地区平面図



第154図 溝3出土遺物

## 第4章 安威遺跡の諸問題

### 第1節 出土した初期須恵器について

#### 1. はじめに

今回検出した造構のほとんどが、5世紀初頭から6世紀前半に比定されるものと推定しているが、6世紀代の造構の数は少なく、造構の中に初期須恵器を含んでいるものが多い。

初期須恵器については、近年の調査において窯跡を含め多数の遺跡が発見されている。これらによって、初期段階の須恵器の形態も徐々にではあるが明らかになり、編年についても研究が進められている。これらについては、研究者の中では、いろいろと意見が交わされているが、系統立てて述べられたものは今のところない。

しかし、今回の調査において安威遺跡の集落の変遷をつきとめるためには、初期須恵器の編年を行う必要に迫られた。編年については、年代觀の相違はあるものの形態の変遷については研究者の中での共通認識に基づいて行った。

#### 2. 初期須恵器の編年

漠然とした編年觀（第156・157図）ではあるが、陶邑古窯址群の中で調査された窯の中では、形態的特徴などからTG231・232号窯が最も古いとされ、次にON231号窯、TK73号窯、TK216号窯の順と推定されている。これら陶邑古窯址群から出土した資料を中心に、和歌山県楠見遺跡から山上したものを加え、畿内における須恵器の編年を試みた。なお、楠見遺跡から出土した一括資料は、胎土分析結果から日本産とされている。しかし、坏身、坏蓋、龜の一部に関しては形態に不明な点があるので除いた。

まず、器種別構成についてであるが、TG232号窯とON231号窯との顯著な違いとしては、龜がある。TG232号窯には小形のもののみであるのに対して、ON231号窯では樽型龜が出現している。樽型龜の出現は、百濟の影響、これ以前のものは、伽耶の影響を受けているものとされている。これらの区分は、初期須恵器の型式を分けるひとつの基準とされている。

坏身は相対的な出土量ではあるが、TG232号窯、ON231号窯、TK73号窯の順に多くなる傾向を示している。反対に、高环の量は減少する傾向にあり、器台、人窓も同様なことがいえる。

日本での初期須恵器の初現であるが、朝鮮半島南部で出土する5世紀代の陶質上器には、波状文が施されているが、4世紀代のものには認められない。このことから畿内から出土する日本産とされる初期須恵器には、波状文が施されていることから、「4世紀代には、畿内では現在の所、須恵器の窯跡は存在しない。」と考えられる。これらから、編年の基準となる須恵器の初現をとりあえず、5世紀初頭としたい。これらの時期については、田辺編年のTK73型式、中村編年のI段階1型式を從米からの編年觀が、5世紀中頃に設定されている。このことから一番古い型式

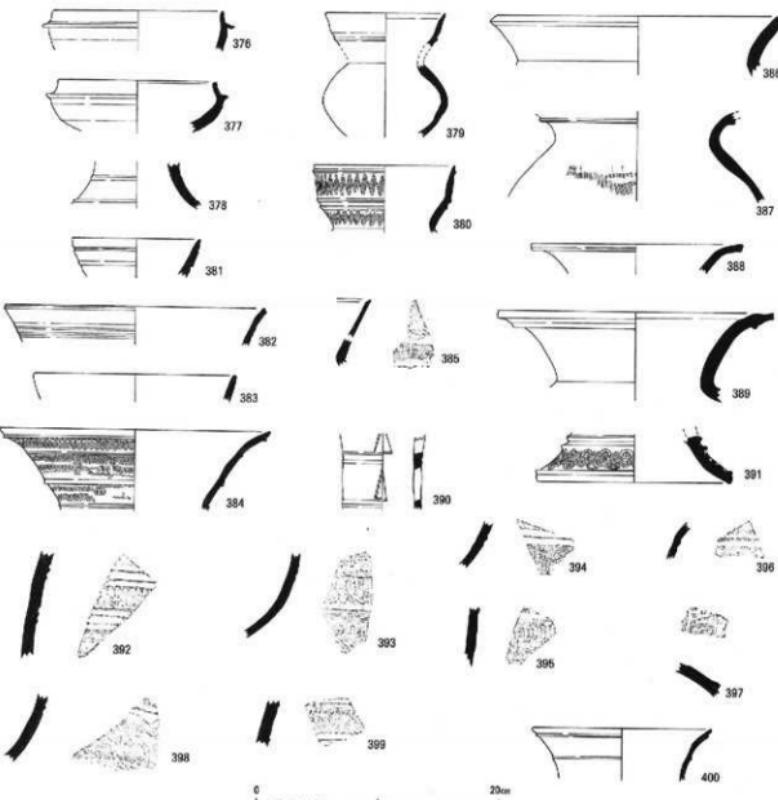
と考えられる楠見遺跡のものを5世紀初頭に置き、T K73号窯までを約50年間を単純に分け、TG232号窯を5世紀前半、ON231号窯を5世紀前半から中頃、TK73号窯を5世紀中頃とした。

今回の編年表(案)については、単純に窯跡別、遺跡の一括遺物を並べたのみであり、個々の遺物の形態の説明については、各報告書を参照されたい。

### 3. 安威遺跡出土の初期須恵器

これらの編年表から、安威遺跡で出土した初期須恵器は、楠見型に属するものは1点も出土していないものと推察される。遺構内から出土した初期須恵器の中で、最も形態の特徴が現われ時期の指標と考えているのが、住居15から出土した高環蓋(155)、住居14から出土した坏身(140)、住居16・17から出土した把手付鉢(182、183)を挙げることができる。

TG232型式の須恵器 155の高環蓋は、いわゆるTG232号窯出土のものよりも断面が厚いも



第155図 出土初期須恵器（包含層・その他）

の、稜が外方に伸び、天井部に刺突文を列点状に施すことなど極めて形態が似似し、なおかつ、胎土分析から産地が陶邑産とされている。これらからTG232型式として差し支えないものと推察される。同様な形態を示す破片として、第6群周辺から出土した397がある。

把手鉢は、3点(182・183・328)出土している。特に182・183は、口縁端部が外方に伸び、口縁部と体部の境に断面三角形に近い突帯を有することなどTG232号窯のものと酷似し、産地も陶邑産とされている。328は、口縁部が欠損しているため不明な点が多い。前者のものよりも体部に丸みをもつ。体部中央に存在する突帯が断面三角形に近いことから初期須恵器には違いないが型式的にあてはまらない。産地は不明とされている。

住居24出土初期須恵器は、基準となる資料が少ないが、甕、壺、鍋の口縁端部が角張り四面をなすのが特徴である。伽耶?座と推定されている241・242の高坏以外は、産地はすべて陶邑産とされている。これらの中で、247の壺蓋のつまみの中央部にしっかりとした乳頭状の突起がついていることにより、古い形態と考えられる。そのような突起は、同一型式の範疇と考えられるTG231号窯の高坏蓋に認められる。器種の違いはあるもののその型式の範疇と考えられる。

しかし、伽耶?座とされる241の高坏の坏部の口縁部と体部の比率が同様な形態のものより上部に存在することから若干古い可能性もある。

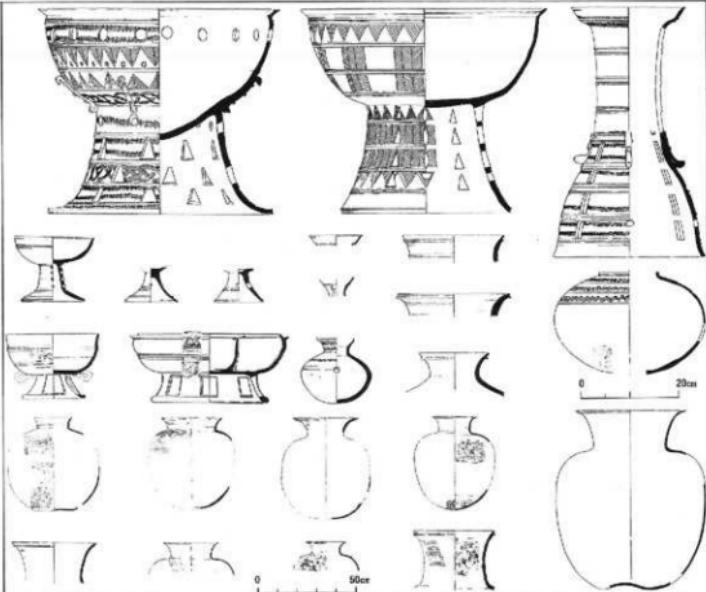
坏身については、包含層から出土しているもの(376)が相当するものと考えられる。いわゆる鉄型を示すものではあるが、口縁部は直立し短い。受部はやや下に垂れ下がっている。体部下はナデによって仕上げている。TG232号窯には認められないものであるが、特にこの時期のものは個体数が極めて少なく、個体毎に異なる形態を示しているため時期の決め手には欠く。

高坏は、有蓋高坏(377)、無蓋高坏(241、242)、脚部(378)の計4点出土している。前述した241、242の無蓋高坏2点は、胎土分析により伽耶?座とされていることからここではふれない。377の有蓋高坏は、口縁部が短くやや内傾し、端部は角張る。受部は水平に伸び断面三角形に近い。体部はやや丸みを持つ。体部の外面約2分の1から上は回転ナデ、その下はナデによって仕上げている。378の高坏脚部は、筒部のみ残存している。筒のほぼ中央部と推定される地点と、外側に大きく開く地点に緩やかな突帯を有する。形態からTG232号窯よりは若干新しい特徴を持つものではないかと推定される。

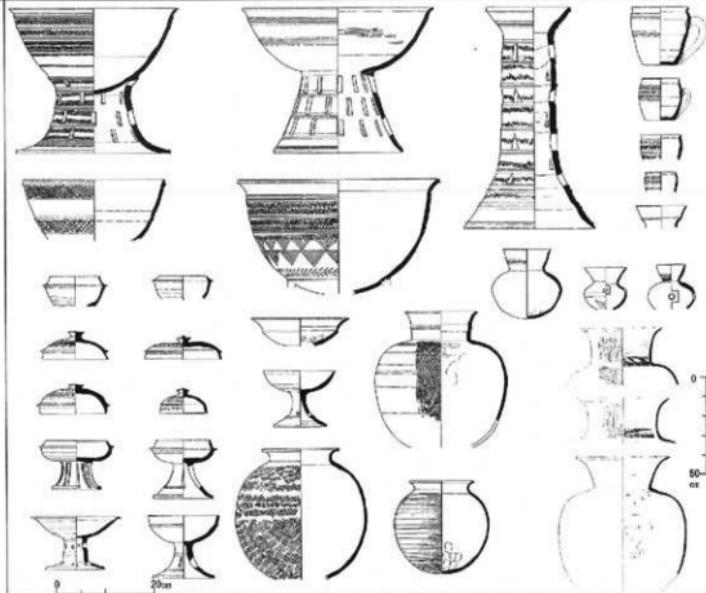
大型の甕は、口縁部が全く山上していないので形態の特徴は不明である。ただ体部外面の調整は、平行タタキ、格子目タタキのみで、繩文は全く認められない。

壺は、口縁部の形態をとってみても様々で、どの型式に収まるものか判断できないものが多い。造構内や出土地点などからこの型式の特徴を示すものを推定すると、頸部と口縁部の境に突帯を有し、直立気味に上方に伸びる2重口縁をなすもの(197、379、380)、やや開き気味に上方に伸びるもの(382、383)、大きく外方に開くもの(384)などがある。口縁部外面に波状文を施しているものも認められる。壺体部の最大径付近には、波状文、櫛文沈線を施すもの(393、398)も認められる。これらの中に、当初筒形器台の脚部と推定していたが、脚径が他と比較し

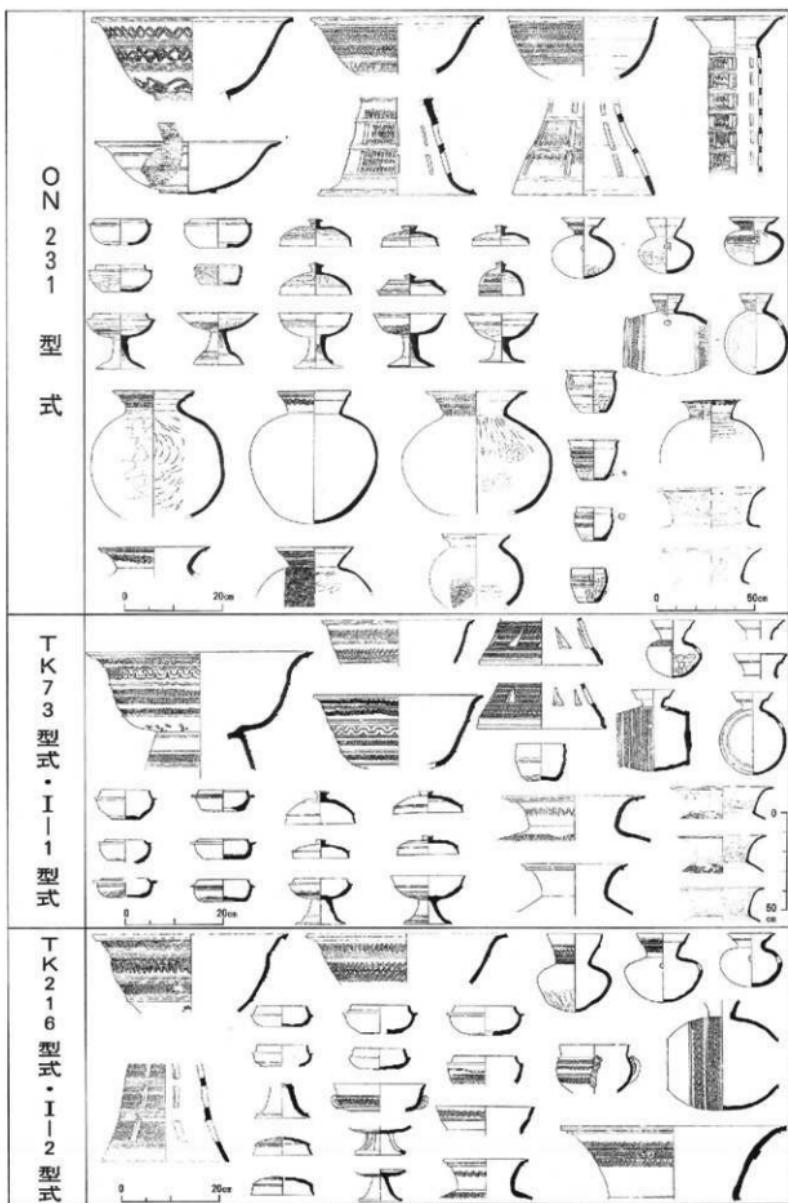
楠見型式



TG  
232  
型式



第156図 初期須恵器編年試案 1



第157図 初期須恵器編年試案 2

て短いため脚付壺の脚部（391）としたものがある。脚部外面に凹面を有し、端部は角張る。そこから外窓気味に内傾し、その上に2条の断面三角形に近い突帯を有する。その上部は欠損しているため不明であるが、長方形と推定される透かしが存在する。脚端部と突帯の間には波状文の後に竹管文を施している。突帯の形態、外面に竹管文を施していることなど、補見遺跡のものよりも新しいもののTG232号窯よりも若干古い要素を持つものではないかと推定している。

器台は、住居27から出土した308が最も古いと考えられる。口縁端部が、欠損しているものの端部下の坏部外面を、断面三角形を呈する鋭い1条ないし2条の突帯によって区切り、内部に波状文を施している。

ON231型式・TK73・I段階1型式の須恵器 住居12・14から出土したものが該当するものと推定される。住居14から出土した140の坏身は、いわゆる鍋型を呈するものである。口縁部は内傾し端部は角張り、受部は短く水平に伸びる。体部から底部にかけて丸みをもつ。内面は口縁部から体部上部にかけて回転ナデ、それ以下はロクロ停止後ナデによって仕上げている。TK73型式・I段階1型式の特徴は、底部が平らのものが多く、体部上半から底部にかけてロクロ停止後のヘラケズリによって仕上げている。これら諸特徴は、ON231型式に近いもののが存在する。

同じく住居14から出土した器台（142）は、口縁部がほぼ水平に外に伸び、端部が丸い。坏部外面は1条ないし2条の突帯によって区切り内部に波状文を施している。これら器台の特徴からいえば、TK73型式・I段階1型式には存在しないもので、ON231型式以前に多く認められるものである。

住居12から出土した103の甌の口縁部は、いわゆる2重口縁をなすものである。口縁部と頸部の境に緩やかな段を有し、外上方に伸び、端部内面に凹面をもつ。これらの諸特徴はTK73・I段階1型式に近いものと推察される。

以上のように、出土した初期須恵器を見てきたが、破片が多く全体を明らかにするものが少なかったことと、高坏、坏のように形態の変化が追え、編年の基準となる資料が少なかったため、若干の誤差が生じているものと考えている。また、TG232型式の範疇のものとした住居跡に重複関係が認められることから、その中でも時間差ないしは時期差が存在するものと考えている。また須恵器の初現を一応5世紀初頭としたが、その範疇で収まるものかどうか不明であることなど、多くの疑問点を残しており、今後の研究課題としたい。

#### 参考文献

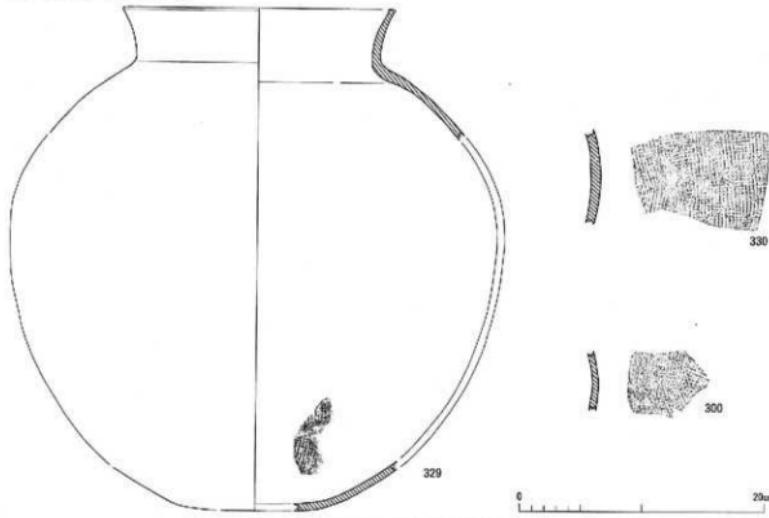
- 田辺昭一「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園研究論集第10号 平安学園考古学クラブ 1966  
中村浩他「陶邑Ⅲ 人阪府文化財調査報告第30輯 人阪府教育委員会  
関西大学「補見遺跡の調査」「和歌山市における古墳文化」関西大学文学部考古学研究 第4期 1971  
西口陽一「野々井西遺跡 ON231号窯」(財)人阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第90輯 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1994  
富加見泰彦・上井和幸「陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ」(財)人阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第75輯 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1993  
岡戸哲紀他「陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ」(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第86輯 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1995

## 第2節 出土した瓦質土器について

瓦質土器は、住居26から1点(300)、住居34から2点(329, 330)の計3点出土した。3点とも胎土分析の結果、産地が伽耶の可能を示しているものである。

329は、口縁部から体部上半と底部の一部が出土した。第139図に掲載したものは、体部上半から体部下半が欠失し、全体の形状が不明であったため、あえて復元しない図を掲載した。これとともに復元したのが第158図に示したものである。口縁復元径約21.4cmを測り、やや外方に開き端部は角張る。体部上半は、外側に大きく開く。口縁部から体部上半、底部から体部下半の形状から、最大径は体部上半に存在するものと推定され、高さ41.0cm前後を測る。底部は平底に近く径8cm前後と推定される。調整は、口縁部は回転ナデ、他はナデによって仕上げられているが、底部内面の一部に、格子目タタキが認められる。300, 330は、胎土分析により同一個体の可能性が高いものとされ、壺体部片と推定される。外面に格子目タタキ、内面はナデによって仕上げている。

朝鮮半島南部では、4世紀から5世紀にかけてのものは報告されていないことと、畿内における出土例が少ないため、瓦質土器のみでの時期の決定が困難であるが、これと共に時期が確定できる遺物として、住居34から出土した須恵器壺体部(331)小片がある。外面に格子目タタキを施し、内面はナデによって仕上げている。胎土分析の結果、陶邑産とされている。この形態から出土した瓦質土器は、初期須恵器の範疇のものと推定され、時期は5世紀初頭から前半にかけてのものと考えている。



第158図 出土瓦質土器

### 第3節 出土した瓶について

器種は、ほとんどが軟質であるが、1点のみ須恵質（第159-402図）のものが存在する。器形としては、口縁部が直行するものとやや外側に外反するものの2種がある。他に土師器の布留式壺の底部に蒸気孔と推定される、径0.8cm前後を測る多数の小円孔を開けたものがある。

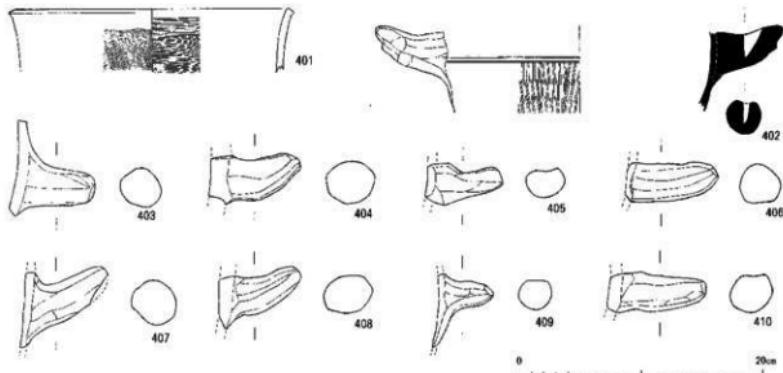
底部は丸底のもの、平底のものの2種があるが、圧倒的に丸底のものが多い。蒸気孔は、小円形多孔、円形、楕円形+円形のものが認められるが、器形によって蒸気孔が決められている訳ではない。把手は、牛角形のものと截頭牛角形のものがあり、前者が大半を占める。把手に切れ目を持つもの持たないものがあり、切れ目を持たないものがものが多い。調整は、外面に刷毛目を施し、タタキは須恵質のもののみで軟質には認められない。軟質は内面にヘラケズリを施すものが多く、一部刷毛目が認められる。須恵質はナデである。

これらの形態の諸特徴から系譜をたどれば、朝鮮半島南部、特に伽耶東部の影響を強く受けているものと推察される。しかし、口縁が直行するものは半島南部や日本で認められるが、やや外反するものは、現在の所極めて少ないと、339の形態が新羅系とされていることなどから不明確な点が認められる。<sup>(註)</sup>

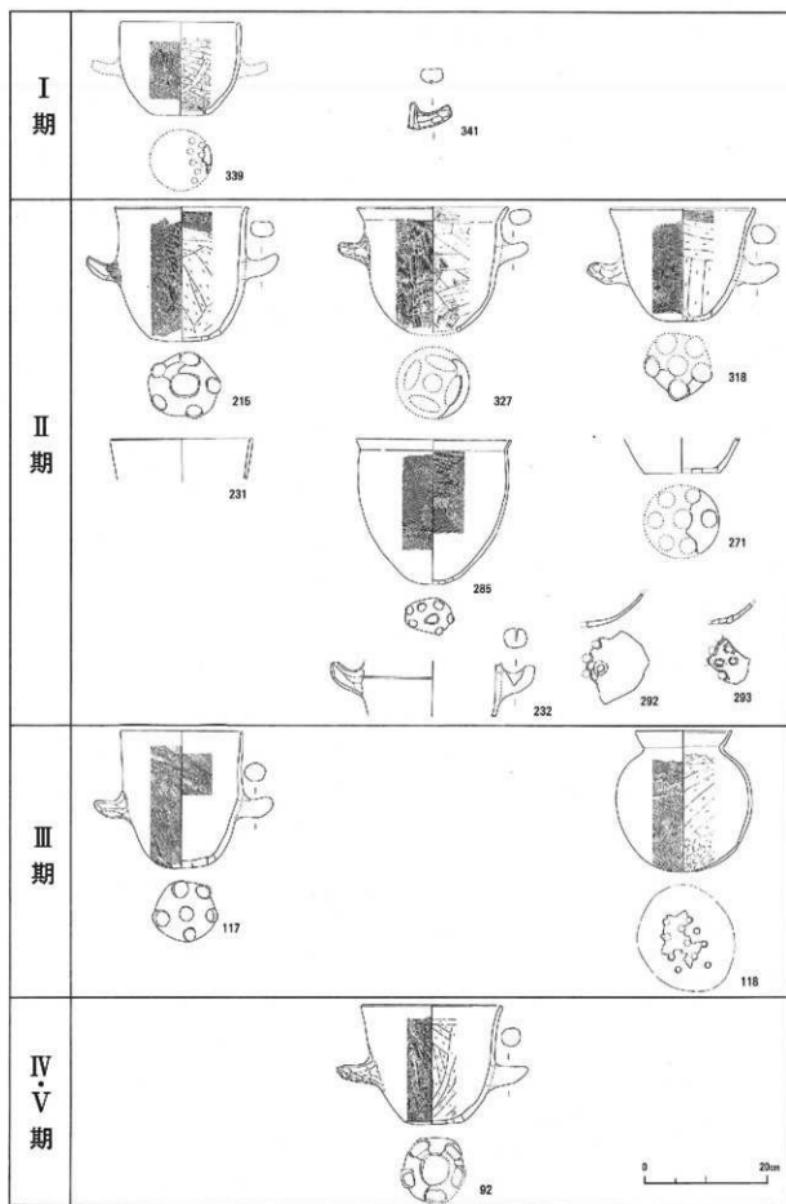
これらの瓶を、形態で分類するのではなく、住居の時期をI期からVI期までの6時期に分け、その中でどのように変化しているかを検証し、出土した他の遺物から、I期からIV・V期までの4時期に分けた（第160図）。

しかし現在の所、形態の変化がこれによって、明確に時期差が認められた状況ではなく、本遺跡で出土した瓶の特徴として表れたに過ぎなかった。このことから摂津地域から出土した瓶の形態および集落跡を含めた比較検討が必要であり、今後の研究課題としたい。

註》 沢井清治「日韓の瓶の系譜から見た渡来人」『椿崎彰一先生古希記念論文集』 1998 真陽社



第159図 出土瓶（包含層）



第160図 瓶変遷図

## 第4節 住居跡出土の管玉について

有井宏子

今回の調査では、2棟の竪穴住居跡において、管玉を検出している。第4群に属する第16号住居跡からは、緑色凝灰岩製管玉1点、滑石製管玉2点（第70図）が出土している。また、第6群に属する第27号住居跡から、緑色凝灰岩製管玉1点（第103図）が出土している。管玉以外に、装身具と考えられる遺物は出土していない。

出土した管玉は、いずれも直徑0.4～0.5cm、中央部に膨らみをもたない円筒形で、この時期に通有の形態を示している。現状では第16号住居跡から出土した滑石製管玉1点のみが破損しているが、割れ口の観察から新しい時期に損傷を受けたものとみられる。したがって住居内に残された時点では、すべて完形であったと推察される。いずれも住居跡の床面付近において検出しているが、人為的に埋納した形跡や、住居焼火に際して火を受けた痕跡はみられなかった。また、出土状態からみて、これらの管玉に共伴すると考えられる遺物は確認していない。

管玉を出土した住居跡は、近接する他の竪穴住居跡と同様、壁立ち竪穴住居である。この2棟の住居跡は、どちらも全体の半分くらいが調査区外にあって、全掘されていないので断言はできないものの、構造・規模において、他の住居跡との間に著しい階層差はないとしてよさそうである。焼失した直後に廃棄された点も共通している。また、それぞれの属する住居跡群の中でみた場合、立地上も他と隔離した位置を占めるものではない。さらに、出土遺物からみても、これらの管玉が山上したこと以外には、土器の種類・数量においても、著しい格差はみられない。つまり、本遺跡においてはごく一般的な住居跡から管玉が出土したといえる。

古墳時代の玉類は、住居跡から普遍的に出土する遺物ではない。ここでは、他の住居跡との間に階層差がみられない住居跡から管玉が出土することの意味を考察してみたい。

古墳時代中期以前には、弥生時代以来の伝統を受け継いで、翡翠や碧玉、緑色凝灰岩などの緑色を呈する石が装身具の主流であった。これらの素材でできた玉類は、主に墓への副葬品として検出され、被葬者が着装した状態で埋葬されたと推定できる位置から出土する場合が多い。しかし、これらの「装身具」は、現代的な意味での身体装飾品ではなく、限られた地域でのみ産出する素材入手できる権力を誇示する威儀具であった。それと同時に、沖ノ島などの祭祀遺跡において多量に出土することから、呪術的な意味合いを付与されていたと考えられている。

一方、装飾品への滑石の使用は、縄文時代前期初頭にまでさかのぼるもの、縄文時代から古墳時代前期前半にかけては、数甚が非常に少ない。この頃までは、玉類の素材としての滑石は、あまり顧みられなかったようである。さらに、管玉の形式は、縄文時代晚期後半には朝鮮半島から九州に伝わるが、滑石製の管玉が出現するのは、古墳時代前期末頃である。のことから、滑

石製管玉は、古墳時代前期末に日本において選択された装飾品といえよう。

滑石製品が急激に増加し始めるのは、古墳時代前期後半以降である。玉類では、勾玉や玉柄の資料がますます出現し、やや遅れて円筒形管玉が大量に生産される。

古墳出土の滑石製玉類は、被葬者の推定埋葬位置から離れた地点で一括して山上する場合が多い。したがって、被葬者が身についた状態で副葬された装身具とは、別の要素をもつと考えられている。しかも、一ヶ所から出土する滑石製玉類の数量は、碧玉やその他の素材でつくられた玉類に比べて、圧倒的に多くなる傾向がみられる。また、古墳以外では、祭祀に関連したと考えられる特殊な造形から、滑石製模造品とともに出土する滑石製玉類が多い。<sup>(1)</sup>このため、滑石製玉類は、着装よりもむしろ祭祀との関わりを重視した遺物と考えられている。

祭祀との関わりを考えるうえで重要な示唆を与えてくれる好例が、奈良県磯城郡川西町所在島の山古墳の粘土櫛内に埋納された滑石製玉類である。

島の山古墳では、粘土櫛構築の最終段階で塗布された赤色顔料面の直下および被覆粘土第1層上面、被覆粘土第2層上面に、連珠の糸を切って滑石製玉類をばらまいた状況が確認されている。ここでは、つなぎだ糸を切って玉を撒くという行為が、埋葬主体部構築の各段階において、重要な儀礼として実施されたことが指摘されている。<sup>(2)</sup>一つの主体部の埋納に際して三段階に分けて儀礼行為を行なったという事実から、被葬者個人に対する儀礼というよりむしろ、埋めるという行為に關わる儀礼とみる方が妥当と筆者は考えている。この儀礼には、地鎮的な意味合いが強いと推察できる。

さらに、島の山古墳では、滑石製玉類にまじって、緑色凝灰岩製管玉もわずかに出土していることが報告されている。この点から、緑色凝灰岩製品にも、滑石製玉類と同様の儀礼的意味合いを認めていたことがうかがえる。

ここで今回出土した緑色凝灰岩製管玉・滑石製管玉に話を戻すと、先に述べたように、すべての管玉が住居の床面付近において検出されている。また、これらの玉が特定個人に帰属するものであるなら、住居焼失に際して持ち出さなかったこと、および玉に火を受けた痕跡がないことは共に不自然である。これらの管玉は、住居焼失前に既に埋められた状態であったとみる方が、合理的に解釈できるものと思われる。

したがって、安威遺跡の住居跡山上の管玉は、住居構築という大地を改変する行為に際して執り行われた地鎮的祭祀との関連を想定することができると考えている。

#### 註)

(1) 北武藏古代文化研究会編『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』(第2回東日本埋蔵文化財研究会資料 1993)

(2) 奈良県立橿原考古学研究所編『島の山古墳調査概報』1997

## 第5節 壁穴住居跡について

### 1. 概要

検出した壁穴住居跡35棟は、出土遺物から5世紀初頭から6世紀前半の約100年間にわたって築かれている。これらの時期はおおまかにいえば、第4群から第7群までが5世紀初頭から前半(TG232型式)、第3群周辺が5世紀中頃(ON231型式～TK73型式)、第1群から第2群が5世紀後半から6世紀前半(TK43型式～TK10型式)に分けることができる。このことから北に行くに従い住居の時期が、新しくなる傾向が認められる。各時期の住居跡の数は、5世紀初頭から前半にかけてのものとした一群がもっとも多い。しかし、調査区の幅が約10m前後であるため調査区外の状況は不明であり、今回の調査で集落の状況をつかんでいるとはいえない。出土した遺物から共存していたと推定される住居16と住居17、住居26と住居34に認められるように、住居跡群の個々の方向、竈の位置が異なり、これらから集落の形態を表すことは困難である。しかし、山上遺物から同時期とした初期の住居の中には切り合っているものも認められ、初期の集落群の中にも時間および時期差が認められることから、少なくとも2時期に分けることができる可能性がある。

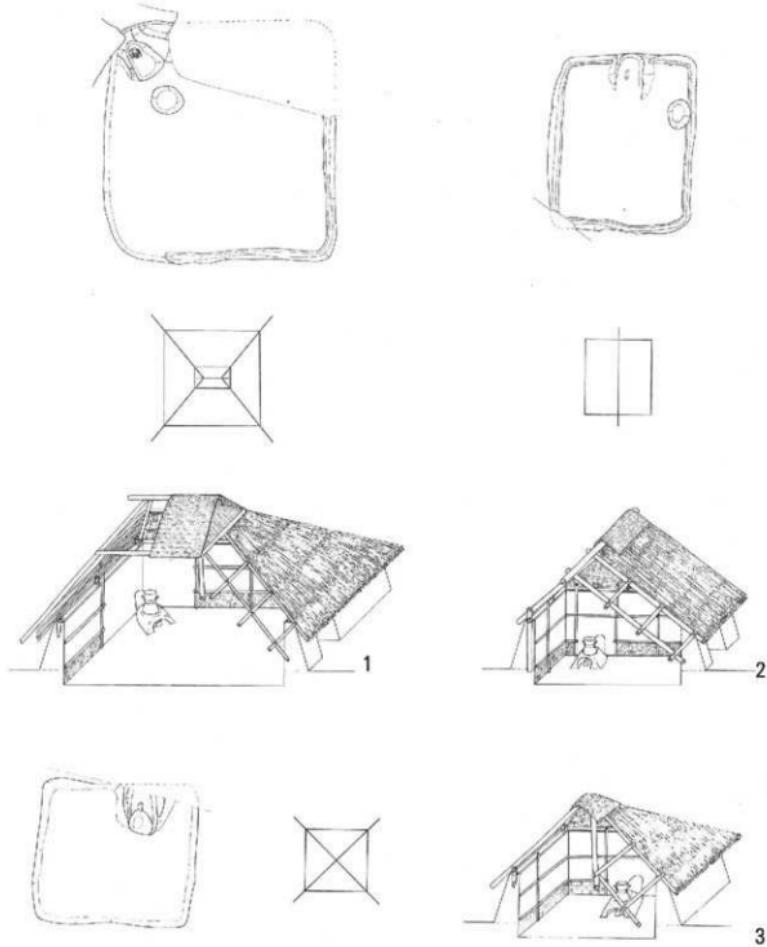
壁穴住居跡は平面形では、隅丸方形、隅丸長方形、円形をなすものの3種が認められる。時期的には、隅丸方形のものは全般的に認められるが、隅丸長方形のものは、5世紀前半までの古いものに多い傾向を示している。円形のものは、弥生時代の伝統の形態を引き続いているものと推察しているが、古い時期には存在しない。

### 2. 壁立ち住居の構造について

これら検出した壁穴住居跡35棟のすべてに主柱穴を検出しなかったことから、どのような住居の構造をしていたものかを住居跡の検出状況から検証したい。

隅丸方形ないしは隅丸長方形をなす住居の床面積は、最大で36m<sup>2</sup>、最小で9m<sup>2</sup>を測り、規模は小さいものが古い時期に多い傾向が認められる。最小のものは、検出面上面付近から屋根が伸びると、壁面付近において作業をするのは極めて困難である。また、失火と認められる焼失住居が約3分の1にも及んでいる。これらの原因は主に住居内に竈を設置したことによって、火事になったものと推察される。竈は、壁面と接しているか、近くに存在していることから、屋根に最も火を受けやすい位置にあり、従来からの壁穴住居であれば、検出面付近から屋根が伸びており、壁面付近には竈は設置できないと考えられる。特に住居のコーナーに竈が設置されているものは、屋根の構造上最も火を受けやすい位置にあると推察される。これらのことから、壁立ち住居であるほうが火事になる確立は低いと考えられる。

これら検出した住居跡の構造をある程度把握できるものに、焼失住居である住居16(第66・67図)がある。十脚断面の平面観察の結果、上層に焼上層及び炭・灰層が帯状をなして凹レンズ状に堆積し、下層の埋上ほとんど焼けていない状況を呈していた。このことから焼失の際、住居の



第161図 壁立ち住居想定図

四方に存在する土壁が住居内に倒れ込んだ状況を呈していたものと推察され、壁立ち住居であった可能性を示しているものと推察される。これらから検出面からの壁の高さは、1.5m前後、幅0.2m以上を測るものと推定される。また、住居1（第7図）では、地山を一辺約5m程度掘り込んだ後、約0.5m内側に板材を打ち込み、外側の掘方との間を土で埋め戻している状況が観察されていることもその根拠となるであろう。

### 3. 屋根の構造について（第161図）

検出した住居跡のすべてにおいて上柱穴が存在しない壁立ち住居であることから、主柱穴なしで屋根を支えるためにはどのような構造であったかを、住居の構造が最もよく確認できた住居1から検証してみると、住居1の周囲には住居を開むように杭跡と推定されるビットが多数検出されている。このことから、壁の中に杭を打ち込み、壁立ち住居の壁を補強したものと推察される。しかしその中には、壁の中だけに収まっているものばかりではなく、何本かは壁の外に出ていたものもあると考えている。そして、壁の上面の四方に横木を置き、その杭によって壁と横木を結び付けることによって、屋根を固定していたものと考えている。ほとんどの住居周辺には、住居1のような杭跡は検出しなかったことから、杭を地中に打ち込みます、壁の中で収まり、屋根を結ぶ杭のみ存在したものと考えている。

住居の平面プランが隅丸方形、隅丸長方形、円形の3種があることから屋根の構造についても様々なものと推察される。

平面形が隅丸方形をなすものは、住居の規模の違いにより2種に分けることができよう。住居4・5・6・7・11・14・25・27・31・35など床面積が20m<sup>2</sup>以上を測る規模の大きなものは、寄棟造を想定している(1)。当初入母屋造とも考えたが、屋根の規模が大きくなりこの住居には適さないと判断した。

住居1・8・9・12・15・17・18・20・22・24・28・33などの床面積が20m<sup>2</sup>未満の規模の小さいものは、寄棟造より屋根の構造が簡単である方形造りの方が、最も適しているものと考えている(3)。

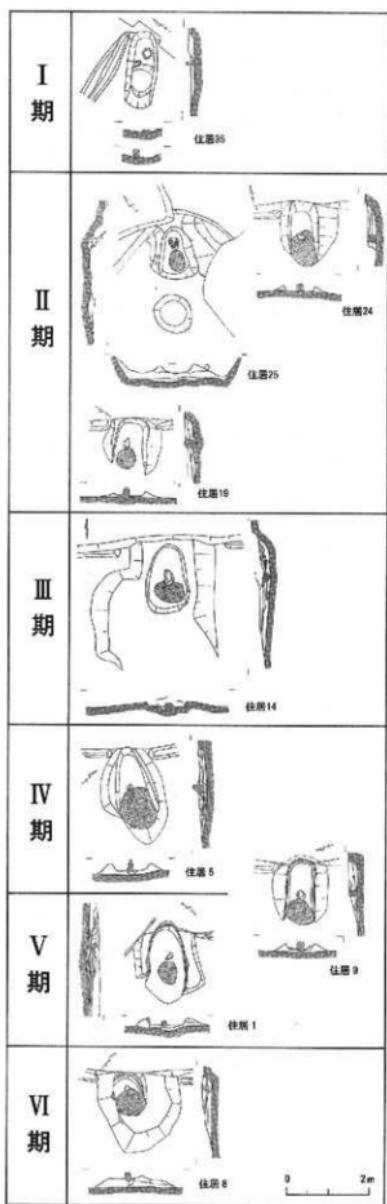
住居18・19・22・26など平面形が隅丸長方形のものは、屋根の構造上切妻造りがもっとも適当であると考えられる(2)。それらの竈設置場所は、切妻造りであると大半の住居が火事になりにくいと考えられる短辺側に設置されている。

住居4・13のように平面形が円形をなすものは、従来の家屋の伝統を引き継いでいるものと推定されるが、他の住居跡同様主柱穴が存在していないことから、壁立ち住居を想定している。屋根の構造は、寄棟造りが最も適当であると考えている。

### 4. 住居内の構造について

壁帶溝は、大部分の住居跡から検出されており、これらは土層断面観察の結果、使用時には埋まっていた状況が確認されている。その中には、住居1では板材の痕跡が確認されていること、住居14では杭跡が並んで検出されていることなどから、外側からの雨水を防ぐものとは考えにくく、壁を支えるためのなんらかの施設であったものと考えられる。

住居床面には、住居10、住居14のように杭跡が多数検出されているものもあり、床面になんらかの施設が存在していたものもある。これらは、アトランダムに検出されていることから、どのような構造であったかは不明であるが、床のようなものが存在していた可能性を考えている。



第162図 竈変遷図

## 第6節 竈について

検出および出土した竈は総数20基で、移動式のもの1基を除くとすべて住居跡内に設置された作り付けのものである。住居跡の検出状況から住居4を除く、ほとんどのものに設置されていたものと推定される。

作り付けの竈は、周辺の同色、同系統の土を使用して築造されており、4世紀代の古い型式とされ、主に北九州地方で検出される石組みのものは存在しない。

竈の設置場所は、住居の一辺のほぼ中央部に近い場所にあるものが大半であるが、コーナーにあるものも2例存在する。竈の位置は、住居の壁面に接して存在するもの、離れているもの、若干外側にあるものなど様々である。これらは、住居跡の時期から5世紀前半から6世紀前半に定できる。これらの竈を形態のみで分類するではなく、住居の時期によって、I期からVI期までの6時期に別け、竈に形態の変化が認められるかどうかを検証した(第162図)。しかしこれらが、他の遺跡で検出したものと比較検討を行っていない段階であるため、現在の所、本遺跡においてのみの変化であることを明記しておきたい。

I期は、須恵器の編年でTG232型式の中では最も古い時期に属するものであり、5世紀初頭から前半に比定される。最も古い住居跡のひとつと考えている住居35に設置されていたもので、竈は、住居のコーナー部に存在する。平面形では隅丸長方形に近く、他と比べて細長い特徴がある。焚口付近は、住居床面より若干掘り下げている、他のものは、支脚が1脚のみであるのに対して、2脚存在する。

II期は、須恵器の編年ではTG232型式の範疇のものと推定され、5世紀前半に比定される。住居25のようにコーナーに設置されているものも存在するが、ほとんどが住居跡の一辺の中央部付近にある。住居25の焚口付近の床面は、住居床面より若干掘り下げて築造され、支脚付近から急に先端に向かって上る。支脚は、河原石ではなく土器を転用している。平面形では「V」字形に近い。これら以外は、平面形で、「U」字形をなすものが多く認められる。竈床面は、住居床面に直接築かれており、フラットに近い。

III期は、須恵器の編年ではON231型式からTK73型式の範疇のものと推定され、5世紀前半から中頃に比定される。住居12・14に設置されているものが相当する。竈は、住居床面に若干の盛上を行いその上に築いている。平面形は「U」字形に近い。焚口は、盛上面より若干低い位置にあり、そこから先端に向かって徐々に上がる。

IV期は、須恵器の編年ではTK208型式の範疇のものと推定され、5世紀後半に比定される。住居5に存在する1基のみである。竈は、住居床面に竈の部分のみに若干の盛上を行い、その上に築いている。平面形は「V」字形に近い。

V期は、須恵器の編年ではMT15型式の範疇のものと推定され、6世紀初頭に比定される。住居1が相当する。住居床面上に竈の部分のみに若干の盛土を行い、その上に築いている。竈の先端が住居壁面より若干外側にある。

出土した須恵器が小片であるため時期が特定出来なかったものに住居9に存在するものがある。周辺に存在する遺構からIV期ないしはV期に属するものと推定される。平面形では平面形は「U」字形に近い。住居床面上に直接築かれており、先端は住居壁面より若干外側にある。竈床面はほぼフラットである。

VI期は、須恵器の編年ではTK10型式の範疇のものと推定され、6世紀前半に比定される。住居8に存在する1基のみである。IV期のタイプが変化したものと推定され、住居床面に高く盛上を行いその上に築いている。

これらから竈の形態は、時期により若干の変化が認められる。竈の設置場所は、ほとんどのものが住居の一辺のほぼ中央部付近に存在するが、コーナーにあるものが2基のみである。時期はI期からII期に限られ、III期以降は存在しない。

これらの形態の変化が、全般的に認められるものであるかどうか、また朝鮮半島南部から中部にかけて、作り付けの竈の源流があるとされていることから、これらとの違いなどこれから的研究課題としたい。

#### 参考文献

- 合田幸美「中国の竈集成－検出遺構を中心に－」『研究調査報告』第1集 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1997
- 合田幸美「山規期の竈－蔡子善教先生草稿記念考古学論集』 1988
- 武末純一「西新町遺跡の竈－その歴史的意義－」 喜伊鎧教授70年退任記念論叢 1996
- 合田幸美「朝鮮半島の竈」『大阪文化財センター研究助成報告書 研究紀要』 Vol.2 1995

## 第7節 安威遺跡出土硬質土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

### 1. はじめに

平安時代の須恵器に比べて、古墳時代の須恵器の生産と供給の関係は単純である。須恵器が日常用具として広く使用された平安時代では、一般に、1遺跡から数ヶ所の生産地の製品が出土するのが普通である。これに対して、古墳での祭祀道具として重要な役割を果した初期・古式須恵器が1基の古墳から出土する場合、数ヶ所の生産地の製品が混ざることはまずない。その結果、多くの場合、地元産か陶邑産かの2群間判別分析によって決着がつく。ただ、初期須恵器の中には型式的にみて伽耶地域の陶質土器に酷似したものがしばしば出土するので、陶邑産か伽耶産かの判断をするため、両群間の2群間判別分析をやっておく方が無難である。

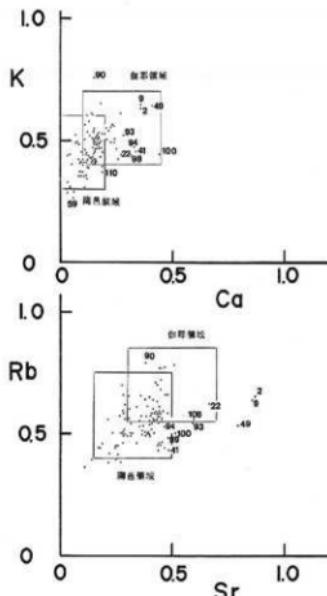
型式的に伽耶産の陶質土器に酷似した初期須恵器が出土するのには理由がある。もともと、須恵器製作技法は伽耶地域から伝えられたものであり、陶質土器そのものが日本に持ち込まれた可能性もあるが、大庭寺窯の例にみられるように、工人集団が日本へ来て須恵器を製作した可能性もあるからである。この場合には、胎土分析によって両者間の識別が行われる。

本報告では、安威遺跡から出土した初期・古式須恵器が陶邑産か、それとも、伽耶地域から搬入された陶質土器であるかを識別するため、蛍光X線分析が行われた結果について報告する。

### 2. 分析結果

分析データは表1・2にまとめられている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料JG-1による標準化値で示されている。

表1・2の分析データはK-Ca, Rb-Srの両分布図を作成することによってはじめて、データ解説への道が開かれてくる。そのため、第163図に今回分析した試料の両分布図を示す。大部分の試料は陶邑領域を中心に分布しており、伽耶領域を中心に分布していないことがわかる。このことから、大部分の試料は陶邑産であろうと推察されるのである。しかし、問題は両領域が重複する領域があり、そこに、かなりの試料が分布することである。これらの試料が陶邑群

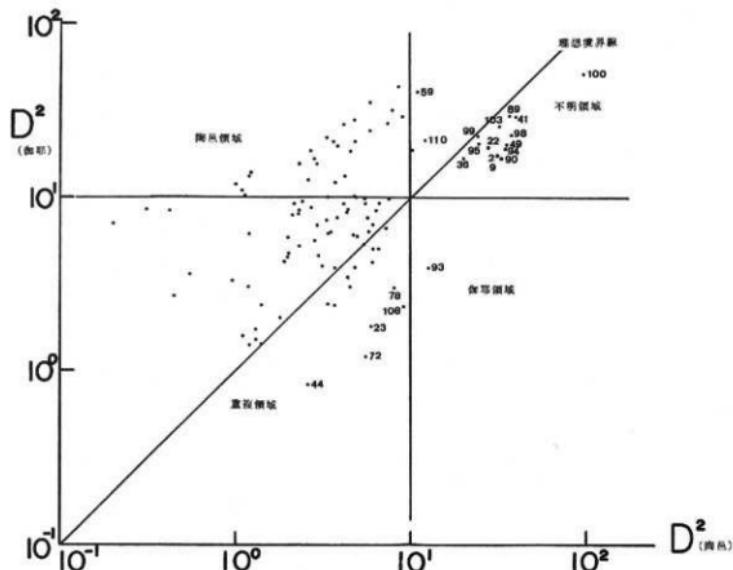


第163図 安威遺跡出土硬質土器の両分布図

に帰属するのか、伽耶群に帰属するのかは両群間の2群間判別分析をしてみなければわからない。

第164図には、両群間の2群間判別図上に今回分析した全試料をプロットした結果を示してある。両軸にとった $D^2$ (陶邑)、 $D^2$ (伽耶)はそれぞれ、両母集団の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値である。全試料の $D^2$ (陶邑)、 $D^2$ (伽耶)の計算値は表1・2の右欄に示してある。この計算値を使って両対数グラフ上に全試料をプロットすると、第164図が得られる。

さてここで、両群の領域をどのようにしてとるかである。そのために、5%の危険率をかけたホテリングの $T^2$ 検定にかけられた。この検定に合格するのは $D^2$ (陶邑)  $\leq 10$ 、 $D^2$ (伽耶)  $\leq 10$ である。これがそれぞれ、陶邑群、伽耶群に帰属するための必要条件となる。そのため、 $D^2$ (陶邑) = 10、 $D^2$ (伽耶) = 10のところに、目安として直線を引いてある。ところが、陶邑窯群の製品は $D^2$ (陶邑)  $\leq 10$ の全領域に、また、伽耶の窯群の製品は $D^2$ (伽耶)  $\leq 10$ の全領域に分布するかというとそうではなく、その一部の領域に分布するに過ぎない。この領域は両母集団の試料を実際に、判別図にプロットすることによって経験的にわかるのである。筆者はこれを十分条件と名付けている。必要条件と十分条件を併せて、特定母集団への帰属条件が決まることになり、古墳(消費地)出土須恵器の産地はこの特定母集団への帰属条件を満足するかどうかによって判断されることになる。ただ、この場合、両母集団の化学特性が類似すると、重複領域に両群の試料が混在することになり、十分条件が明確に設定できない場合がある。陶邑群と伽耶群の間の判別分析がその例である。陶邑群も伽耶群も多数の窯群から構成されている。1基の窯跡から出土する



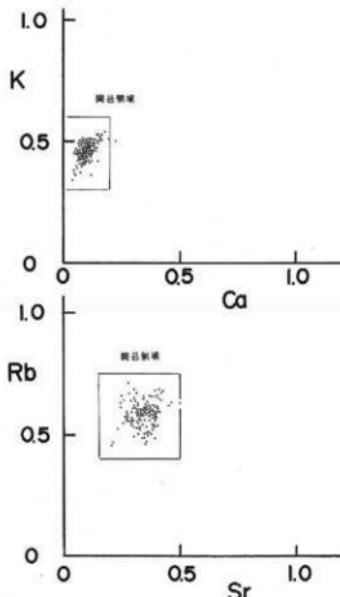
第164図 安威遺跡出土硬質土器の产地推定

試料は両分布図ではよくまとまって分布するが、窯が異なると、同一地域内にある窯の試料でも少しずれるのが普通である。これは、粘土の採取場所が窯によって異なることに原因があると考えられている。陶邑内でも粘土が出土するところはいくつもあるが、採取場所によって化学特性は若干、異なることが実験データでも示されている。したがって、1基の窯の試料ほどは集中しないが、もう少し広がった形で陶邑群としてまとまる。つまり、泉南地域の大坂層群の粘土としてまとまるのである。大阪北部の吹田丘陵に広がる窯群も同じ大阪層群の粘土を素材として須恵器を作るので、吹田領域は陶邑領域とはほぼ重なる。このことについては後述する。

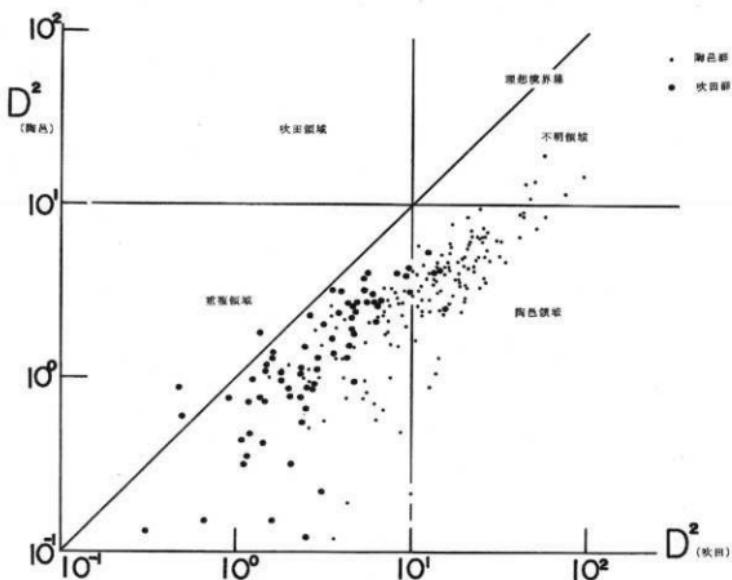
このような訳で陶邑群も伽耶群も多数の窯を包含した集団であるから、その領域も両分布図では少し広がってくる。その結果、陶邑領域と伽耶領域は重複する部分が出てくるのである。その結果、判別図で理想境界線の周辺では互いに相手群の試料と誤判別される場合も出てくるのである。ここでは一応、 $D^2$ (陶邑) と  $D^2$ (伽耶) の値を比較して小さい値(つまり、母集団の重心により近いということ)を優先して産地を推定してみた。その結果は表1・2の右欄に列挙されている。この結果は第164図にも示されている。大部分の試料が陶邑産の須恵器であることが理解出来るであろう。このことは第163図とも併せて理解されるべきである。試料番号を付けた試料はすべて、産地不明となっている。また、理想境界線上にプロットした試料は産地不定とした。第164図より産地不明となった試料は № 2, 9, 22, 36, 41, 49, 59, 89, 90, 94, 95, 98, 99, 100, 103 の15点である。これらは陶邑産の須恵器ではあり得ない。いずれも、Ca, Sr量の多い試料であり、まだ、窯跡の調査が不十分な朝鮮半島の製品である可能性は高い。第163図の両分布図での分布位置からみてもわかる。ただ、産地不明となった試料のうち、Na59だけは別である。第163図の K-Ca 分布図での分布位置からわかるように、Na59は陶質土器ではあり得ない。むしろ、陶邑産の須恵器である可能性がある。また、理想境界線付近のものも多くは陶邑産であろうと筆者は考えている。しかし、第164図に示した № 23, 44, 72, 78, 93, 108 の6点は伽耶地域産の陶質土器である可能性が高い。

次に、安威遺跡が大阪府北部の遺跡であるところから、吹田窯群の製品が含まれているかどうかの問題である。

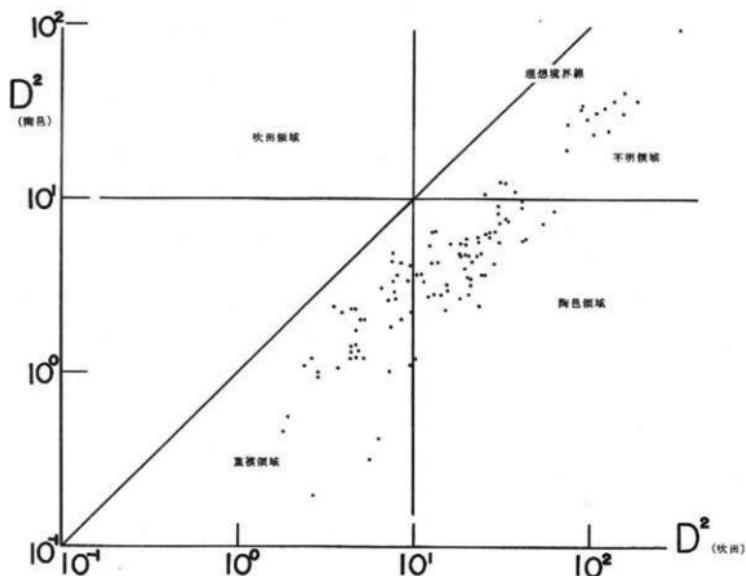
まず、吹田窯群の須恵器の両分布図を第165図に示す。比較対照のために陶邑領域を描いてある。



第165図 吹田群の須恵器の両分布図



第166図 陶邑群と吹田群の須恵器の相互識別



第167図 安政遺跡出土須恵器の産地推定

使用したのは吹田12, 20, 29, 34, 38, 39, 40, 45号窯の試料である。よくまとまって分布し、同質の粘土を素材として使用したことと明示している。しかも、陶凹領域に全試料が分布しており、同じ人阪層群系の粘土を素材として使用したことがわかる。そこで問題は陶邑群と吹田群が相互識別できるかどうかである。K, Ca, Rb, Srの4因子を使って両群を相互識別した結果は第166図に示されている。すでに、第165図で示されたように、4因子で両群の試料の化学特性は類似している。このような場合には、判別図上では理想境界線に沿って分布する。第166図の結果はまさに、そのような例の一つであることを示している。しかし、両群の試料は全く重なる訳ではなく、若干のずれが認められる。すなわち、集団全体の左下方に吹田群の試料が集中して分布し、右上方部分に陶邑群の試料が集中して分布することがわかる。もし、安威遺跡の硬質土器がいずれかの部分に偏って分布すれば、陶邑産の須恵器か、吹田窯群の須恵器かの推察は出来る。

第166図の判別図上に安威遺跡の硬質土器を分布させたのが第167図である。明らかに第166図の右上方に分布した集団と同じ位置に安威遺跡の硬質土器の人部分が分布することがわかる。したがって、今回分析した試料の大部分は陶邑産の須恵器であろうと推察される。なお、左下方に20点ばかりの試料が分布しているが、吹田産の試料であるとすれば、これらの中にある。しかし、これらもまた、陶凹産の可能性ももっているのである。さらに、不明領域に分布した試料は第164図でも不明領域に分布し、朝鮮半島産の可能性の高い硬質土器である。

これまでのところ、吹田窯産と推定される須恵器がまとまって出土した遺跡の例はない。恐らく、地方窯としての性格をもっており、それほど広く伝播していないのではなかろうか。今後、同時期の窯周辺の遺跡から山上する須恵器に注目したい。

試料番号	遺物番号	器種・器形	遺構	K	C s	F e	R b	S r	N a	D <sup>2</sup> (周辺)	D <sup>2</sup> (伽耶)	推定产地
1	347	甕(須恵)	土13	0.418	0.097	2.89	0.485	0.296	0.301	1.1	11.2	陶邑
2	208	甕(須恵)	住18	0.631	0.361	2.78	0.648	0.866	0.320	31.7	17.5	不明
3	250	甕(須恵)	住24	0.483	0.164	1.70	0.561	0.416	0.237	1.2	3.0	陶邑
4	415	甕(須恵)	住24	0.497	0.171	1.72	0.582	0.451	0.257	1.8	2.0	陶邑
5	416	甕(須恵)	住24	0.508	0.166	1.75	0.589	0.431	0.238	1.1	1.6	陶邑
6	417	甕(須恵)	住24	0.514	0.168	1.72	0.588	0.437	0.236	1.2	1.4	陶邑
7	418	甕(須恵)	住24	0.368	0.089	2.87	0.453	0.259	0.242	2.7	18.4	陶邑
8	419	甕(須恵)	住24	0.416	0.144	1.63	0.520	0.408	0.195	4.3	8.2	陶邑
9	420	甕(須恵)	住18	0.651	0.362	2.96	0.643	0.857	0.342	29.3	16.8	不明
10	421	甕(須恵)	住24	0.487	0.069	1.08	0.661	0.276	0.104	2.3	8.6	陶邑
11	422	甕(須恵)	住24	0.493	0.068	1.04	0.699	0.275	0.101	3.4	10.2	陶邑
12	423	甕(須恵)	住24	0.482	0.171	3.05	0.457	0.442	0.477	4.8	6.1	陶邑
13	424	甕(須恵)	住24	0.427	0.181	2.36	0.493	0.383	0.287	4.9	9.8	陶邑
14	425	甕(須恵)	住4	0.460	0.110	2.38	0.602	0.309	0.282	0.20	7.1	陶邑
15	426	甕(須恵)	住24	0.490	0.162	1.72	0.563	0.431	0.225	1.4	2.4	陶邑
16	427	甕(須恵)	住24	0.467	0.163	3.07	0.454	0.437	0.440	4.9	6.0	陶邑
17	428	甕(須恵)	住24	0.485	0.171	3.16	0.447	0.452	0.450	5.7	6.4	陶邑
18	429	甕(須恵)	住15	0.453	0.097	1.45	0.651	0.307	0.133	1.1	10.3	陶邑
19	251	甕(須恵)	住24	0.478	0.171	3.03	0.458	0.455	0.462	5.4	5.4	不定
20	429	坏蓋(須恵)	住9	0.309	0.036	3.00	0.394	0.140	0.068	5.8	34.9	陶邑
21	383	壺(須恵)	4群包	0.526	0.203	1.48	0.767	0.465	0.227	5.5	9.4	陶邑
22	380	壺(須恵)	7群包	0.441	0.273	1.47	0.623	0.665	0.291	27.7	19.6	不明
23	381	壺(須恵)	4群包	0.550	0.225	2.04	0.591	0.461	0.384	5.9	1.8	伽耶?
24	376	坏身(須恵)	7群包	0.350	0.089	2.56	0.451	0.255	0.086	3.6	20.8	陶邑
25	391	器台(須恵)	6群包	0.442	0.146	1.77	0.535	0.398	0.207	2.0	5.9	陶邑
26	378	高环(須恵)	5群包	0.386	0.124	2.12	0.495	0.290	0.108	2.9	15.5	陶邑
27	390	器台(須恵)	7群包	0.348	0.117	2.33	0.413	0.259	0.102	5.8	24.2	陶邑
28	386	甕(須恵)	7群包	0.600	0.121	1.22	0.770	0.449	0.248	7.5	9.8	陶邑
29	384	甕(須恵)	5群包	0.392	0.187	1.55	0.613	0.437	0.204	10.4	18.8	陶邑?
30	389	甕(須恵)	3群包	0.420	0.117	2.49	0.569	0.365	0.223	2.4	9.7	陶邑
31	387	甕(須恵)	6群包	0.413	0.114	1.64	0.504	0.382	0.200	4.4	8.6	陶邑
32	382	壺(須恵)	7群包	0.344	0.122	2.45	0.391	0.252	0.080	7.3	27.2	陶邑
33	308	器台(須恵)	住27	0.431	0.158	1.45	0.569	0.387	0.207	2.2	8.0	陶邑
34	377	有蓋高环(須恵)	6群包	0.398	0.098	1.75	0.501	0.281	0.106	1.2	13.4	陶邑
35	430	無蓋高环(須恵)	2群包	0.498	0.111	2.66	0.574	0.272	0.291	3.3	7.3	陶邑
36	142	器台(須恵)	住14	0.422	0.255	1.50	0.552	0.400	0.189	19.8	16.9	不明
37	411	甕(須恵)	3群包	0.502	0.211	2.45	0.632	0.435	0.365	4.5	3.0	伽耶?
38	379	壺(須恵)	5群包	0.543	0.152	2.04	0.711	0.432	0.272	1.9	4.2	陶邑
39	197	甕(須恵)	住17	0.467	0.160	1.47	0.564	0.458	0.259	3.7	3.9	不定
40	103	甕(須恵)	住12	0.447	0.116	1.19	0.534	0.363	0.141	1.2	6.2	陶邑
41	400	壺(須恵)	6群柱穴	0.454	0.336	2.27	0.434	0.478	0.188	40.7	29.4	不明
42	247	甕(須恵)	住24	0.455	0.154	1.81	0.539	0.412	0.223	2.0	4.7	陶邑
43	155	高环蓋(須恵)	住15	0.539	0.146	2.08	0.700	0.437	0.267	2.0	4.5	陶邑
44	242	無蓋高环(須恵)	住24	0.525	0.193	1.77	0.585	0.483	0.276	2.6	0.84	伽耶?
45	328	把手付鉢(須恵)	住33	0.452	0.151	1.58	0.561	0.419	0.203	2.3	5.2	陶邑
46	228	器台(須恵)	住21	0.518	0.069	2.09	0.619	0.291	0.160	3.4	6.2	陶邑
47	140	坏身(須恵)	住14	0.430	0.141	1.81	0.500	0.395	0.201	2.9	6.9	陶邑
48	241	無蓋高环(須恵)	住24	0.517	0.166	2.05	0.613	0.336	0.188	4.9	3.9	伽耶?
49	431	甕(須恵)	住24	0.644	0.409	1.43	0.527	0.794	0.539	35.5	19.7	不明
50	331	甕(須恵)	住34	0.451	0.188	2.23	0.438	0.440	0.205	6.4	8.4	陶邑
51	330	甕(瓦質)	住34	0.576	0.130	1.70	0.663	0.477	0.230	6.5	5.0	伽耶?
52	300	甕(瓦質)	住26	0.563	0.129	1.67	0.661	0.475	0.227	6.2	5.0	伽耶?
53	432	甕(須恵)	住14	0.406	0.095	2.33	0.578	0.281	0.112	1.2	13.5	陶邑
54	433	甕(須恵)	住14	0.403	0.101	1.66	0.507	0.367	0.192	4.9	10.0	陶邑
55	225	甕(須恵)	住19	0.370	0.093	2.86	0.462	0.279	0.253	2.8	16.8	陶邑

表1 安威遺跡出土土器の分析データ1

試料番号	地點番号	岩種・岩形	遺構	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D <sup>1</sup> (陶器)	D <sup>2</sup> (鉢)	推定産地
56	434	巖(須恵)	住24	0.512	0.169	1.70	0.581	0.439	0.262	1.3	1.5	不定
57	183	把子付鉢(須恵)	住16・17	0.512	0.141	1.59	0.638	0.380	0.216	0.45	2.7	陶邑
58	149	不明(須恵)	土坑群	0.439	0.114	2.10	0.558	0.307	0.248	0.32	8.6	陶邑
59	141	壺(須恵)	住14	0.260	0.056	2.05	0.460	0.192	0.082	11.0	40.7	不明
60	435	环身(須恵)	7群穴穴	0.385	0.126	2.61	0.592	0.278	0.103	4.5	18.4	陶邑
61	182	把手付鉢(須恵)	住16	0.478	0.155	1.72	0.576	0.411	0.208	0.95	3.3	陶邑
62	226	壺蓋(須恵)	住21	0.441	0.037	2.08	0.562	0.216	0.106	2.6	12.8	陶邑
63	436	壺(須恵)	7群穴穴	0.293	0.061	1.74	0.378	0.216	0.063	7.9	31.6	陶邑
64	181	龜(須恵)	住16	0.551	0.152	1.95	0.724	0.454	0.270	2.8	5.6	陶邑
65	289	壺(須恵)	住25	0.535	0.120	2.13	0.564	0.293	0.123	5.7	7.6	陶邑
66	244	壺(須恵)	住24	0.399	0.146	1.74	0.487	0.400	0.177	5.4	9.9	陶邑
67	245	壺(須恵)	住21	0.647	0.177	2.32	0.778	0.508	0.279	7.2	6.7	陶邑
68	207	壺(須恵)	住18	0.468	0.162	1.44	0.572	0.452	0.252	3.1	4.0	陶邑
69	227	壺(須恵)	住21	0.471	0.176	1.97	0.552	0.361	0.205	3.5	6.3	陶邑
70	437	壺(須恵)	住14	0.506	0.164	1.66	0.580	0.438	0.235	1.3	1.7	不定
71	438	壺(須恵)	住24	0.531	0.168	1.56	0.652	0.404	0.231	1.4	1.4	不定
72	439	壺合(須恵)	住24	0.548	0.206	2.13	0.638	0.416	0.280	5.5	1.2	伽耶?
73	440	龜(須恵)	2群包	0.424	0.159	1.90	0.530	0.370	0.180	2.7	8.8	陶邑
74	392	壺合?(須恵)	3群包	0.339	0.029	2.09	0.437	0.177	0.088	4.1	25.8	陶邑
75	385	壺(須恵)	2群包	0.611	0.136	1.68	0.680	0.447	0.299	6.1	4.2	伽耶?
76	399	壺合(須恵)	3群包	0.325	0.026	2.10	0.441	0.175	0.070	4.8	27.6	陶邑
77	394	壺(須恵)	4群包	0.413	0.150	2.63	0.467	0.342	0.165	3.7	12.4	陶邑
78	395	壺(須恵)	4群包	0.540	0.222	2.33	0.602	0.418	0.286	8.1	3.0	伽耶
79	412	壺合(須恵)	住24	0.305	0.106	2.07	0.384	0.266	0.085	8.9	28.9	陶邑
80	157	壺合(須恵)	住15	0.437	0.117	2.00	0.537	0.316	0.174	0.42	8.4	陶邑
81	396	壺(須恵)	4群包	0.409	0.154	2.85	0.504	0.316	0.233	4.2	13.3	陶邑
82	398	壺(須恵)	4群包	0.426	0.142	2.06	0.495	0.371	0.174	2.3	8.1	陶邑
83	393	壺(須恵)	3群包	0.612	0.112	1.83	0.769	0.455	0.277	6.1	7.0	陶邑
84	397	壺(須恵)	6群包	0.421	0.152	1.82	0.494	0.402	0.201	3.8	7.7	陶邑
85	249	壺(須恵)	住24	0.406	0.140	1.61	0.497	0.390	0.193	4.2	9.2	陶邑
86	246	鉢(須恵)	住24	0.415	0.160	1.46	0.542	0.444	0.203	6.6	9.0	陶邑
87	329	壺(丸)	住34	0.516	0.134	1.75	0.568	0.444	0.188	3.4	2.4	伽耶?
88	49	环身(須恵)	住5	0.346	0.109	2.13	0.502	0.279	0.121	4.8	21.2	陶邑
89	198	龜(十師)	住17	0.460	0.247	2.28	0.494	0.284	0.097	36.8	29.9	不明
90	161	壺(土師)	住16	0.755	0.149	1.17	0.785	0.378	0.199	33.4	16.6	不明
91	58	环身(須恵)	住6	0.408	0.087	2.17	0.499	0.281	0.149	1.0	12.2	陶邑
92	55	环蓋(須恵)	住6	0.401	0.047	2.76	0.415	0.217	0.123	3.8	19.9	陶邑
93	284	平底鉢(韓式)	住25	0.522	0.282	1.44	0.537	0.592	0.263	12.5	3.9	伽耶
94	47	平底鉢(韓式)	住4	0.468	0.326	0.965	0.527	0.470	0.157	34.9	19.6	不明
95	203	壺(韓式)	住18	0.487	0.236	2.02	0.502	0.323	0.094	25.1	20.8	不明
96	248	壺(須恵)	住24	0.488	0.175	2.19	0.500	0.423	0.226	3.0	4.6	陶邑
97	271	壺(韓式)	住24	0.423	0.080	2.00	0.444	0.252	0.112	2.3	15.6	陶邑
98	270	平底鉢(韓式)	住24	0.411	0.305	1.18	0.567	0.405	0.126	37.5	22.8	不明
99	304	鉢(土師)	住27	0.605	0.272	2.20	0.476	0.476	0.230	24.0	22.6	不明
100	339	壺(韓式)	住35	0.443	0.443	1.09	0.496	0.509	0.215	96.5	52.1	不明
101	64	环身(須恵)	住8	0.277	0.031	2.45	0.355	0.111	0.059	8.5	44.2	陶邑
102	63	环蓋(須恵)	住8	0.348	0.076	2.20	0.501	0.235	0.101	3.3	21.9	陶邑
103	192	壺(韓式)	住17	0.498	0.244	2.22	0.485	0.315	0.110	31.3	26.0	不明
104	65	龜(須恵)	住8	0.485	0.154	2.05	0.612	0.393	0.137	0.56	3.6	陶邑
105	252	壺(須恵?)	住24	0.480	0.081	1.82	0.514	0.278	0.152	2.3	9.3	陶邑
106	232	壺(韓式)	住22	0.489	0.229	1.56	0.442	0.471	0.183	9.8	10.1	不定
107	293	壺(韓式)	住25	0.497	0.148	1.74	0.549	0.459	0.246	3.7	2.4	伽耶?
108	292	壺(韓式)	住25	0.564	0.235	1.48	0.552	0.600	0.262	9.2	2.4	伽耶?
109	29	壺(須恵)	塙	0.573	0.108	2.22	0.663	0.364	0.168	4.4	3.5	伽耶?

表2 安威遺跡出土土器の分析データ2

## 第8節 安威遺跡出土鍛冶滓の金属学的調査

大澤 正巳・鈴木 瑞穂

### 概要

古墳時代中期から後期前半（5C初頭～6C前半）に属する安威遺跡出土の2点の鉄滓を調査して、次の点が明らかになった。鉄滓は、鉄器製作に際して排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。鍛冶原料鉄は、鉱石系の純度のよい半製品的な鉄素材が充当された可能性をもつ。

### 1. いきさつ

安威遺跡は、大阪府茨木市安威1丁目～南安威1丁目に所在する。発掘調査は、道路の拡幅工事（主要地方道茨木龜岡線）に伴うものである。鉄滓は、古墳時代中期から後期前半の集落の溝や上坑内から4点が出土している。このうちの2点の鉄滓の調査を通して、当時の鉄器製作の実態を把握する目的から金属学的調査を行った。

### 2. 調査方法

#### 2-1. 供試材

表3に供試材の履歴と調査項目を示す。

#### 2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察 遺物の肉眼観察による所見を記す。
- (2) 顕微鏡組織 切り出した試料（実測図に位置明記）をベーカライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150, #240, #320, #600, #1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3μmと1μmで仕上げて光学顕微鏡観察を行った。
- (3) ピッカース断面硬度 鉄滓の鉱物組成の同定を目的として、ピッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に130°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた座みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。
- (4) 化学組成分析 供試材の分析は、次の方法で実施した。

全鉄分(Total Fe), 金属鉄(Metallic Fe), 酸化第1鉄(FeO)：容量法。

炭素(C), 硫黄(S)：燃焼容量法, 燃焼赤外吸収法。

二酸化珪素(SiO<sub>2</sub>), 酸化アルミニウム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>), 酸化カルシウム(CaO), 酸化マグネシウム(MgO), 酸化カリウム(K<sub>2</sub>O), 酸化ナトリウム(Na<sub>2</sub>O), 酸化マンガン(MnO), 二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>), 酸化クロム(Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>), 五酸化磷(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>), バナジウム(V), 銅(Cu)：ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

### 3. 調査結果

#### (1) ANI-1 : 橢形鍛冶滓

- ① 肉眼観察：鍛冶炉の炉底に堆積形成された楕形鍛冶滓である。平面は不整五角形を呈して周縁部を欠損する。側面の4面が破面で、そのうちの2面は比較的新しい。表面は平坦で表層は紫紅色を発し、地は暗灰色である。裏面は1~5mm程の気泡が密に認められる。全体に表面風化が著しく、そのためか数点以上の破片が接合されている。
- ② 顕微鏡組織：図版57の①~⑤に示す。鉱物組成は、大きく成長した白色粒状結晶のヴスタイト (Wustite : FeO) と、その粒間に淡灰色盤状結晶のファイヤライト (Fayalite :  $FeO \cdot SiO_2$ ) が暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。なお、ヴスタイト粒内に微小淡茶褐色のヘーシナイト (Hercynite :  $FeO \cdot Al_2O_3$ ) が局部的に析出する。
- 以上の晶癖は、鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高溫作業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。
- ③ ピッカース断面硬度：図版57の①に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、525Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値は、450~500Hvであって、上限を若干上回っているがヴスタイトに同定される。
- ④ 化学組成分析：表4に示す。鉄分が多くて、ガラス分や脈石成分 (Ti, V, Mn, Cu) の極端に低めの成分系である。すなわち、全鉄分 (Total Fe) は67.74%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.04%，酸化第1鉄 (FeO) 64.67%，酸化第2鉄 ( $Fe_2O_3$ ) 24.29%の割合である。ガラス質成分 ( $SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$ ) は少なくて7.83%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) を0.35%含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン ( $TiO_2$ ) は0.17%，バナジウム (V) 0.006%など低値である。鉄素材の始発原料は鉱石系となろう。また、酸化マンガン (MnO) 0.02%，銅 (Cu) 0.004%と低めが特徴的である。精整された鉄素材 (棒状・板状) の加熱加工鍛治が想定される。

#### (2) ANI-2 : 橢形鍛冶滓

- ① 肉眼観察：非常に扁平な楕形鍛冶滓で平面形は不整五角形を呈している。側面の約1/3程が生きており、5面の破面をもつ。表面は長さ1cm程の木炭痕が2箇所あり、また1~4mm程の気泡がまばらに認められる。裏面は比較的滑らかで、細かい木炭痕が薄く数箇所にみられ、表面と同様に気泡が散在する。色調は灰色で表面風化が顕著である。
- ② 顕微鏡組織：図版57の⑥~⑧に示す。鉱物組成は前述鉄滓のANI-1と同系で、ヴスタイトとファイヤライトが暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。ヴスタイト粒内にはヘーシナイトの析出も認められた。鍛錬鍛冶滓に分類される。
- ③ ピッカース断面硬度：図版57の⑥に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、407Hvであった。これもヴスタイト文献硬度値の下限を若干下回るがヴスタイトに同定される。誤差範囲で粒の風化が原因するのであろう。

④ 化学組成分析：表4に示す。分析値も前述鉄滓ANI-1に準じたものである。全鉄分(Total Fe)は61.92%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.11%，酸化第1鉄(FeO)55.53%，酸化第2鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)26.66%の割合であった。ガラス質成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は13.61%で、このうちに塩基性成分(CaO+MgO)を0.58%を含む。また、二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)0.24%，バナジウム(V)0.010%も左程高くない。酸化マンガン(MnO)0.03%，銅(Cu)0.009%なども大局部的には差異のない値であった。鉱石系鉄素材の鍛錬鍛冶滓に分類される。

#### 4.まとめ

安威遺跡出土の鉄滓は、鉄器製作に際して鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓であった。鍛冶に供された鉄素材は鉱石系の純度の高いものである。恐らく鉄素材は、大陸側からの搬入品が想定される。特に安威遺跡は、住居跡内よりカマド、瓦質土器、韓式系土器など朝鮮半島南部からもたらされた特徴をもつ遺物、遺構が数多く検出されている。<sup>(3)</sup>鉄素材や鍛冶技術もこれらに密接した関係が想定される。

なお、発掘調査担当者側から鉄滓が山上した周辺には浅い土坑群が検出され、炭や灰層があつて、分布状況の規模が大県遺跡と極めて酷似しており、鍛冶炉のあった可能性が高いと指摘されている。<sup>(3)</sup>しかし、安威遺跡の土坑3~8の形状をみると、鍛冶炉よりも鍛冶用木炭を焼いた伏せ焼き炭窯の形態である。

一方、大県遺跡の過去に大型鍛冶<sup>(4)</sup>と発表された遺構も、1998.7.25の第5回鉄器文化研究会『村方鍛冶と專業集団』において花田勝広氏より鍛冶用炭窯に改めるべきだと提案があった。<sup>(5)</sup>これに対して当日、出席者から特別異議なく黙認されている。

更に今回の安威遺跡出土鉄滓の成分組成は、表6にみられるように大県遺跡出土鍛冶滓に近似するものであった。ちなみに表6は古墳時代前・中期に属する列島内出土鉄滓の代表成分値を示したものである。

列島内の鉄生産の開始問題は未だに定説はない。弥生時代説、古墳時代説に大別されているが、古墳時代も前・中・後期と分かれる。日本の鉄の歴史を考察する上で重要な問題である。今回の供試材もこれらの問題を考える要素の一つになりうるデータと思われる。

#### 註)

- (1) 日刊「業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968。グタイトは450~500 Hv。マグネタイトは500~600 Hvの硬度値がある。
- (2) 奥和之「安威遺跡発掘調査の概要」『大阪府埋蔵文化財研究会(第39回)資料』(財)大阪府文化財調査研究センター 1999.7.25
- (3) 奥和之(前掲書②)
- (4) 花田勝広「畿内鍛冶遺跡の再検討」『村方鍛冶と專業集団』第5回鉄器文化研究集会(発表要旨集)奈良大学 1998.7.25.26

件号	測定名	出土位置	遺物名	測定期代	計測値		調査項目		化 学 分 析	耐 火 強 度	カロ リ ー ジ ー ク
					大きさ( )	重量(g)	マクロ 構 成	顯微鏡 構 成			
AN1-1	安城 測2	保毛塚古墳 上室	保毛塚古墳 保毛塚古墳	5世紀前半	43×33×26	54.2	なし	C	O	O	
AN1-2	安城 土13	保毛塚古墳 中室	保毛塚古墳 保毛塚古墳	5世紀前半	50×37×17	44.5	なし	C	O	O	

表3 供試材の履歴と調査項目

件号	測定名	出土位置	遺物名	測定期代	計測値		調査項目		化 学 分 析	耐 火 強 度	カロ リ ー ジ ー ク
					大きさ( )	重量(g)	マクロ 構 成	顯微鏡 構 成			
AN1-1	安城 測2	保毛塚古墳 上室	保毛塚古墳 保毛塚古墳	5世紀前半	43×33×26	54.2	なし	C	O	O	
AN1-2	安城 土13	保毛塚古墳 中室	保毛塚古墳 保毛塚古墳	5世紀前半	50×37×17	44.5	なし	C	O	O	

表4 供試材の化学組成

件号	測定名	山十位値	遺物名	地定期代	測定結果		調査項目		ガラス 質感分	Cu	所見	
					Total FeO	FeO %	Tb	V				
AN1-1	安城 測2	板形鏡治療	5世紀前半	W-V (黒鉛W-V) W-V (黒鉛W-V)	67.74	24.29	0.35	0.17	0.006	0.02	7.83	0.004 黒口系鏡治療
AN1-2	安城 土13	板形鏡治療	5世紀前半	W-V (黒鉛W-V) W-V (黒鉛W-V)	61.92	28.66	0.58	0.24	0.010	0.03	13.61	0.009 黒口系鏡治療

W:Wastewater(FeO-SiO<sub>2</sub>) H:Heteromelite(FeO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)

表5 出土遺物の調査結果まとめ

遺跡名	所在地	推定年代	羽口出土状況	鍛冶場	鉱物組成	化 学 組 成 (%)			註	
						Total Fe	CaO	TiO <sub>2</sub>		
横牟礼川	鹿児島県指宿市	SC中葉	有	Wustitet Fayalite	56.7	3.47	0.24	0.013	0.010	1
博多 59 次	福岡県祇園	4C初	有	Wustitet Fayalite	59.5	1.09	0.13	0.040	0.003	2
松木	福岡県那珂川町	4C中頃		Wustitet Fayalite	48.8	3.95	0.11	0.004	0.001	3
松木 A	福岡県那珂川町	SC前半		Wustitet Fayalite	45.9	3.99	0.15	0.016	0.001	3
野坂一時間	福岡県宗像市	SC中葉		Wustitet Fayalite	43.7	1.85	0.30	0.010	0.005	4
勝浦井ノ口	福岡県津屋崎町	4C後半		Wustitet Fayalite	50.34~ 54.09	1.29~ 1.38	0.31~ 0.38	0.010~ 0.020	0.01	5
重留	福岡県北九州市	SC前半	専用羽口	Wustitet Fayalite	48.9~ 55.0	1.24~ 1.92	0.32~ 0.41	0.010~ 0.025	<0.01	6
萩蝶	大分県日田市	SC前半~中	高环脚 専用羽口	Wustitet Fayalite	61.28	0.14	0.06	0.012	0.002	7
唐木茶師	山口県總社市	SC前半		Wustitet Fayalite	45.10	1.99	0.36	0.012	0.012	8
小戸	兵庫県川内市	4C後半	有	Wustitet Fayalite	41.3~ 54.3	0.7~ 1.37	0.15~ 0.24	0.016~ 0.079	0.003~ 0.006	9
南流	兵庫県三原郡	SC中葉	有	Wustitet Fayalite	39.4~ 67.0	0.9~ 2.14	0.14~ 0.18	0.039~ 0.19	0.011~ 0.004	10
大県	大阪府柏原市	SC末~6C	有	Wustitet Fayalite	33~ 66	0.32~ 1.53	0.083~ 0.27	0.003~ 0.007	0.001~ 0.007	11
大和川今池	大阪府松原市	SC前半		Wustitet Fayalite	47	1.14	0.84	0.005	0.040	12
土器	大阪府堺市	SC後半		Wustitet Fayalite	27.8~ 42.7	1.9~ 3.8	0.18~ 0.37	0.012~ 0.020	0.003~ 0.012	12
陵南北	大阪府堺市	SC後半	有	Wustitet Fayalite	46~ 55	0.59~ 2.0	0.23~ 2.1	0.019~ 0.043	0.001~ 0.005	13
森	大阪府父野市	SC後半~6C前	有	Wustitet Fayalite	43.0~ 56.6	1.8~ 3.34	0.14~ 0.25	0.001~ 0.016	0.002~ 0.003	14
田尻	和歌山県	SC前半	有	Wustitet Fayalite	33.6~ 53.1	1.19~ 3.61	0.24~ 1.09	0.030~ 0.24	0.004~ 0.020	15
長瀬高浜	鳥取県羽合町	4C末~ 5C初		Wustitet Fayalite	57.7	4.44	0.14	0.008	0.001	16
吉田奥	愛知県瀬戸市	SC末	有	Wustitet Fayalite	34.0~ 59.4	1.01~ 5.66	0.12~ 0.51	0.027~ 0.20	0.002~ 0.010	17
行人塚	埼玉県大里郡江南町	5C初~中	高环脚 専用羽口	Wustitet Fayalite	44.0~ 62.0	2.8~ 5.7	0.23~ 0.51	0.006~ 0.010	0.005~ 0.013	18
御藏山中	埼玉県大宮市	SC中葉	高环脚 専用羽口	Wustitet Fayalite	34.0~ 62.0	2.7~ 8.8	0.54~ 1.29	0.008~ 0.063	0.011~ 0.026	19
御藏台	埼玉県大宮市	SC中葉	有	Wustitet Fayalite	49.0~ 57.0	3.70~ 6.0	0.40~ 0.59	0.010~ 0.026	0.013~ 0.044	19
中山	千葉県四街道市	SC前半	高环脚 専用羽口	Wustitet Fayalite	49.0~ 63.0	0.42~ 2.1	0.020~ 0.58	0.005~ 0.065	0.006~ 0.036	20
折返 A	福岡県いわき市	4C代		Wustitet Fayalite	43.23	3.05	0.40	0.010	0.01	21
西裏	福岡県小山市	SC末	高环脚 専用羽口	W+F+H	42.5~ 46.0	3.3~ 7.02	0.51~ 0.52	0.010~ 0.025	0.01	22
新郭	福岡県千種町	SC中葉	高环脚 専用羽口	W+F	38.28~ 51.33	0.73~ 1.77	0.44~ 0.68	0.010~ 0.020	0.01~ 0.020	23
永作	福岡県山市	SC後半	有	W+F	39.0~ 53.0	1.4~ 2.4	0.24~ 0.44	0.013~ 0.030	0.004~ 0.010	24
南山田	福岡県山市	SC	専用羽口	W+F	54.09~ 61.71	0.71~ 1.88	0.20~ 0.44	0.008~ 0.010	0.01	25
辰巳城	福岡県石川郡下川村	SC	有	W+F	55.7	1.32	0.35	0.007		26
南小泉	宮崎県仙台市	SC中葉		W+F	56.5	1.98	0.12	0.002	0.002	27
山上	宮崎県多賀城市	5C	高环脚 専用羽口	W+F	34.8~ 51.5	1.62~ 5.85	0.15~ 0.31	0.025~ 0.045	0.01	28
八幡脇	宮崎県土浦市	4C末~ 5C初	専用羽口	W+F	64.01	1.65	0.22	0.001	0.006	29
烟沢	千葉県木更津市	SC中葉		W+F+H	33.08	4.84	0.69	0.016	0.021	30
安威	大阪府茨木市	SC前半		W+F+H	61.9~ 67.7	0.17~ 0.30	0.17~ 0.24	0.004~ 0.009	0.006~ 0.010	31

表 6 古墳時代前・中期の鉱石系精錬・鍛錬鐵治津出士例

Hillerite(FeO·Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)

註)

1. 指南市教育委員会発掘調査、報告書準備中
2. 福岡市教育委員会発掘調査  
大澤正己「鉱山から見た古代の鉄生産」「特別考古学講座—鉄と考古学(第2回)」福岡市埋蔵文化財センター 1993.10.16
3. 大澤正己「松木遺跡出土鉄洋の金属学的調査」「松木遺跡」(那珂川町文化財調査報告書第11集) 那珂川町教育委員会 1984
4. 原俊一他「埋蔵文化財発掘調査報告書1984年度」(宗像市文化財調査報告書第9集) 宗像市教育委員会 1985  
大澤正己「春日市の鉄の歴史」「春日市史上巻」1995.3.31
5. 大澤正己「勝浦井ノロ遺跡出土鉄洋の金属学的調査」「勝浦北部丘陵遺跡群—勝浦井ノロ遺跡」(津屋崎町文化財調査報告書第13集) 津屋崎町教育委員会 1998
6. 北九州市教育文化事務部埋蔵文化財調査室、報告書準備中 1998発行予定
7. 大澤正己「秋穂遺跡鐵冶鍛造物の金属学的調査」「森鉄遺跡」(大分県日田市埋蔵文化財調査報告書第9集) 日田市教育委員会 1995
8. 大澤正己「庄木製鐵遺跡出土製鐵関連遺物の金属学的調査」「庄木製鐵遺跡」(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書86) 岡山県教育委員会 1993
9. 兵庫県川西市教育委員会、報告書準備中
10. 大澤正己「雨浦遺跡出土の複形鉄鋤と鍛造剝片の金属学的調査」「雨浦遺跡」(兵庫県文化財調査報告書第76集) 兵庫県教育委員会 1990
11. 大澤正己「大県遺跡及び周辺遺跡出土鉄洋・鉄劍の金属学的調査」「大県・大県南遺跡 下水道皆聖塙設工事に伴う」大阪府柏原市教育委員会 1984
12. 大澤正己「大阪府所在十箇遺跡27・1街区、大和川・今池遺跡・高師浜遺跡鉄洋の調査」「大和川・今池遺跡」大和川・今池遺跡調査会1981
13. 大澤正己「新日本製鐵研修センター内山上鉄鋤・鉄製品の科学的分析調査」「十箇遺跡発掘調査報告書その1」堺市教育委員会 1976
14. 交野市教育委員会「森遺跡Ⅰ・Ⅱ」1989・1990  
大澤正己「交野市森遺跡とその周辺遺跡出土鐵冶鍛造物の金属学的調査」「森遺跡」交野市教育委員会 1991
15. 和歌山県埋蔵文化財センター提供資料、未発表
16. 鳥取県教育委員会提供資料、未発表
17. 大澤正己「吉田奥遺跡出土十箇治関連遺物の金属学的調査」「上之山」一愛知県瀬戸市吉田、古川炎遺跡群、広久手古窯跡発掘調査報告書—瀬戸市教育委員会 1992
18. 大澤正己「本田・東台Ⅰ・Ⅱ 遺跡出土鉄洋の金属学的調査」「本田東台・上前原」(江南町文化財調査報告第8集) 埼玉県大里郡江南町教育委員会 1988
19. 大澤正己「御藏山中遺跡出土鐵鋤と鉄器の金属学的調査」「御藏山中遺跡」大宮市遺跡調査会 1989
20. 大澤正己「中山遺跡鍛冶工場跡出土製鐵関連遺物の金属学的調査」「中山遺跡・水流遺跡・東原遺跡」(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第11集) 印旛郡市文化財センター 1987
21. 財團法人いわき市教育文化事業団、報告書準備中
22. 大澤正己「西裏遺跡出土十箇治関連遺物の金属学的調査」「西裏遺跡」(茨城県埋蔵文化財調査報告書第180集) 茨城県教育委員会・財團法人新木俣文化振興事業団 1999
23. 財團法人桜木保文化振興事業団埋蔵文化財センター 報告書準備中
24. 福島県郡山市教育委員会調査、福島県文化センター寺尾伝氏経由入手試料、未発表
25. 大澤正己「南山田遺跡出土鍛冶関連遺物・鉄製品の金属学的調査」(猪川市埋蔵文化財発掘調査歩査会への提出資料 1998.7.10)
26. 大澤正己「長良城遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」「母糸地区遺跡発掘調査報告81」福島県教育委員会・財團法人福島県文化センター 1991.3
27. 大澤正己「南小泉遺跡祭祀土壤出土鉄洋の金属学的調査」「南小泉遺跡第16~18次発掘調査報告書2」(仙台市文化財発掘調査報告書第140集) 仙台市教育委員会 1990
28. 大澤正己「山王遺跡出土製鐵関連遺物の金属学的調査」「山王遺跡」(多賀城市文化財調査報告書第45集) 多賀城市教育委員会・建設省東北地方建設局 1997.3
29. 大澤正己「田村・沖宿地区遺跡群<八幡塚・尻替遺跡>出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」「八幡塚遺跡」(田村・沖宿地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書) 上田市教育委員会、編集:上田市追跡調査会準備中
30. 予定原稿「畠沢遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」白井久美子氏依頼
31. 大澤正己・鈴木瑞穂「安威遺跡山上鍛冶洋の金属学的調査」「安威遺跡」(大阪府埋蔵文化財調査報告1999.6) 大阪府教育委員会 2000.3

## 第9節　まとめ

### 1. 概要

今回の調査で検出した古墳時代の遺構は、第1群の北に存在する溝1から南側で検出し、そこから北側には存在しなかった。遺構の種類は、古墳時代中期から古墳時代後期前半（5世紀初頭～6世紀前半）にかけてのものと推定される竪穴住居跡35棟、掘立柱建物跡11棟、鍛冶炉と推定される上坑7基、溝2本、土坑6基などである。これらは遺構の分布状況でいくつかのグループに分けることができ、南側が古く、北側が新しい傾向を示しており、集落群の時期は、5世紀初頭から前半（TG232型式）にかけてのものが最も多い。

### 2. 検出した遺構について

竪穴住居跡は、平面形が隅丸方形に近い形をなすものがほとんどであるが、中には隅丸長方形、円形のものも認められる。隅丸方形のものは、一辺4m前後、最大でも一辺5.5mを測り、小規模なものが多い。竪穴住居跡の方向は、不定方向で一定していない。住居を建てる前に何らかの規制があったものと考えているが、出土遺物から、時期によって方向が決まっているとも現在の所考えられない。このことは後述する竈の方向からもいえる。

竪穴住居跡の床面には、4本ないしは2本の主柱穴が通常認められるが、検出した竪穴住居には全て存在しなかった。これらの中には、住居壁の外側に沿って多数の木杭が打ち込まれている例や焼失住居の埋土の堆積状況などから、壁立ちの住居を想定している。

検出した竪穴住居跡の約3分の1が火災を受けており、遺物が当時の生活していたそのままの状態で遺物が床面上から出土した。竪穴住居内から出土した土器は、平均8個体前後で、器種は壺が大半を占める。ほとんどの竪穴住居に瓶が1個体存在する。その他に高壺、小形丸底壺などもあるが、壺がほとんど出土していない、竪穴住居埋土中、遺物包含層から少量出土しているのみである。

竪穴住居跡の床面積が狭いものが多く、その中に8個体前後の土器を配置しているものもあり、その中に作り付けの竈が設置されている。これらの配置状況から判断すると、大人1人寝る場所もない居住空間で、一体何人の人がここで生活していたのか、現代人の感覚では推し量れない暮らしが、そこにあったものと思われる。

調査範囲の関係で竪穴住居跡全体を調査したものが少ないが、住居内に作り付けの竈が設置されているものが18棟あった。竪穴住居跡の検出状況から判断すると、ほとんどに竈が設置されていたものと推定される。竈が設置されている場所は、竪穴住居の一辺の中央部にあるものがほとんどであるが、コーナーにあるものも2例認められる。近畿地方ではきわめて希少な例で、朝鮮半島南部にその源流を求めることができる。竈内にはほとんどのものに支脚が残存していた。支脚は通常は1個であるが、住居35のように2個認められるものもある。また住居25のように土師器を転用しているものもある。これらは、時期差によって竈の形状、構築方法が様々な様相を呈

しているものと推定される。

掘立柱建物は、11棟検出した。柱穴内の遺物から堅穴住居と同時期と推定される。堅穴住居と掘建柱建物の数が異なることから各堅穴住居に1棟の割合ではなく、少ない。

### 3. 出土遺物について

注目される遺物としては、初期須恵器、陶質土器・瓦質土器・韓式系土器（軟質）・鉛滓などがある。

初期須恵器、陶質土器は、土師器の出土量と比較して少ない。出土地は、堅穴住居の埋土中、遺物包含層からで、堅穴住居床面上のものはない。破片で出土したものが多いため、土師器に比べてその当時はとても貴重であり、壊れるまで使用したものと思われる。これらは、形式的にみるとTG232型式前後のものが多いと推察される。これらは、胎土分析の結果、陶邑周辺で焼かれたものがほとんどであるが、中には伽耶産の可能性を示すもの、産地不明のものも含まれている。瓦質土器は、住居26（1個体）、住居34（2個体）の埋土中より出土した。器形がわかるのは、住居34から出土した甕（329）のみで、他は破片である。共伴している須恵器から形式的には新しく5世紀初頭から前半にかけてのものと考えている。韓式系上器（軟質）は、腹が目立つが、平底鉢の破片も若干ながら見受けられる。甕は、口縁が外反するものと直行するもの、把手の部分に切れ目を持たないものがほとんどであるが、持つものもある。甕の蒸気孔は、円、楕円、小円。底部は丸底と平底などさまざま形態を示している。これらは、朝鮮半島南部（伽耶東部）地方の特徴を持っていると思われる。また、平底鉢の中（284）にも胎土分析の結果、伽耶産の可能性を示す物も存在する。鉛滓は、溝、土坑内から4点出土した。いずれも楕形鍛冶滓と推定されるものである。これに伴う遺物としては、圓化はしていないがフイゴの羽口が遺物包含層から一点出土している。鉛滓が出土した周辺には人力掘削時、炭・灰層が出土地周辺で確認されていることから、小鍛冶が行われていたものと推定される。

### 4.まとめ

以上のように発掘調査を実施した箇所は、狭い範囲であるが数々の成果を収めることができた。古墳時代中期から後期（100年間）にかけての集落は、東西に広がる可能性が高く、200棟以上の堅穴住居跡が存在するものと推定される。特に5世紀初頭から前半にかけての集落跡は、畿内では少なく貴重な資料を提供した。堅穴住居跡内、周辺からは、陶質土器、瓦質土器、韓式系土器、甕、小鍛冶が行われていたと推定される遺構・遺物など朝鮮半島南部からもたらされた特徴を持つ遺構・遺物が数多く検出された。これらをもって朝鮮半島南部から渡米した人々の集落とは断定できないが、他の同時期の集落とは異なる状況を示しており、密接な関係があったものと思われる。

安威遺跡で発見された古墳時代中期から後期にかけての集落跡は、近畿地方ひいては日本の古墳時代の集落の在り方を考えるうえで極めて重要な遺跡であり、今後調査・研究に欠かせない資料となるであろう。

## SUMMARY

### INTRODUCTION

This is a report of the archaeological survey at Ai Site, which is situated in Ibaragi City, northern part of Osaka Pref. We excavated about 3,520 of the eastern end of the site.

Here we found the settlement dated to the first half of Late Kofun Period (from the beginning of the 5th century to the first half of the 6th century). We unearthed 35 flat dwellings, 11 building houses, 7 hollows which we presumed to be related with the iron-smith, 2 ditches and so on of this period.

### THE PATTERN OF THE SETTLEMENT

The settlement can be divided into several groups based on the cluster of the dwellings. According to the chronological analysis of the remains, we concluded that the first settlement had emerged from the south and spread to the north.

We found out that one-third of the dwellings had been burnt out, which fact made us find their remains in situ. Each of the dwellings had 8 or so pottery and a stayed oven with a tripod. The styles of ovens and the forms of tripods have much variety and we regard this as a result of the time-lag. We found that many of the dwellings were built during the first half of the 5th century.

### THE INFLUENCE FROM THE CONTEMPORARY KOREAN CULTURE

Most of the stayed ovens found in the flat dwellings had situated at the middle of a certain wall, which was the familiar location of a stayed oven of this period. But two of them were set at one corner of the dwelling.

More peculiar were the absence of the pillars to sustain the roof. None of the dwellings found here had a pillar, while there existed two or four of them as usual. This means that the roof of each ones was not sustained by the pillars, but by the walls made of mud.

We seldom see these characteristics mentioned above in Kinki District of Japan, while they are often seen at the site of southern Korean Peninsula.

Within the dwellings were found some pottery and the stoneware which show the feature of the contemporary of the southern Korean Peninsula.

These facts do not directly lead the conclusion the settlement was a village of people who came across the Japanese Sea, but they indicate that the inhabitants here had a close relationship with the culture of the Peninsula.

# 安威遺蹟(아이유적) 發掘調查報告書

## 大阪府教育委員會

### 韓國語要旨

安威遺蹟은 大阪府茨木市安威(오사카부 이바라키시 아이) 1丁目~南安威(미나미아이) 1丁目에 소재하는 마을유적이다. 조사지점은 安威遺蹟의 동단부 부근에 해당된다. 발굴조사는 府道茨木龜同線의 擴幅공사에 선행하여 실시된 것인데 길이 370m, 폭 10m, 면적은 3700m<sup>2</sup>가 된다.

검출된 유구로서, 고분시대 중기부터 후기 전반(5세기 초두~6세기 전반)에 걸쳐 존속된 것으로 추정되는 수혈주거지 35기, 捩立柱주거지 11기, 溝 27기, 土壙 6기, 鐵冶爐로 추정되는 특수土壤 7기 등이 포함된다.

### 遺構概要

유구분포 상황을 보면 이 마을유적은 몇 개의 그룹으로 나누어 볼 수 있다. 유구의 시기는 5세기 초두~전반(TG232호요 단계)의 것으로 추정되는것이 많은데 출토유물은 남쪽으로부터 북쪽에 향해 연대가 내려가는 경향을 보여주고 있다.

수혈주거지의 평면은 圓角方形(구석이 둥근 방향)에 가까운 것이 대부분이지만 그 이외에도 圓角長方形(구석이 둥근 장방형)이나 원형 주거지도 있다. 이 주거지들에는 邊長 4m~5.5m의 소규모적이거나 주거지가 많다. 수혈주거지의 主軸방향은 일정하지 않다. 출토유물로 보아도 시기에 따라 主軸방향이 다른 것으로 생각되지 않는다. 이것은 후술할 罐의 방향에서도 알 수 있다.

수혈주거지에는 보통 4개 내지 2개의 主柱穴이 배치되지만 이번 조사에서는 전혀 확인하지 못하였다. 그러나 수혈주거지 중에는 主柱을 따라 말뚝이 박힌 예가 있음으로 벽체가 있는 수혈주거지의 존재를 상정할 수 있다.

검출된 수혈주거지의 1/3이 화재로 인하여 당시 생활모습 그대로 유물들이 출토되었다. 수혈주거지 내에서 출토된 토기는 평균 8점 정도이며 기종은 罐이 대부분이다. 시루는 대개 1기의 수혈주거지에서 1점씩 확인되었다. 그 이외에 高杯, 소형 丸底壺 등도 있지만,壺는 극히 적으며 수혈주거지 외적이나 유물 포함총에서 소량으로 출토한 것이다.

수혈주거지 바닥의 면적은 평균 16m<sup>2</sup>이며 그 내부에서는 8점 정도의 토기, 그리고 罐도 발견되었다. 이들 배치상황으로 보아서 어른 한 사람이 가까스로 잘 수 있는 좁은 생활공간이었기 때문에 대체 몇 사람이 생활하고 있었는지 확인할 수 없다.

조사범위의 제한으로 수혈주거지를 전체적으로 조사한 예는 적지만 수혈주거지 내에 罐가 설치된 것이 18기 있다. 수혈주거지의 검출상황으로 보아 대부분의 주거지에 罐가 설치된 것으로 생각된다. 罐의 방향은 일정하지 않다. 罐가 설치된 장소는 수혈주거지의 일번의 중앙부인 것이 대부분이지만, 구석에 설치된 것도 2기가 있다. 이런 현상은 近畿지방에서는 매우 희소한 것이며, 조선반도 남부지방에서 그 源流을 찾아볼 수 있다. 罐는 대부분 支脚이 남아 있다. 支脚은 보통 하나이지만 주거지 34와 같이 두 개가 확인된 것도 있다. 주거지 25와 같이 土師器를 전용한 예도 있다. 罐의 형태, 구축방법도 각자색이며 출토유물로부터 시기차가 있는 것으로 생각할 수 있다.

撓立柱건물은 7기가 검출되었다. 柱穴내 유물로 보아 모두가 같은 시기의 것으로 추정된다. 수혈주거지와 撓立柱건물을 비교하면 수혈주거지쪽이 撓立柱건물보다 양적으로 많다.

## 出土遺物

주목되는 유물로서는 瓦質托기, 초기須惠器, 韓式系托기(연질), 鐵滓 등이 있다.

瓦質托기 瓦質托기는 주거지 26(1개체분), 주거지 34(2개체분)의 뇌적토 중에서 출토되었다. 기형이 분명한 것은 주거지 34에서 출토된 壺뿐인데 그 이외는 파편상태로 출토되었다. 끝반되는 須惠器로 보아 5세기 초두~전반의 것으로 볼 수 있다.

초기須惠器 초기須惠器는 土師器에 비해서 출토량은 많지 않다. 수혈주거지 뇌적토나 포함층에서 출토되며, 수혈주거지 바닥에서 출토된 것은 없다. 파편 상태로 출토된 것이 많은 것으로 보아 당시 須惠器는 귀중한 물품이었기 때문에 완전히 훼손될 때까지 사용하였던 것으로 추측된다.

이들은 형식으로 보아 TK73호 가마터 전후의 시기로 추정되지만, 그 가운데는 大庭寺窟(TG232·233호요) 출보 유물보다 빠른 것도 있다. 태도 분석결과를 보면 陶邑주변에서 구운 것이 대부분이지만 일부는 가야산품의 가능성도 있으며, 산지가 분명하지 않는 것도 있다.

韓式系托기(연질) 시루가 주목되는데 平底鉢, 長胴甕 등의 파편도 약간 찾아볼 수 있다. 시루는 구연부가 외반하는 것과 직행하는 것, 손잡이에는 刻目이 있는 것도 더러 있지만, 刻目이 없는 것이 암도적으로 많다. 시루의 바닥은 丸底와 平底가 있고, 통기공은 圓形, 橢圓形이 있으며 그 형태는 다양하다. 이것들은 조선반도 남부지방(가야)의 특색이 갖추어 있는 것으로 생각된다. 분석결과, 平底鉢(284) 중에는 가야산의 가능성을 보여주는 것도 있다.

鐵滓 漆, 土礪내에서 4점 출토되었다. 모두가 楔形 鐵治滓로 추정된다. 공반 유물로서는 풀무의 끝부분이 유물 포함층에서 1점 출토되었다. 광재 검출지점 주변에서는 숫, 채가 확인되어 鐵治의 존재를 示唆한다.

## 맺음말

이번 발굴조사의 범위는 작았지만 많은 성과를 얻을 수가 있었다. 고분시대 중기부터 후기의 약 150년간 이 마을은 동서방향으로 전개하였을 가능성이 높은데 200기 이상의 수혈주거지가 있었음으로 추측된다.

수혈주거지 내부와 그 주변에서 瓶, 와질토기, 韓式系토기 등 조선반도 남부지방의 특색을 보여주는 유구와 유물들이 많이 발견되었다. 비록 조선반도 남부지방에서 견너온 사람들의 마을유적으로 단정하기는 어렵지만, 동시기의 기타 마을유적과는 다른 양상을 보여주고 있으며 밀접한 관계가 있었던 것으로 생각된다.

安威遺蹟에서 발견된 고분시대 중기부터 후기에 걸친 마을유적은 近畿지방뿐만 아니라 일본 고분시대 마을형태를 고찰하는데 극히 중요한 유적이며, 앞으로 고분시대 유적의 조사 연구에 있어서 불가결한 자료가 될 것이다.

## 出土遺物計測値表

### 凡 例

番号 …… 挿図、図版の遺物番号と一致する。

色調 …… 小山正忠・竹原秀雄「新版標準土色帳」日本色彩研究所 1992  
により、色名については JIS notation で表した。

土師器、韓式系土器については外面、須恵器については内面の  
色調を基本とした。

胎上 …… 密、やや密、やや粗、粗の順で表した。

焼成 …… 堅緻、良好、やや不良、不良の順で表した。

遺物番号	遺構	種類	器種	法量cm( )は復元値			色調	胎土	焼成	残存	備考
				口径	器高	底・脚径					
1	住居1	須恵器	壺蓋	(34.0)	残4.0		N7/0	密	良好	5%	
2	(住居1)	須恵器	壺蓋	(12.8)	残3.5		N8/0	密	良好	10%	
3	(住居1)	須恵器	壺身	13.0	6.1		N7/0	密	良好	完形	
4	住居1	須恵器	壺身	(13.0)	残5.4		N7/0	密	良好	40%	
5	住居2	土師器	壺	(24.2)	残6.9		SYR6/6	密	良好	口縁部10%	
6	住居2	須恵器	壺蓋	11.7	3.8		N7/0	密	良好	90%	
7	土坑1	上部器	高环	(22.3)	(17.7)	(15.8)	SYR7/6	やや粗	良好	40%	
8	土坑1	土師器	高环	(14.3)	13.6	(11.6)	2SYR8/3	やや粗	良好	60%	
9	上坑1	土師器	高环	(24.0)	残7.4		7.5YR6/6	やや密	良好	環部25%	
10	土坑1	土師器	高环	(21.1)	残7.1		7.5YR6/8	やや粗	良好	環部30%	
11	土坑1	土師器	高环	(21.5)	残6.8		SYR7/6	やや粗	良好	環部60%	
12	上坑1	土師器	高环	(20.8)	残7.8		10YR6/6	やや粗	良好	環部60%	
13	土坑1	土師器	高环	(19.6)	残4.2		7.5YR5/3	やや粗	良好	環部10%	
14	上坑1	土師器	高环		残4.2	(11.1)	7.5YR7/3	やや密	良好	環部60%	
15	土坑1	土師器	高环		残7.1	(11.4)	7.5YR7/4	やや粗	良好	環部40%	
16	土坑1	土師器	高环		残7.0	(9.4)	7.5YR8/3	やや密	良好	環部60%	
17	土坑1	土師器	高环		残3.6	(11.8)	7.5YR5/3	やや密	良好	環部35%	
18	土坑1	土師器	壺	(17.6)	残5.6		7.5YR7/4	やや密	不良	口縁部10%	
19	上坑1	土師器	壺	(19.0)	残7.7		10YR6/3	やや密	良好	口縁部10%	
20	土坑1	土師器	壺	10.3	6.6		7.5YR7/6	やや密	やや不良	光形	
21	上坑1	土師器	壺	(11.8)	5.3		7.5YR7/4	やや密	良好	40%	
22	土坑1	須恵器	壺蓋	(14.2)	残4.0		7.5YR7/4	やや密	不良	10%	
23	場	須恵器	壺蓋	(13.5)	4.9		N7/0	やや密	良好	50%	
24	場	須恵器	壺蓋	(11.0)	残4.5		N8/0	やや粗	良好	30%	
25	場	須恵器	壺蓋	(12.4)	残4.8		SYR5/1	やや密	良好	40%	
26	場	須恵器	壺身	(9.6)	残4.8		N7/0	密	良好	15%	
27	場	須恵器	壺身	(10.6)	残4.8		NR/0	やや粗	良好	25%	
28	場	須恵器	壺身	10.3	4.7		SP7/1	やや粗	良好	80% 自然釉	
29	場	須恵器	壺	(19.4)	残6.6		SP7/1	密	良好	口縁部15% 鹿形?	
30	場	須恵器	壺	(40.2)	残15.0		K8/0	密	良好	口縁部40%	
31	場	須恵器	壺	(18.6)	残9.1		N7/0	密	良好	口縁部10%	
32	場	須恵器	壺	(22.5)	残4.2		N7/0	密	良好	口縁部10%	
33	場	須恵器	壺		残6.2		N8/0	密	良好	体部30% 円孔欠損	
34	場	須恵器	壺	(11.8)	残12.3		N8/0	密	良好	10%	
35	場	須恵器	壺身		残17.6		SP7/1	やや粗	堅城	30% 自然釉	
36	場	須恵器	壺台	(30.6)	(28.2)	(24.6)	10YR5/1	密	堅城	壺部20% 3段に7方向の長方形透かし	
37	場	上部器	手づくね土器	4.8	残3.2		10YR8/2	やや粗	良好	80%	
38	場	輪式系土器	瓶				10YR8/3	やや密	良好	把手のみ	
39	場	輪式系上器	瓶				10YR8/3	やや密	良好	把手のみ	
40	場	輪式系土器	瓶				10YH7/2	やや粗	良好	把手のみ	
41	土坑1	輪式系土器	瓶				SYR7/6	やや粗	良好	把手のみ	
42	土坑1	輪式系上器	瓶				SYR7/8	やや粗	良好	把手のみ	
43	上坑1	輪式系土器	瓶				7.5YR7/4	やや粗	良好	把手のみ	
44	土坑1	上製品	彷彿車				SYR5/8	やや粗	良好	上部欠損	

表7 遺物計測値表 1

遺物番号	遺構種類	器種	法面( )は復元値				色	調査者	差減	残存	備考
			口径	高さ	底・脚径	その他の寸法					
45	上坑1	土製品	纺錘車	(11.0)	残2.7	5.8	7.5YR6/6	やや粗	良好	光形	
46	住居4	須恵器	环身	(15.8)	残3.7		10YR6/1	南	堅織	口縁部10%	
47	住居4	韓式系土器	平底鉢	(15.8)	残8.1		7.5YR5/6	やや粗	やや不均	口縁部10%	底地不明
48	住居4	土器類	高环				5YR6/6	粗	良好	開口部80%	
49	住居5	須恵器	环身	(9.8)	残3.6		N6/0	やや粗	良好	5%	褐色
50	住居5	須恵器	越	9.5	9.4		N6/0	やや密	良好	85%	凹乳
51	住居5	須恵器	高环	(15.8)	10.5	9.8	2.5YR5/3	密	良好	60%	
52	住居5	土器類	高环		残3.4	(10.0)	2.5YR5/6	やや粗	良好	被覆15%	
53	住居5(塗)	土器類	製塙土器	(5.8)	残3.2		10YR7/1	密	良好	口縁部30%	
54	住居5(塗)	須恵器	环盖	14.1	5.2		10YR7/1	粗	やや不良	85%	
55	住居6	須恵器	环蓋		残3.2	12.0	10YR5/1	密	堅織	40%	褐色
56	住居6	須恵器	环蓋	(14.4)	残3.1		2.5GΥ7/1	やや粗	良好	5%	
57	住居6	須恵器	环身	(13.4)	5.2		N6/0	南	良好	30%	
58	住居6	須恵器	环身	(12.2)	4.5		N7/0	やや密	やや不均	20%	褐色
59	住居6	須恵器	环身	(12.6)	5.0		2.5YR6/1	粗	良好	60%	自然釉
60	住居6	須恵器	甕	(19.2)	残4.2		SYR6/1	やや密	やや不良	口縁部20%	
61	住居6	土師器	手づくね土器	5.2	2.7		SYR5/6	粗	不良	70%	
62	住居6(塗)	石器	砾石			長51.7 幅2.2	SYT7/1				
63	住居6(塗)	須恵器	环蓋		残3.4		N6/0	密	良好	40%	褐色
64	住居6(塗)	須恵器	环身	(12.5)	残4.9		5DB6/1	南	堅織	30%	褐色
65	住居8	須恵器	越	(11.0)	残3.4		5H6/1	密	堅織	口縁部10%	褐色
66	住居8	土師器	甕	(26.0)	残2.4		SYR6/6	密	良好	口縁部35%	
67	住居8	土師器	甕	(17.0)	残2.2		SYR6/6	密	良好	口縁部10%	
68	住居8(塗)	土師器	甕	(14.5)	14.2		2.5YR6/6	密	良好	50%	
69	住居8(塗)	土師器	甕			幅7.0	10YR8/2	密	良好	底の一一部	移刻式
70	住居9(塗)	土師器	甕	(17.0)	残17.5		SYR6/4	密	良好	上半部50%	
71	住居9	土師器	手づくね土器	(6.0)	4.7		SYR7/4	密	やや不良	30%	
72	住居9	土師器	手づくね上器	(4.4)	5.9		5YR6/4	南	やや不良	50%	
73	住居9	土師器	手づくね土器	(6.5)	残5.7		7.5YR7/4	密	やや不均	50%	
74	住居9	土師器	手づくね土器	(5.0)	4.9		10YR7/3	南	やや不良	ほぼ完形	
75	住居9	土師器	手づくね土器	(5.8)	残5.7		SYR6/4	密	良好	ほぼ完形	
76	住居9	土師器	手づくね土器	(5.3)	残5.1		10YR7/2	密	やや不良	25%	
77	住居9	土師器	手づくね土器	(5.0)	4.9		SYR6/4	密	良好	ほぼ完形	
78	住居9	土師器	手づくね土器	(5.0)	4.6		SYR6/6	密	やや不良	全体部5%	
79	住居9	土師器	手づくね上器	(4.8)	残4.4		SYR6/4	南	やや不良	40%	
80	住居9	土師器	手づくね土器	(5.3)	4.9		SYR6/4	密	良好	ほぼ完形	
81	住居9	土師器	手づくね上器	(5.0)	残4.7		SYR6/4	南	良好	15%	
82	住居9	土師器	手づくね土器	(5.5)	残3.7		7.5YR6/2	密	やや不良	口縁部80%	
83	住居9	土師器	手づくね土器	(6.0)	残2.5		7.5YR5/2	南	不均	口縁部15%	
84	住居9	土師器	手づくね土器	(4.6)	残2.1		5YR6/6	密	良好	口縁部25%	
85	住居9	土師器	手づくね土器		残3.3		7.5YR6/3	密	良好	全体部30%	
86	住居9	土師器	手づくね土器	4.4	残2.8		10YR6/3	密	良好	80%	
87	住居9(塗)	土師器	甕	16.8	(31.3)		SYR7/4	密	良好	50%	
88	住居9(塗)	土師器	甕	(16.8)	22.7		10YR7/2	密	良好	30%	

表8 遺物計測値表 2

遺物番号	遺構	種類	器種	法量cm( )は復元値			色調	釉土	焼成	残存	備考
				口径	器高	底・脚等					
89	(床面)	土師器	甕	(16.2)	残22.5		2.5YR5/6	密	良好	60%	
90	(床面)	土師器	甕	15.4	26.0		5YR6/6	密	良好	70%	
91	(床面)	土師器	甕	(13.0)	16.7		5YR6/6	密	良好	85%	
92	(床面)	輪式系土器	甕	22.2	19.5		2.5YR5/6	密	良好	90%	底部に穿孔 二列の把手
93	(床面)	土師器	甕		残6.7		5YR5/6	密	やや不良	底部のみ	
94	(床面)	土師器	高环		残2.2	(7.8)	7.5YR6/6	密	不良	脚部60%	
95	(床面)	土師器	高环		残5.7	(8.1)	2.5YR5/6	密	良好	脚部のみ	
96	(土坑)	土師器	高环		残5.7		7.5YR6/6	密	良好	35%	
97	(土坑)	土師器	甕	(14.6)	残18.2		2.5YR6/4	密	良好	ほぼ完形	塗装土器の可能性あり
98	(床面)	土師器	甕	(9.9)	10.8		5YR6/4	密	良好	40%	
99	住居12	土師器	甕	(16.4)	残24.2		7.5YR6/4	密	良好	口頭部80%	
100	住居12	土師器	甕	(10.8)	残2.6		2.5YR5/6	やや粗	不良	口頭部10%	
101	住居12	土師器	高环	16.1	残6.0		5YR6/8	やや粗	良好	坏部0%	
102	住居12	土師器	高环	(17.6)	残6.6		7.5YR7/6	やや粗	不良	坏部50%	
103	住居12	須恵器	甕	(8.2)	3.5		5PB7/1	密	良好	口頭部35%	陶器
104	住居13	土師器	高环	(15.0)	残3.1		2.5YR6/8	密	やや不良	坏部10%	
105	住居13	土師器	甕		残1.7		7.5YR6/2	密	良好	口縁部分	
106	(床面)	土師器	甕	(7.0)	8.1		5YR7/4	密	良好	80%	
107	(床面)	土師器	甕	(6.0)	7.7		10YR6/3	密	良好	50%	
108	(床面)	土師器	甕		残6.3		10YR8/4	やや密	良好	口頭部欠損	
109	(床面)	土師器	甕	7.3	9.9		7.5YR8/4	やや粗	不良	ほぼ完形	蓋の最大径部分に凹孔
110	(床面)	土師器	台付甕	(14.1)	8.6	(5.9)	7.5YR6/4	密	良好	50%	
111	(床面)	土師器	高环	(15.6)	12.9	10.2	2.5YR6/6	密	良好	70%	
112	(床面)	土師器	高环		残11.5	(10.2)	5YR7/4	密	良好	70%	
113	(床面)	土師器	高环	13.4	10.8	(10.0)	2.5YR5/6	密	良好	80%	
114	(床面)	土師器	高环	(13.1)	残5.3		2.5YR6/8	密	やや不良	坏部40%	
115	(床面)	土師器	高环	(15.9)	残4.6		5YR7/8	粗	不良	坏部50%	
116	住居14(廻)	土師器	甕	(15.6)	残25.1		5YR6/6	密	良好	30%	
117	住居14(廻)	輪式系土器	甕	(19.6)	22.6		2.5YR5/8	やや粗	不良	80%	底部に穿孔 二列の把手
118	住居14(廻)	土師器	甕?	15.5	(23.1)		5YR6/6	粗	良好	80%	蓋の底部に穿孔
119	住居14(廻)	土師器	甕	(16.0)	26.9		7.5YR3/2	密	不良	50%	
120	住居14(廻)	土製品	十五		残3.0		5YR6/6	やや密	良好	完形	
121	住居14	土師器	甕	(15.5)	残7.1		5YR6/6	密	良好	口頭部10%	
122	住居14	土師器	甕	(8.0)	8.8		5YR6/6	密	良好	40%	
123	住居14	土師器	甕	12.3	残13.4		7.5YR6/3	密	良好	口頭部・体部50%	
124	住居14	土師器	甕	(19.3)	残10.8		2.5YR6/8	密	良好	口頭部10%	
125	住居14	土師器	甕	(18.6)	残14.3		7.5YR7/4	密	良好	20%	
126	住居14	土師器	甕	13.1	残5.2		7.5YR6/3	密	良好	口頭部70%	
127	住居14	土師器	甕	(16.6)	残4.8		5YR6/6	密	良好	口頭部10%	
128	住居14	土師器	甕	(12.1)	残6.5		10YR8/1	やや粗	不良	口頭部25%	
129	住居14	土師器	甕	(12.5)	残7.1		10YR7/2	密	やや不良	口頭部15%	
130	住居14	土師器	甕	(15.2)	残11.8		7.5YR5/4	密	やや不良	口頭部・体部80%	
131	住居14	土師器	甕	(12.8)	残7.1		2.5YR6/6	密	やや不良	口頭部15%	
132	住居14	土師器	高环	(16.5)	残6.9		10YR8/2	粗	やや不良	坏部60%	

表9 遺物計測値表3

遺物番号	造 構	種類	器 種	法景cm( )は復元値				色	調査	始上	拂成	残存	備 考
				口径	器高	底・脚径	その他						
133	住居14	土師器	高环	(15.6)	残6.4			7.5YR7/4	密	やや不良	坏部30%		
134	住居14	土師器	高环	(15.8)	残4.7			5YR6/6	密	良好	坏部35%		
135	住居14	土師器	高环	(25.6)	残6.0			10YR4/1	密	やや不良	坏部10%		
136	住居14	土師器	高环	24.6	残6.4			7.5YR6/3	やや粗	やや不良	坏部40%		
137	住居14	土師器	高环	(14.4)	残6.5			10YH7/2	密	良好	坏部30%		
138	住居14	土師器	高环	(14.9)	残5.4			5YR6/6	密	良好	坏部15%		
139	住居14	韓式系上蓋	蓋					7.5YR8/3	密	良好	把手のみ		
140	住居14	須恵器	環身	11.0	5.8			10H6/3	やや密	やや不良	85% 陶邑		
141	住居14	須恵器	壺	8.0	残2.4			5PB7/1	密	良好	口部10% 產地不明		
142	住居14	須恵器	器台	(27.8)	残6.4			N7/0	やや密	良好	坏部5% 產地不明		
143	住居14 (床跡)	石器	磁石			長87.8 幅4.3							
144	十坑群	土師器	壺	26.0	残22.4			7.5YR7/3	密	良好	60%		
145	十坑群	土師器	壺	(8.0)	残5.3			10YH7/3	密	良好	口部35% 陶邑		
146	十坑群	土師器	壺	(14.0)	残2.9			10YR7/3	密	良好	口部30% 陶邑		
147	十坑群	土師器	壺	(11.0)	残7.3			5YR6/6	密	良好	口部20% 陶邑		
148	十坑群	土師器	高环	(17.4)	15.1	11.6		5YR6/6	密	良好	50%		
149	土坑群	須恵器	不明		残2.0	(12.4)		5GY7/1	やや密	良好	糊部5% 陶邑		
150	住居15 (床跡)	土師器	高环	(21.6)	16.8	13.7		2.5YR5/6	密	良好	ほぼ完形 3方向の円孔		
151	住居15 (床跡)	土師器	高环	15.0	12.6	10.3		7.5YR6/4	密	良好	ほぼ完形 3方向の円孔		
152	住居15 (床跡)	土師器	高环	14.2	13.6	10.6		10YR8/3	密	良好	ほぼ完形		
153	住居15 (床跡)	土師器	壺	(15.6)	残18.9			7.5YH7/4	密	良好	45%		
154	住居15	七輪器	壺	(15.6)	残3.0			5YR5/6	密	良好	口部5% 陶邑		
155	住居15	須恵器	高环蓋	(12.9)	残3.8			5RP6/1	やや密	壊れ	15%		
156	住居15	須恵器	壺		残5.4			SPB4/1	密	良好	体部片 陶邑		
157	住居15	須恵器	器台		残3.0			2.5Y6/1	密	良好	坏部片 陶邑		
158	住居16 (床跡)	土師器	壺	(10.8)	13.4			10H6/6	密	やや不良	95%		
159	住居16 (床跡)	土師器	壺	10.9	9.8			5YR5/6	粗	不良	95%		
160	住居16 (床跡)	土師器	壺	17.0	25.3			10YH7/3	やや密		60%		
161	住居16 (床跡)	土師器	壺	12.5	23.3			2.5YR7/4	密	やや不良	40% 壁部不明		
162	住居16 (床跡)	土師器	高环	(22.0)	(14.7)	9.3		5YH6/6	やや密		坏部20% 壁部5% 陶邑		
163	住居16 (床跡)	土師器	高环	15.4	12.1	10.2		7.5YR6/6	密	良好	坏部75% 壁部5% 陶邑		
164	住居16 (床跡)	土師器	高环	(16.7)	残4.2			10YR6/2	やや密	不良	坏部60%		
165	住居16 (床跡)	土師器	高环	15.6	残5.0			5YR6/6	やや粗	良好	坏部のみ		
166	住居16 (床跡)	土師器	高环	14.8	残5.3			10YR6/3	密	良好	坏部25%		
167	住居16	土師器	高环		残7.9	12.9		5YR6/6	やや粗	やや不良	壁部のみ		
168	住居16	土師器	高环		残8.0	13.8		5YR6/8	密	良好	脣部のみ 3方向の円孔		
169	住居16	土師器	高环		残7.9	13.1		7.5YR5/4	やや粗	不廣	脣部のみ		
170	住居16	土師器	高环		残7.9			5YR7/6	やや粗	やや不良	基部のみ		
171	住居16	土師器	手づくね上器	2.7	2.5			10YR5/2	やや粗	不良	完形		
172	住居16	土師器	壺	(11.8)	残13.8			5YR6/6	密	良好	45%		
173	住居16	土師器	壺		残6.8			10YR7/3	密	良好	整体割70%		
174	住居16	土師器	壺	12.2	残10.2			5YR5/4	密	良好	30%		
175	住居16	土師器	壺	(19.6)	残6.2			7.5YR6/4	密	良好	口部10%		
176	住居16	土師器	高环	14.8	13.0	10.5		7.5YR7/6	密	良好	ほぼ完形		

表10 遺物計測値表 4

遺物番号	追跡	種類	測定値(cm)	法元価		色調	胎土	焼成	残存	備考
				口径	高さ 底・脚径					
177	住居16	土師器	高環	(22.6)	残7.3	7.5YR7/4	やや粗	やや不良	环部20%	
178	住居16	土師器	高环	(18.4)	残5.2	5YR7/4	やや粗	やや不良	环部55%	
179	住居16	土師器	高環		残8.5 (10.8)	7.5YR7/4	密	良好	脚部10%	
180	住居16	土師器	高環		残6.3	7.5YR7/4/2	やや粗	不良	底部30% S方向の円孔	
181	住居16	須恵器	甌	(10.6)	残3.5	5W6/1	密	良好	口縁部5%	陶邑
182	住居16	須恵器	把手付鉢	(8.4)	残5.3	5PB7/1	やや密	良好	15% 陶邑	
183	住居16・17 (丸)	須恵器	把手付鉢	(8.0)	残4.2	N7/0	やや粗	良好	20% 陶邑 白釉輪	
184	住居16	石製品	菅瓦		長31.6 幅 0.5					無色灰岩
185	住居16 (西側)	石製品	菅玉		長32.65 幅 0.5					滑石製
186	住居16	石製品	菅玉		長33.45 幅 0.5					滑石製
187	住居17	土師器	甌	(16.2)	残11.0	7.5YR7/4	密	良好	口縁部40%	
188	住居17	土師器	甌	6.7	8.9	5YR6/6	密	良好	90%	
189	住居17	土師器	甌		残6.2	7.5YR7/4	密	良好	口縁部欠損	
190	住居17	土師器	甌	(15.8)	18.9	5YR6/6	密	良好	50%	
191	住居17	土師器	甌	(13.6)	残3.9	7.5YR6/4	密	良好	口縁部70%	
192	住居17	韓式系土器	甌	(23.2)	残16.8	5YR6/8	密	良好	20% 把手欠損 底部不規	
193	住居17	土師器	高環		残7.2	7.5YH4/1	密	良好	30%	
194	住居17	土師器	高環		残6.9	10.3	5YR6/4	密	良好	脚部40%
195	住居17	土師器	高環	(16.8)	残4.6	7.5YR6/4	密	良好	环部15%	
196	住居17	土師器	高環	(15.6)	残10.5	10YR7/3	密	良好	40%	
197	住居17	須恵器	甌	(10.6)	14.8	5PB7/1	密	良好	25% 地面不定	
198	住居17 (木床)	土師器	甌	(7.2)	9.2	5YR6/4	密	良好	85% 他の最大部分に円孔 底接不明	
199	住居17 (木床)	土師器	高環	(14.3)	10.7	10.2	5YR6/6	密	良好	90% 3方向に円孔
200	住居18	土師器	甌	(17.4)	残6.5	5YR6/6	密	良好	口縁部15%	
201	住居18	土師器	甌		残17.8	5YR6/6	密	良好	30%	
202	住居18	土師器	甌	(17.8)	残12.2	5YR6/6	密	良好	口縁部50%	
203	住居18	韓式系土器	甌	(23.2)	残0.3	5YH5/6	密	良好	口縁部10% 产地不明	
204	住居18	土師器	高環		残7.7	5YR7/6	密	良好	基部のみ	
205	住居18	土師器	高環	(13.8)	残5.4	7.5YH6/6	密	良好	环部20%	
206	住居18	土師器	高環	(14.8)	残4.9	5YR6/6	密	良好	环部30%	
207	住居18	須恵器	甌		残6.6	N7/0	密	良好	体部10% 陶邑	
208	住居18	須恵器	甌		残5.9	5PB6/1	やや密	堅硬	体部片 产地不明	
209	住居19 (床面)	土師器	甌	(15.0)	(25.0)	2.5YH5/4	密	良好	85%	
210	住居19 (床面)	土師器	甌	13.3	16.9	5YR6/6	密	良好	95%	
211	住居19 (床面)	土師器	甌	11.4	13.2	7.5YR6/4	密	良好	95%	
212	住居19 (床面)	土師器	甌	(10.2)	13.1	7.5YR6/6	密	良好	70%	
213	住居19 (床面)	土師器	甌	(6.7)	6.9	7.5YR6/3	密	良好	30%	
214	住居19 (床面)	土師器	甌	15.4	残8.6	5YH7/6	粗	やや不良	口縁部のみ	
215	住居19 (床面)	韓式系土器	甌	21.0	22.1	5YR6/6	密	良好	95% 底部に穿孔 一割の把手	
216	住居19 (床面)	土師器	高環	(13.2)	(11.7) (10.4)	5YH7/6	密	良好	50%	
217	住居19 (床面)	土師器	高環		残7.8	7.5YR7/4	粗	不良	脚部55% 3方向に円孔	
218	住居19	土師器	甌	16.0	残7.7	5YR6/6	やや密	良好	口縁部35%	
219	住居19	土師器	甌	15.0	残7.5	7.5YR5/6	密	良好	口縁部25%	
220	住居19	土師器	甌	(13.1)	残8.5	5YI6/6	密	良好	口縁部30%	

表11 遺物計測値表 5

遺物 番号	遺 物 名	種 類	器 種	法量cm( )は復元値			色	陶 土	燒 成	現 存	備 考
				口 径	器 高	底 径					
221	住居19	土師器	高环	(15.4)	残6.3		10YR6/3	密	不良	坏部65%	
222	住居19	土師器	高环	14.4	残5.1		2.5YR6/5	粗	良好	坏部のみ	
223	住居19	土師器	高环	15.2	残5.4		2.5YR5/8	粗	良好	坏部70%	
224	住居19	土師器	高环	14.2	残6.3		2.5YR6/1	粗	不良	坏部65%	
225	住居19	須恵器	壺		残3.8		5PB5/1	密	堅緻	体部片	陶色
226	住居21	須恵器	壺?	(16.2)	残4.0		5YR5/2	粗	堅緻	10%	大井部外側に波状文 施毛
227	住居21	須恵器	壺		残8.9		5PB7/1	やや粗	堅緻	体部55%	陶色
228	住居21	須恵器	器台	(32.4)	残10.8		5PB6/1	やや粗	堅緻	坏部10%	陶色
229	住居21	土師器	壺	(16.2)	残3.1		7.5YR6/4	粗	やや不良	口部55%	
230	住居21	土師器	高环	(15.3)	残3.3		10YR7/3	密	良好	口部10%	
231	住居22	韓式系土器	瓶	(22.2)	残6.6		10YR8/4	密	良好	口部10%	
232	住居22	韓式系土器	瓶		残8.9		10YR8/1	密	良好	把手、体部10%	產地不定
233	住居22	土師器	壺	(14.2)	残2.7		N3/0	密	良好	口部55%	
234	住居22	土師器	高环		残5.0		7.5YR7/4	密	良好	陶部5%	
235	住居23	土師器	壺	(12.4)	残3.8		2.5YR6/8	密	やや不良	口部15%	
236	住居24 (木造)	土師器	壺	(15.1)	残15.2		7.5YR7/4	密	良好	65%	
237	住居24 (木造)	土師器	壺	(12.2)	残8.1		10YR4/1	密	良好	口部25%	
238	住居24 (木造)	土師器	高环	(15.0)	残4.4		7.5YR6/4	密	不良	坏部15%	
239	住居24 (木造)	土師器	高环	15.7	(13.5)	11.1	2.5YR5/6	やや密	良好	85%	
240	住居24 (木造)	韓式系土器	瓶		残3.2	(11.8)	2.5Y5/1	密	不良	底部10%	
241	住居24	須恵器	無蓋高环	(19.4)	残5.2		N7/0	やや粗	良好	坏部10%	自然釉
242	住居24	須恵器	無蓋高环	(16.6)	残5.0		2.5YR5/2	やや粗	堅緻	坏部10%	伽耶?
243	住居24	須恵器	壺	(13.2)	残5.9		5YR4/1	粗	堅緻	口部55%	陶色
244	住居24	須恵器	壺	(39.0)	残5.9		N7/0	やや密	口部55%	陶色	
245	住居24	須恵器	壺	(13.4)	残5.6		5Y8/1	密	良好	口部10%	
246	住居24	須恵器	鉢	(12.0)	11.8		5B6/1	やや密	やや不良	45%	陶色
247	住居24	須恵器	壺		残3.7	つまみ 孫3.8	5PB7/1	やや密	堅緻	つまみ 孫70%	陶色
248	住居24	須恵器	壺		残1.9	(11.2)	2.5Y8/1	密	不良	底部65%	陶色
249	住居24	須恵器	瓶	(27.2)	残25.4		N7/0	やや粗	不良	70%	一対の把手 陶色
250	住居24	須恵器	壺		残7.8		5PB6/1	密	良好	体部片	陶色
251	住居24	須恵器	壺		残4.3		5PB5/1	密	良好	体部片	陶色
252	住居24	須恵器	壺?	(16.0)	(30.6)		5YR7/6	密	不良	60%	
253	住居24	土師器	壺	(16.9)	残20.4		10YR7/3	密	良好	口部40%	体部60%
254	住居24	土師器	壺	(11.0)	13.1		7.5YH6/1	密	良好	60%	
255	住居24	土師器	壺	10.7	残12.7		5YR6/6	密	良好	70%	
256	住居24	土師器	壺	9.9	10.9		5YR7/6	密	良好	70%	
257	住居24	土師器	高环	22.2	17.2	(14.0)	2.5YR5/6	密	良好	90%	3方向に円孔
258	住居24	土師器	高环	(21.9)	残9.1		5YR6/6	やや粗	不良	坏部40%	
259	住居24	土師器	高环	(14.4)	残5.6		5YR5/6	密	良好	坏部30%	
260	住居24	土師器	高环	(14.0)	残5.0		5YR6/4	密	良好	坏部10%	
261	住居24	土師器	高环	(14.1)	残5.1		5YR7/6	密	良好	坏部30%	
262	住居24	土師器	高环	(15.4)	残5.5		5YR6/4	粗	やや不良	坏部60%	
263	住居24	土師器	高环		残7.4	(10.6)	5YR6/8	やや粗	やや不良	脚部70%	3方向に円孔
264	住居24	土師器	壺	15.6	27.8		5YI6/6	密	良好	50%	

表12 遺物計測値表 6

遺物番号	造 構	種類	器種	法量cm( )	は復元性	口 径	容 量	高 底・脚性	その他	色 製	胎 上	燒 成	残 存	備 考		
265	住居24	土師器	甕	(13.4)	残16.7					2.5YH5/6	素	良好		60%		
266	住居24	土師器	甕	(11.2)	残4.2					7.5YR6/2	やや粗	不良		口頭部20%		
267	住居24	土師器	甕	(17.4)	残6.1					10YR7/3	やや粗	やや不良		口頭部10%		
268	住居24	土師器	甕	(17.8)	残4.0					K2/0	粗	不良		口頭部30%		
269	住居24	韓式系土器	平底鉢			残2.4	(7.0)			10YR7/3	粗	やや不良		底範60%		
270	住居24	韓式系土器	平底鉢	(20.4)	残10.2					10YR7/3	粗	不良		20%	底地不明	
271	住居24	韓式系土器	甕			残5.8	(12.1)			5YH6/6	素	良好		底部35%	陶邑	
272	住居24	韓式系土器	甕			残1.9	(14.6)			10YR6/4	密	良好		底部10%		
273	住居24	韓式系土器	甕							10YR6/3	やや粗	やや不良		把手のみ		
274	住居24	韓式系土器	甕							10YH5/3	密	良好		把手のみ		
275	住居24	石器	叩石					粗5.7 横5.3							完形	
276	住居25 (底面)	土師器	高坏			残3.4				2.5Y8/4	素	良好		底面30%		
277	住居25 (底面)	土師器	高坏			残4.7				10YR5/6	密	やや不良		底面25%		
278	住居25 (底面)	土師器	高坏	15.7	残6.2					2.5Y7/3	素	良好		底部のみ		
279	住居25 (底面)	土師器	高坏			残7.7	(9.6)			7.5YH7/8	密	やや不良		脚部5%	3方向に円孔	
280	住居25 (底面)	土師器	甕	17.0	32.5					5YR7/6	やや密	やや不良		80%		
281	住居25(盤)	土師器	高坏	(16.0)	残4.7					10YR6/2	素	不良		底面50%		
282	住居25(盤)	土師器	甕	10.0	13.7					2.5YR7/4	密	良好		85%		
283	住居25(盤)	土師器	高坏	(17.4)	残5.1					7.5YR7/3	密	やや不良		底面35%		
284	住居25(盤)	韓式系土器	平底鉢	(17.0)	12.1					2.5Y7/2	密	不良		50%	伽耶	
285	住居25(盤)	韓式系土器	瓶	(35.0)	(23.8)					7.5YR6/6	密	良好		80%	底部に穿孔	
286	住居25 (底面)	土師器	甕	(8.0)	11.8					7.5YR7/4	素	やや不良		ほぼ光形	甕の最大径部分に円孔	
287	住居25	土師器	鉢	(14.0)	残6.0					2.5Y8/4	密	良好		口頭部10%		
288	住居25	土師器	甕	(17.8)	残4.0					10YR7/2	密	良好		1.1頭部10%		
289	住居25	泡窓器	壺	(11.4)	残2.8					5PB7/1	粗	平底		口縁部5%	陶邑	
290	住居25	土師器	高坏			残7.3	(9.0)			2.5Y8/3	密	良好		脚部10%		
291	住居25(甕)	韓式系土器	甕							7.5YH8/6	素	良好		把手のみ		
292	住居25	韓式系土器	甕			残5.5				2.5Y7/3	密	良好		底部部	伽耶	
293	住居25	韓式系土器	甕			残3.4				7.5Y7/4	素	良好		底部片	伽耶?	
294	住居25	土製品	紡錘串					直径4.6 厚1.7		7.5YR6/6	やや密	良好		完形		
295	住居25	石器	叩石					元厚3.9 左厚3.4 右厚3.8 幅9.4								
296	住居25	紡錘品	不明													
297	住居26 (東上層)	土師器	甕	(17.4)	残5.5					2.5Y7/3	密	良好		30%		
298	住居26 (東上層)	土師器	甕	(15.8)	残20.7					10YH8/3	密	良好		40%		
299	住居26 (東上層)	土師器	甕	17.1	残9.0					10YR6/2	密	良好		口頭部70%		
300	住居26	瓦質土器	甕			残4.9				5PB5/1	素	良好		体側片	伽耶?	
301	住居27	石製品	骨玉					直径22.65 厚0.5							緑色凝灰岩製	
302	住居27	土師器	甕	(18.0)	残7.5					10YR7/3	やや密	良好		口頭部30%		
303	住居27	土師器	甕	(17.8)	残6.6					7.5YR6/3	やや密	良好		口頭部30%		
304	住居27	土師器	鉢	(12.6)	残6.1					5YI6/6	密	良好		口縁部30%	底地不明	
305	住居27	土師器	高坏			残7.7	(10.8)			5YR6/4	密	良好		揚輪50%		
306	住居27	土師器	高坏			残6.9				2.5YR7/4	密	良好		脚部30%		
307	住居27	土師器	内坏	(7.9)	残1.7					7.5YH7/6	密	良好		底面5%		
308	住居27 (米面)	須恵器	器台			残5.4				5PB7/1	やや密	良好		底面5%	陶邑	

表13 遺物計測値表 7

遺物 番号	造 成 年 代	種 類	器 種	法量cm( )は復元値			色	調 査 方 法	土 壌	燒 成	残 存	備 考	
				口 径	器 高	底・脚径							
309	住居28	土師器	壺	(10.0)	15.8		2.5YR5/4	密	良好	70%			
310	住居28	土師器	壺	6.5	7.9		2.5YR5/6	密	良好	90%			
311	住居28	土師器	高环	(19.4)	残6.5		5YR7/6	密	良好	口縁部20%			
312	住居28	土師器	高环	(14.2)	残5.0		7.5YR7/4	やや密	良好	坏部45%			
313	住居28	土師器	高环	(15.0)	残3.1		5YR6/6	やや密	良好	坏部30%			
314	住居28	土師器	高环	(15.6)	残5.1		5YR6/6	密	良好	坏部20%			
315	住居28	土師器	高环		残2.5	(8.6)	5YR6/6	密	良好	脚部20%			
316	住居28	土師器	高环	(14.4)	(11.8)	(10.2)	5YR6/6	密	良好	外底30%			
317	住居28	土師器	高环		残2.1		10YR7/2	密	良好	脚部15%			
318	住居28	土師器	瓶	(25.0)	残18.6		5YR6/6	密	良好	40%	底部に穿孔 一对の把手		
319	住居30	土師器	高环		残7.2	(19.6)	7.5YR7/3	密	不良	脚部20%			
320	土坑9	土師器	高环	(13.4)	11.0	(11.8)	10R5/6	密	良好	40%			
321	土坑9	土師器	瓶	(17.2)	残6.4		2.5YR6/6	密	良好	口縁部10%			
322	土坑11	土師器	壺	(18.2)	残7.5		5YR6/6	密	良好	口縁部25%			
323	住居31	土師器	高环	(14.0)	残3.2		5YR6/6	密	良好	坏部10%			
324	住居31	土師器	高环		残6.6		7.5YR7/4	密	良好	脚部20%			
325	住居31 (床面)	土師器	高环	(30.2)	残13.4		7.5YR6/8	密	良好	坏部60%			
326	住居31 (床面)	土師器	壺	(14.4)	(21.5)		7.5YR7/4	やや粗	良好	30%			
327	住居31 (床面)	土師器	瓶	(23.8)	残20.6		7.5YR5/4	密	良好	50%	底部に穿孔 一对の把手		
328	住居33	須恵器	把手付鉢		残4.4		5PB5/1	やや密	良好	5%	脚部		
329	住居33 (床面)	瓦質土器	壺	(21.4)	残10.7		5PB5/1	やや粗	不良	口縁部20%	底部に穿孔		
330	住居34 (床面)	瓦質土器	壺		残7.8		5PB6/1	密	良好		底部に穿孔		
331	住居34 (床面)	須恵器	壺		残4.5		5YB2/2	密	不良		体部片	陶色	
332	住居34	土師器	壺	(13.0)	4.0		5YR6/6	密	不良	口縁部20%			
333	住居34	土師器	高环		残2.3		2.5YI5/6	粗	不良	坏部20%			
334	住居34	土師器	高环		残4.0		10YR8/2	密	良好	基部50%			
335	住居35 (床面)	土師器	壺		残7.2		7.5YR6/2	やや密			体部20%		
336	住居35 (床面)	土師器	壺		残15.0		N3/0	密			体部片		
337	住居35 (床面)	土師器	高环	(36.2)	残4.4		7.5YR6/8	南	不良	5%	脚部15%		
338	住居35 (床面)	土師器	高环	(19.0)	残3.7		7.5YR8/4	密			坏部20%		
339	住居35 (床面)	土師器	瓶	(19.0)	15.3		2.5Y7/1	密			25%	底部に穿孔 底面不明	
340	住居35	土師器	瓶	(19.8)	残3.1		10YR8/4	密	良好	口縁部10%			
341	住居35	土師器	瓶				2.5Y7/4	密	良好	把手のみ			
342	住居35	土師器	平底瓶	(14.6)	残2.2		7.5Y7/4	やや粗	良好	口縁部15%			
343	土坑13	土師器	壺	(15.6)	残3.8		5YR7/6	密			口縁部10%		
344	土坑13	土師器	高环	(16.4)	11.3	(10.3)	10YR7/3	南	不良	40%			
345	土坑13	土師器	高环	(15.2)	残6.5		2.5Y7/8	密			坏部35%		
346	土坑13	土師器	高环		残7.8	(10.8)	5YR7/6	密	良好		脚部25%		
347	土坑13	須恵器	壺		残16.0		5PB5/1	密	良好		体部片	陶色	
348	土坑14	弥生土器	壺	(12.8)	残7.5		5YR6/8	密	良好	口縁部のみ			
349	土坑14	弥生土器	壺	(9.7)	残7.9		7.5YR7/3	密	良好	口縁部70%			
350	土坑14	弥生土器	壺	(9.8)	残5.9		10YI0/4	密	良好	口縁部25%			
351	土坑14	弥生土器	壺		残4.9	(4.8)	5YR7/6	南	良好		底部のみ		
352	土坑14	弥生土器	壺		残4.7	(4.1)	10YR6/4	密	良好		底部のみ		

表14 遺物計測値表 8

番号	遺構	種類	器種	法量cm( )は復元値		色調	胎土	焼成	残存	備考
				口径	器高					
353	土坑14	弥生土器	縦	(15.0)	残5.7	7.5YR8/6	密	良好	口縁部20%	
354	土坑14	弥生土器	縦	(16.4)	残6.4	7.5YR8/4	密	良好	口縁部20%	
355	土坑14	弥生土器	縦	(15.8)	残5.7	10YR7/4	密	良好	口縁部20%	
356	土坑14	弥生土器	縦	(16.4)	残6.5	7.5YR8/3	密	やや不良	口縁部20%	
357	土坑14	弥生土器	縦	(15.2)	残3.0	7.5YR7/6	密	良好	口縁部20%	
358	土坑14	弥生土器	縦	(16.6)	残4.9	10YR8/6	やや密	良好	口縁部25%	
359	土坑14	弥生土器	縦		残3.6 (4.2)	5YR5/4	密	良好	底部のみ	
360	土坑14	弥生土器	縦		残2.5 4.0	10P5/6	密	やや不良	底部のみ	
361	土坑14	弥生土器	縦		残7.8 (4.8)	7.5YR7/4	密	良好	底部70%	
362	土坑14	弥生土器	縦	(31.9)	残6	7.5YR7/4	密	良好	口縁部20%	
363	土坑14	弥生土器	縦	(16.2)	残6	5YH6/6	密	良好	口縁部20%	
364	土坑14	弥生土器	縦	(15.4)	残6.0	7.5YR5/4	やや密	不良	口縁部25%	
365	土坑14	弥生土器	縦		残5.5	7.5YR6/6	密	良好	底部のみ	
366	土坑14	弥生土器	高环	(25.4)	残7.5	7.5YH5/4	密	良好	環部40%	
367	土坑14	弥生土器	高环	(23.4)	残4.6	10YR6/3	密	良好	環部30%	
368	土坑14	弥生土器	高环		残7.6	5YR6/6	密	良好	脚部50%	
369	土坑14	弥生土器	高环		残6.1	5YR6/6	密	良好	脚部5%	
370	土坑14	弥生土器	蓋	14.2	7.2	2.5Y7/1	密	やや不良	35%	
371	北畠地区 溝3	須恵器	环身	(11.0)	残3.1	N6/0	素	良好	口縁部5%	
372	北畠地区 溝3	土師器	壺	(15.9)	残3.9	7.5YR6/4	密	やや不良	口縁部5%	
373	北畠地区 溝3	土師器	壺	(16.2)	残4.8	5YR6/6	密	良好	口縁部5%	
374	北畠地区 溝3	土師器	壺	(15.6)	残3.6	7.5YR7/4	密	良好	口縁部25%	
375	北畠地区 溝3	土師器	高环		残7.1 (13.4)	2.5YR6/6	密	やや不良	脚部25%	
376	第7群 包含層	須恵器	环身	(13.8)	残3.3	10RG5/1	やや密	堅致	6%	陶邑
377	第6群 包含層	須恵器	有蓋高环	(12.8)	残4.2	5PB7/1	密	良好	环部15%	陶邑
378	第5群 包含層	須恵器	高环		残3.8	N7/0	やや密	良好	脚部10%	陶邑
379	第5群 包含層	須恵器	壺	(9.5)	残 (10.2)	5PB7/1	やや密	堅致	口縁部5%	陶邑
380	第7群 包含層	須恵器	壺	(11.4)	残5.6	10Y7/1	やや密	良好	口縁部10% 底部不規	
381	第4群 包含層	須恵器	壺	(10.3)	残3.2	N6/0	密	良好	口縁部5% 伽耶?	
382	第7群 包含層	須恵器	壺	21	残3.1	5D6/1	やや粗	良好	口縁部5% 陶邑	
383	第4群 包含層	須恵器	壺	(16.3)	残2.3	10Y7/1	やや密	良好	口縁部5% 陶邑	
384	第5群 包含層	須恵器	壺	(22.0)	残6.5	7.5Y7/1	やや密	良好	口縁部5% 陶邑	
385	第2群 包含層	須恵器	壺		残 (5.6)	7.5Y6/1	やや密	良好	山腹部片 伽耶?	
386	第7群 包含層	須恵器	壺	(22.9)	残4.8	5PB7/1	やや密	良好	口縁部10% 陶邑	
387	第6群 包含層	須恵器	壺		残7.5	5YR7/2	やや密	良好	口縁部10% 陶邑	
388	第7群 包含層	須恵器	壺	(17.2)	残2.4	2.5Y8/1	密	不良	口縁部10% 陶邑	
389	第3群 包含層	須恵器	壺	(22.4)	残6.3	N7/0	やや密	良好	口縁部10% 陶邑	
390	第7群 包含層	須恵器	壺台?		残6.2	5PB6/1	やや密	堅致	脚部10% 陶邑	
391	第6群 包含層	須恵器	台付壺?		残4.0 15.6	5PB7/1	やや密	堅致	脚部5% 陶邑	
392	第3群 包含層	須恵器	器台?		残9.0	7.5YS5/1	やや密	良好	脚部片? 陶邑	
393	第4群 包含層	須恵器	壺		残7.0	5P6/1	密	堅致	体瓶片 陶邑	
394	第4群 包含層	須恵器	壺		残4.0	7.5YH7/3	中や密	堅致	体瓶片 陶邑	
395	第4群 包含層	須恵器	壺		残5.0	5PB6/1	中や粗	良好	体瓶片 伽耶	
396	第4群 包含層	須恵器	壺		残3.1	10R4/1	中や密	良好	体瓶片 陶邑	

表15 遺物計測値表 9

生物 番号	遺 構 種 類	器 種	法 規 cm( )		色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
			口 径	高 さ					
397	第2群 包含層	須恵器	縦2.7		SB7/1	密	堅緻	天井部片	陶邑
398	第2群 包含層	須恵器	縦5.7		N6/0	やや密	良好	体部片	陶邑
399	第2群 包含層	須恵器	縦3.7		N6/0	やや粗	良好	口縁部片	陶邑
400	第2群 柱穴	須恵器	直 (14.4)	縦4.3	SPB6/1	やや密	堅緻	口縁部5%	产地不明
401	第2群 包含層	韓式系上唇	縦 (22.2)	横6.2	7.5YR7/4	密	良好	口縁部10%	
402	第2群 包含層	須恵器	瓶	横6.9	7.5Y7/1	密	良好	把手、体部片	場の可能性あり
403	第2群 包含層	韓式系十唇	瓶		SY11E/6	密	良好	把手のみ	
404	第2群 包含層	韓式系上唇	瓶		7.5YR7/6	密	良好	把手のみ	
405	第2群 包含層	韓式系十唇	瓶		7.5YR7/6	密	良好	把手のみ	
406	第2群 包含層	韓式系上唇	瓶		7.5YR7/1	密	良好	把手のみ	
407	第2群 包含層	韓式系上唇	瓶		2.5YR6/6	密	良好	把手のみ	
408	第2群 包含層	韓式系十唇	瓶		7.5V10E/6	密	良好	把手のみ	
409	第2群 包含層	韓式系上唇	瓶		SYH7/6	密	良好	把手のみ	
410	第2群 包含層	韓式系十唇	瓶		7.5YR8/3	密	良好	把手のみ	
411	第2群 包含層	須恵器	縦2.0		535/1	やや密	良好	口縁部片	伽耶?
412	住居24	須恵器	器台	縦4.8	SPB6/1	やや粗	良好	底部片	陶邑
413	遺2	鉄矛	鍛冶作					破片	
414	土坑13	鉄矛	鍛冶作					破片	
415	住居24	須恵器	甕	縦8.5	SPB6/1	やや密	堅緻	体部片	陶邑
416	住居24	須恵器	甕	縦13.5	N7/1	密	良好	体部片	陶邑
417	住居24	須恵器	甕	縦12.1	N7/1	密	良好	体部片	陶邑
418	住居24	須恵器	甕	縦6.5	SPB6/1	やや密	良好	体部片	陶邑
419	住居24	須恵器	甕	縦1.8	N7/0	密	やや不均	体部片	陶邑
420	住居18	須恵器	甕	縦4.6	N6/0	やや密	堅緻	体部片	产地不明
421	住居24	須恵器	甕	縦3.8	2.5Y7/1	やや粗	良好	体部片	陶邑
422	住居24	須恵器	甕	縦1.9	2.5Y7/1	やや粗	良好	体部片	陶邑
423	住居24	須恵器	甕	縦2.8	SPB4/1	密	良好	体部片	陶邑
424	住居24	須恵器	甕	縦4.2	5CY6/1	やや密	不良	体部片	陶邑
425	住居4	須恵器	甕	縦6.9	N6/0	密	良好	体部片	陶邑
426	住居24	須恵器	甕	縦4.0	N7/1	密	良好	体部片	陶邑
427	住居24	須恵器	甕	縦3.2	SPB5/1	やや密	良好	体部片	陶邑
428	住居24	須恵器	甕	縦2.5	SPB4/1	密	良好	体部片	陶邑
429	住居9	須恵器	壺	縦0.9	SR26/1	密	堅緻	大井部片	陶邑
430	第2群 包含層	須恵器	無蓋高環 (14.1)	縦3.5	SPB5/1	やや密	堅緻	口縁部片	陶邑
431	住居24	須恵器	甕	縦5.3	N7/0	密	良好	底部片	产地不明
432	住居14	須恵器	甕	縦1.9	N6/0	密	良好	体部片	陶邑
433	住居14	須恵器	甕	縦2.9	SPH7/1	密	良好	体部片	陶邑
434	住居24	須恵器	甕	縦5.6	2.5Y10E/1	密	堅緻	体部片	产地不定
435	第2群 柱穴	須恵器	环身 (10.1)	縦4.2	SPH6/1	やや粗	堅緻	15%	陶邑
436	第2群 柱穴	須恵器	甕 (17.0)	縦6.5	SB7/1	やや粗		口縁部片	陶邑
437	住居14	須恵器	甕	縦3.4	N6/0	密	堅緻	体部片	产地不定
438	住居24	須恵器	甕	縦2.4	SPB6/1	密	良好	体部片	产地不定
439	住居24	須恵器	器台	縦6.2	SB6/1	やや密	良好	体部片	伽耶?
440	第2群 包含層	須恵器	甕	縦5.0	SY7/1	やや密	良好	体部片	陶邑

表16 遺物計測値表 10

# 報告書抄録

ふりがな 書名	あいいせき 安威遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	1999-6
編著者名	奥和之、酒井泰子
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あいいせき 安威遺跡	茨木市安威1丁目 ～南安威1丁目地内	27211	74	34° 51'	135° 34' 15"	1997年9月 29日～ 1999年3月 31日	3,520	主要地方道茨木危岡線道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安威遺跡	集落跡	古墳時代中期～古墳時代後期	住居跡 35棟	須恵器、陶質土器、瓦質土器、土師器、韓式系土器、鐵器、砥石、鉛滓	
			建物 11棟 棚列 2基 土杭 13基 土杭群 1基 溝 1本 流路 2本		
		弥生時代後期	落ち込み	弥生上器	

大阪府埋蔵文化財調査報告 1999-6

安威遺跡

2000年3月31日 発行

編集・発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL. 06-6941-0351(代)

印刷 ダイコウ印刷株式会社

〒544-0034 大阪市生野区桃谷5丁目3番3号

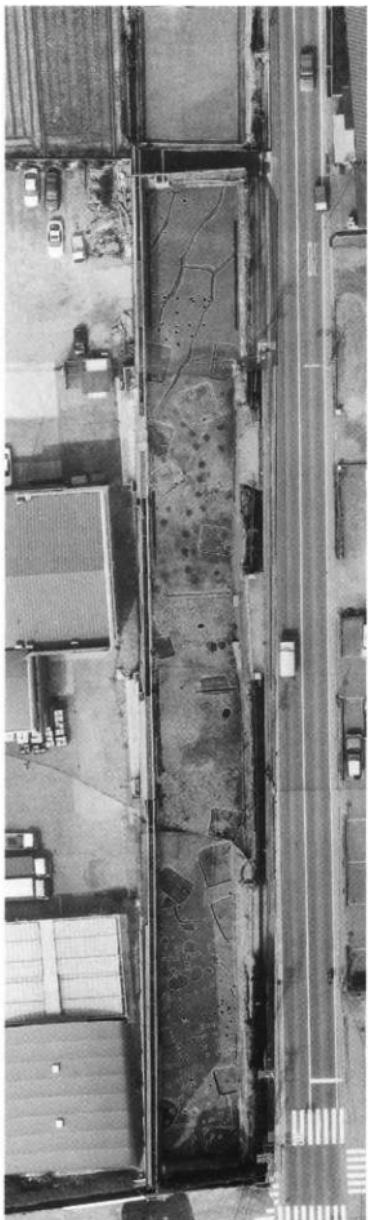
TEL. 06-6712-6709(代)

# 図版



調査地区全景（南上空より）

図版1 古墳時代遺構全景（空中写真）



図版2

基本断面及び第1群

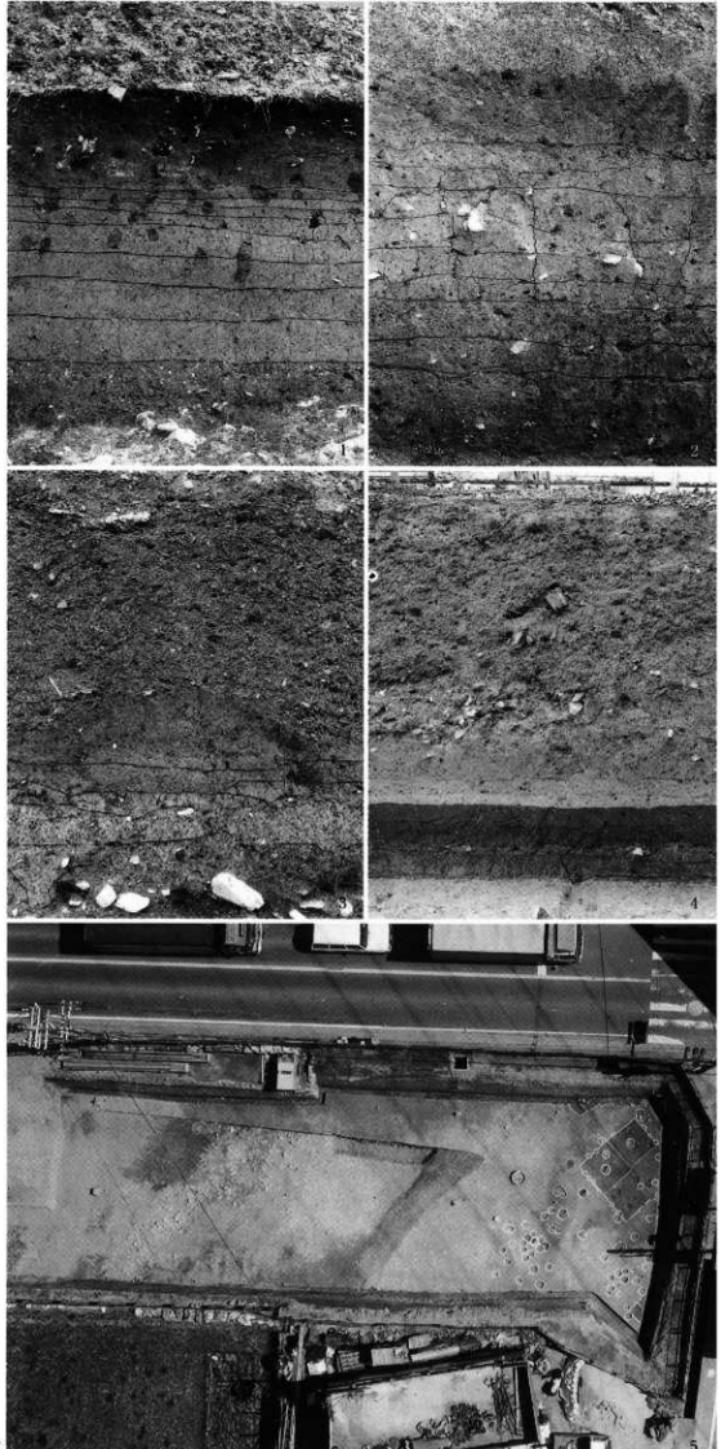
1. 北部地区基本断面

2. 第1群基本断面

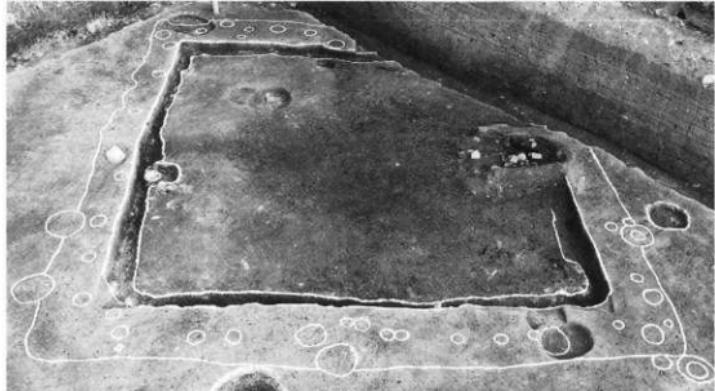
3. 第4群基本断面

4. 第7群基本断面

5. 第1群全景

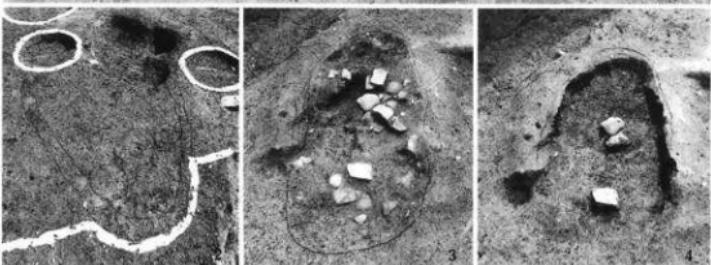


図版 3  
第 1 群



1. 住居 1

北より



2. 住居 1 突上面検出状況

西より

3. 住居 1 突遺物出土状況

東より

4. 住居 1 突

東より

5. 住居 1 突埋土断面

南より

6. 住居 1 断面

北より

7. 住居 2

北東より

8. 住居 3

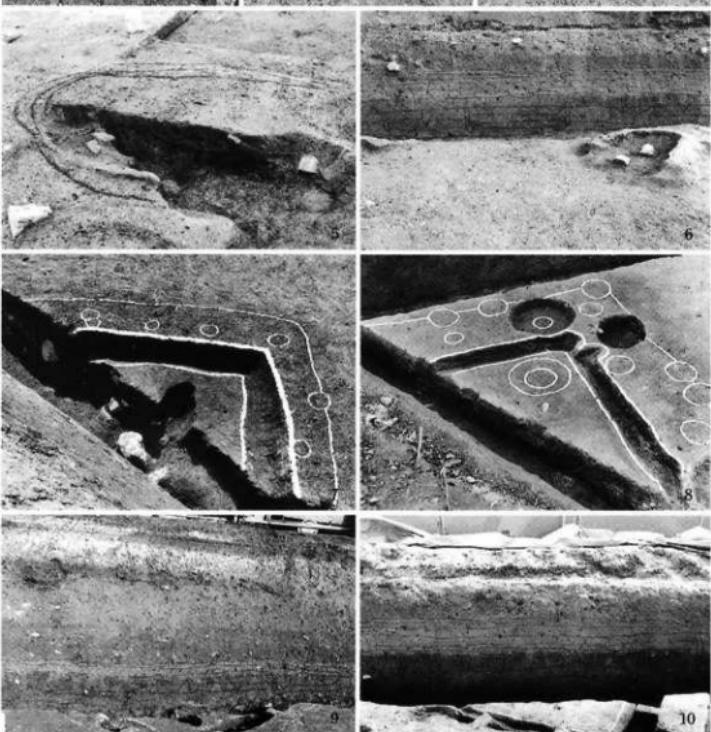
南東より

9. 住居 2 断面

北より

10. 住居 3 断面

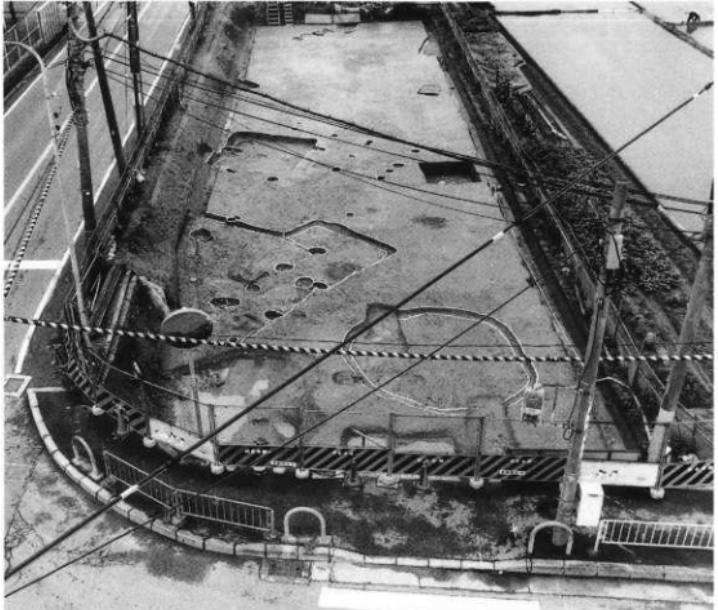
西より



図版 4  
第 2 群

1. 全景

北より



1

2. 住居 4

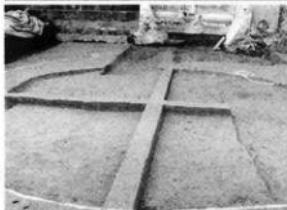
南より



2

3. 住居 4 東西断面

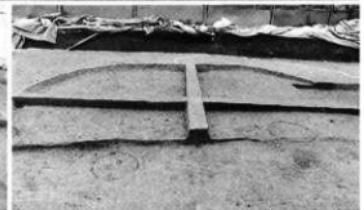
南より



3

4. 住居 4 南北断面

東より



4

図版 5  
第 2 群

1. 住居 5

西より



2. 住居 5 窑

東より



3. 住居 5 窯遺物出土状況

東より



4. 住居 5 窯遺物出土状況

北より



5. 住居 5 窯埋土断面

南より



6. 住居 5 遺物出土状況

東より

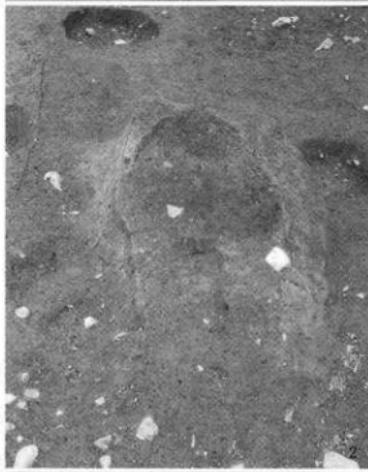


図版 6  
第 2 群



1. 住居 6

西より



2. 住居 6 魚

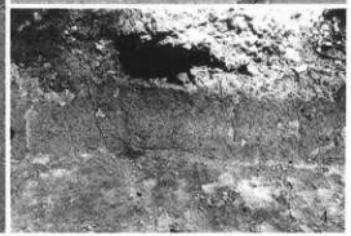
東より

3. 住居 6 南北断面

東より

4. 住居 5・6 切合い断面

西より



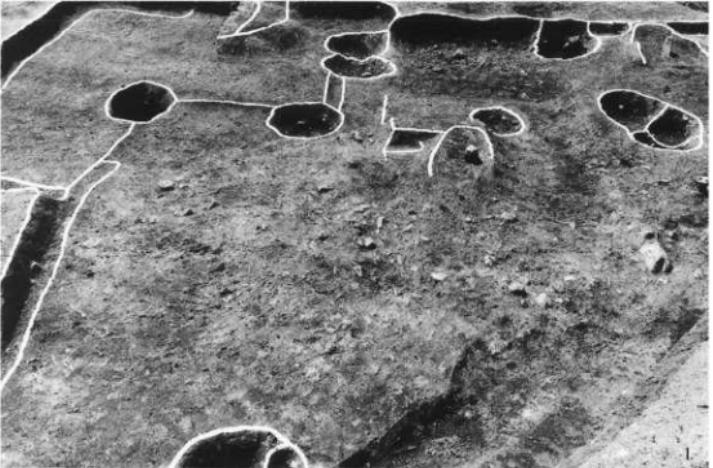
5. 住居 6 遺物出土状況

北より

図版 7  
第 2 群

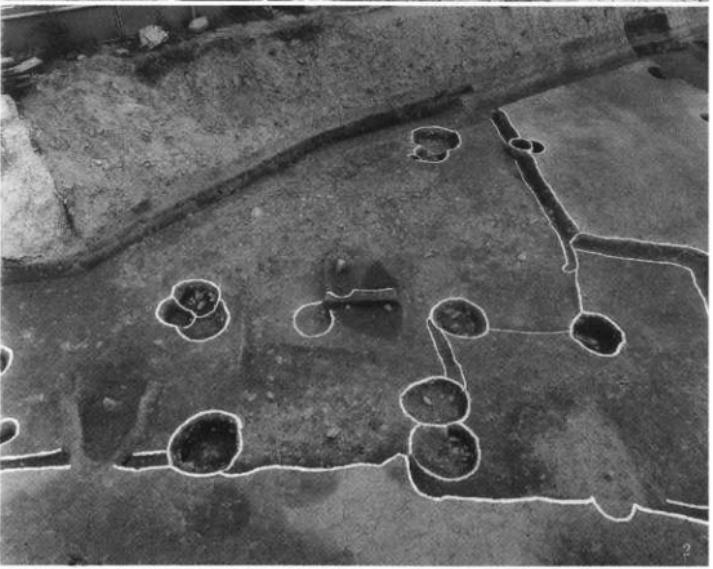
1. 住居 7

東より



2. 住居 7

西より



3. 住居 7 電

東より

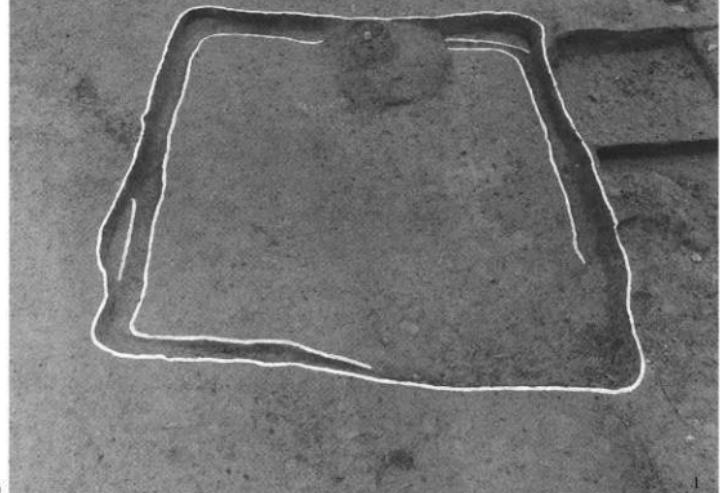


4. 住居 7 魚埋土断面

南より



図版 8  
第2群



1. 住居 8

東より



2. 住居 8 東西断面

南より



2

3. 住居 8 南北断面

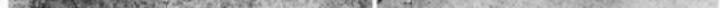
東より



3

4. 住居 8 窑埋土断面

南より



4

5. 住居 8 窯盛土断面

南より



5

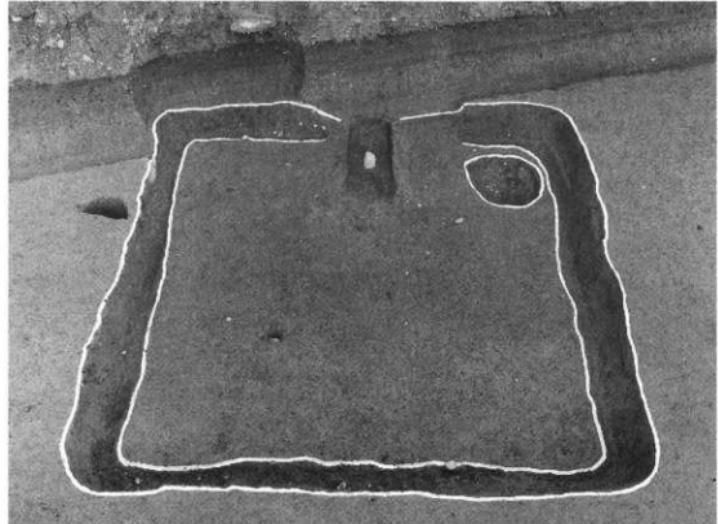


6. 住居 8 遺物出土状況

東より

6

図版 9  
第 2 群



1. 住居 9

西より



2. 住居 9 遺物出土状況

西より



3. 住居 9 南北断面

東より



4. 住居 9 東西断面

東より



5. 住居 9 南壁付近断面細部

東より

4. 住居 9 北壁付近断面細部

東より

図版10  
第2群

1. 住居9竈遺物出土状況

西より



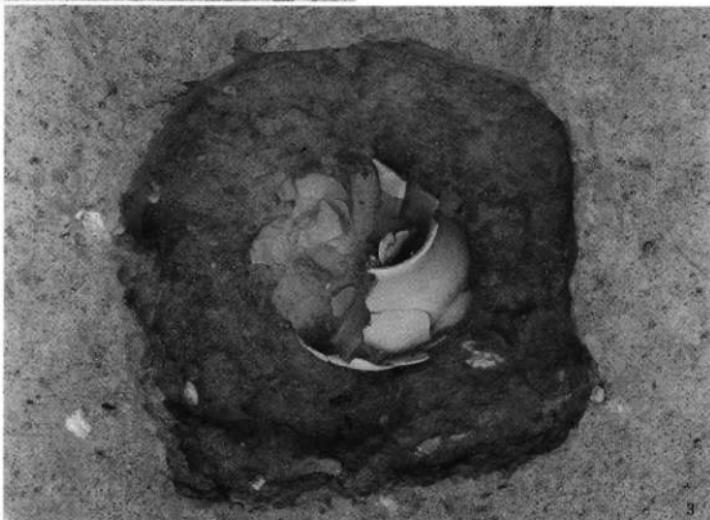
2. 住居9竈埋土断面

南より



3. 住居9土坑遺物出土状況

北より



4. 住居9土坑断面

南より



図版11  
第2群

1. 住居9遺物出土状況細部

南より



2. 住居9遺物出土状況細部

東より



3. 住居9上層遺物出土状況細部

南より



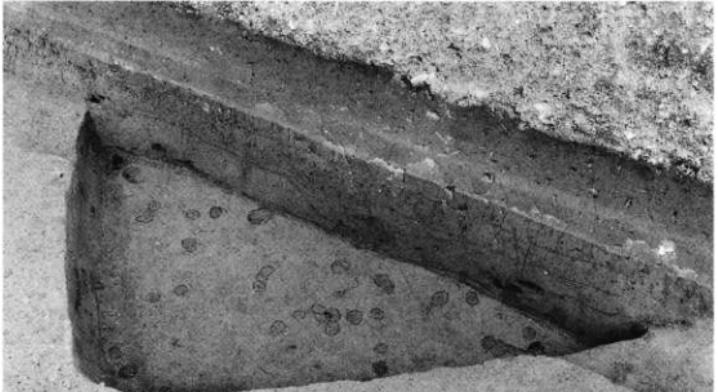
4. 住居9上層遺物出土状況細部

西より



1. 住居10

西より



2. 住居10遺物出土状況

北より

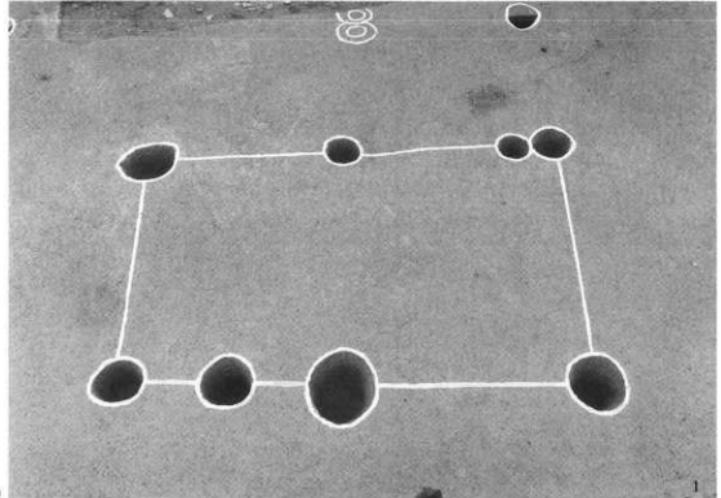


3. 住居11

東より



図版13  
第2群



1. 建物 2

西より

2. 建物 2 SP9

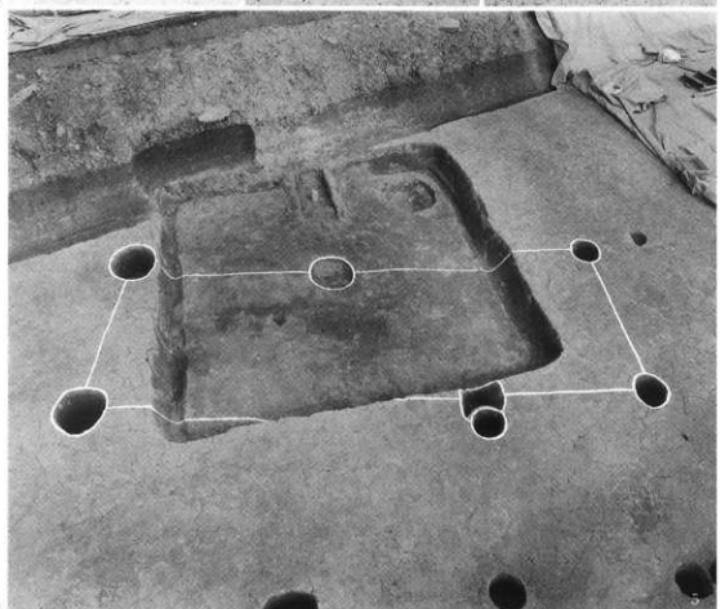
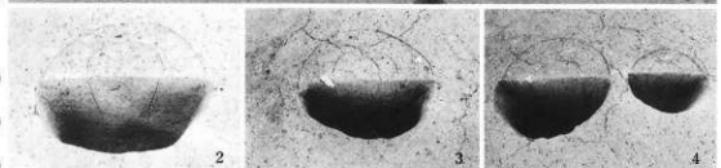
東より

3. 建物 2 SP15

東より

4. 建物 2 SP14・17

東より



5. 建物 3

西より

6. 建物 3 SP21

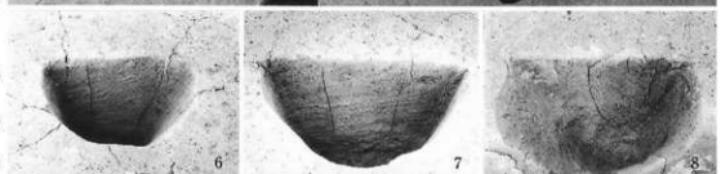
東より

7. 建物 3 SP4

西より

8. 建物 3 SP18

東より



図版14  
第3群

1. 全景

北より



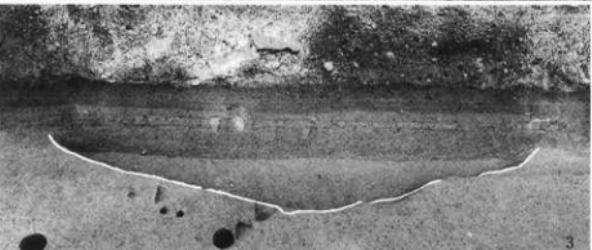
2. 住居13

西より



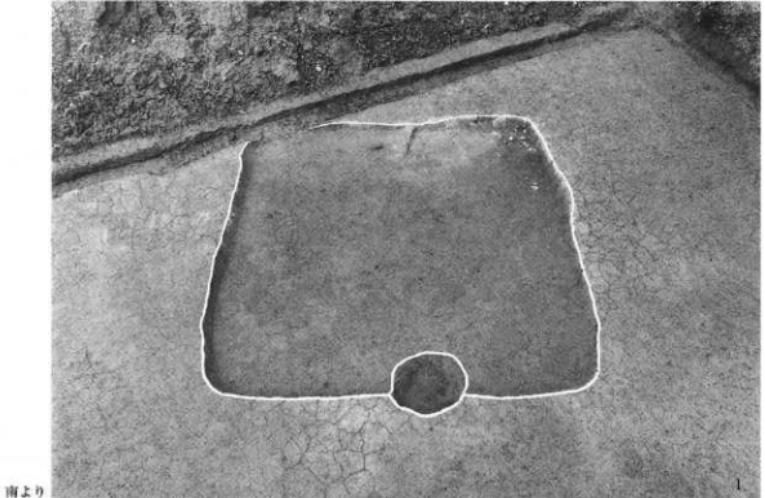
3. 住居13南北断面

西より



図版15  
第3群

1. 住居12



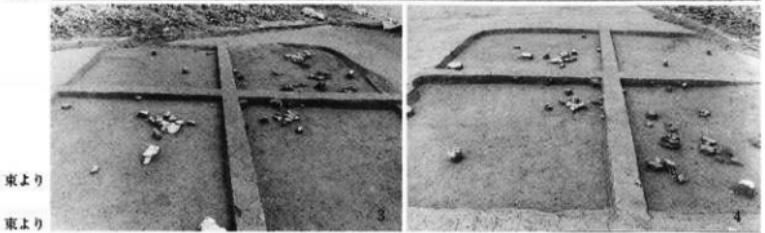
南より

2. 住居12遺物出土状況



南より

3. 住居12東西断面



東より

4. 住居12南北断面



東より

5. 住居12竪堀土断面



東より

6. 住居12土坑断面



東より

図版16  
第3群

1. 住居14



南より

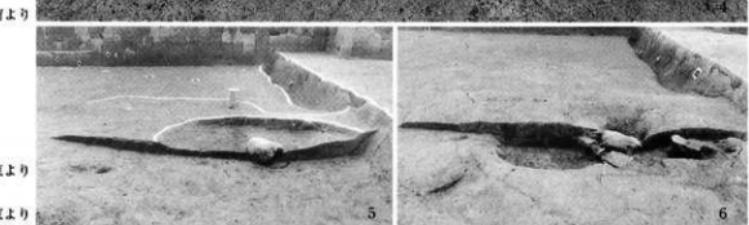
2. 住居14東西断面



3. 住居14南北断面



4. 住居14竈



5. 住居14竈埋土断面

6. 住居14竈盛上断面

図版17  
第3群

1. 住居14遺物出土状況

北より



2. 住居14電遺物出土状況

南より



3. 住居14電上面遺物出土状況

東より



図版18  
第3群

1. 住居14埋上遺物出土状況

北より

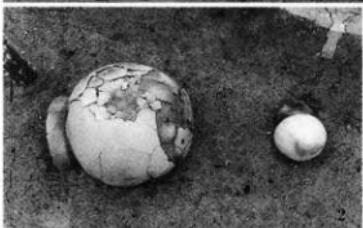


2. 住居14遺物出土状況細部

西より

3. 住居14遺物出土状況細部

東より



4. 住居14石敷土坑

北より



5. 住居14石敷土坑上層断面

東より

6. 住居14石敷土坑断面

東より



図版19

第2・3群 土坑群・土坑

1. 土坑群全景

北より



2. 土坑B遺物出土状況

東より



3. 土坑C遺物出土状況

西より



4. 土坑A断面

南より



5. 土坑B断面

南より



6. 土坑C断面

南より



7. 土坑D断面

南より



8. 土坑E断面

北より



9. 土坑2断面

南より

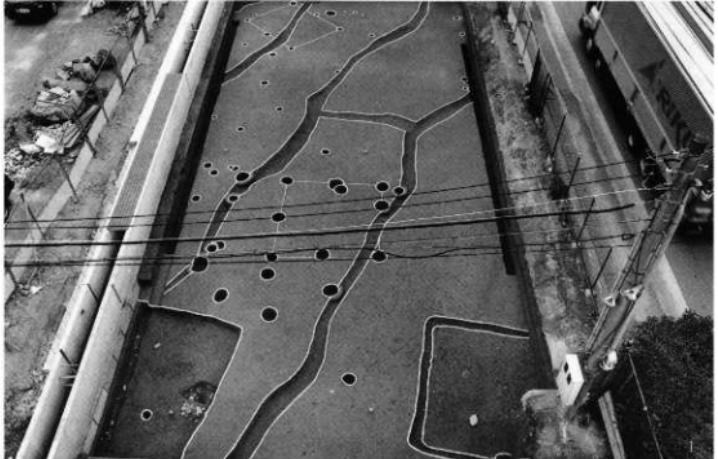


8 9

図版20  
第4群

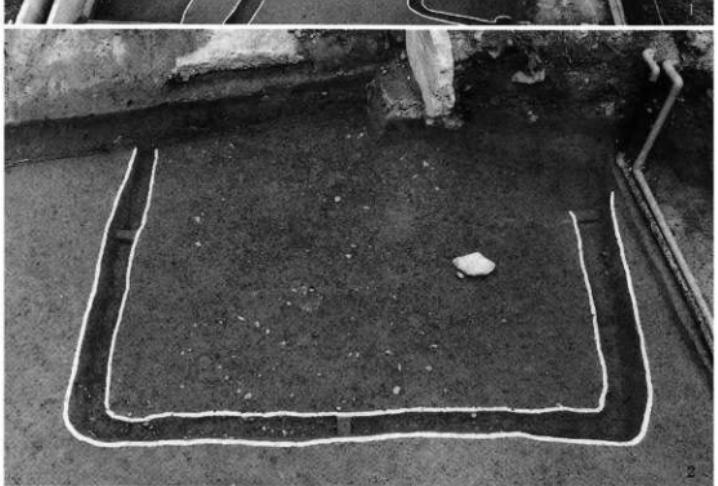
1. 北部全景

南より



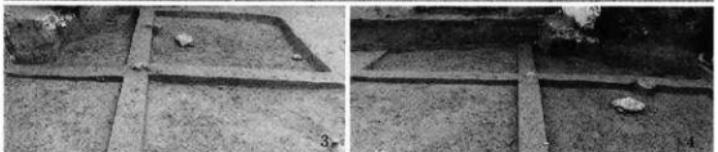
2. 住居15

西より



3. 住居15東西断面

北より



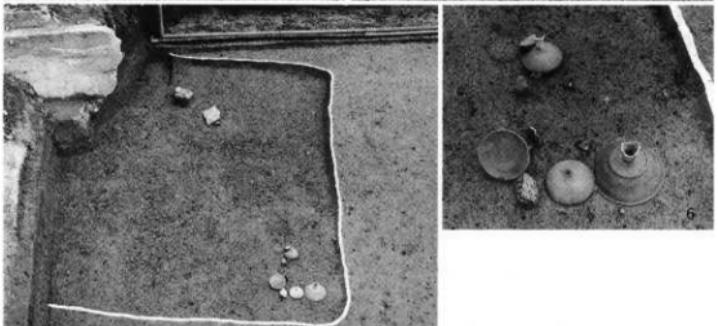
4. 住居15南北断面

西より



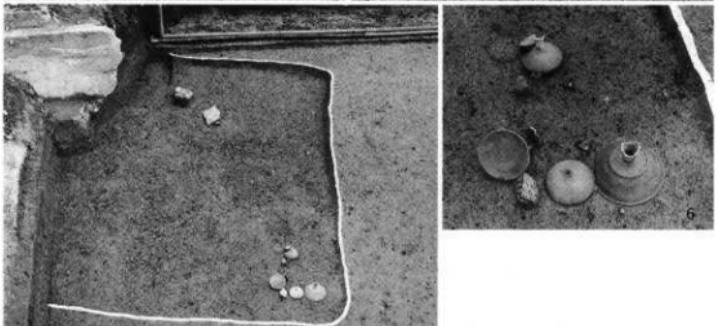
5. 住居15遺物出土状況

北より



6. 住居15遺物出土状況細部

北より





西より

東より

2. 住居16南北断面

3. 住居16東西断面

南より

4. 住居16焼失状況

東より

5. 住居16上層東西断面

南より



2



3



4



5

図版22  
第4群

1. 住居16遺物出土状況

東より



2. 住居16遺物出土状況細部

西より



3. 住居16遺物出土状況細部

西より



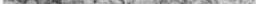
4. 住居16遺物出土状況細部

東より



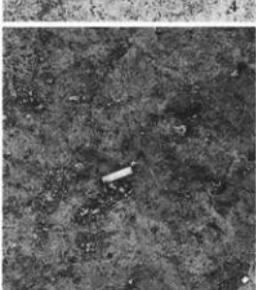
5. 住居16遺物出土状況細部

南より



6. 住居16管玉出土状況

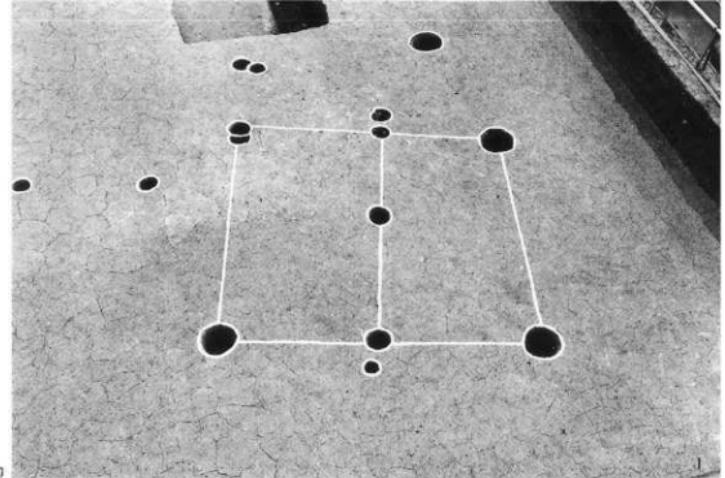
西より



7. 住居16遺物出土状況細部

西より





1. 建物 4

北より

2. 建物 4 SP50

東より

3. 建物 4 SP43・44

東より

4. 建物 4 SP52

北より

5. 建物 4 SP42

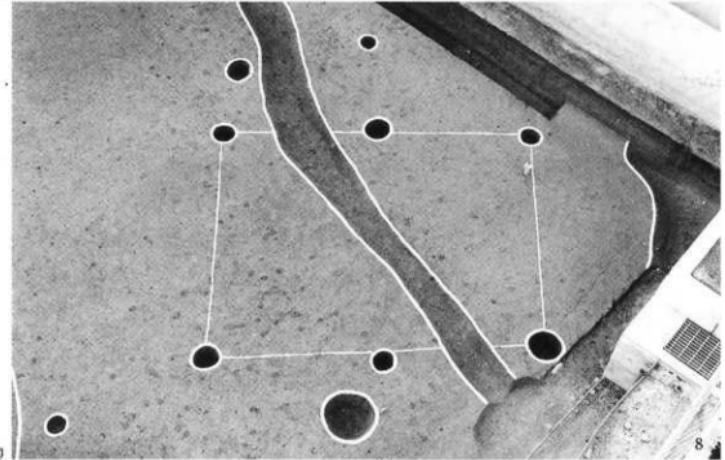
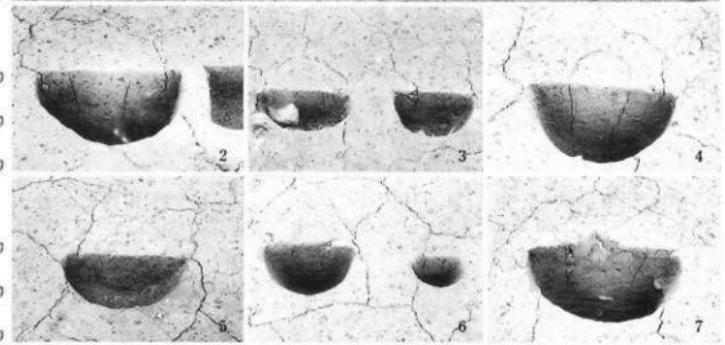
北より

6. 建物 4 SP46・47

東より

7. 建物 4 SP41

東より



8. 建物 5

北東より

9. 建物 5 SP76

東より

10. 建物 5 SP75

東より

11. 建物 5 SP74

東より



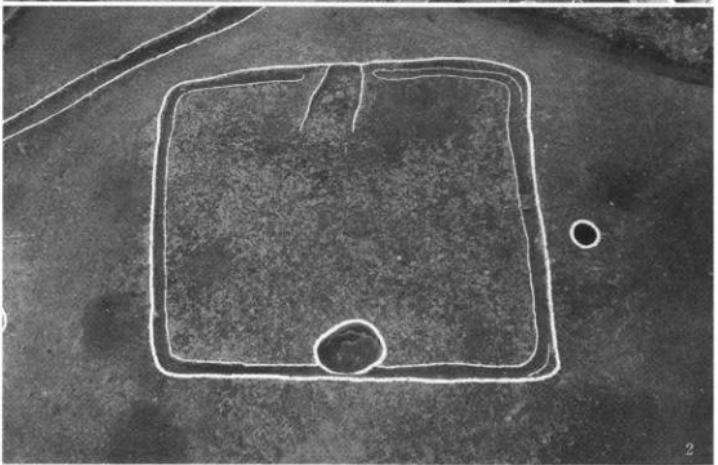
1. 南部全景

北より



2. 住居17

南より



3. 住居17東西断面

南より



4. 住居17南北断面

東より



5. 住居17土坑遺物出土状況

西より



6. 住居17土坑断面

東より



図版25  
第4群

1. 住居17竪面

南より



2. 住居17竪面断面

東より



3. 住居17竪面

南より



4. 住居17遺物出土状況

南より



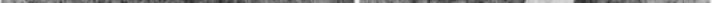
5. 住居17遺物出土状況細部

南より



6. 住居17遺物出土状況細部

南より



図版26  
第4群

1. 住居18

東より



2. 住居18南北断面

東より



3. 住居18東西断面

東より



4. 住居18遺物出土状況

西より



5. 住居18竪

西より



6. 住居18竪埋土断面

南より



7. 住居18竪断面

西より

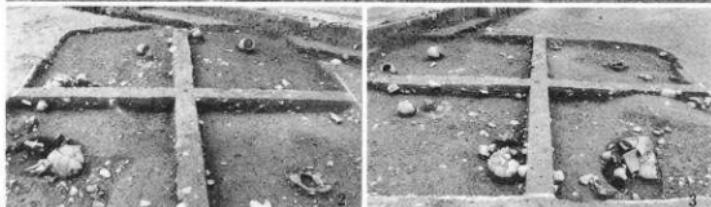


図版27  
第4群



1. 住居19

北東より

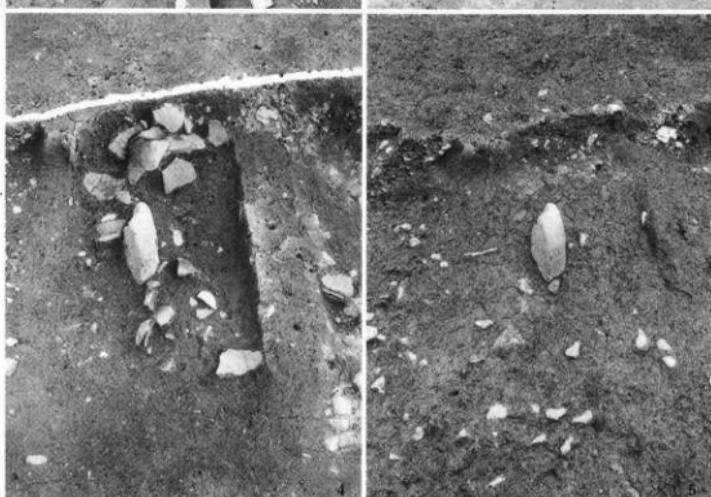


2. 住居19南北断面

南より

3. 住居19東西断面

東より

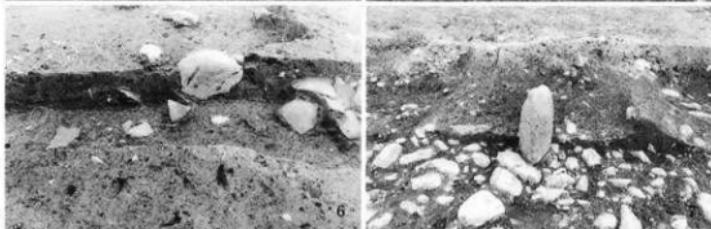


4. 住居19遺物出土状況

北西より

5. 住居19竈

北西より



6. 住居19竈埋土断面

南東より

7. 住居19竈断面

南西より



1. 住居19遺物出土状況

北東より

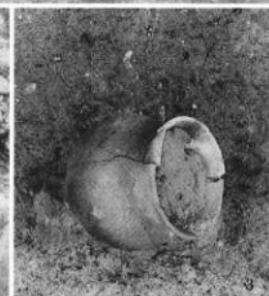


2. 住居19遺物出土状況細部

東より

3. 住居19遺物出土状況細部

南より

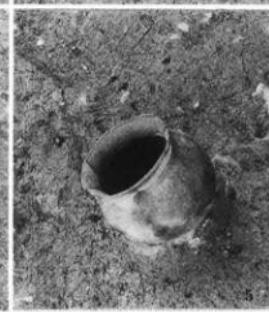
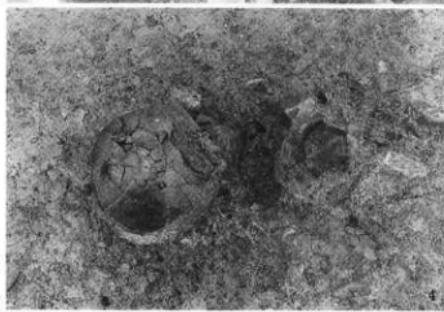


4. 住居19遺物出土状況細部

南より

5. 住居19遺物出土状況細部

南より



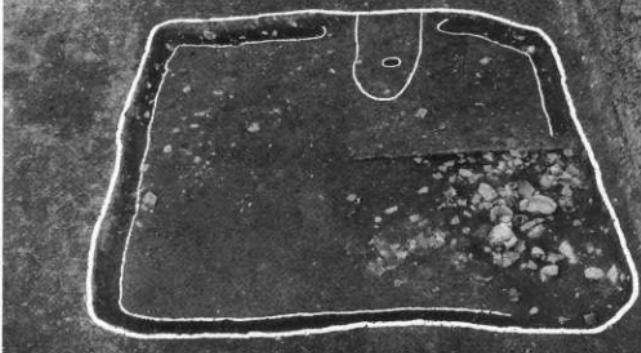
6. 住居19遺物出土状況細部

西より



1. 住居20

南より

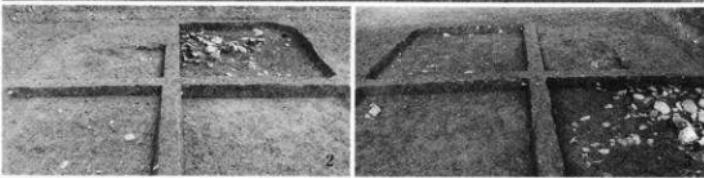


2. 住居20東西断面

南より

3. 住居20南北断面

東より



4. 住居20竈

南より



5. 住居20竈盛上断面

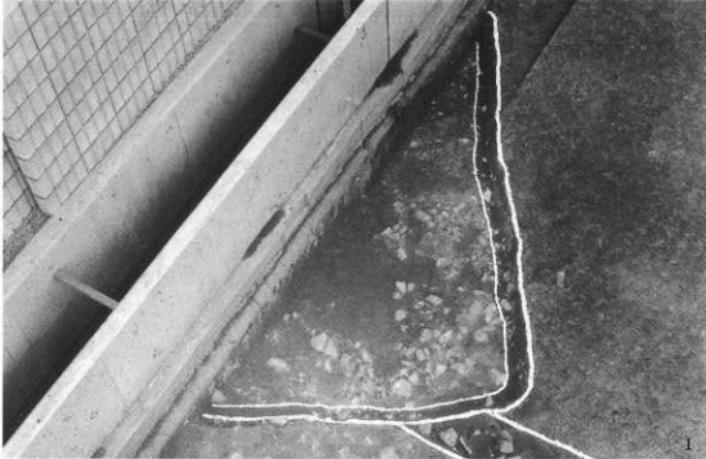
東より



図版30  
第5群

1. 住居21

南より



2. 住居21東西断面

南より



2

3. 住居22

東より



4. 住居22竪

南より



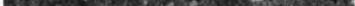
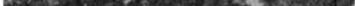
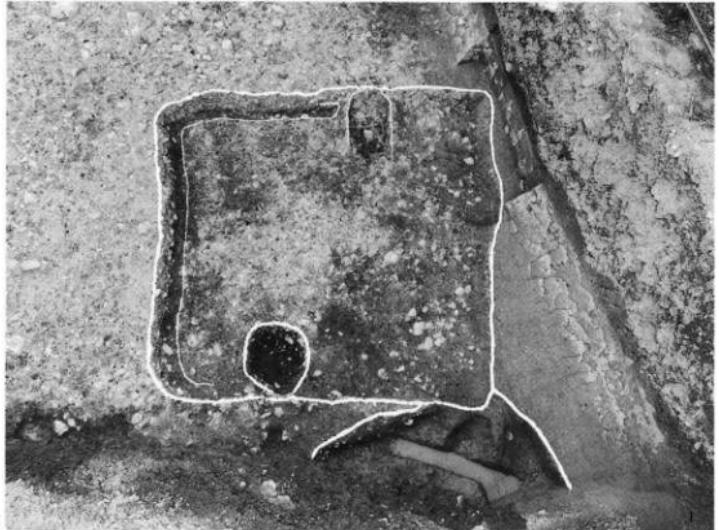
5. 住居22竪埋土断面

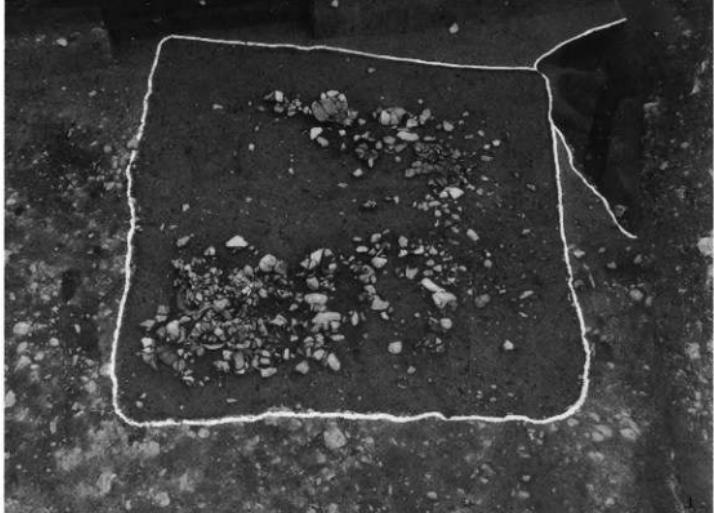
東より



5

図版31  
第6群





1. 住居24上層遺物出土状況

西より



2. 住居24上層遺物出土状況細部

南西より

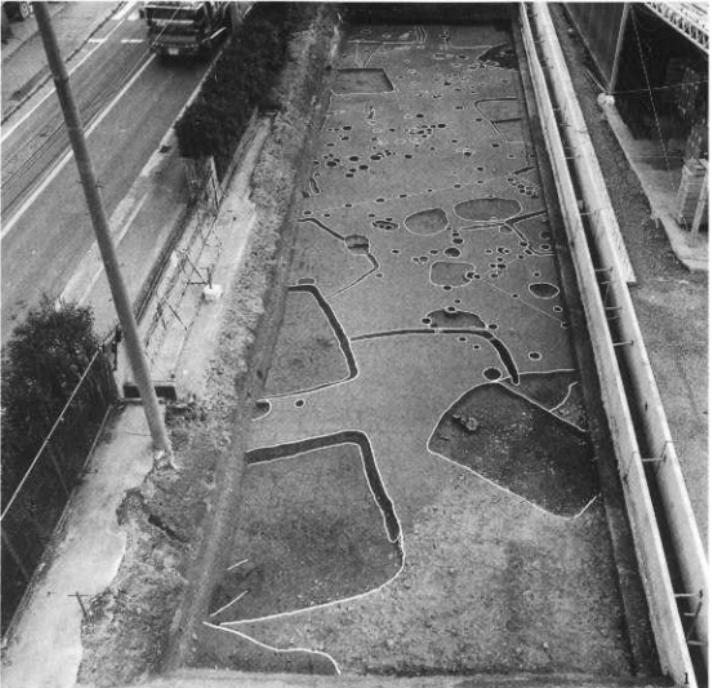


3. 住居24上層遺物出土状況細部

南東より

図版33

第6・7群



1. 第6・7群

北より



2. 住居25

西より



3. 住居25東西断面

南より



4. 住居25南北断面

東より

図版34  
第6群

1. 住居25竈

南西より



2. 住居25竈遺物出土状況

南西より



3. 住居25竈支脚

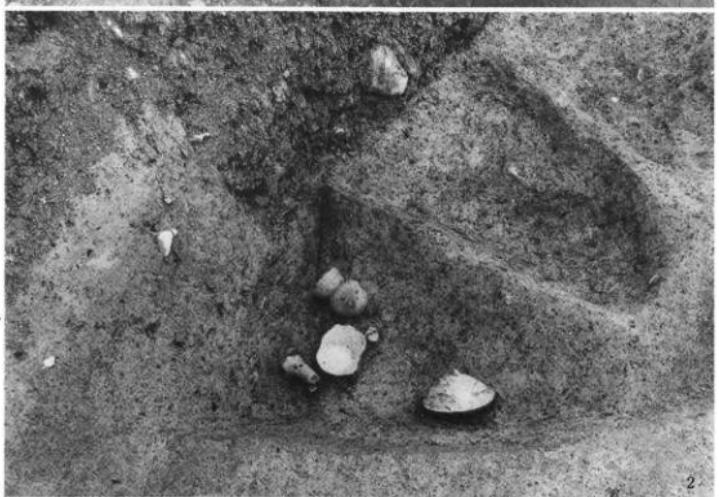
南西より





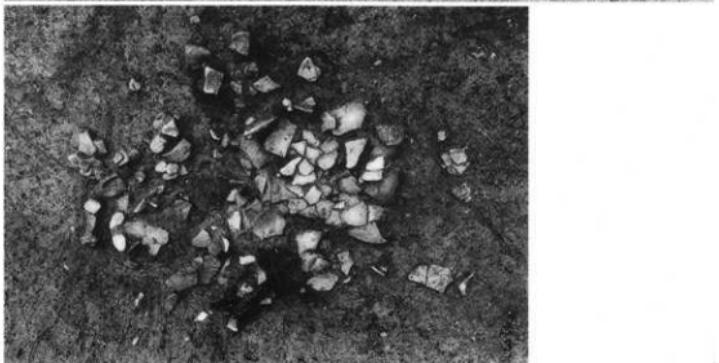
1. 住居25遺物出土状況

西より



2. 住居25竈周辺遺物出土状況

東より



3. 住居25遺物出土状況細部

南西より



1. 住居26

北東より

2. 住居26東西断面

南より

3. 住居26南北断面

東より



4. 住居26竈遺物出土状況

北西より

5. 住居26竈

北西より



6. 住居26竈埋土断面

南より

7. 住居26竈上面遺物出土状況

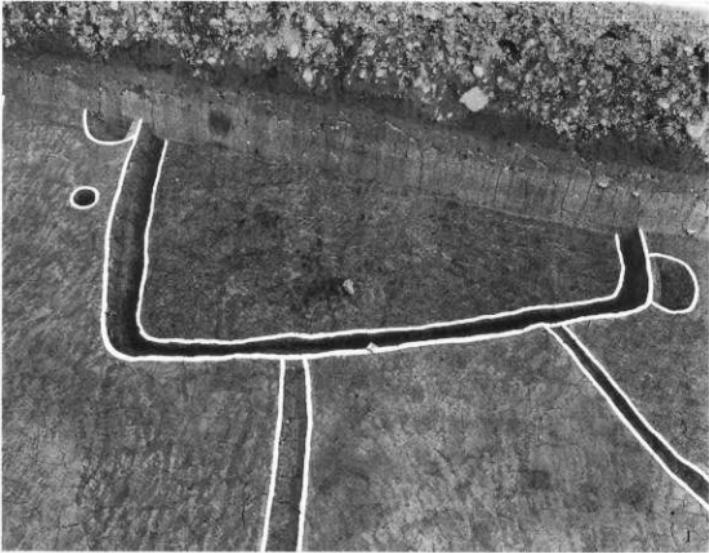
南西より



図版37  
第6群

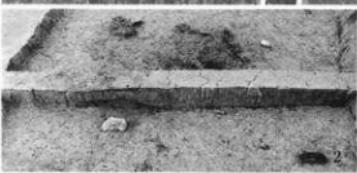
1. 住居27

南西より



2. 住居27東西断面

南より



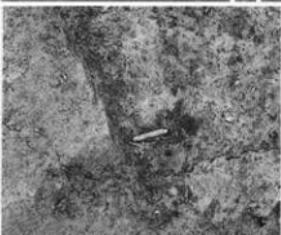
3. 住居27遺物出土状況

南西より

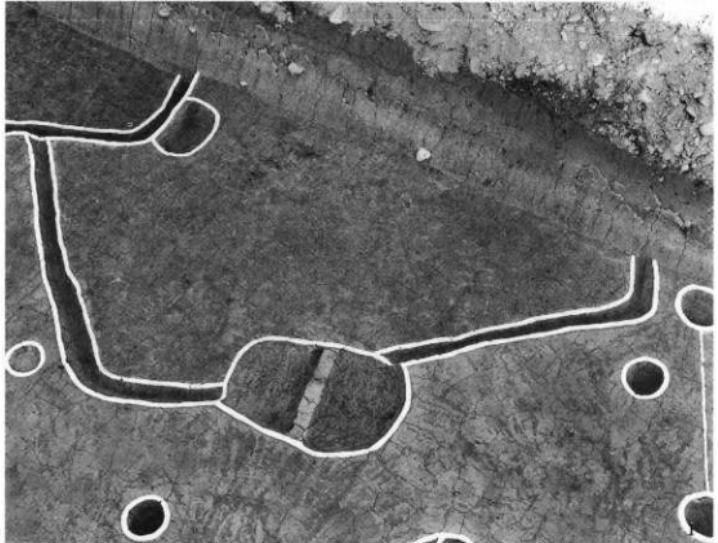


4. 住居27管玉出土状況

南より



図版38  
第6群



1. 住居28

南西より

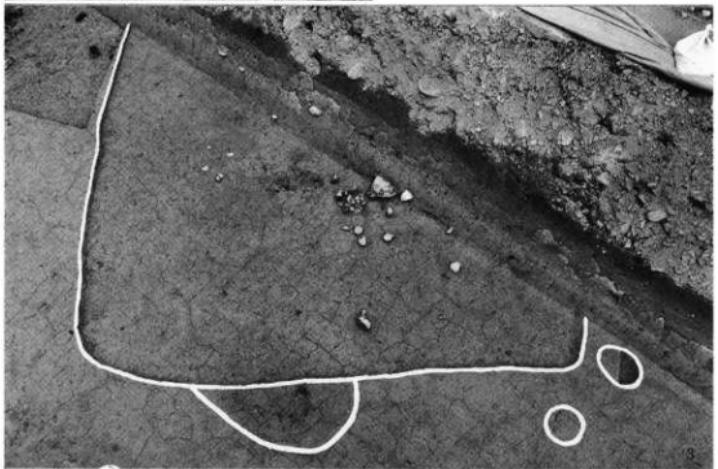
2. 住居28東西断面

南より



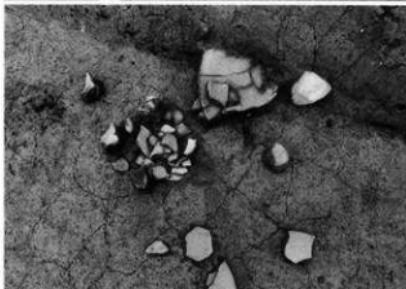
3. 住居28遺物出土状況

南西より



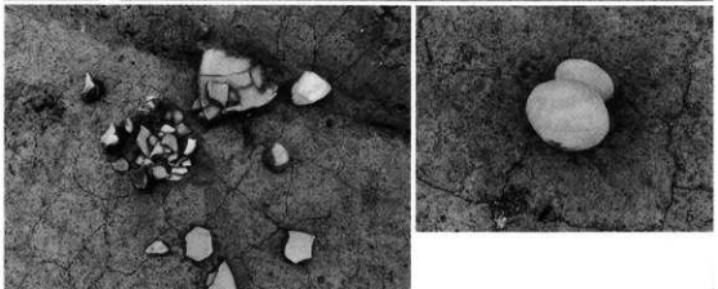
4. 住居28遺物出土状況細部

南より



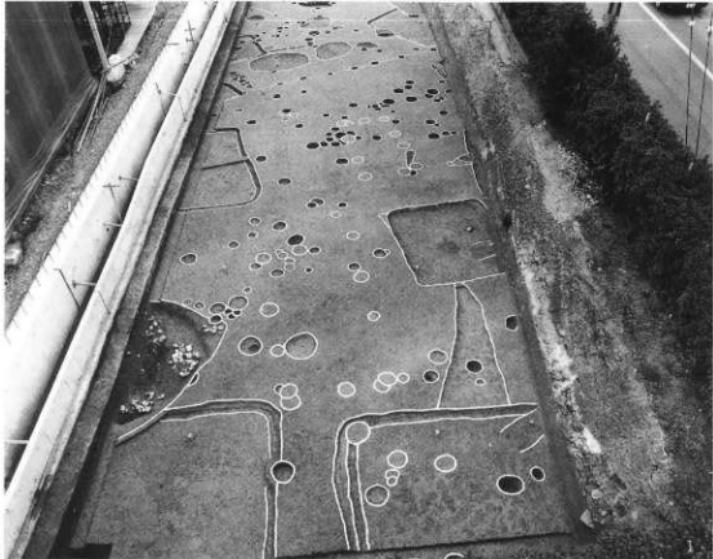
5. 住居28遺物出土状況細部

西より



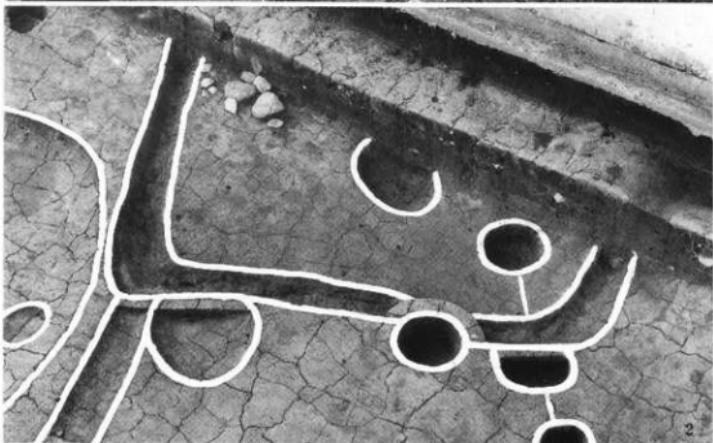
1. 第6・7群全景

南より



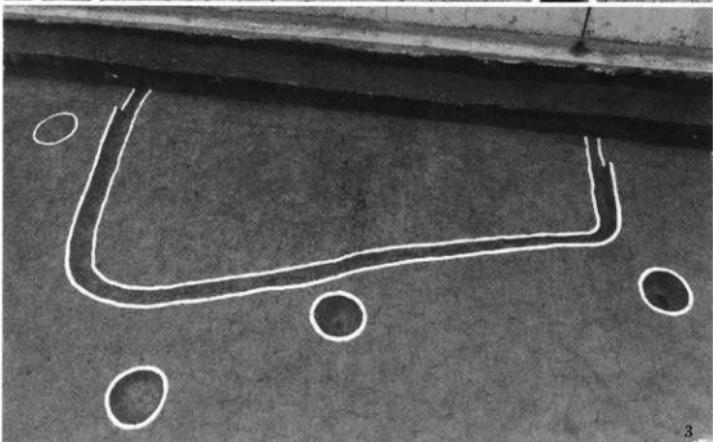
2. 住居29

西より

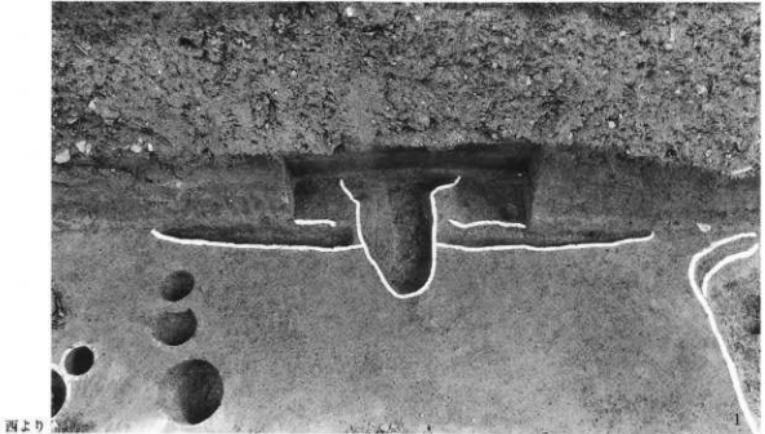


3. 住居31

西より



1. 住居32



西より

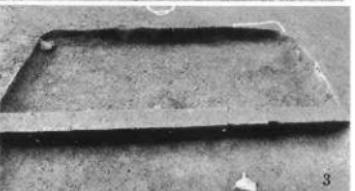
2. 住居32竪堀土断面

南より

東より

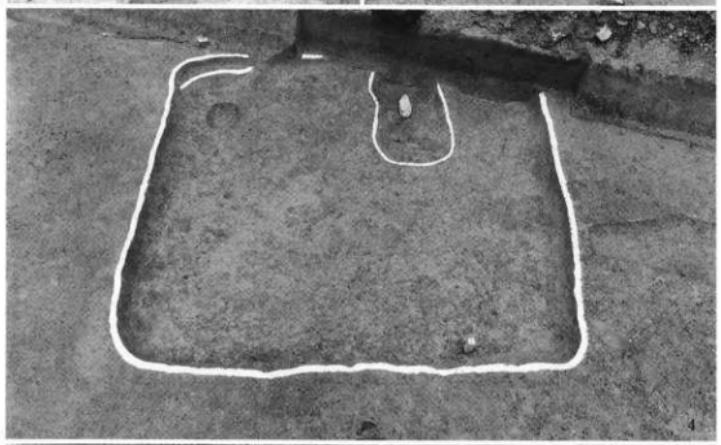


2



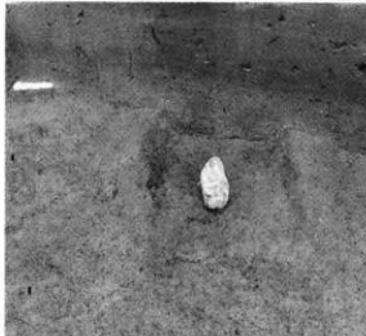
3

3. 住居33南北断面



4. 住居33

西より



5

5. 住居33竪

西より



6

6. 住居33竪堀土断面

南より



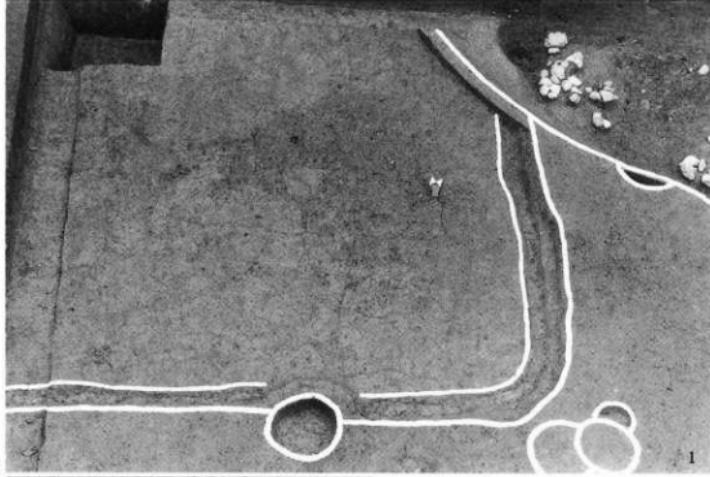
7

7. 住居33竪堀土断面

南より

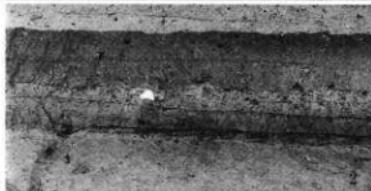
1. 住居34

東より



2. 住居34東西断面

北より



3. 住居34遺物出土状況

北より

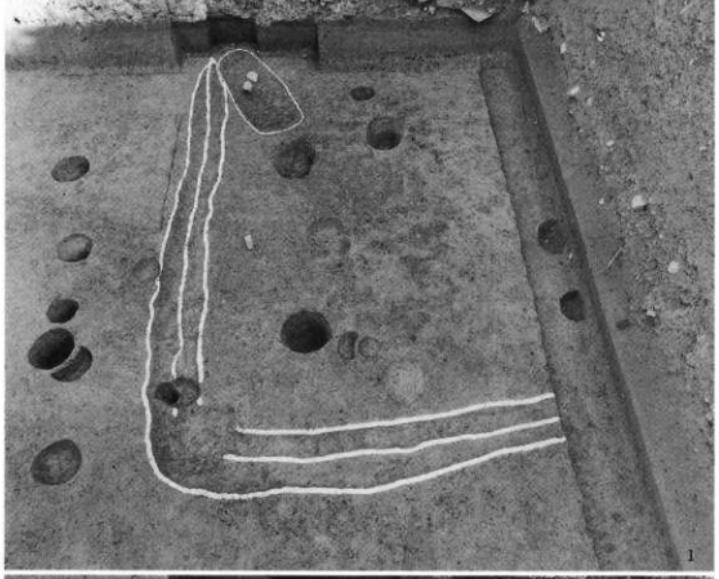


4. 住居34遺物出土状況細部

北より



図版42  
第7群



1. 住居35

西より



2. 住居35

南西より



3. 住居35

南より

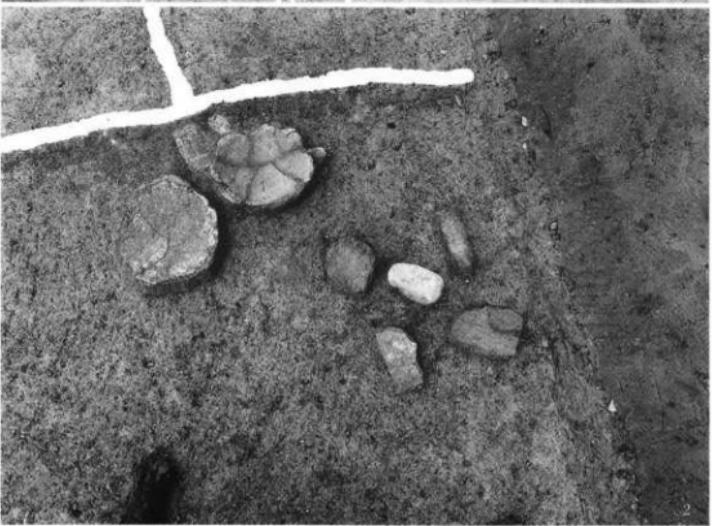
1. 住居35遺物出土状況

北より



2. 住居35遺物出土状況細部

南より



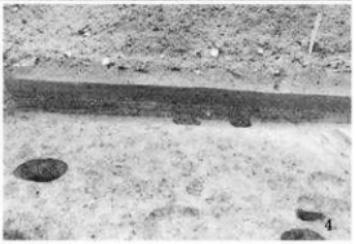
3. 住居35南北断面

西より



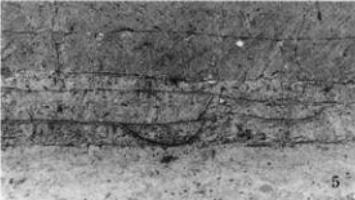
4. 住居35東西断面

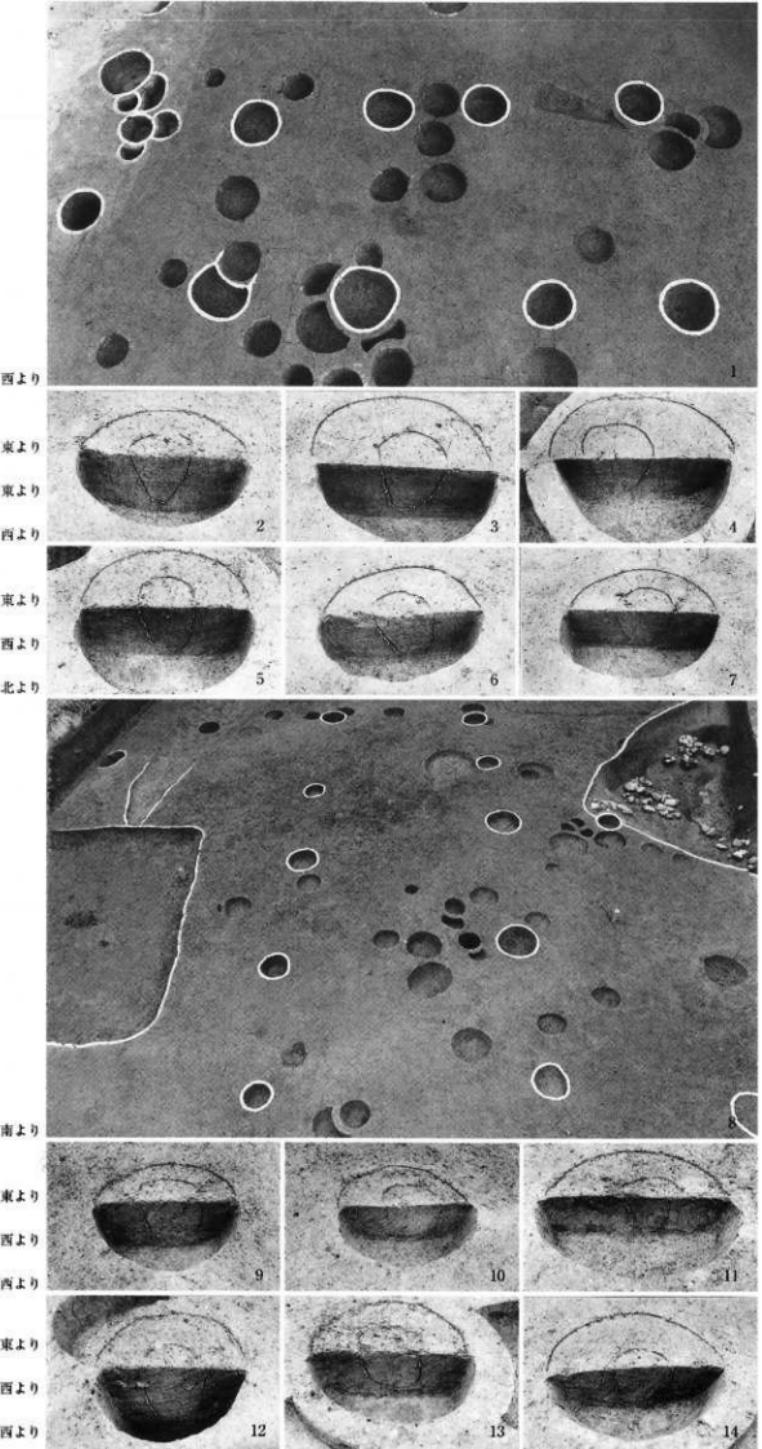
北より



5. 住居35東西断面細部

北より

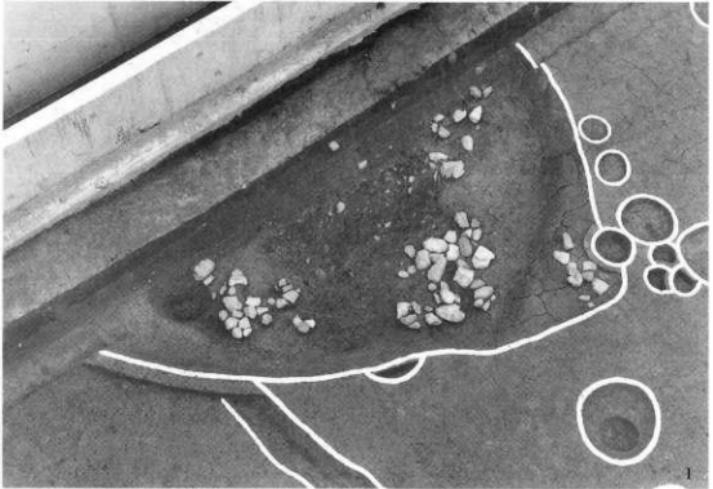




図版45  
土坑

1. 土坑13

南東より



2. 土坑13断面

東より



3. 土坑7断面

南より



4. 土坑8断面

南より



5. 土坑9断面

南より



6. 土坑10断面

南より



7. 土坑12断面

南より



8. 土坑14遺物出土状況

南より



図版46  
北部地区

1. 1997年度調査区

南より



2. 1998年度調査区

北より



3. 1998年度調査区 柱穴群

北より





3



7



6



21



8



20



54



36



50



51



68



90



91



92



88



72



74



97



75



76



77



80



98



106



109



111



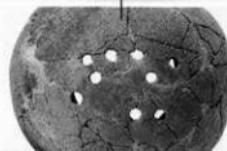
113



119



117



118



110



140



150



151



152



158



160



161



159



163



188



190



198



199



210



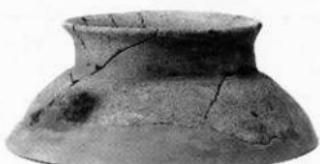
211



214



215



216



246



249



252



264



254



256



255



257



236



239



280



281



282



284



286



285



285



278



298



309



318



326



327



325



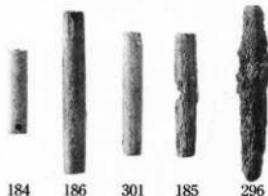
329



294



120



184

186



62



—

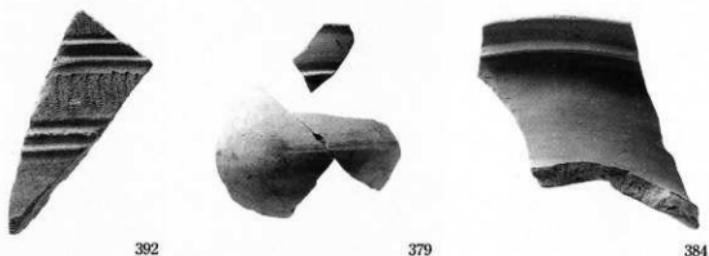
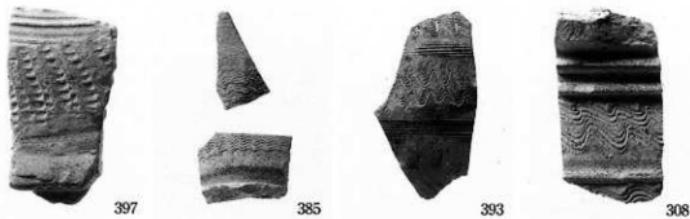


143



—







103



142



141



155



181



197



182



183



228



226



241



242



227



412



243



244



251



300



328



330



400



149



376



377

## ANI-1 (413)

椀形鍛治津

①×200硬度圧痕：

525Hv ヴスタイト

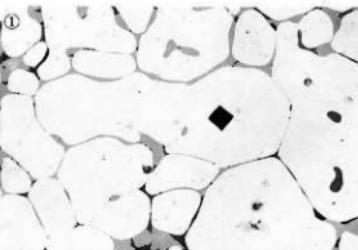
②×100③×400ヴスター

イト（粒内微小析出物

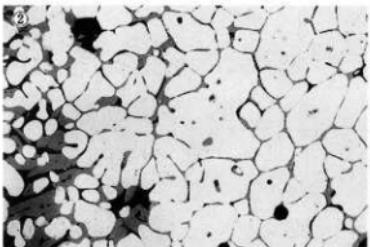
あり）ファイアライト

④×100⑤×400ヴスター

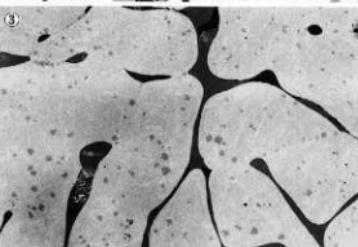
イト ファイアライト



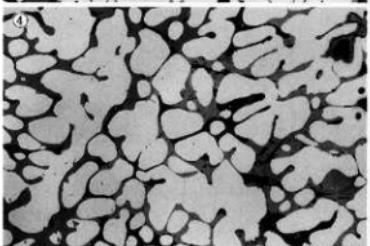
②



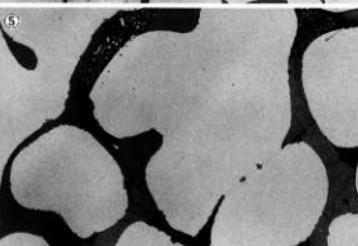
③



④



⑤



## ANI-2 (414)

椀形鍛治津

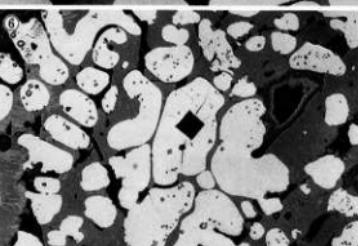
⑥×200硬度圧痕：

407Hv ヴスタイト

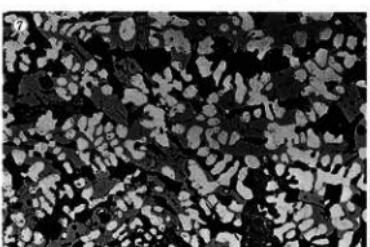
⑦×100⑧×400ヴスター

イト（粒内析出物あり）

ファイアライト【風化】



⑦



⑧

